

# 奇譚クラス

新しい風俗文獻誌

1965・10

10  
月  
号



奇譚クラス

10  
月  
号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



10月号

¥ 300



第一回作品発表  
キヤビネ版印画紙焼

各組三枚一組	五〇〇円
八組全部にて	三五〇〇円

背中から二の腕太股にまで刺青を施した稀代の女賊が捕縛されて白洲で厳しい拷問を受けた上、白状しないので全裸に剥かれて砂の上で折檻、更に逆さ吊り、海老貴木馬貴、大の字寝と凄惨な拷問が重ねられるという想定である。

三枚一組 略号(よき)

荒縄できりきりと縛りあげられ、た女賊は、両足首に取縄を何重にも巻かれて高々と逆さに吊り上げられる。首がかろうじて床についているが血が逆行する苦しさを耐え忍んでいるところへ、非情な竹の折檻棒が豊満な乳房や咽喉元に烈しい苛責のムチを加える。流石の女賊も氣息えんえんとして、ぐったりと吊られたままでいる。

三枚一組 陸軍(少校)

白洲へ荒むしろを敷いた上へ引  
き据えられた女賊は、先ず手荒な  
ことをしないうちに有体に白状せ  
よといわれたが、せせら笑って答  
えないので、打役の手でその入墨  
も見事な背中を、したたかに竹棒  
にて打ちまくられる。次第に変化  
する女賊の苦悶の形相も物凄く、  
全身を鼓うたせ、ムチの痛さに悶  
えるサジスチツクな場面。

三村一和 監製・演出

木馬の四つの脚に両手両足をめ  
つちりと四方に縛りつけられて、  
仰向けに固定された女賊。いかに  
痛めつけても参らない女囚に對し  
て、女の最も無防備な姿をさらけ  
だした刑罰を強要した。女囚は只  
顔をのけぞらして、この羞恥責め  
に對して必死になつて耐えている  
ばかりである。裂けるような痛さ  
に失神しそうになりながら。

三十一 三十一

れた女賊は、入墨の裸身をさらけ出して白洲の砂の上にはうり出された。男たちの目の前に裸で放置されるのも、さることながら素早い取組は女をきびしい高手小手にした上、更に股間縛りにしてしまつた。竹棒で追いまくられ、足蹴にされ、女囚は砂の上を転りまわつて呻めき泣くのだった。

三枚一組 随号(よす)

いかにしぶとい女賊にしてもこの海老賣めだけは骨身にしみてこたえたことだろう。高手小手に両手首を高々と釣られた上、兩足首と連結されて全身が二つ重ねにされた苦しさ。更に盛り上った厩先を竹がささらになるまで打ちのめされる痛さ。喘ぎつつ転った女賊の顔には竹棒の先が、白杖せとと容赦なく突きあげてくる。

三枚一組 警号(対)

遂に稀代の大名を占めた女賊は、碇合に四肢をおもひ切りひるがた大の字に固定されて、いよいよこれから胴斬り、足斬り、両腕斬り、首斬りの一寸刻み五分試しの鑿り殺しにされるのである。自分の身に、こんな恐ろしい運命が待っているとかわかっていても、縄で太の字にハリツケられてゐる女賊はどうすることも出来ない。

三枚一組 既入 在

四つ這いに縛られた女賊。見事な  
刺青をさらけて、その脅郎も、背  
中も、肩口も、無防備のまま露出  
している。力まかせの竹のささら  
が、はっしとばかり豊満な臀部に  
背中を炸裂する。髪ふり乱し絶叫  
しつつ耐え忍ぶ女賊の凄惨さわま  
りない光景。尚竹ムチは雨となつ  
て操身のあちこちに降り注ぐ。

三才一統 國号へんも

ても、尚ほますますその若さと美しさを發揮して贅れえを見せぬ女賊に對して、その美しさの残っている中にハリツケにしてしまおうと僅かに白布を前に当てた裸の女賊を襖梁にかけてしまった。架上の美しい女賊の真白い肌も、やがて銷鎗の穂先に貫かれて血汐にまみれることだろう。

大好評注文殺到

日本女性拷問刑罰集

キヤヒネ版印画紙焼付  
各組三枚一組 五〇〇円  
八組全部にて 三五〇〇円

三枚一組 略号(もと)

後手高小手にきびしく縛しめられた腰に一枚の女囚が、三角木の痛さに髪ふり乱して泣き叫びもだえる姿の全身を、刻明に鮮鋭なレンズによって捉えたスチール。若くて美しいモデルの足の爪先から髪の毛の末端に至るまで、女の衰れさと悲しさが、いきいきと描かれています。

三枚一組 略号(もに)

若い女因に對する老害賣めは  
まことにエロチシズムとサジズム  
の極致といつていいであらう。な  
叉した足首を續えて踵り、うつ伏  
せに二つ折りになるまで締めつけ  
れば、美しい両足の拇指はくの字  
にそり反り、その激しい苦痛と羞  
恥に悶えに悶えぬくのである。一  
瞬に胸の膨らみに抑まるように  
喰い込んだ細目の痛々しさ。

三枚一組 略号(もほ)

白洲の冷たい糖砂の上に引き、えられた高手小手縛りの女囚は、首繩を引きしほられて白状を強られるが、返答をしないために唇をささらに割った筈で、後手に縛られてゐるため盛り上るようにつき出た肩先をたたかに打たれるのだ。血がにじめば白洲の砂を眼にすり込んで白状するまで、打ち続ける無惨なありさま。

## 三枚一組 暗号(まうご)

斬刀の試し斬りに、女を真二つに斬られようとする哀れな死罪相模の若い女囚。今やもがき泣き喚いても逃れるすべもなく、臍を中とした胸の部分さをさらけだされて土壇の上に仰向けに寝かされ顔は白紙で目かくしをされて斬られようとする女囚。観念して静かに身を横たえる女の全身には、サビスチツクな静寂がある。

三枚一組 略号(モ)

下着のすそをはねのけて、女の素肌をじかに算盤板のギザギザが喰ひ込むのでさえ耐えられない痛さなのに、正座した膝の上へ更に伊豆石をのせるというのであるから、その苦痛たるや想像を絶するものがあるであらう。それでも白状しないので更に非人が、その膝の上の石を揺つて悶絶するまで責め抜くのである。

三枚一組 略号(もち)

腰巻一枚にひんめくられた若い女囚の両手は背後で首筋にとどろきまで高々と括り上げられ、二の腕と脇には、どす黒い捕縄が情容杓もなく力まかせに、うす汚ない非人の手によって縛られている。

そして白洲の砂の上で引きずられた女囚には更に竹の棒を鹿目の間にねじ込められて、白状するまで締めあげられるのである。

## 三校一組 略号(モタ)

女性というものは、若痛に對して意外しぶとい耐久力を持つてゐるものである。身動きもできない高小手縛りの女囚を白洲に引きすえ、腰巻の乱れを必死に防ごうとはかない努力を続ける真白い足首を八の字に開かせ、その柔かい足首に非情の細引きを喰ひ込ませようと、うのである。女囚の哀願と悲鳴の尾をひくなかで。

三枚組 略号(もは

殊にすうりと伸びた脛と素足の可愛いい美木モデル嬢が、白洲のて厳しく縛られ、悲しさと恥しさに悶える美しい哀婉ポーズを展開しています。これこそ女囚の悲惨美の至極をきわめた好演技といえるでしょう。こうしてS派の皆さまの目に、いつまでもこのポーズを晒していただきたいのです。



アルバム「美しき縛しめ」第六集 愈々完成！

緊縛美女艷姿百態

頒価一〇〇〇円(送共)

略号「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

「出演モデル」 ○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田みゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子  
○新井マリ子○刑部典子の十三名

十三名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことのないものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三名の美女の緊縛艷姿百態が、この一冊で皆さまの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。

アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集、第三集「美3」は残念ながら売却済みですが、「美4」「美5」「美6」は只今在庫しております。引続いて「美7」「美8」の企画をしておりますので、どうか一括してお揃え下さい。

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め	(大塚)	太股の刺青をはだけ	(山原)	肉体自慢の開股縛り	(長野)
猿ぐつわに悶える	(山原)	荒縄と荒蕪で苛なむ	(大塚)	火あぶりにあう囚女	(大塚)
緊縛に微笑む典子	(刑部)	顔をいじめられる	(新井)	汚れた麻縄縛り	(絹川)
瘦躯をくびる縄目	(木村)	柱の立しほり	(山原)	豊胸を二つに割る	(長野)
逆さ吊りに泣く新妻	(増田)	赤いオシメカバー	(絹川)	水着を剥がれて細	(梨花)
痛めつけられる牝豹	(鈴木)	荒縄拷問哀愁	(梨花)	ゴムカバーの艶	(大塚)
益々肥った肌に縄	(東浦)	全裸の後手吊り	(玉田)	真白き肌に樹液れ日	(絹川)
鮮明な刺青緊縛	(山原)	案山子縛り	(新井)	着衣は無惨に剥がれ	(山原)
長髪は肌にとまとう	(長野)	正面ウエスト縛り	(絹川)	裸身を晒して悶える	(梨花)
ゆれる吊られた女体	(梨花)	可愛い尻えくぼ	(長野)	縄は胸に息苦しい	(大塚)
		樹間のハダシの囚女	(桜井)	背中の刺青をさらす	(山原)

全裸後手縛り引回し	(大塚)	手摺りに開股責め	(梨花)
両手吊りに耐えぬく	(玉田)	裸身の開股縛り	(大塚)
後手吊り麻柱晒し	(山原)	お茶目ぶり発揮	(長野)
ネットをかぶらせる	(梨花)	猿ぐつわと荒縄縛り	(大塚)
山の木に曝す	(絹川)	高島田の全裸の縛り	(山原)
庭前に見せる艶姿	(山原)	裸身にハイヒール	(大塚)
高小手足首縛り	(大塚)	ブロッコリの石抱き	(木村)
手ぐさり足枷	(絹川)	生ゴムの猿ぐつわ	(大塚)
裸身に光と影の綾	(大塚)	緊縛の悦虐表情	(梨花)
後手は高々と吊り	(梨花)	後手に縄はきびしく	(刑部)
木馬に跨がる乙女	(大塚)	豊満に挑戦する縄	(東浦)
逆さ吊りにあえぐ女	(梨花)	黒紐は白肌に映える	(絹川)
デニムの拘束衣	(大塚)	裸身を踏まれる	(大塚)
海老縛りに耐える	(東浦)	破られたシュミーズ	(梨花)
女囚第六十三号	(梨花)	六尺帯は白く映える	(大塚)
吐きだした布片	(絹川)	いたぶられる足	(梨花)
白肌にフンドシ縛り	(大塚)	涎の中の緊縛肢体	(大塚)
後手の背面さらし	(山原)	鼻責めにあう晃子	(鈴木)
柔肌に喰い入る麻縄	(大塚)	責めに酔う恍惚境	(東浦)
後手吊りに浮かぶ女	(梨花)	逆エビにもだえる	(山原)
鎖に吊られた両手	(大塚)	椅子責め媚態	(大塚)
黒革製の猿ぐつわ	(新井)	見事な臍窩を晒す	(大塚)
スダレの中の晒し	(玉田)	豊満を割る縦縛り	(東浦)
巻煙草責め	(大塚)	足下にもがき苦しむ	(新井)
日本髪腰巻しほり	(山原)	黒革のフンドシ縛り	(大塚)
後手高小手しほり	(絹川)	浣腸器の恐怖	(大塚)
立木縛りムチ打ち	(桜井)	美肌は縄に酔う	(長野)
エビしほり苦悶姿態	(梨花)	吊られ吊られて	(木村)
高島田着物あて姿	(山原)	白輝の後手しほり	(大塚)
臀部誇張股間縛り	(大塚)	責めに愉悅する女	(山原)
強烈な後手と乳房	(梨花)	マゾの境地露呈	(木村)
脱げかけたズロース	(絹川)	プレイに疲れはてる	(絹川)
柱に後手しほり	(玉田)	乳房は光り輝やく	(大塚)
強烈な鼻ひねり	(大塚)	全裸美プラス縄目	(長野)
足挙げ椅子しほり	(東浦)		





# 奇譚クラブ 10月号 目次

◇奇クサロン……………編集部選……………(9)

○或る「疑問」に答えて……………編集部(9)  
 生首に描く幻想……………編集部(12)  
 徳田……黒井……(13)  
 14……マニアの手帖……………編集部(13)  
 15……大いに活躍……………編集部(13)  
 16……H・Y生……………編集部(16)  
 17……東映史……………編集部(17)  
 18……のけぞる……………編集部(18)  
 19……テレビ……………編集部(19)  
 20……燃ゆる……………編集部(20)  
 21……六角……………編集部(21)  
 22……白虎……………編集部(22)  
 23……米俵……………編集部(23)  
 24……背負……………編集部(24)  
 25……の意……………編集部(25)  
 26……の意……………編集部(26)  
 27……の意……………編集部(27)  
 28……の意……………編集部(28)  
 29……の意……………編集部(29)  
 30……の意……………編集部(30)

## ＜本文＞

扉 (本誌の信条)……………夜乃 探郎……………(25)

サーカス 「サーカスの哀愁」……………夜乃 探郎……………(26)

文献紹介 「サーカスの哀愁」……………夜乃 探郎……………(26)

ガン作マニヤのノート……………夜乃 探郎……………(26)

濡れにぞ濡れし……………芳野 眉美……………(30)

『痴人の糧』 吊られて……………山本 一章……………(38)

耕土散筆 「落穂拾い」……………保藤 久人……………(44)

懸賞(告白、手記、体験)入選作品……………太田 尚子……………(52)

病院の一室にて……………栗瀬 長……………(59)

SM入門講座……………栗瀬 長……………(59)

「若き友に与う」 「浣腸」への導入……………海野美津男……………(64)

娘相撲物語 良男の体験……………海野美津男……………(64)

告白物入選発表もうれしく、ブラボー奇ク……………行司子……………(76)

懸賞(告白、手記、体験)入選作品……………田代 俊夫……………(80)

蚯蚓のたわごと……………宗方 一子……………(94)

「切腹供養」 予行演習……………久我 庄一……………(98)

私流アブ解釈……………黒田 寿……………(10)

「地獄」メモ……………久我 庄一……………(98)

読者原稿 死刑される欲……………黒田 寿……………(10)

女斗美ファンタスティック・シリーズ……………黒田 寿……………(10)

デパート女子レスリング……………黒田 寿……………(10)

アリアドネ (希臘神話の再編成)……………黒田 寿……………(10)

愛読者原稿 亜紀子奇譚……………黒田 寿……………(10)

浪江大五郎 (悦庵絵灯籠)……………黒田 寿……………(10)

実録「奇譚クラブ」……………黒田 寿……………(10)

連載「花と蛇」続篇第十回……………黒田 寿……………(10)

△手記△私と私の周辺……………黒田 寿……………(10)

SMカメラ・ハント……………黒田 寿……………(10)

小説 箕田京二……………黒田 寿……………(10)

久我庄一氏の労作に感謝しつつ……………黒田 寿……………(10)

伊藤晴雨に因して……………黒田 寿……………(10)

コンスチチューション……………黒田 寿……………(10)

芳野眉美氏と夜野探郎氏へ……………黒田 寿……………(10)

一筆啓上……………黒田 寿……………(10)

御厨番秘聞 第一章 花仙老と唐女……………黒田 寿……………(10)

夢、のまた夢……………黒田 寿……………(10)

読者通信……………黒田 寿……………(10)



限定版写真集「美しき縛しめ」(第五集) 発売!

# 女性刑罰拷問特集 日本版

頒価一〇〇〇円(送共) 略号A美5V

モデル……美木乃々子……山原清子

待望のグラビヤ印刷アート紙の刑罰拷問写真集成る。

先に美木乃々子嬢出演の「日本拷問刑罰集」並に山原清子嬢出演の「入墨女賊拷問刑罰集」の二集をキャビネ判の印画紙焼付にて分譲しましたところ、熱心なファンの方々から、いち早くお申込みを頂き迫力のある刑罰フォトに、非常な好評を賜りました。その頃よりグラビヤ印刷による刑罰拷問写真のアルバムを強く望まれ

▲「アルバムの内容」(刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による刑罰拷問図譜写真集)

○荒庭の上に荒縄にて引据えられた女囚 ○算盤責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する女囚 ○捕縄にて本縄を掛けられ棒にて乱打されて髪ふり乱してもがく女囚 ○アグラ縛りで竹にてムチ打たれる女囚 ○非人の手によって不浄縄を掛けられる女囚 ○美しき素足を白洲の上に晒して鳴咽するうら若き女囚 ○海老責めにされ肩先を竹のささらで打たれて泣く女囚 ○海老責めで放置されて全身蒼白となった女囚 ○非人に囚衣を剥がされて引回しにあう女囚——等々、縛しめられた女囚の哀れさ、悲しさ、美しさにポイントを置いて編集しました。  
(一般書店にては販売いたしません。限定版につき直接発行所へお申し込み下さい。御送金次第直ちに急送いたします。)

## 「浣腸フォト新版」

山原清子が浣腸マニア東浦ひかるに施す浣腸

浣腸排泄おムツ着用写真

浣腸されることに対して異常なまでの執着を持つ東浦ひかるを被術者として、これまたSMに關しては、どんなことでも関心を抱く山原清子が施術者として、ここに浣腸マニア垂涎の浣腸フォト、おしめフォト・シリーズが登場、皆さまの高覧を待っております。実際に強烈な浣腸をしてほしいと願う東浦ひかるに、浣腸を施し同性を苦しめることに興味を抱く山原清子のコンビは、浣腸フォトとしては、最高の取り合わせといえます。

## 浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号一〇〇〇円

浣腸をしたあとの排便の介添えを挿込み便器でやつてもらおう。

## 百CC溶液注入

大手札六枚一組 略号一〇〇〇円

一〇〇CCの大きな浣腸が清子の手でひかるのお尻へ迫ってゆく。

## グリセリン溶液浣腸

大手札六枚一組 略号一〇〇〇円

グリセリンを満たしたガラス浣腸器が近々と肌に襲う恐怖の瞬間。

## シリンドー浣腸

大手札六枚一組 略号一〇〇〇円

シリンドーのポンプが押されて溶液が尿管の先から出る。

## イルリ尿管挿入

大手札六枚一組 略号一〇〇〇円

一リットルのイルリの尿管が清子の手によってひかるのアヌスへ

## アヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号七〇〇円

ひかるが自分から浣腸しようとするのへ清子が親切に介添え。

## イルリガートル

大手札十枚一組 略号一五〇〇円

尿管から送る溶液。ひかるは満足気に清子の手に身をゆだねる。

## オシメをつける

大手札六枚一組 略号一〇〇〇円

浣腸のあとで、オシメをていねいにあててもらい、甘えるひかる。

## ゴム製カバー着用

大手札六枚一組 略号一〇〇〇円

オシメを当てたあと、ゴム製のおムツカバーをしてもらう。





「読者通信」を見ただけで、この雑誌を買う人も、これで結構あるんですよ、という声も聞きました。グラビヤ写真を楽しみで、毎月買っているというはなしも聞きました。或る読者なんかは、グラビヤ頁がなくなれば、奇クはきつとこれで終りだろうと、書店での本誌の減りぐあいを見て極言してきたこともありました。

昭和二十九年頃は、読者通信の原稿や転送依頼の通信が毎日東になつてドサリドサリと配達されてきましたし、一時間でも早く雑誌を入手したいということのため、直接購読者も今の十倍以上もあつたものです。

グラビヤ頁にしたって、三十二頁もあつたんですから、うんとパンチのきいたものをほり込むと、もうそれだけで、グンと売行きが増してきました。

## 或る疑問に答えて

編集子

だから、誰の誰よりもグラビヤ写真や読者通信欄の威力を知っているのは編集子ということになりましょう。その神通力を、自らの手で抑圧してしまおうというのですから、実際正気の沙汰ではないと思われるかも知れません。事実現在、グラビヤ・フォト頁再開、読者通信欄増頁、転送開始ともなれば、相当の売行き増加となることは火を見るより明らかです。そうなれば定価据置きのままでの増頁も可能になってくるのです。それなのに何故速かに実施しないのかという疑問が「拝啓、箕田編集長殿」(八月号)の木戸川健氏ならずとも当然起ってくるわけ

です。こういった質問に対する回答は、直接お逢いした方には詳しく申し述べましたが、公開の誌上で印刷物として残すということは不穏当な面もありますので、一つの挿話を書いておきましょう。或る女性の読者のところへ何通かの通信が寄せられてきました。彼女はそれの中の一人と意気投合しその人とだけ交際したいと望んだのです。しかし、彼女とそれまで文通をした中の数人は、彼女が余りにも素晴らしい女性だったので忘れられず、直接訪問その他の行動に出たというわけです。次にこれは或る男性ですが、やはり自分の気持ちにぴったりの相手が見つかり、他の文通者とは中止したいからといってきましたが、すでに直接文通していたため、熱心に交際を求めてくる人達によって大変迷惑を受けたと、本誌に解決を求めてきたことがあります。こういったトラブルは氷山の一角といつてよいでしょう。具体的事例は、いくら挙げてても挙げきれ

ませんが、やはり本誌は発行部数は多くなくとも、本文を楽しみに読んで下さる真面目な読者を対象に発行されるべきだと思うのです。決してSMの相手を求めるための雑誌ではないと思います。勿論、本誌の読者は九九%、真面目な方ばかりだと信じております。それだからこそ、尚更のこと、徒らにつまらぬ誤解の種を誘うようなことは、敬遠するにしくはないと考えます。

誌上で公明正大に文通してこそ誰憚ることのない共通の広場で楽しみが味わえるのではないのでしょうか。また多くの読者の方たちも誌上の通信によって、共感し反発し、微笑笑していただけるのです。極く一部の直接文通志望者が禍の種を撒こうと撒くまいと、大多数の読者にとっては知ったことではないのです。このような招かざる客は、本誌にとっても、真面目な読者にとっても、速かに離反してほしいと願って然るべきではないでしょうか。

どうせ、そんな物欲しい人々は永続するファンでないと判断するので、真面目な読者の皆様の御意見は、どうでしょうか。



## 世相診断室

木戸川 健

最近、どうも困った哲学が流行している。渋谷竜彦さんの「人間は、動物の一種ですから、食って寝て、性交して、寿命がくれば死ぬだけの話です」という、例の快樂主義の哲学である。これは、どうもひっかかる。人間は、動物の一種ですからVと、大前提をもつてこられるから、ひっかかるのである。動物の一種である事に間違いはない。しかし、他の動物とは違うのであり、渋谷さんも人間物であるVとはいっておらず人間物の一種Vといっている。これは結論を導き出す仕掛けである。哲学用語では「詭弁」という。

では、他の動物とどう違うか、それはみなさんが考えてごらんになれば、いや既に考えるという事において、大いに違っている。渋谷さんにしたところで、犬や猫ではないのだから、思考力を持った動物なのだから、こういう哲学をお考へになる。違っているではないか。念のため、二つの文章を比較されたい。「人間は動物ですから、食って、寝て、性交して、寿命がくれば死ぬだけです」「人間は動物の一種ですから、食って、寝て、性交して、寿命がくれば死ぬだけです」

命がくれば死ぬだけです」「人間は動物の一種ですから、食って、寝て、性交して、寿命がくれば死ぬだけです」

△動物の一種Vとしたところがミソである。仕掛けである。

ともあれ、食って、寝て、性交して、寿命がくれば死ぬ、だけが人間ではないのである。もしも、この哲学を心底お信じになるお方がいるとしたら、人間廃業を宣言すべきである。食って、寝て、性交して、そんなものが人生であつたら、何も寿命がくるまで待つことはしない、さっさと死んだらいいのである。

この課題は、△世相診断室Vにはうってつけのものであり、実のところ、私はもっと早く反論したかった。しかし、今日までそれが出来なかつたのは、K誌の一部読者の方々に対する遠慮である、と御理解いただきたい。どうやら、この哲学がK誌のバックボーンになりつつある、と思われたからである。が、違っていた。——ホッとした。

元来、エピキュリズムというものは、渋谷竜彦さんが大変わかり易く、ずばり解説されたようには不肖私、単純なものではないと理解している。人間集団の幸福をその政治形体に見出す、社会主義にも、国家社会主義、ギルド社会主義、民主社会主義、社会民主主義そして共産社会主義、つまりヒットラーのナチズムから毛沢東の共産主義まで色々あるように、個々人の幸福を欲望の満足に見出す、いわゆる快樂主義にも、精神的なもの、肉欲的なもの、樂天的なもの、厭世的なもの、節制的なもの、不節制的なもの、と巾広いのである。

いいかえれば、欲望を或る程度追求しても節制して、その楽しみを明日にとどめよう、そこに人生の楽しさと目的を見出す人々と、明日の事など考えず、とことんまで欲望を追求して、それで死んだってかまわない、という人々、それを両極として、エピキュリアンにも色々あるのである。もっと具體的な話をすれば、K誌の読者には△精神的SVとか△精神的MVとか自称される方々がおられるが彼等も立派な快樂主義者である。何故ならば、目的と期待を、そこ

に置くからである。

「人間の生活には、目的なんか無いのです。人間は、動物の一種ですから——」と、いうくどりは、だから、それにしても、おかしいのである。快樂主義者は、欲望を追求するという事が、人生の目的なのである。官能的な快樂に溺れて、例え死んだとしても、そこには目的があつた。目的に殉じた死に方である。単なる厭世死ではない。

第一、△快樂主義の哲学Vと銘うつ以上、人生に目的がない、と、いういい方はおかしいではないか。哲学とは、そもそも何であるか。「人間の生活には目的なんか無いのです」という事を、わざわざ教えるのが哲学であるとしたら、そういうものが哲学であると、お信じになつておられる方々があるとしたら、又、何をかいわんやである。

もっとも、著者は、そうはいっても、その後で、「わたしたちのすべてが求めているのは、欲望の満ちたりた状態です。——欲望を満たそうとする努力こそ、人間が生きている以上避けて通ることのできない人生の目標だといえましょう」と、至極く当り前な事をい



っている。これを、「人間の生活には目的なんかないのです」という文章と比較されたい。矛盾もいところである。目的がないとい、後で、あるという。全体に、著者の語り口はそうである。

実は、著者がいたかったのは後の部分で、前の部分は大衆へのアピールである。常識的な結論を導き出すための「はったり」である。こういう語り口には、大衆は弱い。そして、そのアピールが、著者の意に反して、著者の思想、ひいては、エピキュリズムの全べてであると、誤り解釈されてしま

又、渋沢さんは、ストア哲学をも、快楽主義の一部と見なしているような発言をされているが、それはいいとしても、ストア主義には、ちゃんとした、断乎とした、画一された人生の目的がある。カトリック思想の根本をなすものはストア哲学である。カトリック教徒が禁欲生活に耐えるのは、裏を返せば、精神的欲望を満たそうとする努力、かもしれないけれども、「目的とするところは、いづれの場合も同じであって、人間の本能、人間の欲望に忠実であるということです」ということには、

ならないのである。

八汝、姦淫するなかれVが、どうして、人間の本能、人間の欲望に忠実であるといえるだろう。彼等は、神に忠実なのだ。そして、ストア哲学は神即ち自然（汎神論）を否定している。つまり俗にいう自然の生き方ではないのである。それをしも、エピキュリズムであるというならば、人間全てが快楽主義者という事になってしま

そして、しかりである。本来、快楽主義とは精神の安定を意味する。安心立命を意味する。目的を何に見出そうと自由なのである。神仏の法悦にひたるのも、女体の悦楽にひたるのも、快楽主義である。要するに、本人が満足しておればそれでよい、というような、極く大ざっぱな哲学なのである。

そもそも、八快楽主義Vという日本語の訳がおかしいのであって私は、八満足主義V或は、思い切った八創価主義Vとしたらいかがかと思っている。創価学会の八創価主義Vには、明らかに、というより勿論の事、現世快楽の思想がある。創価学会が他の宗教に比べて、底ぬけに明るいのは、そういう思想が強く前面に打ち出されて

いるからである。

私は、学会員ではないけれども又、折伏されても入会はしないけれども、創価学会は好きである。それは、一口にいつて、彼等が正直であるからである。人間に一番大切な事は、素直に生きるという事である。素直に生きれば、自然明るくもなってくる。そして、これこそ、エピクロスの唱えた八快楽主義Vそのものであり、八創価哲学Vの中核でもある。——私はかように理解している。

「人生は、ただいち度の招待である。私は、この招待券を無駄にしない」

そのためには、素直に、自然に生きる事である。そこに、人生の価値が生ずる。自分の能力に反した生き方、自分の性向に反した生き方、自分の思想に反した生き方それ等は、人生の価値を減ずるものである。折角の招待券をフイにするものである。

私は自らの経験に於いて、自信を持っていいたい。人生、素直に、自然に生きれば、道自から拓けるのである、と——。

人生には絶望はないのである。快楽主義の哲学の根本は、これである。どうして、「食って、寝て

性交して、寿命がくれば死ぬだけ」の話であるものか。

私が、とりわけこの箇所を問題にしたのは、この思想の、一般への、わけても青少年への影響が大きいからに他ならない。現に、耳をすましてごらんない。彼等は、いっている。「都議会はメチャメチャだし。（新しいのが選ばれたからよくなるでしょう。これ以上悪くなりっこない）吹原産業事件はどうなっているのかわからないし。（全く）山一証券は助けても中小企業の千や二千倒れたって助けちゃあくれないらしいし。（五十万あれば助かったんだがなあ）物価は上る一方だし。（来年は、鉄道運賃も上るんだとよ）河野一郎は死んじまったし。（頼りになる男だったのに）——どうせ人間なんて、食って、寝て、性交して……」と、来ちゃうのである。

（四〇・七・二三・記）

× × ×  
× × ×  
× × ×





## 「生首に描く幻想」

剣持逸人

最近の生首フォトで、水野弘氏の三宝にのせた生首フォトは、正に圧巻でした。ああした勝れたフォトにお目にかかる、私にもムラムラと意欲が湧き上ってくるのです。内心、水野氏に負けない、素晴らしい生首フォトをこの手で撮って見たいと、及ばぬ鯉の滝上りとしりつつも、先日、久し振りに妻の生首フォトを撮りました。フォト二葉同封しますが、スペースをとるとは存じますが、生首愛好諸氏のためにも、是非掲載していただきたいと思います。

最近の生首フォトで、水野弘氏の三宝にのせた生首フォトは、正に圧巻でした。ああした勝れたフォトにお目にかかる、私にもムラムラと意欲が湧き上ってくるのです。内心、水野氏に負けない、素晴らしい生首フォトをこの手で撮って見たいと、及ばぬ鯉の滝上りとしりつつも、先日、久し振りに妻の生首フォトを撮りました。フォト二葉同封しますが、スペースをとるとは存じますが、生首愛好諸氏のためにも、是非掲載していただきたいと思います。

発表出来にくいフォトばかりなので、終着の目的は妻の斬首にあるので、その過程はどうしても粗雑なものになり勝ちです。しかしそうしたフォトでも差支えなければ、一度編集部に送りますから御批判下さい。

新宮氏が近頃生首フォトを余り発表されないのは、淋しい限りです。

私の生首への幻想は、あの豊満な肉体に、全身刺青をした山原清子嬢の生首、大塚啓子嬢のあどけない生首、そんな生首が私の手によって自由に撮れる日を不可能としりつつ望んでいることです。又荒蕪に、彼女達の生首が、凄惨にズラリと並び、その傍らに血のしたたる刀をさげた私が、それらの生首を凝視している。そんな幻想に憑かれる今日此頃です。

「生首に描く幻想」は一般に思われるように陰惨とか残酷とかいうものではありません。そのイメージは、実際に行うことの出来ないもののだけに、美しい夢であり、憧れの幻影であるといつて、いいでしょう。

八編集部よりV二葉の写真の中の一葉は、誌面の都合で掲載できなかったことをお詫び致します。

## 編集部だより

○多数の読者の皆様方から、暑中見舞状を頂き激励して下さいましたことを厚く御礼申し上げます。

○来年はどうやら昔からの迷信で妊娠分娩は敬遠されそうです。しかしM人士にとっては丙午の女性は垂涎の的、いずれ二十年後には稀少価値を発揮しように思えそうなのですが、それはさておき、本年こそ、編集部の手で妊娠フォトをと、只今交渉お願い中の一名、果して成功しますかどうか。

○琵琶湖へドライブがてら遊びに行こうかと誘ったところ、大塚啓子、東浦ひかるの二嬢から、いっただいだとせがまれて遂に近江舞子での女相撲撮影行となってしまうました。雪崎京人氏から送られた「相撲」という本を見せたところ二嬢とも俄然乗り気で、次はもっと近い処で、時間をかけてゆっくりに女相撲をとってみたいワというハリキリようでした。勝つても負けても、次は次は、と何番も繰り返えす二人に、撮影子の方が暑さに参ってしまい、もうこれくらいにしてほしいとは、いやはや。



## 伊藤晴雨先生を偲ぶ

黒井珍平

九月号久我庄一さんの創作「伊藤晴雨画伯」拝読、文中、小生と晴雨先生の論争の事がのっておりうたたなつかしく、語り草に残るなどといわれると？十二年ぶり、つい筆をとりたくなりました。

あれ以来、私のSM趣味、少しも変わらず、平凡な後手しぼりがかわいく、やはり血は今もこわいだけ、又亡くなられた晴雨先生も尊敬し、ずっとずっと好きなおじいちゃんです。ただ三十二年に結婚して、子供もできて以来、妻のていつて的だんだんあつ（私の好きなSMの面への）で、きも玉の小さい私のせい、写真はよろかSM記事のきれはしたりとても、家の中つとめ先は勿論、みつけ次第やぶく、止めねば別れるぞという有様で、（日本の政治歴史、ベトナムにも関係してくる。都条例が決った頃から特に）奇クともごぶさたしています。

したがって黒髪論争（28年頃）も何もかも一切、手もとにありません。20年間のコレクション全滅。でもたとえ手もとになくとも、マニヤというものは、SMに限り何でもおぼえています。奇ク難感の久我さんのいわれるように、読むだけ書くだけ、誌上のたのしみ位40に近い中年の私にみとめてほしいと思うものの、親友知己にまでふれまわり、動物気狂いあつかいされるのでは（ただ奇クをこっそりみたく位の趣味なのに、それも後手にしぼるだけ、それ以外の奇ク記事には全く興味なし）、この九月号もみつかったら、二センチずつに切りさかれるでしょう。いま、かくし場所をさがしているところ。

もっともサド全集や一流？文学學術の本は一切おかまいなし、堂々本棚に並んでいます。どういふ心理なのか不可解。しかし、しかし、かわいさのあまり（愛するのあまりです。これが又あちらに通じない）女房をつい紐で後手にく

くったりもします。おもちゃにする、おじよくする、死ぬほどこいやだといいながら夫婦とはふしぎなものです。又、いつバクハツしてよくも私の体に紐なんか、くくりつけたわね、おこるだろうか？そんなわけで文通不能の状態でおゆるし下さい。久我庄一さんによるしくおつたえ下さい。

いくらSMを止めろといっても食欲をなくせ、死んじまえと同じ事なのでムリな話です。先日NHK会長（阿部）の書いた「恐妻」なる本をよみ、上には上があるとたまげました。これも又人生也。



## 代理部だより

○九月号で予告しました、限定版「女性刑罰拷問特集」八美しき縛しめV（第五集）略号「美5」は予定の八月五日より数日早く出来上りましたので、お申込みの方々に、いや早くお送りしました。○これは待望久しきグラビヤ写真集アルバムです。どうか一冊お備え下さい。同じく限定版写真集の「美しき縛しめ」第三集八略号「美3」Vは売切れになりました。○アルバム「美しき縛しめ」第六集「緊縛美女艶姿百態」略号八美6Vは、予定通り八月十日に発送開始いたしました。未見の方はすぐ申込み下さい。折返し、お送りいたします。○引続いて「美しき縛しめ」第七集として、刺青の女王山原清子の秘密のすべてを括る特集組写真を企しております。未発表の特写物をふんだんに盛り込んだ豪華なアルバムをファンの方に捧げたいと思います。次号に発表の予定で目下撮影続行中です。限定版で印刷部数が僅少ですから、売切れると再び入手は困難です。



## サロソ楽我記

辻村 隆

(第十六回)

昨年の十一月号の青木順子さんを皮切りに、カメラハントを発表して、既になりの女性を紹介して来たが、SMカメラハントを書くこと、忽ち、次号辺りで、その女性に対して、大なり小なり反応があつて誠に有難い事と感謝して、いますが、中には紹介してほしいとか、住所を知らせてくれとか、色々と言つて来られるので、その始末に箕田編集長は非常に困つておられた。私が一度撮つたらあとは捨てておく様に思われるのか、辻村隆のおこぼれ頂戴といつてくる方もかなりおられるが、過去カメラ・ハントとして発表した女性には編集部へ紹介するなり(山原清子、美木乃々子、刑部典子、増田喜代司夫妻)、又折を見ては連絡しているのです。青木順子さんとの交遊も続いているし、竹野ひろ子さんの旦那さんからも忘れた頃電話して来ますし、志村善子さんとはあれ以来数度お目にかかつて、二度許り撮りましたし、S子として発表した南志津子さんとは、ヒョ

んたりしました。唯、カメラ・ハントの性質上、かつて鑑賞用女性として登場させた梨花悠起子のように、一人の女性のみを追い続けることは出来ないで、一見さもあるように思われ勝ちなのだが、私も人一倍フェミニストを以て自認しているのですから、彼女達をその後もお粗末には扱っていません。箕田氏の要請もあつて、来月号辺りで一度、カメラ・ハントに登場した男性女性の「その後」を全部未発表のフोटを掲載し、総括して見たいと思つています。SMカメラ・ハントも些か夏枯れでしょうが。過去の女性達をもう一度想い直していただくのもいいと思ひまして――。

× × ×

私達の先駆者、伊藤晴雨氏の物語が掲載された九月号が市販された数日後、伊藤氏と生前交遊のあった、静岡のU氏から長距離の電話があつた。U氏の声を実に四年振りにきいて、非常に懐かしう思つたが、私も彼を通じて伊藤氏と



は些かのお知合になり、氏の晩年の作だが責めの絵巻物を懇望して書いて戴き、過日も山原清子の懇談会に持参して、参集の方々にお見せしたのだが、U氏の曰くに、晴雨氏好みの恰好の女性が当地にいるが、是非撮つて見ないかとの有難い御連絡である。八月中旬頃を約して話をきいたのだが、晴雨氏には到底及ばないとしても、私自身、晴雨氏の心酔者であるから氏への供養の爲にも、来月お盆頃には、必らず、晴雨氏好みのいいフोटをものして、SMカメラ・

× × ×

夜乃探郎氏、芳野眉美の健筆には、唯々恐れいつている。最近号から、このお二人を抜けば、奇くは忽ちパニック。それに引き換え体調整わずとはいえ、辻村隆の何と影薄き事よ。自嘲の念しきり。



## マニアの手帖

## バンド・マニア

安田 隆夫

愛読者の皆様、お褒りありませんか。愈々盛夏を迎え、どなたも海に山にお出かけになり、思いきり遊ばされた事と存じます。

夏になると女性の服装が開放的になり、きまって痴漢の出没が云われるようになりますが、今年も御多聞に洩れず、当地でも市中新聞に、干してある婦人の下着類をネラったり、娘さんにイタズラしたりする人間が出てきた旨書いてありました。なかでもショッキングなのは（フェチシストにとり）或る町のA子さんBさんが勤めを終えて七時頃帰宅中、すれちがった三十才位の男が、いきなりピントのパンティを出して「これは私が着用するパンティです」と言ったり、ズボンのバンドをゆるめ少し下げてみせ、「この通り私は月経バンドをはいてます」等気狂じみた態度をとったので大変驚いたが、危険な事はなさそうなのでA子さんが勇気をふりしぼって、

「貴男は何故女の下着などつけたり見せびらかしたりするので」と尋ねると「私は生理バンドやズロース、パンティが大好きなのです。それから女の人に縛られて恥かしめられたり、たたかれたりするのが、何よりの望みなのです」と答えたそうです。

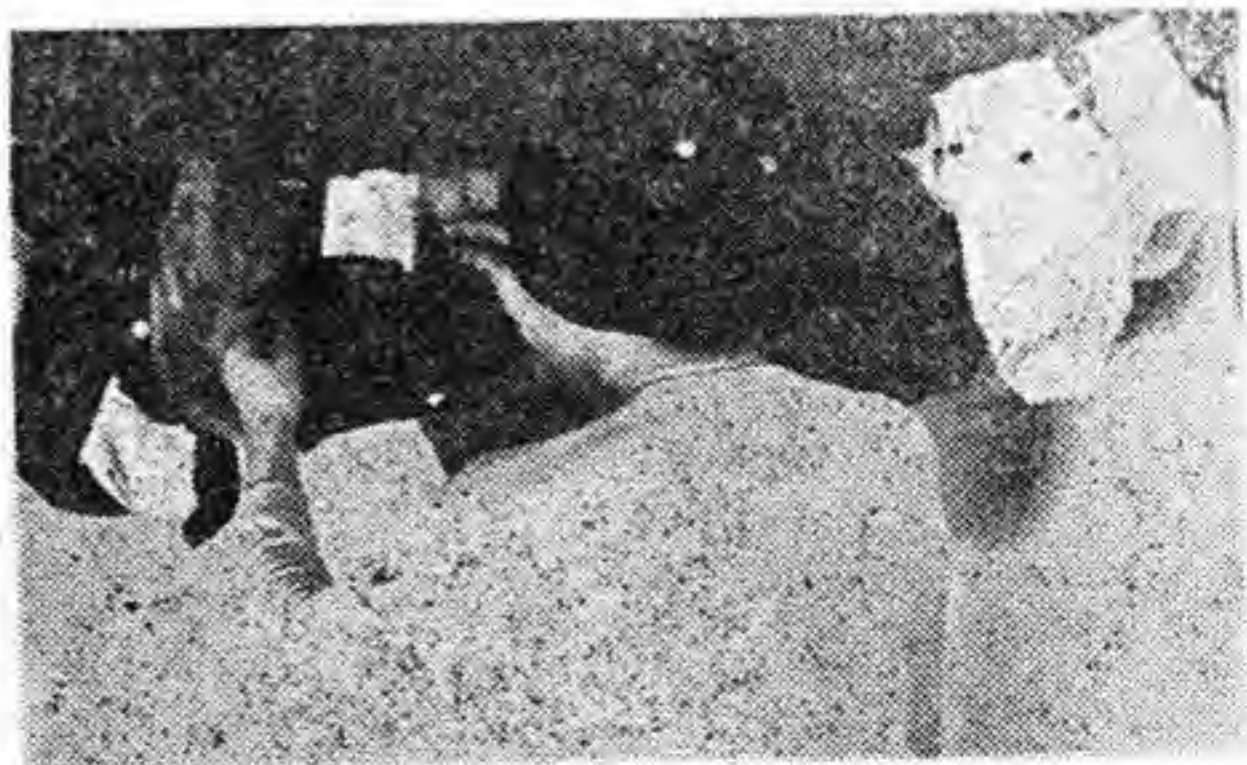
戦後、男の権威地に落ちたりといえど、まさか、こんな気狂い男が現われようとは……と、この新聞は結んでいたのですが、私は、



この男の勇気をまこと羨ましく存じました。勿論正しいフェミニストとして自ら節度のある他人に迷惑をかけない態度をとるべきであると思いついて行動してきたつもりですが、時には軒先の黒いメンスバスの向いの席に腰かけている美しい女性を見て、その前にひざまづきたい欲望にかられたりすることもありました。

妄想にとりつかれるだけの私にくらべ、たしかに他人に迷惑をかけてはおりますが、思い切った態度をとった、この痴漢に一種の羨望を禁じえない私はいささか青白き……のかたわれといったくらいが多分にあるようです。

編集部の方へ、六月号の奇クサロンに私の拙い写真、文を載せていただいたて、本当に有難うございます。御厚情に甘え、もう一度写真をお送り申し上げますので何卒御掲載賜わりますよう、願います。一枚は、今迄買い求めた月経帯を出干しのように網を通してひろげ鑑賞している私です。もう一枚はそれらの楽しい生理バンドを身につけたり口に押しこみ、替ゴムで押さえパンティを頭からかぶっている私です。重ねて掲載方お願い

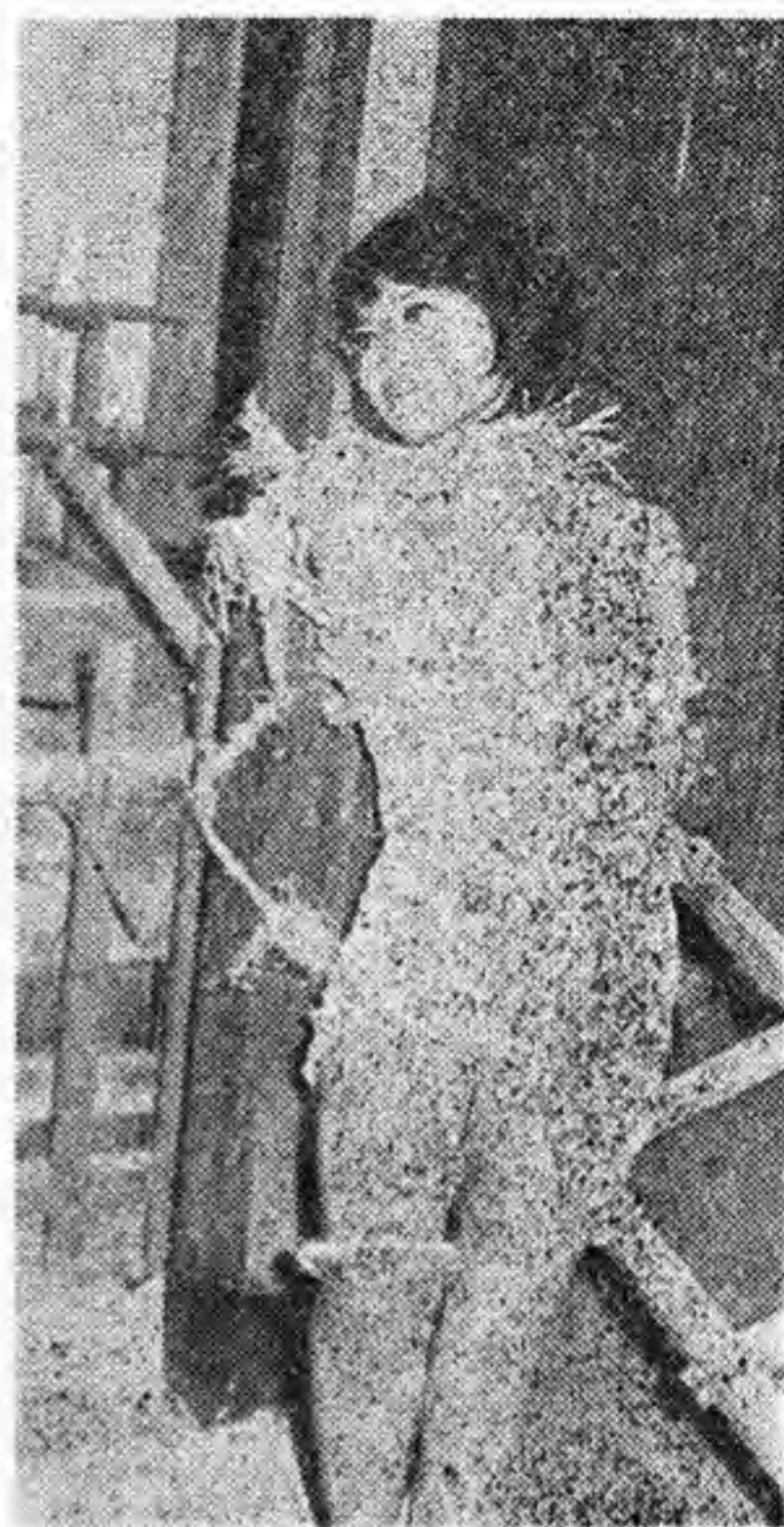


申し上げます。

私は最近、総ゴム張りの産後バンドを入手することができ、これをジカに穿いて楽しんでます。ゴムが肌に直接ぴたりと吸いつく感触はたまりません。特にこの頃のように気温が高いと、ゴムで蒸れて、穿き心地は最高です。私はこの産後バンドを毎日愛用しております。

末筆ながら奇クが益々御発展なよう祈ります。





## サジズムの極致

## 「青木順子」京で大いに活躍

東山 映史

『サジズムの極致』『サジズムの女王』青木順子が、京都に現われた。所は、ミュージックの殿堂、千中ミュージックで、大いに、その通のファンを満足させている。

青木順子といえば、本誌でおなじみ、病気のため、休んでいるという辻村隆氏のたよりで、ファンを失望させていたが、大いに元気に活躍していることを、先ず報告しておこう。

だしものは、いま、話題になっているベトナム戦争を背景にした

「戦争残酷物語」向井一也との、もちろん共演もの。ベトナムを背景にして、青木順子は、ベトナムのスパイ、そして向井は、アメリカの情報員、どちらも中国人でおなじみという間柄、そして、彼は順子を大いに恋していたが、彼女にはベトナムの恋人がいる。そこに、入りこんだ人間関係がある。

そして、彼女は、彼に、スパイ容疑として逮捕される。彼は、昔、彼女にふられた腹い

せに、「白状せよ」と、拷問にかける。

彼女は珍しいシナ服、そして、首に、縄をかけられ、引きずり回される。その痛さにのけぞりながら、縄をはなそうとするが、ぬけない。

そして、いよいよ、股間縛りである。前手縛りにされ、そして、マタの間に縄をかけられ、グッと引きしめられる。「アッ」という悲鳴があがる。そして、首縄をかけられ、太縄を猿轡にされる。

ぐっと前かがみになる。観客席からは、「アッ」という声が出ただけで、あとは重苦しい沈黙が流れる。

そして舞台では、彼女がのみ込んだレポ用紙をはき出させようというために、彼女のハラをタチワルとか、恐ろしいセリフが飛び出す。そして、ついに、彼女は、もって出たナイフで、彼をつき殺して倒れる。

現在、話題のベトナム戦争をからましたところがミソで、単なるエロ、グロ、サジズム劇でないところが面白い。

次に見に行った時は、最初ごろ話題になった「生の確認」をやっていた。昔の恋人だった女——今

は人妻になっている——彼女を密室に檻禁し、交通事故で記憶喪失になっている彼女を、昔の、縄ブレイなど、ゴウ問でよみがえらせようとする。彼は白血球の減少で死期が迫っている。

洋服をはぎとり、シュミーズも破り、彼女を後手に緊縛し、そして、マタにまわし、きつい股間縛りにする。青木順子は余程、股間縛りが好きというところか。そして舞台の上をゴロゴロころがす。乳房に、舞台のソゲがささり、その痛さは、たまらんという談話を本誌上でみたが、さもありなん。

舞台上に正坐させられ、彼の靴をくわえさせられる所は、前と同じだ。股間縛りもよいが、一度、あぐら縛りで、エビ責めを見せてほしい。

エロダクシヨンの小森白の「日本女性拷問刑罰史」の西条エリ子の女囚のエビ責の姿態が忘れられない。現代劇ばかりだが、青木順子を女賊——女囚にして、石抱きエビ縛りの拷問にかけてほしい。彼女なら、その効果を大いに発揮してくれるだろう。

ほかの舞台では、新国劇の「慶安狼」で、いまNHKテレビ「太閤記」の木下藤吉郎役で人気絶頂



## マゾヒスチック賛歌

それでもぼくは……

犬になりたい！

H・Y生



の緒方拳が丸橋忠弥、そして、その妻の節子が高倉典江、最後の丸橋忠弥の大立廻り、そして、捕えられるが、高倉典江の妻も、腰縄を打たれ、引っぱってこられる。もう少しサジスチックな姿にして

ほしかった。かつて、宝塚の、新芸座の小崎政房の「丸橋忠弥」で千原万紀子の女スパイが、由井正雪に捕えられ、ゴウ間にあう、よいシーンがあったのを思い出す。

(完)

坊や、大きな身体の

いかつい顔の大人の坊や

アララ、怒い顔きついお目目

いやあね、何処見ているの？

穴が開きます、ほら、こんなにどうするの、おかしい坊や

でも駄目！大人の坊や、

私は女神、地上の女王！

私の脚は逞ましい白木の宮柱

私の躰は足の爪まで総て神聖だから、だから拝みたいのね

潔めたいのね

でも駄目！大人の坊や

私は女神、地上の女王！

私は気憐な女王さま

大人の坊やをいじめたいの

アラ、そんなに、私に——？

いじめてほしいの

踏んずけてほしいの

なぶってほしいの

押し潰してほしいの

縛ってほしいの

鞭で打ってほしいの

知っている？坊やはM

そうなの……マゾヒスト！

私は勝気な女王さま

Mの坊やを飼い馴したい

アラ？犬になる、私の——？

はだかにします。踏みます

それで、いいの？

首輪をはめます。潰します

それで、いいの？

鎖でつながります。打ちます

それで、いいの？

それでもお前は、

私の犬になりたいの？

いいのかしら、マゾヒスト

——変な動物——

私は女神、地上の君主！

Mの坊やを支配する

私は気高い女王さま

Mの坊やを飼育する

私の心は、神の意志！

大人の坊やを犬にする

私の言葉は天の声

私のお水は神の酒

家畜の坊やのいのち水

立っては駄目——這って……

おてては駄目——お口で……

お返事ワンワン

お遊戯チンチン

大切な奴隷のご奉仕

家畜のおつとめ

ご褒美！

足の指、指のまた、足の裏、

かがと、くるぶし、ひざ頭、

美しいだろ、柔かいだろ、

甘いだろ、それから上は、

女神の聖域——おやめ！

お下り！無礼者

鞭！鞭！鞭！

床にまみれて

動けない哀れな雄犬

それでも人ほくVは

犬になりたい——



## テレビ

## 「燃ゆる白虎隊」鑑賞の一場面

## 兵頭庫一

筆者は先に「テレビ徳川家康鑑賞の一場面」と題して、或る老武士夫妻の悲壮な自刃風景の感激を綴った。「徳川家康」では、その後、天目山の武田家滅亡に際し、その夫人と数人の侍女達が壮烈な集団自決を遂げる場面も放送された。現在関西テレビ系では、「燃ゆる白虎隊」が毎週一回連続で放送されている。会津若松鶴ヶ城をバックに、キャストが写し出されている間に、三田明の若々しい美声が主題歌を唄ってムードを盛りあげる。

明治元年秋半ば

古城を守る初陣に  
降るは血の雨 弾丸の雨

花も会津の若緋武者  
我等は燃ゆる 我等は燃ゆる

白虎隊

会津藩校日新館では、家老日向外記が館長となって十六才から十八才までの少年の薫陶に当たっていた。鳥羽伏見の戦と上野の戦に、

幕軍を破った征討軍が勝に乗じて飽くまで幕府に忠誠を尽そうとしている会津目指して怒涛の進撃を続けてきたので、会津藩には戦時体制が敷かれ、玄武、青竜、朱雀、白虎の四隊が編成されて、日新館の少年武士達も白虎第二中隊となつて初陣を飾ることとなった。

館長日向外記の家には、貞淑な峯子夫人と剣を執つては男にひけを取らぬ美しい娘美弥があった。美弥はかねてから、同じく腕に覚えのある同じ年頃の藩の娘中野武子、優子たち十数人とかたらつて非公式な娘子軍を結成して、有事の際に活躍することを申し合せていたのである。

野戦利あらず敗報相次いで、城内では藩主容保公を中心に、連日連夜軍議が行われていたが、遂に要衝滝沢峠の守りが潰えるや、討幕軍はどっと城下に乱入し、会津の命運も正に尽きようとしたが、最後の御奉公と奮い立った会津武

のけぞる瞬間！

六角京之介



自らの下腹を切る激しい痛覚の嵐の中で、悲愴の思いが脳裡をよぎって、彼女は思わず大きなけぞるのであった。

着物の裾を割って真白い太股がなまめかしくのぞき、美しい女身の最期を花々しく飾るのであった。

士と薩長軍兵士との間に、激烈な市街戦が繰りひろげられた。

白虎隊や娘子軍の奮戦にも目覚ましいものがあつたことは、云う迄もない。ここに哀れをとどめたのは、こうした華々しい戦に参加し得なかった老幼の婦女子達であ

る。かねての打合せでは、敵の城下侵入と共に一斉に入城して城と運命を共にすることになっていたが、それを潔しとしない婦人達は老幼を道連れに、悉く自決し果てた。

テレビでは、夫と娘を戦場に送





ボクは猿ぐつわは、余り好きではない。理由は簡単である。折角の美しい女性の表情がかくされてしまうこと、かんじんの文弥節が聞かれな

いからであらう。ボクはどの女を責めても、この文弥節をとを第一の目的としている。文弥節の上手下手によって女の評価の



## ボクの責め方 さるぐつわ無用論

### 宝塚二三夫

った夫人峯子が一人淋しく仏間で壮烈な自害を遂げる場面を特写した。先ずカメラは三宝を前に端坐した夫人の姿をとらえ、帯の間に挿した守刀を外して鞘を払い、刀身を左の袂で巻いて右手を柄頭に添え、切先を左の乳房の下に当てて上体を前へ傾けると同時にグッと突込む。この時カメラは背後に廻って寸時苦痛と闘う夫人の姿を

とらえるが、まもなく右横斜めにどうと仆れて安らぎの表情を写し出す。哀れにも美しく又美事な女性自刃の情景であった。茶の間を対象とするテレビ放送で、女性の切腹姿態を期待しても無理な注文であるが、このような慎ましい自害場には、しばしば遭遇する。この場面では逆光線で衣服のあいりもさだかでなく、刺突

直後の苦痛の表情が上体の前傾に依って蔽われたこと、途中でカメラが背面に廻ったこと、などの点で筆者の不満を買った。又、お定まりの白無垢の着用が無く、女の嗜みとする膝括りの仕草が無かったことにも物足りなさを感じる。更に又たとえ急所の一突きとはいえ、重ねられた衣服の上からの動作は困難であらうから

せめて上衣一重の脱衣ぐらいは行った方がリアルだと思う。さはあれ、峯子を演じた名優加藤治子の演技は、その特異なマスクと共に賞讃に値いしよう。新聞の予告に依ると、八月下旬有名な「落城」がテレビ放送されるらしいが、又このような感激的場面が再現されることを祈ってやまない。

だ。もっとも、ボクの教育によって、その進況も相当違ってくるのも事実だが、なににしても、この文弥節をふさぐ猿ぐつわというヤツはボクの性に合わないわけだ。



米俵を背負う女

小妻 容子



〈体験報告〉

ベトコン責めと学生式しごき責め

三春谷 為義

初夏の頃、皆様如何お過ごしですか。奇ク六月号を拝見して我が意を得た様に感じました。私は或る運送会社へ勤めている男ですが、女性には一応紳士として通ってお

りますので、同性を責めることで満足しています。女性を責める人達には、あまり興味がないと思いますが、我々にはベトコン責め、学生式しごき責

め等興味あるニュースで、一寸話題豊富です。あの不幸な事件もM Sの気のない子が、「自分達も先輩にやられたから、やったんだ」という調子で無分別にやった為に起った事と思います。下級生を並べてベンタする位は、そう取立てて騒ぐ事はないと思いますが、やはりそこには愛情がないと学生としては、どうかと思います。

今春一人の後輩が会社へ入ってきましたが、偶然この男がMでしたので、よいコンビになって色々SM写真を作っております。

(一)は全裸で後手に縛って松の枝に逆吊りにしている所。庭球用ボールを口へ押し込んで私の褲でさるぐつわをしているので、痛めつ

けてもクレークー言うだけです。写真真はもう一人の友人に撮ってもらったものです。(二)と(三)は一寸発表出来ないと思いますが、参考までに。合成洗剤をたっぷり使って腸を洗った後、楽しむといったプレイです。

「男性モデル募集」との記事を読んで本人も応募したいといっていました。関東と関西では一寸離れていますが、もしよかったら小生が写真を撮って送りましょうか。もっとも小生の下手な写真では仕様がいかもしれません。

身長一六〇センチ、体重五五キロ位で小生と同じ会社員。好みはまあ吊りと海老責等でしょうか。

(山梨県八三春谷為義)

鼻ぐさりをつけられた青年

鼻障子の穴に鉄のくさりをつけられて酷使されるドレイ青年。

〈美枷輪生〉





## 短 信 往 来

木戸川健氏へ

橘行司子より

○オセツカイを一つ。九月号「世相診断室」で、浜口浩の「浅草紅団」というくだりは、川端康成の「が正ではありませんか。また浜本浩（浜口ではなく）は、たしか、懐しの「浅草の灯」という松竹映画の原作者ではないでしょうか。十二階下の風俗絵巻は、いまも行司子の胸中をゆさぶるものがあります。

編集者へ

小笠原正より

○女性を猪吊りにした際、何分程度なら持ち耐えうるかという件につき、経験に照して御回答下さいませんか。今まで貴誌を毎月続けて拝読いたしておりますが、こうした知識について、まだ納得するまでに至っておりません。

こうした遊びは繰り返して行きたいので、相手をトコトンまで傷つけてしまつては終りです。そのため特に貴社に質問する次第です。又、猪吊りの要領も教えて下さい。猶、足を両側に一直線にし

て縛った場合、五分以上の放置は相手を傷つけるでしょうか。以上二件質問します。

中村優子様へ

清田 真より

○御指定の場所へは午前九時参上しましたが、同時刻下り電車から降りた二十二、三才位の背の低い眼鏡をかけた男が、指定個所に走り寄り、何かを手にしたのを目撃しました。小生との距離約十五米位。もしやと思い訊ねましたが、強く否定するため、そのままに指定個所およびその周辺を捜しましたが、メモは見当りませんでした。

足早やに立去った男の右掌中から、チラッとピンク色（赤ではない）の吸取紙様の紙片がのぞいていたのが憶い出されますが、それでしようか？そうであれば、前記の行動等から、事情を知悉している者の仕業かと考えます。数秒の違いで落手できなかったため、貴女に御迷惑がかかったのではないかと心配しております。小生の都合で八時頃お訪ねできず右のような仕儀となりましたことを深くお詫びいたします。場所等は小生にとって都合なので、御希望があれば、八月二十九日、

又は九月五日、同様方法で御連絡願えれば幸いです。

なお前記男性がKKの読者であれば、かような通信の妨害をされないようお願いいたします。

(川崎八清田真)

大塚啓子様へ

皆川 実より

毎日暑い日が続きますが、お元氣でお暮しですか。

大塚啓子様、私は貴女のあのフアンです。雑誌の口絵にのっているのは勿論のこと、限定版や分譲写真も貴女のは全部買い求めました。髪がだんだん伸びてきた頃、一時瘦せられて又肥られた時など、フォトを眺めながら一喜一憂していたものです。私は写真に関する限り、貴女のすべてを知っているつもりです。

これ以上の望みは、天然色の貴女の縛られた姿をじかにこの目で眺めてみたいという願いです。どうせ私にとっては、高嶺の花でしょうけれど、これだけ写真の上で恋した貴女を、一度でいいから実物を見たいのです。

それから、是非貴女の体験談を誌上に載せて下さい。縛られたきの感想など、私の最も知りたいところです。

## 落 書

梶 天平

お待ちしています

駅の

あの階段のわきを入った便所の前だか後だか

とにかくそこです

午後5時30分、

困ります

下痢がちよっと止りません

紙をお持ちではないでしょうか？

ぞろぞろぞろぞろ

自動車とハットとねずみと昨夜の夢

女がガニ股で歩き去る

きつと過ぎたるは及ばざるが如しであります

## 秋

じっとしていると汗ばむ

まゆをひきしめて

じっと汗を少しずつ出している

それから

ふいに

笛吹くように喉が鳴る。

いましめをとく時間

ゆっくりゆっくりやってくる

爽やかな風の季節



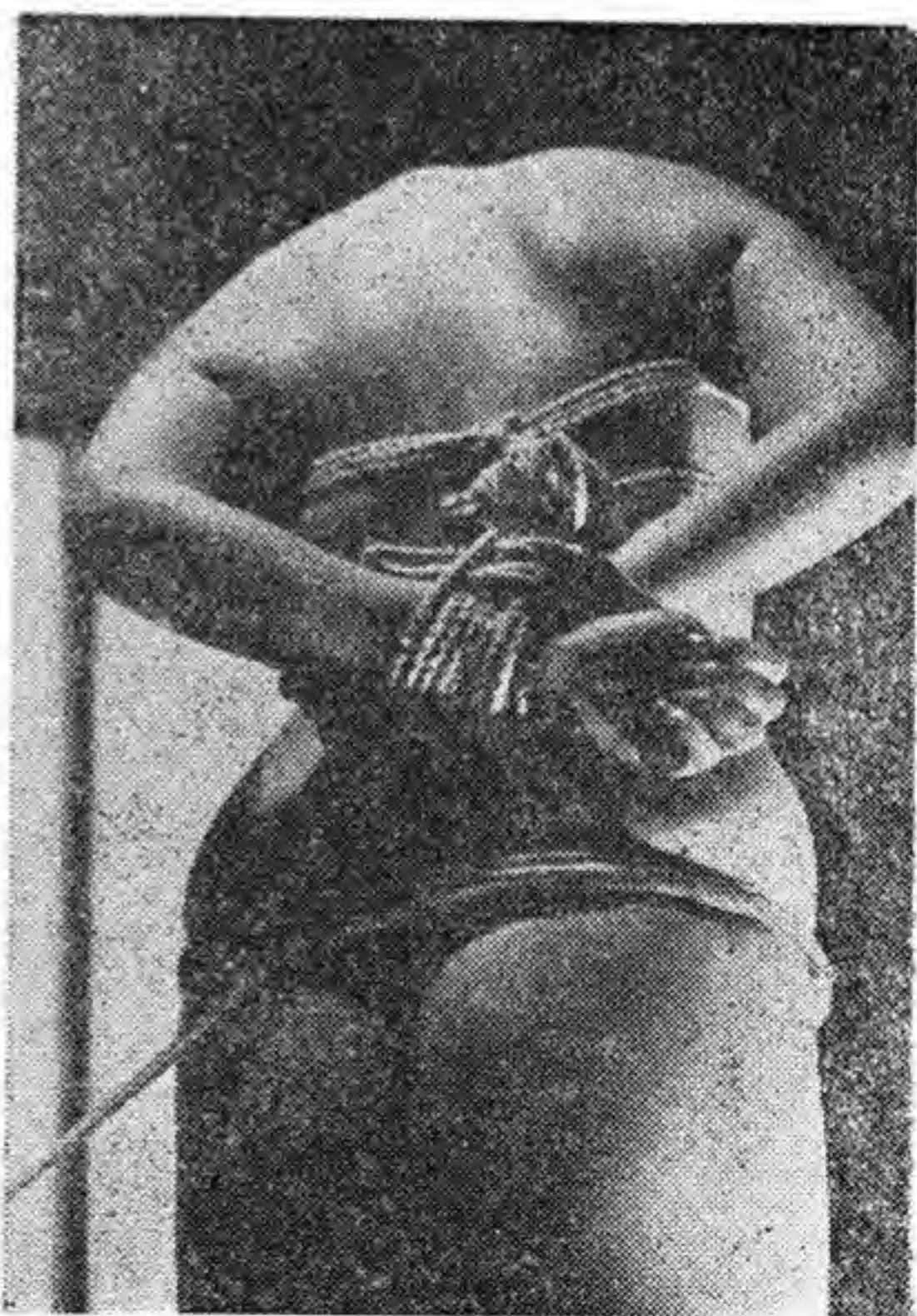
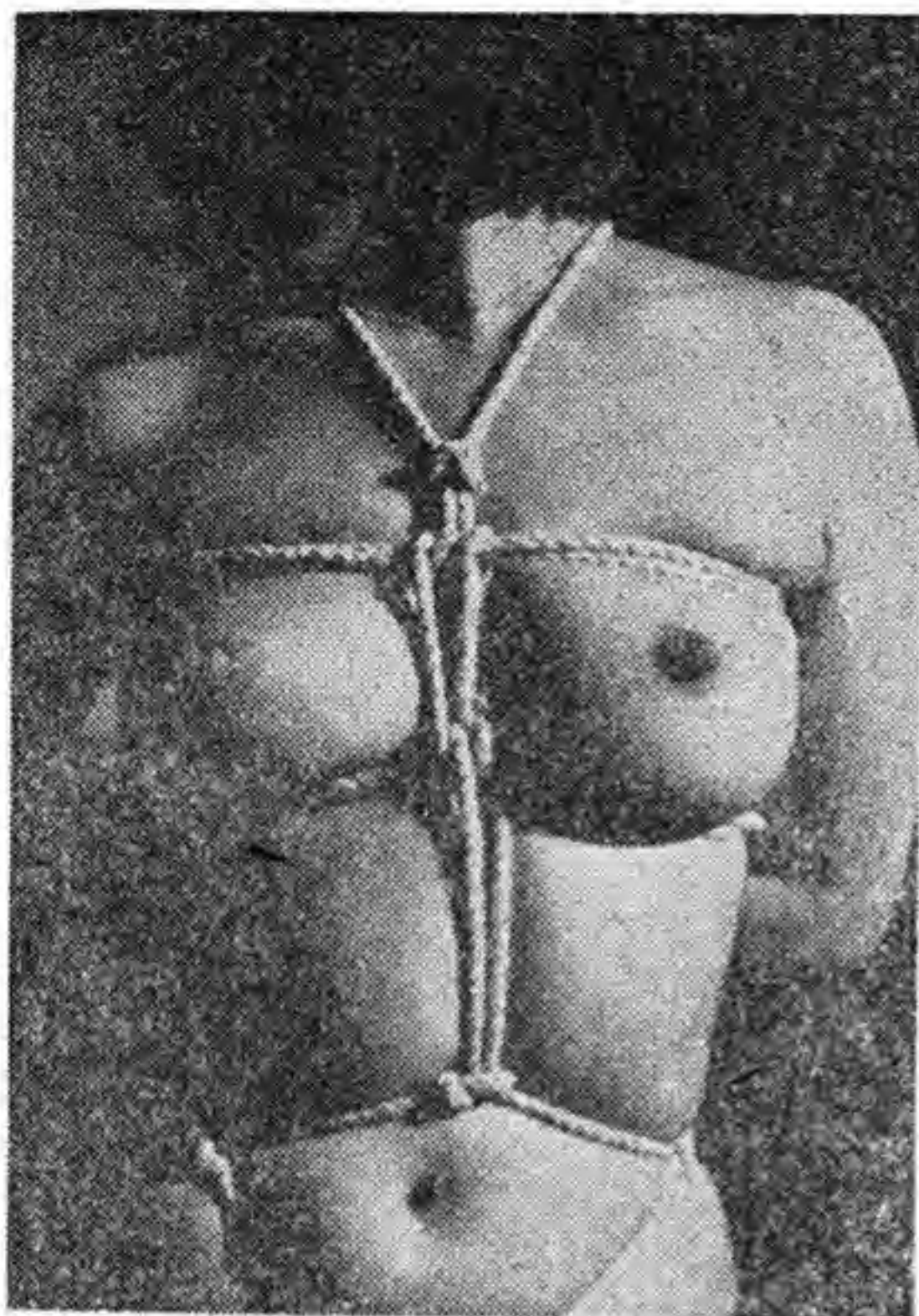
△夫婦のSMプレイ写真▽

## 愛妻ゆう子の近況

新田 英雄

長らく御無沙汰致しました。このところ、仕事に忙しく落着いてカメラもいじれず、又考えれば考える程アイデアにも行きづまり今日に至ってしまいました。このまま御無沙汰致して居りますと、皆様に忘れられてしまうのではないかと思います、小生の失敗作ではありますが、フォトを奇クサ

ロンに寄せた次第です。ライテングもアングルも、何もかもなっぺはいませんが、私達まだ健在という事を皆様にお知らせしたく敢えて寄せた次第です。近いうちに、必ずまたお便り致します。



「今年は妊婦マニヤの当り年か！」

夜乃 探郎

私の自己分析によると、特に妊婦マニヤであるとも思われない。だが、キライでもないようだ。とにかく、近頃、腹ぼての妊婦さんが、アチラにもコチラにも、これみよがしに、堂々の行進？をされているのがめだつ。しかも、私の住んでいるおひざもとでも、まず、隣の若い奥さんが、つい十日前頃、御出産。そのトナリの中年の奥さんも、つづいて御出産。

その四、五軒向うの新婚さんは、もう目だちはじめたおなかを、ピンクのエプロンで、はずかしそうにかくして買物に出かける姿を、みかけるETC……。そのような、あんばいの故か、私のところに、お茶のみにやってくるオバサンたちの話は、もっぱら妊婦談義である。このオバサン達の学？のある所によると、なんでも来年は、ひのえ・うまとかで





## 責画 「木馬の女」

室井亜砂路・画

吊り上げられてきた女が、木馬にまたがせられるという嗜虐的な幻想を絵画化したものです。無理に木馬にまたがせられる少女へ

の哀婉のイメージを、こういう絵でまとめました。私の絵が拙いため、十分効果が出ていないウラミはありますが御高評願います。

どうせ腹ぼてになるなら、今年に限るとか——である。迷信だか、どうか知らんが、とにかく、この「迷信」は、マニヤにとってはうれしい物の一つではなからうか。「ひのえ・うま」とは、六十年にいったん回ってくるようで、この

年に生れる子供は、ややもすると脱線がちな？子供達が生れる？とかETC……。

とまれ、今年は妊婦マニヤの当り年でもあらうか——。

△七月二十六日▽

## 山原清子後援会

○本誌六月号に山原清子後援会のことを発表以来、会員の方々も相増えてまいりましたので、只今いろいろと楽しいプランを企画しております。この件については、二、三会員の方々からの御意見も承っておりますが、御希望をお洩し下されば幸いです。

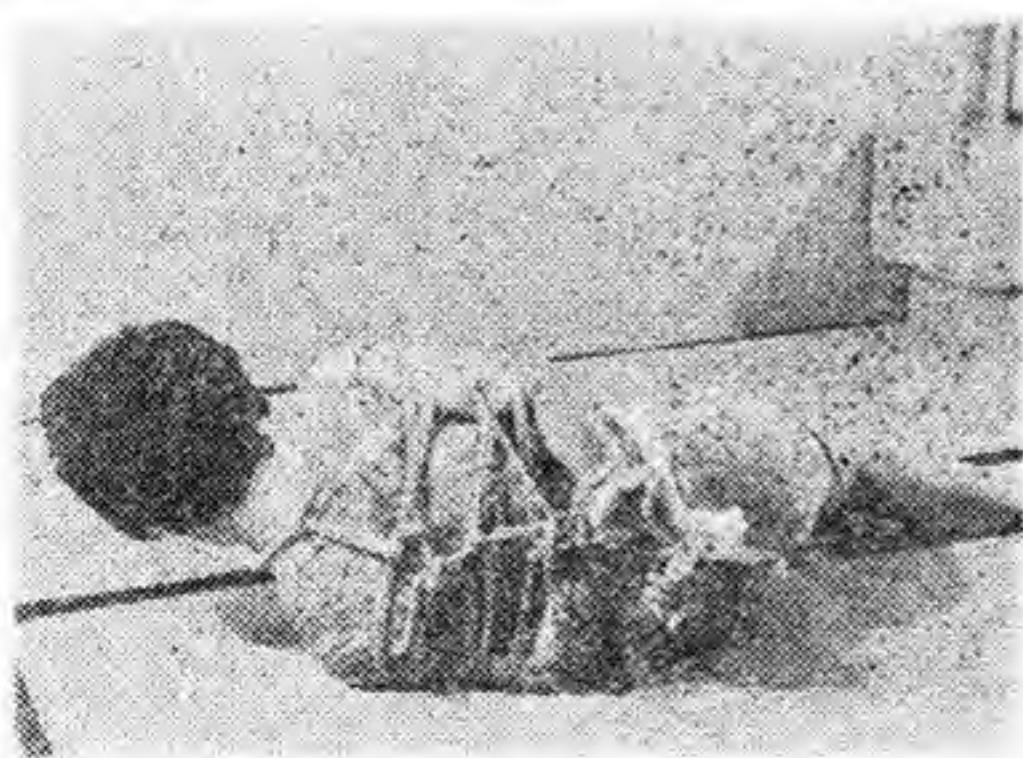
○入会したいのだが、自分の希望する場所で「山原清子を囲む座談会」を催してくれるのか、という御照会が数件ありました。この御照会に関しては、只今はっきり御希望の場所で開ける、ということとは確答いたしかねます。と、申し上げますのは、山原清子さんの都合もありますし、又、出席される会員の方々の御都合もあり、なるべく多数出席される場所を選びたいと考えておりますから、悪しからず御了承頂きたいと思えます。

○山原清子さんの見事な刺青を、自分の目でじかに確かめてみたいという刺青ファンの方々、大分御熱心な方が入会されています。それに刺青に関連したSファン、Mファンの方々、或は単に同好者と

して、山原清子に後援してやろうと思われる方々。紳士の集いとして、いずれ、会員の方々には、集いに關しての御連絡は直接差し上げることに致します。

○山原清子後援会に入会御希望の方は入会金千円を添えてお申込み下さい。その際、大中判の山原清子ポートレート二枚を差し上げますから、刺青、S、M、の三種のうち、いずれを御希望か、お書き添え願います。折返し御返信申し上げます。

(山原清子後援会)





謹んで

江戸川乱歩  
谷崎潤一郎

両氏の御逝去に対して

哀悼の意を捧げます

本誌にとっても、本誌の愛読者にとっても、一番馴染みの深かった、江戸川乱歩、谷崎潤一郎の二人の大家が、相ついで逝去されましたことは、暗闇に輝やく二つの灯を一度に失ってしまったようで、まことに哀惜の情を禁じえません。いついつまでも長寿せられて、私共のために珠玉の作品を一篇でも多く残して頂きたかったと願っております。

本誌では、両先生の作品について最も多く取り上げておりましたし既刊号で、作品の絵面化を試みたりしたこともありましたが、殊に江戸川乱歩先生は、本誌の直接購読者として、十数年来御愛読を頂き、陰ながらの理解者として協力を賜ったことなど考えあわせると一入その御逝去に対して、悲しみの感を深くいたします。

谷崎潤一郎先生については、M

派のメッカとして、その作品に接しないものは絶無だといわれるくらい親しまれてきたわけで今更くどくど申し上げるまでもありませんが、両氏の逝去に際して各新聞紙上で大々的に報道しておりますので、その中の一部を抜粋して生前の業績を偲びたいと思います。

江戸川乱歩氏

本名平井太郎、作家、日本推理作家協会理事長、紫綬褒章受章、二十八日午後四時十分、脳出血のため東京都豊島区池袋三ノ一六二六の自宅で死去、三重県出身、七十一才。大正五年早大政経学部卒貿易商の店員、新聞記者など十数種の職業を転々とした後、大正十一年に処女作「二銭銅貨」を「新青年」に発表して認められた。「心理試験」「D坂の殺人事件」など本格探偵小説のほか、「黄金仮面」以下怪奇小説で活躍、日本の

探偵、推理小説とともに歩んだ。戦後は評論集「幻影城」や「自伝探偵小説四十年」があるが、作家活動はほとんどなく、数年前から病気がちだった。しかし「宝石」を建て直したり乱歩賞を設定して新人育成につとめた。高木彬光、多岐川恭、仁木悦子、戸板康二、松本清張などに執筆をすすめて、推理小説の隆盛の機運をつくった。

谷崎潤一郎氏

作家、芸術院会員、三十日午前七時半、神奈川県湯河原町吉浜字蓬ヶ平一八九五ノ一〇四の自宅で急性心臓衰弱のため死去。東京都出身、七十九才。明治四十三年、東大国文科を中退、小山内薫らと第二次「新思潮」を創刊。同誌に「刺青」「麒麟」などを発表し永井荷風に激賞され、ついで耽美的な悪魔主義の「お艶殺し」「痴人の愛」戯曲「愛すればこそ」など多くの作品で大正期の文壇に足跡を残した。

関東大震災後、関西に住み昭和三年の「肥」「夢喰う虫」を転機に、その後古典的な題材と取り組み「盲目物語」「春琴抄」現代語訳「源氏物語」などを発表した。戦後も「細雪」「小將滋幹の母」「鍵」など力作を次々と発表、文

脈の衰えを感じさせなかった。昭和十二年芸術院会員、二十四年文化勲章を受章、二十六年文化功労者に選ばれた。「鍵」「細雪」「短篇集」などはアメリカでも翻訳され高く評価され、三十九年には日本人として初めて全米芸術院と米国文学芸術アカデミーの名誉会員に選ばれた。

という報道を読み、読者の皆様も今更のように、両先生の初期の作品を思いうかべて、青春時代のほろ苦くて、しかも甘酸っぱい感動を新らたにされたことだろうと思います。「刺青」「痴人の愛」「少年」或いは「一寸法師」「パノラマ島奇談」など、その題名を聞いただけでも血沸き肉躍る思いがせつないまで胸に迫ってくるのではないでしようか。

両先生に言及した原稿が、いちはやく投稿されてまいりましたが残念ながら、今月号の掲載には間に合いませんでした。次号では若干掲載できると考えます。マニアの目から見た両先生の業績なり作品感なりを今後の誌上に飾りたいと思います。何卒御投稿下さるようお願いしております。

終りに謹んで谷崎、江戸川両先生の冥福をお祈りします。



# 奇 譚 ク ラ ブ

昭和40年10月号

(1965年・10月号 <第19巻第10号・通刊207号>)



## 本誌の信条

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。

一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。

一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。

一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようはしません。そのためグラビヤ写真と口絵は廃止いたします。

一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。



## サーカス文献紹介

## 「サーカスの哀愁」

—「座らぬ座談会について」—

夜乃探郎

『奥の奥』第二巻第五号昭和12年5月1日発行

## 「前書」

サーカス・マニヤとしての名乗りを上げ、本年「奇ク」五月号に『見世物放浪記』——また、郷愁としての惨虐——を発表してから、私は、やっぎ早やに『見世物に関するメモ』（七月号）・『八鞭』その華麗なるファンタジイ（八月号）と投稿、掲載の栄に浴してきた。幸いにして、篠塚正氏をはじめ大方のこの種、ジャンルのマニヤの支持も感じられ、うれしく思った。

さて、これらの自作は、文獻的な裏付があるとしても、そこは夢男、夜乃探郎の描く世界——幻なるユメモノガタリであることに変わりはない。そこで今度は、チョットくらい、夢からさめて見るのも一興と『サーカス文献紹介』とした。

たまに一度位は（機会があれば、また実現するかも？）しかめっ面した、乙にすました夜乃探郎のポーズもニガミばしってよい？だろうと考えたからである。（では、以下言葉をあらためる）

そもそも、サーカスの世界は戦前のものである。これは日本ばかりでなく、世界的にそうだ。現在もかろうじて形態は残って居り、ときたま東京は「後樂園」グラウンドなどで開催されるとしても、もはやあのサーカスがつ独自の哀愁を秘めた華やかさは、放浪的なデカダンスはうかがうすべもないようだ。つまり仮設興行物への郷愁ではなく、シヨウという表現がピッタリの劇場観にも通じるものになってしまった。

サーカスの芸人たちのラブ・ロマンスが大





々的に新聞に報じられ、新しいスリルある曲芸種目が社会の好事家達の間話題となった良き時代、第一次大戦前のヨーロッパ、サーカス華やかかなりし頃を持出すまでもなく、

——「有田洋行」サーカスが（多分、そうだと記憶するが？）海外巡業の際に汽船が沈没して災難にあったとか、××サーカスが火災になったとか、一流紙のビッグニュースとはなった日華事変前（大正から昭和の初期にかけて）は、まさに日本にとってもサーカス黄金時代ではあった。そして、サーカスにも一流、二流はあるが、どこか未知の世界があの哀愁をふくんだジントの影に秘められ、妖しいスリルと空想を大方のマニヤの間にわきたたせたのだ。

これから紹介する『木下サーカス団』は、その当時、「シバタサーカス」「早川サーカス」ETCなど一流サーカス・メンバーの一つで東洋ハーゲンベックとも称された存在である。参考文献としては、昭和十二年五月一月号発行『奥の奥』第二巻第五号・八東京都芝区南佐久間町二丁目十番地・東京社／本文巻頭、特集『サーカスの哀愁』——座らぬ座談会・小此木礼助、編集、沼野健撮影による。◇「作者註」グロテスクなど定評ある専門的

な風俗誌ではなく、大衆的の故か？この雑誌は、現在、書誌研究家の間でもあまり触れてなく、また私の知る所では現役のサーカス団員の『紙上座談会』は珍しいと思うので埋れた文献として取上げる事とした。以下摘宜抜粹する。

# 「サーカス文献紹介」

東洋ハーゲンベック・木下サーカス団				
★				
同	同	同	同	同
木下 琴子	富士子	文子	小雪	松子
				その他
——三月十九日				
蒲田にて				

◇作者註・場所は「蒲田」となっているが、これは、多分、雑誌発行所が東京となっていてるので、旧松竹撮影所があった東京、蒲田のことを指しているものと考えられる。ここで興行しているときの現地ルポでもあらうか——。

## サーカスは 故郷の風

春だが、足下の土は冷える

風にはためく幕。

高い天井から垂れ下った幾十本の縄、鉄線

オートバイ競技の巨大な桶。猿の檻。オット

セイの跳ねる水音。

象が啼く。障子に風のあたるような、寂しい物凄いい声だ。

析が入る。

颯々と駆け込む馬。白い飾り毛。鞭の音。

拍手の響。

いろいろな音や声が、絶えまなく吹きまくる音楽に混って、サーカスの人間はちっとも

じっとしていないその暇もない。

楽屋から、舞台一面に、敷きつめたオガ屑

も、いつか夜気に湿って、ハタハタと幕が揺れる。

その幕と、一段高い楽屋口との僅かな隙間に、地面にじかに炭火を焚いて、代る代る手を暖め、足をあぶる。いわば、ここが溜りだ。

雑然とした、騒しい、そのくせ、変に寂しいサーカス人生の一隅。眼を隈取り、ダブダブのモーニングに、大きな格子縞のズボン、ポケットを押えると、眉毛の先から、チュツと水が飛び出す。『これでよし』と、支度万



端を整った道化<sup>ビエロ</sup>が、出を待つ間を、炭火によつて手をかざす。

顔を作ってしまったら、誰だか、もう判らない。

肉襦袢一枚の少女。きらびやかな日本舞踊の袴を高くはいた少女。

たっつけを捲き、まきげをかぶった越後獅子。

或は、兵士のような馬の調教師。コルセツトのような大きな革帯を巻いたオートバイの乗手。

そんな仲間まじつて、まるでよその世界から来たような記者の姿を見ると、ちよいとげんな顔つきをして、道化<sup>ビエロ</sup>役が、先ず話出す。

道化「どうして、こんなところへ入ったかって？そりや私なんか好きなんだ。女房もいるし、子供もいるし、もう止せて云うんだけど、やめられないね」

記者「どこがいい？」

道化「そいつは気分さ。よく言うじゃアないか。サーカスのジントをきくと、ふいと、忘れた故郷を思い出さつてね。小さい子供の時分に田舎で見たサーカスを思い出すんだらう。郷愁とかいう奴だな。何しろ、私なんか一日舞台に出ないと寂しくっていけねえ。昨

日、帰りに円タクに乗ったら、運チャンが、私の声をきいて、あっ、あんた、あの人だなんて云やがる。道化だから、顔じゃア知らないが、声でおぼえてくれる。やっぱりうれしいね。」

『あのオシャレりの運ちゃんだろう』と、そばから、一人が口を出す。

『あいつはサーカス・ファンだよ。糸子さんがごひいきさ』

拍手がきこえて、舞台から自転車乗りの少女が、漸く二十才位の青年と一しよに退いて来る。

まっ黒い猿叉<sup>タイツ</sup>に、まっ白なスポーツ・シャツ。その胸に大きな赤いリボン。背丈の高い顔の幼ない女。

年令を訊くと、

『十六』

『生国はどこ』

『熊本』

『名前は』

『松子。待ってね、支度して来るから』

いつの間にか、道化が舞台に出て、客を笑わせていると、もうすぐ柝<sup>き</sup>が入って、火にあたったいた、振袖に、胸高く、馬乗り袴を穿いた少女が、ホオ齒の高足駄をはいて、舞台

に出る。

『針金渡り<sup>カネ</sup>』の木下富士子。若者が、二人がかりで支えている。

梯子から、ツト手を離して、針金に乗る。

片手に扇、片手に日傘。くるくると華やかに渡って、やがて、立ち乍ら、袴を脱ぎ、振袖を脱ぐ。目に痛いほどまっ白い肉襦袢。

……

落ちると思ったら

一足も出やしない

富士子「怖いなんて思い出したら、一足も出ないわ。はじめは、地面から、一寸位のところに、針金を張って稽古をして、それを二寸三寸と、だんだん上げて、まア、なれるんですね。」

記者「それだけになるにはどの位かかる」

『随分かかるわね』

と、皆、随分苦労しているらしい。大分集ったところで、年令と芸当と、生国をきいておこう。

木下琴子、三十四才。芸は（地方）三味線岡山生れ。黒い裾模様の振袖を着て、この女子総監督。ここに入って十五、六年になるという。

同富士子、十八才。芸は針金渡り逆綱。広



島の生。小柄な眼尻の長い少女。

同文子、二十才。芸は頭立ちかしらだ（頭で逆立ちする）広島生れ。眼のハッキリした少女。

同小雪、二十二才。芸は足芸。広島生れ一寸森静子（作者註・当時の映画スター）に似ている感じ。

同松子、十九才。芸は自転車の曲芸。

いかにもそれらしく、伸々した脚で、生れは熊本。

◇作者註・次に『足袋は二日に一足』という章があるが略す。

### 天幕の恋は何処へ行く

記者「……この中の人は、この中の人同志結婚するんですか」

琴子「好きな人が出来ればね」

記者「結婚すると芸が出来ないというようなことはないかしら」

琴子「大ていありませんね、何しろ慣れま

すから」  
……じっと見てみると、少女たちは、幾百の観衆の前には、タイツ一つで、むき出してゐる脚を、横坐りのようにソツと曲げて、火にあたる。可憐な心ごころだ。何のことはない、サーカスは、裏返しうらがしの生活だ。

◇作者註・この「座談会」には残念乍ら「鞭」その華麗なるフアンタジイは、うかがうすべもない。

紙上公開という故か？。「誰が好き？」と『サーカスを離れられない若者の人生』の二章を略す。

危いののは――

しかし三分間だ

直径三間程の桶みたいな棚の中をオートバイが疾走する。しかも二台だ。棚は波のようにゆれて、物凄い振動は、小舎の柱の隅々まで響き渡る危い芸当を終えて、曲芸師辰川庄一が、厚い革ベルトを外す。

辰川「こいつを締めてないと、反動がひどいからね。」

記者「速度はどの位出る？」

辰川「四十マイルから八十マイル位だね。」

記者「凄いな、どうも。速度はきめてあるだろうが、二台で衝突しないかしら。」

辰川「大丈夫さ、なれているから、普通之路と変りはないし、それに、三分ですんでしまうんだから。」

と、事もなげに、そばへもどって来ている。相棒の松田曲芸師と顔と、顔色も変えず

呼吸もさわがず、平気で煙草をつけている。だが、三分間という、それは、生命をつなぐ三分間であり、同時に、生命を落すかも知れない三分間だ。

◇作者註・結びは『白い狐の後姿』という、サーカス芝居紹介の章だが略す。

× × ×

この『木下サーカス』のありさまは「奥の奥」誌五月号からみて、おそらく昭和十二年三月十九日・東京、蒲田の空地に仮設された記録と思われるが―この時期。七月七日、北京に近い芦溝橋で戦火の上った日華事変数カ月の前の頃である。すでにサーカス全盛期は過ぎたとは云え、未だ市民の娯楽機関として人気はあった。ただし、それは残光の華やかさにも似た存在ではあったろうか……。」

### 【附記】

この「奥の奥」・（編集後記）によると「サーカスは故郷の風――

村の祭りの鎮守の森に、町はずれの空地の掛小屋に、ハタハタとはためくサーカスのテントに、何かせつないコードモの頃の思い出を持たないひとはないでしょう。楽屋から覗いた裏返しにしたサーカスの哀愁。」（終）



## ガン作・マニヤのノート

## 濡れにぞ濡れし

芳<sup>よし</sup>野<sup>の</sup>眉<sup>まゆ</sup>美<sup>み</sup>

濡れにぞ濡れし

A 美枷輪生氏のMフォト  
B 再び市川千鶴子夫人の  
プレゼント

C 美顔術

D 襟子のこと

E 殿上情交像

F 廣作芳野眉美氏の  
優雅な生活号外

A 美枷輪生氏のMフォト

七月一日

美枷輪生氏より封書を受け取った。

奇クサロンの「連作Mフォト」は毎号楽しみにしている。

最近号では、五月号に二葉、六月号、七月号にも二葉、八月号に一葉、九月号に一葉発

表しておられる。

五月号の「箱詰にされた奴隷青年」は、手枷、足枷、鼻環、それに動物輸送用の檻と、完全武装である。

八月号の「台所仕事をさせられる奴隷」は鼻輪のくさりや腰のくさがりが眼を楽しませてくれるだろう。

小道具を集めるだけでも大変でしょう、美枷輪生さん。

彼の紹介は、三月号の読者通信にある。

「三十六才、体躯スマート、小商店主」

独身とは書いてない。不明。

「男性Sとのプレイは好みませんが、女性Sとのプレイなら、どのような責めにも、奉仕にも、喜んで甘受できるだけの自信があります」

——よし、しかし、

「いつも無理に頼んで、プレイをしてもらうだけで、まだ本当のS女性には、残念ながらお会いしたことはありません」

そこで美枷輪生氏におききしたいのですけれど、七月号の「尻打ちのポーズ」ね、あなたのうしろで、にっこり笑って立っていらっしゃる美しい御婦人、どなたですか。

「無理に頼んだ」女性なのか、それとも、奥様なのか。そっとお知らせ願えませんか。

「尻打ちのポーズ」を拝見してから、気になって、気になって、イカレているのです。

あの笑顔は最高。

(どうして俺は、女に弱いんだろう)

紹介が続けます。彼の特色は、

「鼻中隔に自身で穿孔し、現在、六ミリの孔を持っております」

七月号の読者通信には、彼の好きなプレイ



が書かれてある。即ち、

「一定のストーリーに従って、例えば、誘拐されて着衣剥奪、緊縛、拷問と奴隷になることを強制され、奴隷としてのあらゆる訓練を受けた後、売りとはされ、女主人のもとでさまざまな奉仕、労働、気まぐれな責めに苛まれるといったようなもの」

だそうです。

「どれもセルフタイマーやリリースを利用して写している」

ネガは、

「数えきれないほど所持している」

というのですから、たいしたものです。

美枷輪生氏の連続Mフオトの特色は、このへんにあるのかもしれない。

お手紙によると、最近、女形の流し芸人との連作SMプレイを撮ったそうである。

奇クサロンで拝見したいものだ。

今後の活躍を期待します。

美枷輪生氏のMフオト



## B 再び市川千鶴

子夫人の

プレゼント

七月二日

市川高夫氏より小包と

手紙をいただいた。

小包には、赤と白のナイロンパンティが、丁寧にたたまれてあった。

八月号の「濡れにぞ」を読んで、さっそく送って下さったものらしい。

お手紙には、市川御夫妻の写真が同封されてあ

った。達筆で、

「私達夫婦と致しましては、奇ク誌上においては、誠心誠意おつき合っている積りでおりましたが、何か疑われていた様でもあって不愉快に思い、此処に写真を同封する気になりました」

とあった。

(実に申し訳有りません)

和服姿もよく似合う美しい千鶴子夫人が、微笑を浮かべて、御主人の高夫氏に寄り添っていられる写真なのです。なんとまあ、オムツマジキことです。

「今回お送りしたもののうち、どちらかは、この写真の当日にも、着用したものだそうです。たしか、赤い方だった様な気がするのだけれども、と申します」

(何もいう事は御座居ません。私好みの色彩も感触も、芳香も最高でした。そういえば、東雪枝さんにお会いしたとき、芳野サンにあんな趣味があったのかと驚いて、旧刊号を調べられたらしいのですが、若き健康男性といったしましては、趣味ばかりでなく、その実用性にも大いに興味があるわけがあります。とにかく、芳野眉美氏は、女の子のお尻が大好きですから、お尻を飾っているおパンティはも



っと大好きです。ハア」

「多少S的な処に大いに魅力を感じたのでありました」

だから結婚なされたのでしょうか。

「私の好みに合わせて、精々これからも教育していく積りでおります」

勝手にしやがれ。

七月五日、約束通り、市川千鶴子夫人の悩ましきプレゼントをM氏にオスソワケした。

電話したら、すぐ飛んで来るのだからイヤになる。M氏も好きだな。

右、つつしんで御報告します。

再び、貴重な甘美なプレゼントを有難う御座居ました。いつも、勝手なことばかり書いて、それが返事だとは、我ながらアキレていきますから、それで、お許し下さいますよう。

お写真は大切に保存します。

八月号の読者通信で、市川高夫氏はズバリ書いていられる。

「万事積極的に行くべきです」とね。

「先ず生活力をつける事です。とに角経済力を養わなければ、こちらのいっていることも地に着きません」

「頼もしくない男性なんて、絶対女性にモテ

ル筈がないのですからね。空虚な夢みたいなことばかりいっていては、何時まで経ってもラチはあきません」

同感です。

「女性なんて順応性の強いもので、一旦そう仕付けてしまえば八分通りわが物です。ある程度の時間をかけてゆっくり導くことです」  
「初めから妻がS的であると看破した訳では決してありません」

市川高夫氏は、実にたのもしい男性だと思います。読んでいてスカッとして気持ちいい文章です。

土台がなければ家がたたないってことです。また飛躍したかな。どうも舌足らずは子供の頃から直らない。

## C 美 顔 術

七月六日

今日はちょっとキマリが悪かった。どうも書きすぎるのはよくない。だいたいオッチョコチョイの俺のことだから、何を書きだすかわかったものじゃない。

はじめて来店して下さった、その中年の紳士は、物静かな態度で自己紹介をなさったのだが、それが、だ、それが……

まったく、その時は弱ったな。

二月号の「濡れにぞ濡れし」のA「神酒拝受」の『その一』氏だったのである。

『その一』氏とは、

「雪枝さんのメンスバンドにして頂きたいのです。夜間お休みの間は、メンスのことは一切私におまかせ下さい。徹夜にて御奉仕するのです」

で、私の感想は、

「軽く書き、空想に走りすぎて現実ばなれしているのは、いただけない」  
であり、

「マゾヒストの通信とはいえ、現実の匂いが必要れば面白くないし価値も無い」

それが『その一』氏にいわせれば、

「二日目がいいですね」

「二日目——」

「一番ひどいでしょう」

「ああ」

「ブドウは熟したときが一番いいですね」

「そういうことでしょうか」

「ブドウ汁はすぐくさりますから、すぐ飲まなければいけません」

「はあ」

「ブドウから、したたるのを飲むのは最高で



す」

てなことになって、空想どころか、レッドワインを愛する、この道の先輩でした。

右、つつしんで訂正し『その一』氏の名譽を回復し、おわび致します。

『その一』氏の通信は、三十九年十月号にある。

「あん蜜をたべただろう、といったら」

「あたった」

「そう、びっくりしてました」

「甘かったから」

「何をたべたか、わかりますね」

「それはそれは——」

「薬を飲んだあとはまずいですね」

「薬がでるからでしょう」

「私はお酒が飲めないから、ビールを飲んだあとは困るんです」

「酔ってしまう」

「ええ」

以上神酒放談。

泥まみれの美顔術が流行していますね。女性の顔に泥をぬりたくるやつですよ。美しくなるためには女性は努力します。

その美顔術を『その一』氏は実行したのである。

問題は、その「泥」である。

『その一』氏は、その「泥」を「落下」させた彼女の足で、その「泥」を顔にぬりたくられた。

「まるで黒ん坊ですね」

「匂いは」

「夢中で感じませんでした」

「そういうものでしょうか」

「それに、彼女は無臭だから」

「体質によるのでしょうかね」

「それはあります」

「それで」

「彼女はすぐ洗おうとしたのですが、しばらく、そうしていました」

「——」

「彼女も興奮しましたよ」

以上美顔術でした。

## D 襟子のこと

七月十八日

「でるか」

ときいたら、

「でるわよ」

と答がはね返って来た。

これが二人の挨拶。

「それなら……」

……飲ませろ、とまではいわない。

それで了解。

襟子とは一週間程前にも会っている。

「どうだい」

「いいわね」

てな調子である。

まったく、襟子にはイカレてしまう。いつでも用意されているから、不思議だ。たっぷり飲ませておいてから、

「今日は少なかったわね」

などといっている。少いどころか……

「襟子の好きなように……」

……してもいいよ、という下の言葉が脱けている。私は本来無口で舌足らずだから、解説しないと何をいつているのかわからない。

舌の回転が早くなると頭痛がするという軟弱な体質である。ウソツケ。

もう少し説明すると、襟子の好きな態度で自由に俺に飲ませろ、ということである。

襟子はこちらから注文をだすと怒るから、好きなようにさせておくと面白い。

私の頭の上に腰掛けて襟子は考えている。襟子の柔肌で、眼は見えない。



考えながら、私の鼻をつまんだり、鼻の穴に指を突っ込んだり、唇をつまんだり、両手で口をふさいだりするから、息苦しくて、パクパクやっている。金魚じゃねえや、と思ってもそんなことは口に出していわない。考えているときは、何かしらいじくっていないと迷案が浮んでこないらしい。

と、

暖かいものを感じて、あわてた。

襟子は、頭から暖流を浴びせかけてきたのだ。そういえば、今日はフランス映画の「頭上の脅威」を観てきたばかりだった、と、なんてまあ、くだらねえことを考えるのだろう俺は。この時になって。

襟子の暖流は、髪をぐっしより濡らして、床にこぼれた。

「暑いわね」

と襟子がいった。

暑いのはこっちだ、と叫びたかったけれどそれどころではない。

中断。

襟子がまた考え始めた。

唇をまさぐっていた襟子が、私の口をこじあけると、腰を浮かした。

開いた口に、襟子の暖流が、少しずつ流れ込み始めた。

「うっ」

襟子が首を締めたのである。

口からあふれた暖流が、顎に首に流れた。

鼻をつまみ、首を締めながら、襟子は私の口に暖流を注ぎ込んで来る。

なかなか止まらない。

「暖流だけのことはある」

「暖流」

「海水だ」

「暑いから、塩分をきかせたのよ」

「それは有難う」

「感謝しなさい」

「いつまで、俺の顔に腰掛けているんだよ」

「まだ、でるもの」

「それじゃ、しょうがねえな」

あろうことか、私の両手と両足をまとめて

襟子は縛った。その上に坐ったのである。痛い。狸じゃねえや、と、いや、やっぱり叫ば

なかったよ。

まったく、金魚になったり、狸になったり

今日はいそがしい。ホント。

襟子の可愛いお尻が、顔の上にゆらぐ。以下、また今度。

## E 殿上情交像

伊藤堅吉「双体道祖神考」山溪文庫によると、群馬県吾妻郡六合村荷付場（草津）に、「殿上情交像」と呼ばれる双体道祖神があるとのこと。

足を投げ出した男神が、女神を抱いて情交を遂げている道祖神だが、女神像に衣服が見えて、殿上人の昼間の情事を描写しているところがある。

男女の性愛の極致をスケッチしたもので歓喜天の影響を受けていると説明されている。民間信仰と結びつき、双体道祖神にもその影響があらわれたものだという。

本に紹介された写真で拝見するだけだが、素朴な、健康な、明るい太陽の下の「殿上情交図」は、見ているだけでもほほえましい。SEXはこうありたいものだと思う。その意味で、これを書きました。

## F 贗作芳野眉美氏の優雅な

生活号外サクラとボタンでカブだということ、これは九月号と関係が有る



ラフマニノフのピアノ協奏曲第二番を、めずらしく、彼が壁にもたれながら静かにきいていると、まっ赤なネグリジェのサクラが入って来て、九月号を彼の眼の前に突きつけながら、ヤブカラボウに叫んだのである。

「批評や感想が的外れとは何よ。行間を読めとは何事よ。読者の皆さんに失礼じゃない。どこの壁にぶつかったのよ。コブなんか無いじゃない。ウソツキ。何が淋しいのよ。わたくしが、こんなに愛しているのに……」

彼は機関銃じゃねえやと叫びたかったのだけど、叫ぶとその日からオマンマの食いあげになるから、ゴメンネと小さな声でいった。

「あやまるくらいなら、書かなければいいでショ」

「スミマセン」

辻村サンが楽屋話をするから、彼はサクラ

☆お知らせ☆

女体悦虐フォト七十選Z組七十集は、分譲中止になりました。只今分譲中の女体緊縛フォト五十選B組五十集も近々のうちに分譲中止にする予定です。御入用の方は今のうちにお求め下さいませ。袖珍緊縛フォトY組五十集は、すでに分譲打ち切りになっております。

にオコラレル。

「サクラのオコッタ顔ってイイネ」

と彼がいったら、

「馬鹿」

って、サクラは、にっこり笑って、

「わたくしのお部屋で、ちょっと寝ない」

「お店はいいのかよ」

「一時間ばかりあるわ」

てなことになって、彼は、辻村サンに感謝

しなければならぬ（辻村隆氏「サロン楽我

記」八月号参照）

「ゴーイング・マイ・ウェイ」

彼はうれしくなって、隣室のサクラのベッ

ドにころがり込んだ。

さて、そこでイッパツ発射しようと思った

ら、

「いつも酔っぱらっているから、ワケノワカ

ラナイことを書くのよ。麻生サンだって、お

っしゃっているでショ。終戦直後の共産党の

アジ演説だって。名言よ」

とサクラはまだオセッキョを続けるから、

「そういったって、無理ですよ。高校生の頃

の俺は、日ソ親善協会会員だったし、共産党宣

言と資本論が愛読書だったんだから」

彼はベンメイこれつとめたのである。

「だから、この間の参議員選挙には、共産党

の野坂参三に清き一票をササゲてきた」

「それは東京地方区でショ。全国区は誰」

「たしか、自民党のヤツだった」

「それ、どういうこと」

「だってよ、共産党と自民党をたして、二で

割れば丁度いいじゃねえか」

彼の政治意識はコンナモノである。

そこで、どれどれ、麻生センセがそんなこ

とを書いているのかと、彼は頁をめくって、

サクラの裸の胸に顔を埋めて、男泣きに泣い

たのである。

「好みの違う麻生センセが、俺の書いたもの

を読んでもくれているとは思わなかった」

「それなら、アジ演説をしなければいいでシ

ョ」

ところが、彼は、

「行間の意味は、このことだ」

とかなんとか、またワケノワカラナイこと

をサクラにいつて悩ますのである（麻生保氏

「麻生保氏の生活と意見」八月号参照）

そのうち、彼が急にニコニコしだしたので

サクラは、きつと彼が有利な自分に都合のい

い箇所を発見したのだなと思っていると、や

っぱり、そうだった。



「英才的な人は、とにかく、独断的なところが受ける——ですって、ウヌボレルのじゃないの、馬鹿」

「——」  
「不服そうな顔をしてないで、府中サンにお礼をいいなさい」

サクラにお礼をいったってしょうがないと思っただけで、お礼をいわないと許してくれそうにないので、彼は、府中サンの代理として、サクラにお礼をいったのである。

しばらくして、サクラはベッドで叫んだ。

「それでも、実践派なの」

そんなこといったって無理だよ（沼津市府中逸夫氏の読者通信八九月号V参照）

サクラはトルコサンだから、出勤時間がきても、サクラがまだセッキョするといふから彼はサクラのあとをノコノコついて行った。

サクラが入浴料を払って、サクラがサクラサンにチップを払って、彼はようやくトルコ風呂に首だけだして入ることが出来た。

「トルコ風呂でもゆっくりお入りになって、のんびりしたところで……」

執筆しようと思ったのだけど八橋行司「SM時評」八九月号V参照）こういうところは彼はとてもスナオなだけけれど、サクラが

スッパダカになって、第二回戦をイドンデきたものだから、のんびり執筆するどころか、執筆するところが違うよ、って彼が叫んでも無駄だった。

二人とも、うんざりするほど汗をかいて、

「夜乃探郎氏は女の子の汗が大好き」

てなことになって、彼はサクラの汗を舐めたのである。

突然、ユキ、じやなかった、サクラが歯をくいしばったので、

「馬鹿野郎」

と彼は叫んだ。

「ここは映倫じゃねえや。もっと景気よく呻めけ」

サクラもスナオだから、彼に答えて、両国の川開きよろしく呻めいたので、マネジャーがあわてて飛んで来た。どうも、昼間の火花はいけない。（夜乃探郎氏「贗作の贗作夜乃探郎氏の優雅な生活」八九月号V参照）

失神しているサクラのハンドバッグから、一万円札を五枚ばかり失敬して、彼はトルコの帰りに御座敷に寄ったのである。

唐紙が開いて、

「ボタンです」

と、イキな芸者が挨拶したので、彼はあわ

てて、

「夜乃サンに、お尻をカミツカレテ痛かったでしょう」

とか、

「お尻に大きき歯型がついたでしょうね、見せて下さいよ」とか、

「夜乃サンって、俺よりHなんだなあ」

と感心したりしたんだけど、彼女はキョトンとしていたから、ボタンはボタンでも、夜乃サンの愛人じゃなかったらしい。

ボタンちゃんは「上汐」を踊ってくれたけれど、上手だったよ。小唄はいいね。秋になったら「紅葉の橋」でも踊ってもらおう。

トイレに立ったら、ボタンちゃんが戸を開けてくれたので、彼はうれしくなって、

「一緒に入りましょうよ」

とさそったのだけど、ボタンにやんわりとことわられた。残念。

そのあと、彼はチントンシヤンのボタンを抱いたのだけど、サクラとボタンでカブだからエンギがいいね。三回戦と四回戦がボタンである。

ボタンをひっくり返して、可愛いボタンのお尻を見たのだけど、夜乃サンがカミツイタ跡は無かったよ。ヨカッタネ。



る。  
会」の交渉に、襟子のところに行ったのである。  
（野中芳久氏「交友秘録」八月号参照）  
彼には、襟子の友達から、女だよ、受洗されなければならぬ使命があるのである。

豊かで美しい裸身が、ねじれ合  
い、からみ合い、互いに押さえ込  
んでフォールしようとして必死になる  
女体相搏つ女レス。



## 「痴人の糧」

……吊られて……

山本一章



晴れあがった空は、目が痛い程澄んで碧かった。小鳥がせわしく鳴声を響かせて梢を渡って行った。のどかな、まぶしいほどの昼下りだった。

明美はまばらな住宅の間を縫ってゆっくり歩いていった。明るい太陽と明るい風景が彼女を、うきうきとはしゃいだ気分にしていた。

もう夏も近い六月の一日である。

あの日から一カ月近く経っていた。羞しい野晒しから解放されたのは早朝、まだ暗い夜明けだった。冷えた手足を大山と百合子の二

人がストーブの火で温めてくれた。そして体が回復するや、明美は逃げるようにして、その家を後にした。

「またおいでよ。きっとおいで。そして、この家の女になるんだよ。僕は待っている」

大山は彼女の後から囁いた。明美はその言葉忘れてはいない。だからその日からしばらくは放心したような明美だったが、シヨックから醒め、心が冷静に戻ると、彼女は今の生活から訣別するための整理を始めたのだった。劇場からは退団し、今まで世話にな

った叔父にはお別れと今後自分を探さないで欲しい旨の書置を認めた。親しい友人達にもそれとはなしに最後の手紙を書いた。

古い写真や書類は燃やした。(わたしは、新しいアケミになる)

そしてアケミは大山に手紙を書いた。

(あなたの最後の言葉は決して忘れてはいません。あの日のこと、とてもシヨックでした。でもわたしは決心をしました。その決心を実行するために、過去の明美を捨て去りました。文字どおりの裸一貫のアケミになりました。このアケミを受け取って下さい。あなたなら、きっとあなたの仕方を受け取って下さると信じています。

わたしがあなたの家の女になることは誰も知りません。だからどんなにされようと、たとえ殺されても誰も知ることはできません。わたしの体と心と命を、しっかり受け取って下さい。

体の苦痛のために、たとえ涙を流すことはあっても、心でまで泣くことはないと思います。わたしはこの間のみじめな、余りにみじめな体験の中で、わたし自身の中にあるものを発見し、そのためにわたしのすべてを捧げて悔いないことを決心しました。



きつと返事をして下さい。その返事を胸にわたしは参ります。

百合子様がおいでになっても またどんな知らない方がおられても、わたしはもう躊躇いたしません。

愛しています。アケミの悲しい希いと共に――

大山からは折返し返事が送られてきた。  
（待っていた。ただそれだけを待っていた。悪魔のような男のところへ君は一人で歩いておいで。

僕は僕なりの仕方ではなしはしない。そして君の苦悶を悪魔どもに公開しよう。君の牢屋は待っている）

アケミはまぶしい太陽を全身に受けて 少し陽気になって、大山の家へ歩を運んでいるのだった。

犠牲者の悲哀感はなかった。彼女は待っている筈の残忍な待遇も、今の彼女には喜びにさえ感じられた。夢の中に見た苦しい恐怖とは異質の、未知の世界への期待と少しばかりの不安があった。それは初めて学校へ上った時の気持と共通したものがあつた。

大山の家の前に立ったアケミはしばらく、その家を眺めた。そしてゆっくりと呼鈴を押

した。ガチガチと錠を開く音がした時、アケミは胸をどきどきさせていた。

「やあ」

大山は、じつとアケミを見た。

「よく来たね」

二人は大山の書斎へ入り黙ったまま向き合った。大山はしっかりとアケミの手を握り、アケミも軽く握り返えしていた。

「淋しかったよ」

「……………」

「百合子も、もうじき来ることになっているけど、いいだろう？」

「ええ」

「お風呂を沸かしといたから入っておいで。それからみんなで食事に行こう。予約してあるんだ」

大山の優し過ぎる態度は、アケミにはちよつと意外だったし 物足りない感じもした。狭いが小綺麗な浴場に浸った彼女は内心ほつとしていた。入浴を済ませてワンピースを着たアケミは、化粧を直して書斎へ戻った。百合子が来ていた。

「こんにちは。この間はごめんね。あたしも大山にはひどい目にあったことがあるの。アケミさんて云ったわね。可愛いわ。仲良くし

ましようよ」

見えすいたようなお世辞は、快いものではなかった。アケミは黙っていた。しかし余りこだわったような云い方をしないのには好感が持てた。

二人は大山の運転する古いオースチンに乗った。百合子が助手席に乗ったので、アケミは独り後部座席に坐った。車はアスファルトの道を神戸に向って走った。三ノ宮から海岸の方へ、そして車は停った。

「レザニマル」

洋風の構えをした小さいグリルだった。

夕方にはまだ少し間があつたので 中は空いていた。一番奥の半ば個室のようになった一室に用意がされていた。三人はそのテーブルに腰を降ろし、ワインから始まるコースの食事を摂った。

「アケミさん、ここはね、大山が出資しているのよ。案外おいしいでしょう」

百合子は先輩顔をして喋った。

「この地下はバーになっているの。時々面白いショーをやるのよ。この間はゲイボーイのヌードショー、傑作だったわ。後ろから見えちゃうのよ。若い子だったけど」

「アケミ君にも一度出てもらおうかな」



大山が口もとに微笑を浮べながら云った。  
「そうね。いいじゃないの。前に一度やったでしょう。そら、中国人の女でバタフライをつけて手をくくられて鞭で打たれるのがあったでしょう。あの男、いやらしい顔をしてたけど、うまく鞭でバタフライを落したでしょう。そのあとは驚いちゃった。くくられた女に顔をまたがれて、かけて貰うんだから。ちょっとえげつなかったけど。その男ったら顔中ボトボトになりながら笑ってるのよ。バーの女の子はキヤァキヤァ騒いで逃げてたけど、そんなの案外、客が喜ぶのね」

アケミは百合子のそんな話を聞きながら、自分がそんな見世物にされた時のことを想像して、ぞうっとした。

支配人らしい黒い服を着た男が、大山の傍へ寄ると腰をかがめて耳元で何か囁いた。

「さあ行こう」

三人は表へは出ずにカウンター横の狭い階段を下へ降りた。余り広くないサロン風のバーが薄暗い光線の中で現われた。五、六人の客が中央のフロアに向って坐り、煙草をふかしたり、洋酒のグラスを手に使っていた。

その後ホステスらしい女が四、五人立っ

ていた。何かが行われようとしていることは明らかだった。三人もフロアの傍のソファに腰を降ろした。

「夜よりも今頃の時間の方が安全なのよ。」

だから表の入口は締めて、常連ばかりが来るの」

百合子は、不審そうなアケミの表情を見て説明した。

ピアノが、ゆっくりしたテンポでソロを弾き始めると、フロアの中央をライトが左右から照らした。そして金属の影がアケミの横を走り抜けると、そのスポットの中にさっと両手を上げて立った。全身を金粉で塗った女だった。顔から爪先まで金粉に覆われた女体は人間的な暖かさを失った、冷い金属製の彫像のようだった。ただ呼吸するたびに動いている胸と腹部が、生きた人間であることを証拠だてているだけで、まるで爬虫類のようでもあった。その女体が踊り出すと怪しい雰囲気さがサロンに漂った。全裸だった。毛髪さえ取り去られた裸体に塗られた金粉は、ライトの下でキラキラと輝いた。その女は極端な姿勢をとって踊ったが、猥せつな感じは全くなかった。

アクロバットだった。曲りくねる肉体はそ

の塗料の持つ非人間的な輝きと相俟って、人間だということを忘れさせる程だった。アケミの前を向いて、両脚の間から顔を出した時、アケミは恐怖のようなものさえ感じた。体のどこにも肌本来の色はなかった。

「全部に塗ってるのね。すごいじゃないの」

百合子が感心したような声を出した。アケミは、その女の体に塗料を塗るのは誰だろうと考えると、ひどく刺激を感じた。

踊りはほんの五分ばかりで終り、ライトが消えた。

ホッという溜息が聞えた。

「さあ帰ろう」

大山は二人に声をかけると、もと来た階段を上り始めた。

グリーンのオースチンは神戸から大阪へ向った。外はもう夜になっていて、車のライトが国道を連なって走っていた。

大山の家に着いた時には、もう時計は八時を指していた。

再びアケミは百合子と一緒に入浴させられた。狭い浴室で百合子と二人だけ入るのは辛かった。それに体の変化を見つけられるのが恥しくて、しっかり押えたままだった。

「駄目ねえ。恥しがることはないでしょう。」



彼は薄汚れたようなのは好きじゃないのよ」

百合子はアケミの体をゴシゴシ洗った。

手を押しのけて、押えている部分にも石鹸を塗った。

「じっとしてるのよ！」

のぼせる程湯に浸って、ピンク色になったアケミの体を百合子は突然抱いた。

「可愛いわ。好きよ」

大柄な百合子の体に抱き締められて、アケミは息がつまりそうだった。そして彼女が片手でアケミの顔を起して口づけをした時、アケミは甘美な酔ったような気持でなま温い百合子の唇を受けていた。

「さあ、頑張るのよ」

百合子がピシヤリとアケミの茹で上ったような尻を叩いた。アケミの気分を陶醉から屈辱へ突き落す一撃だった。

両眼の上から絆創膏をベッタリと貼りつけてから、百合子はアケミの全身をバスタオルで丹念に拭いた。

百合子に手をとられて、裸のままよろよると歩いた。どこへ連れて行かれるのかわからなかったが、裸のまま仕置を受けることは予感できた。足の裏の感触が板の間から土の上へ、不規則な小石のある地面が痛かった。そ

して平らな土間のところへ入った。それは裏庭の片隅にある古くて半ば壊れかかった納屋だった。湿った微くさい臭いがした。両手首が前にしたまま布製の紐のようなものでしっかりと縛り合わされた。背中を押されて低い木の箱の上に立たされると縛られた手が上へ引き上げられた。アケミは全く柔順だった。

納屋の中には余り明るくない電球が一つ、裸のままぶら下っていた。その土間の中央で箱の上に立って両手を上にしたアケミが、全身を少し腰を引いた姿勢で晒した。

手首の紐に結ばれた縄が露出した梁に巻かれ、彼女の体重のかかるのを待っていた。

百合子は真紅の紐を手にとると、アケミの口を開かせて、それを咬ませてぐるぐると巻いて、きっちりした後頭部で結んだ。

「あんた綺麗な体をしてるわね。憎らしくなっちゃうわ」

そう云いながら百合子は、彼女の耳の孔に柔らかいゴムの栓で詰めをした。アケミから音が去ってしまった。箱の上の両足首が揃えて縛られた。

大山が納屋へ入って来たのは、その時だった。彼は入ってきてアケミの姿を見ると、いきなり足の下箱を足で蹴り外した。ぐぐっ

と体が伸びて爪先が辛うじて土間に着いた。手を上に半吊りになったアケミの体は、伸び切って、白い腹部が喘ぐように呼吸していた。ピンと張った乳房が無防備な体を哀れむようにふるえた。

大山はプラスチックの長い靴篋のようなものを手にすると、遅く突き出た臀部を打った。ピチッピチッよじらせた肌を追って鞭打ちは執拗だった。肌をはじくような音が、彼女の白い脂肪ののった二つの半球を赤く色づかせた。アケミは手首と爪先を軸にして体をくるくると廻わしたが、答は尻が来るのを待って打った。途中百合子が交替した。百合子の打撃は大山のそれよりも残忍で厳しかった。体の内部へ響くような痛さはなかったが肌を切り裂くような痛さは反って耐えられなかった。

アウウウ、アウアウ

紐を咬んだままアケミは呻いた。

（ああ、もう許して、カンニンして！

痛っ！あっあっ——カンニン！）

打撃は尻だけに集中して、徐々に痛さを感じなくなって行ったが、燃えるように熱を持って来るのが体の奥に伝ってきた。

一しきり鞭打ちが終ると、二人はゆっくり



と回転するアケミの体を眺めた。吊られた手が青白く失血していた。そして腹部が大きく波打って、時々すすり泣いているようにけいれんした。

「少しこたえたようね。でも嬉しそうじゃないの。一ぺんやってみたいと思ってただけど……………」

「なにを？」

「逆さ吊りっていうの。どれぐらい保つものかしら？」

「さあね。五分ぐらいなら大丈夫だろう」

「手伝ってくれる？ 足を開かして吊ってやろうと思うの」

アケミにはその会話は聞えなかった。だから手吊りから降ろされ、縄を解かれた時、もう許されるとほっとしていたアケミだった。かがみ込んだ彼女の痺れた手を二人が摩擦した。そして血の色が戻ると、直ぐ後手に縛り合わされ、背中に吊り上げるようにして首に縄が巻かれた。手首を下げると首に縄がかかって絞まった。その首縄の前ところに別の縄が結ばれ腋の下から背中へ、そして乳房の上下を強く締めた。更にその乳房の上下に巻かれた縄が、両乳房の間と、両脇の部分で寄せ合わされて短い細紐で結ばれたので、両の

乳房は縄で搾り上げられて、ぽっくりと円く突出した。その乳首の根元を百合子が木綿糸で括った。

「こうされると、こたえるものよ」

両肘を引き絞るようにして縄がかけられると、アケミの上半身は、もう完全に自由を失っていた。

高いテーブルの上に、俯伏せに寝かされたアケミの両足首に別々に太い縄が巻きつけられた。その一つの縄尻が梁に通されて引張られたので、体は海老のようにそり返った。大山はアケミの腰を両手でかかえると逆さに持ち上げた。百合子は梁を通った縄を一ぱいに引いて横の柱に巻いた。そして直ぐに残った足の縄を離して梁に通して引いた。アケミの両足は大きく開いて梁に引きつけられた。大山がゆっくりとアケミの体から手を離し、足でテーブルを横に押しやった。ぐぐつと縄と体が伸びて、頭が土間の上五十センチ位のところまで下った。完全なY字型だった。ゆっくりと前後に揺れるのを眺める百合子の目に残酷な輝きがよぎった。大山は血走った目で逆さ吊りの無抵抗の女体を見つめた。腰が細くくびれ、それだけに腰から太腿にかけての肉づきが逞しく見えた。

彼は拷問されていた中国女の姿を思い出した。そしてふと自分が未だ、その拷問の場に引続いて、立っているような錯覚に陥った。

ウン、ウン、ウン、アケミは区切ったような呻きを呼吸と共に吐き出していた。顔に血が下り、縛られた上半身の縄が腕から手首へ痺れを呼んでいた。痛さは大したことはなかったが苦しかった。羞恥心はその苦しさの前では無力だった。

百合子はアケミの、その惨じめさに、もったいどい苦悶を味あわしてやりたい欲望を感じていた。理由はなかった。可憐な娘の体がみじめに悶えふるえるのに、強い快感を味わっていたに過ぎなかった。

「蠟燭を立てちやおうかしら」

百合子は、嵐に揺らぐ弱々しい草花を、手当り次第にひきちぎってしまいたいような荒々しい気持に駆られていた。そして、その着想は、女性らしく陰険だった。

Y字型に、ぴんと一直線に張ったアケミの両脚の筋肉は、まるで伸びきったゴムのようになり緊張して、かすかにけいれんしていた。フーと息をするたびに、落ち窪んだお腹が、わずかに上下して、あたかもアケミの激しい苦悶を喘いでいるようだった。



ふっと我に返った大山は、アケミの冷汗の滲んでいる素肌を見て大きな声で言った。

「早く降ろすんだ！死んじゃうぞ」

土間の上に縄を全部解かれて横たえられたアケミは、ぐったりと動く気力もなくなっていた。吊られていたのは、五分間もなかったが、束縛されたままの逆さ吊りは彼女に少し吐気を催させていた。大山は静かに背中から頸筋を撫で擦った。

「お前は残酷な奴だな。死んだら、どうする気だ」

百合子は口をとがらせて フウーと息を吐いてにが笑いをした。

「大丈夫だよ。あれぐらいじゃ、どうっていうこともないわよ」

大山はアケミの口からも紐を外した。

「大丈夫か？」

アケミが、かすかに頷くのを見て、彼はほっとした。そしていじらしい気持で一ぱいになった。

（この女、離しはしないぞ！）

しばらく、そのまま沈黙が続いた。大山

と百合子は煙草をふかした。

「もう止すの？」

百合子がもの足りないような声で云った。「えっ？止しはしないさ」

二人は顔を合わせると、にやりと笑った。

土間に横たわっているアケミの体は、次に加えられる虐待も知らずに、大きな呼吸を繰り返していた。

（この項おわり）

△次号、十一月号▽

「屈辱の夜」

## 「最新版」 ニューモデル悦虐写真五十集

### K組五十集

大手札判印画紙（9×13寸）焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛（山原）
K 2	恍惚たる責の境地（山原）
K 3	苦悶の表情海老責（大塚）
K 4	海老責にあえぐ女（大塚）
K 5	全裸のぐるぐる巻（玉田）

K 6	豊満な臀部を晒す（刑部）
K 7	厳しき縛りに酔う（山原）
K 8	荒縄で仕置される（美木）
K 9	土壇に観念した女（美木）
K 10	ムチ打たれる女囚（美木）
K 11	縛り人形を眺める（山原）
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ（山原）
K 13	足首と首を連繫す（大塚）
K 14	後手の複雑な縛り（玉田）
K 15	裸縛りに恥らう女（山原）
K 16	夫にされる鼻責め（増田）
K 17	緊縛にあう若妻姿（増田）
K 18	猿轡で鼻を虐める（増田）

K 19	開股縛にあう女囚（美木）
K 20	罪状を訊かれる女（美木）
K 21	股間縛りの全裸像（山原）
K 22	荷造り縛りで晒す（玉田）
K 23	革拘束衣で括らる（大塚）
K 24	庭木に立縛りなる（木村）
K 25	柱に晒される裸身（玉田）
K 26	セーラー服しぼり（大塚）
K 27	高手小手首縄緊縛（山原）
K 28	黒輝豊満刺青縛り（山原）
K 29	踏みにじられた女（山原）
K 30	古墳にて吊り準備（木村）
K 31	拷問にあう裸女賊（山原）
K 32	ロープブラジャー（山原）
K 33	嚴重な後手縛猿轡（刑部）
K 34	エビ縛りにあう女（木村）

K 35	イルリのある風景（大塚）
K 36	麗しき裸身を晒す（大塚）
K 37	亀甲縛り正面裸像（刑部）
K 38	豊満乳房縛り上げ（山原）
K 39	全裸を投げだして（山原）
K 40	縛しめに哭く乙女（木村）
K 41	エビ責め放置十分（木村）
K 42	豊かな全裸を緊縛（玉田）
K 43	観念アグラ縛り図（玉田）
K 44	笑顔を縛る強烈さ（刑部）
K 45	猿轡の下にあえぐ（刑部）
K 46	縛りに典子の素顔（刑部）
K 47	伸びやかな裸縛り（刑部）
K 48	エビ縛り刺青姐御（山原）
K 49	立木より逆さ吊り（木村）
K 50	裸身の緊縛と羞恥（玉田）



## 耕土散筆

## 『落穂拾い』

保<sup>やす</sup>藤<sup>ふじ</sup>久<sup>ひさ</sup>人<sup>と</sup>

## 『落穂拾い』

- |   |      |   |        |
|---|------|---|--------|
| 1 | 女性   | 4 | 穿孔術(続) |
| 2 | 女権の国 | 5 | 肉体のリング |
| 3 | 穿孔術  | 6 | 踊り子さん  |

## 序言

落穂というものは馬鹿になりません。特に麦類は同じ禾本科の中でも稈が硬く、少し刈り遅れたりすると、操作中に、穂首が脆くて零れ落ち易いものです。刈り束ねたものと違って落ちた穂は正味の結実で、脱穀時に、その量の多いのに驚きます。近頃の農作業の順序は知りませんが、かつて私が従事していた頃、よく女の方と連立って畠の中を拾い歩いたことを思い出します。

私達の周囲にも、この落穂に似たものがい

くつも転がっているのに、日頃の慌しさに紛れて何気なく見送って仕舞うことが多い様です。鳥詩がましくも私の様なものがこの文章を綴り始めたのも、身辺雑事で見捨てるものの中に、意外に意義あるものが隠れているのに気付いた為、と言えば体裁は宜ろしいが、果して何処までペンが進むやら——。

何しろ、拝み度い程ご婦人が好きで、ヌード状態には跳き度くなり、Mで、Fで、神酒も好きで、その上、エバクリームご使用後が好きて、おまけに、チョップリスで(CMではありません)——。こんな私ですので、何が飛出して来るか判りません。が、成可く暴走は慎みます。併し、自称、SM的SEX派ですので、性書の様な部分が多いのじゃないかと、それだけを心配しております。

読んで戴いて何処か一つでも共鳴して下さい。部分が有り、お役に立つ様な点があれば、それ以上の喜びはございません。

さて、前書きはこれ位に致しまして、先ず最初に取上げるのは「女性」から。(どうしてもこの様な順序になります。何分共、ご婦人方を崇めるタチでございますので——)

## 1 女性

一般的な総括定義として、その肉体構成上の特徴を八高橋鉄氏Vの著書から引用させて戴く。(お断り——言い訳でなく、私の文章にすると主観的に走り易く、公平でなくなり、ます。対異性の主観思想程個人差の激しいものはなく、仮令、客観的に観察し得たとしても、その視野は狭いものです。そしてそれを





乗り越えた場合の主観は大抵同じ様なところへ落付きます。それならば、一番良く纏っているものを……と、拝借させて戴きました」

『比較的大きく円い頭部に髪長く、幅狭くすんなり垂れた肩の下、胸は小さいが、乳房張り出し、短い胴にふくよかな腹部はまるまると曲線を描き、幅広く豊満な臀丘に支えられた腰の真中に、逆三角形の美しい芝生。それに区切られた腿は太く、円錐形をなして逞ましく、短い脚へつづく。——これが女人の裸像である』

『男に競べると著しく安定感があり、事実、観察主観からも、客観的諸現象からも、女人には“貯蓄的”“静的”“安定的”という意味の言葉を当て嵌めることが出来、男は逆に“消費的”“動的”“前進的”ということが出来る』

出来る』

本質的に女体には、凡ゆる困難に耐え得る抵抗力が貯えられていて、従ってこの耐久力が、精神的苦痛にも堪え得る原動力となる。男はこの逆である。筋骨逞ましく強靱そのものに見えるが“贅肉”がない為、案外苦痛に弱く精神的苦悩にも堪え切れない。五官の感受性の相違もあり、又、本能的な順応性の有無も関連してくるが、ありきたりの比較論でなく、不変の男女差といえるし、肉体上に於ける科学的な結論と断しても可笑しくない。が、更に一步進めて、“人間価値”ということになると、言及を憚る不遜事であり、人間冒涇といえるが、尚強いて言えば、身心共の相互の能力に於て個々に優劣が発見出来るが、極めて人間的な視点で尊卑の判断は不可能だと思う。

従って人間男女では肉体構成上男性よりも女性の方が、よく強く、より健やかである、という定義的結論——私にはこれだけでもう充分なのである。

ところが、強い筈の女性が現実では一般的な傾向として、弱い立場、即ち、マゾヒスティックな感情に陥り易く、男性が能動的であるが故に、そしてそれは、極めて自然な現象と

して通例的に受入れられている。“身”と“心”の相違なのであろうし、肉体的な耐久力があるが故にかえって忍従に堪えることを覚え、加えて、古くから培われて来た社会環境の慣習が女性を圧迫している様に思われる。

統計的な数字を見ても、性格的に“S”と“M”とに分類した場合、その比率は女性側に極端な開きがある。つまりサジスチックな女性は稀有に等しいということになる。男の場合は、それ程激しい格差はない。それを男の意気地なさ、と観る人も多いが、私は対女性尊重思想だと思っている。そして、若い世代、つまり現世代程その風潮の強いことを嬉しく思い、男性の心理推移の素因の一つが、女性の持つ“美的要素”にある、と思い到る。同時に、ご婦人方に対して、性格的にも“賢明な強さ”（この意味は是非判って戴きたい）を保持して欲しいと希い願う。（この辺り、我田引水の感があります。失礼）

原則として女性は美しい。そのことは、改めて男女の裸像を並べて見るまでもなく、又単に凹凸の問題でもなく、万人共通の主観である。その理由を、男性に見られる“表徴的要素”でなく、女性には内蔵された“神秘的”な部分が“外的美点”に加味される為



だと私は思う。神秘的な部分は実際の現実では単なる器官と割切って仕舞う場合が多く「快樂」でなく「生理目的」と安易に考えられ勝ちだが、それでは「夢」が皆無である。

夢は人間に与えられた最大の利的特権であり、SMイズムに於ては不可欠の要素であることを忘れない様になりたいと思う。従って、SM信奉者は女性の肉体の総てを美化して観る。SMに於ける女性の、「貴重」な存在価値は此処にある。そして「神秘的」な部分は尚一層妖しい極点となって、われわれ男性に迫って来る。男は、SもMも、その内的外的の美点に惹かれ魂まで傾注しようとする。そして、其処に始めて、異質的な最高の愉悅が産れて来る。

女体美の肯定に対して一つの異論がある。再び△高橋氏のVの書物の一部を引用しよう。「ショッペンハウエルは、女体を美しいと見るのは、男の「性欲による錯視だ」と喝破しトルストイは、女との交りが特によく、心暖る思いだ、というのは、すべて「性欲の幻影」に過ぎないと強調した——」

此処では明らかに、異性をみる眼の曇り易く「アバタも笑靨」になり易いことを教えている。が、その裏、その奥を探ぐれば、それ

程女体というものが、男に無限の夢をはぐくませる要素を持っている生体であることを実証している。錯視であれ、幻影であれ、その繋がる根源がSEXであることを思うと、男の内面的な倖せが其処にあると思う。

序に、△高橋氏の言う「魅惑する女性16型」を紹介しておく。

『明朗美』 『陰翳美』 『知性美』 『野性美』  
『イット美』 『中性美』 『人形美』 『頽廃美』  
『権勢美』 『可憐美』 『新鮮美』 『中年美』  
『古典美』 『純潔美』 『田園美』 『温厚美』

## 2 女権の国

『女人国』という文字を良く見る。

『女の城』 『女の園』 『女の館』 いろいろあるが略同義語に近く、「女性ばかりの集団」であることを示している。男性にとっては夢の様な場所であり、△西鶴Vの『世之介』ではないが、総てを投棄しての最終的な欲楽境に価する。

M的男性は、そういう国で沢山の女人に奉仕したいと夢想し、S的男性も又、足下に隷属する美女を想起し、蹂躪する自己の雄姿を心に画いて妖しく胸を騒がせる。現実には、洋の東西を問わず文献は君臨した女傑の実例も

女護ヶ島のような實在さえも伝えている。外国の例を曳かなくても、日本の上代史を繙けば直ぐに日本史上最大の疑の女性△卑弥呼Vの存在に気付く、記録に残るその権力の偉大さと、神秘的な生活態度は、M男性の夢を無限にまで発展させる要素がある。

併し、二十世紀、宇宙時代の今日に、徹底した『女権国』が実在するとしたら驚かれると思う。(参考文献失念。紹介文を写した雑記帳より抜き書きます)

『アルジェリアの砂漠の奥に、ガベスという部落があり、其処にはトレグ族という部族だけが住んでいる。この部族は通念的人間慣習を完全に打破し、見事に男女の地位がひっくり返っており、世界地誌的にも珍重に価する習慣を、今も尚保ちつづけていることである。比処では「男」が「妻」であり「女」が「夫」である。酋長は勿論、部落の実力者は総て女性である。女性の意志によって日常生活が営まれて行く。男は若い内から女の実力者に可愛いがられる為に、より美しく、より淑やかに振舞い、歌や笛などの芸事に精を出し、やがて、酋長や実力者に囲われ、家中で家事に従事し、夫である女性方のSEXのお相手として奉仕する様に定められてい



る。又、一つの掟があり、男は年頃になると直接女性に顔を見せず、何時も青いヴェールを被って温和しくしている。そして、その青いヴェールを外す時（剥がされる）に男の運命は急転する。つまり、青いヴェールは男にとって名誉ある妻妾の地位の実証であり、ヴェールを剥がされぬ限り、男は夫（女）の寵愛の中で気儘な生活が出来るといふ仕組になっている。併し、年を取り、或は醜くなった、或は又、充分に夫（女）の愛に報いなかった時、男は忽ち追放され、昨日まで荒い陽布一枚にされて炎天下で、女兵士の鞭に追われながら酷使される。奴隷の仕事は牛馬代りの重労働であり、妻（男妾）のなれの果ての男達は喘ぎ乍らその生を終えるのである——」

嘘の様な話だが、これは実記である。その男女の地位の徹底した逆転ぶりは珍奇であるが、広い世界の無数の群小部族の内の一つだから、そういう種族があっても不思議ではない。それよりも、その形態に興味がある。特に、M的傾向の男性にとっては夢幻の桃源境とも思えるのではないか。私も実はこの記録を読んだ時、そういう国で男と産れて見たいと泌々思ったものである。

仮令男の運命が、遂には残忍な鞭の炸裂下で終止すると判っていても、青年期の十年、或は七年、五年でも、自己の性に満足する日を過すことが出来るなら、その日々に、生命の総てを燃焼させても良い、などと考えたものであるが、きっとこの私の思いに共鳴して下さる方もあると思う、又、別の意味で、世の中にこういう国も実在するといふことは、マゾヒストにとって根拠のある空想（連想）の種となり、そしてSM小説の好材料であるといふことも出来る。

### 3 穿孔術

マゾヒスチックな心理を大別すると、実践的本格マゾヒズムと、空想マゾヒズムの二つがあると謂われている。マゾ願望からSMプレイ、夫婦プレイなどは前者に属する。本質的にはマゾヒスチックな諸行為に憧れているが、実際の被虐行為が身心の苦痛であることも知っていて、

『痛い目にあうのは嫌／ただ、こんな恰好をさせられて虐められたらどうだろう？』と思っただけで軀がカーッと熱くなって来る——』

『男の人に思い切り差恥をむき出しに開いた強烈なポーズを強制されて縛られ、イヤッ／

と顔を歪めて泣き叫んでいる自分の姿を鏡の中に見ると——』△38年2月28日号△週刊特報増刊所載△

という様な女性も案外多い。勿論、男性の場合もその例に洩れないが、女性の場合、自己愛的な推移から自虐へ（ナルチシズムからサジチックな感情への移行も多い）更に、露出症的被害妄想というケースが充分に考えられる。そしてこの様なのが後者、即ち空想マゾヒズムの実態である。ところで、私はこの項で、マゾ心理の「本格」と「空想」の是非を言っている訳ではない。私の書こうとしているのは、本格実践派の最右翼の皆さんの事である。

可成り以前から奇ク誌上で、自らの肉体に孔を穿けておられる皆さんの実在することを知らされていた。△美伽輪生さん△△M七〇生さん△△佐々木耳鼻環生さん△等々に。

又、辻村隆さんの三十九夜物語にも『穴に憑かれた男』△（39・12）異妖な穿孔マニヤが登場して来る。その上とうとう辻村さんの『カメラハント』で『耳責めに微笑む娘』△（40・4）△刑部典子嬢△が忽然と誌上に姿を現わし更に（40・7）では△増田ご夫妻△の『鼻責版、夫婦善哉』となり、この分野で



の最高の極致ともいう可き盛上りを見せるに到っている。増田さん達のプレイフオトは、SM愛好の者にとって甚だショッキングなものであったといえる。「SM夫婦善哉」という文字は、正に増田さんご夫婦にこそ相応しいと思える程——。

「縛られる」「鞭打たれる」「女王の足下に隷属する」この様な実践者は多い事と思う。併し、自己の肉体に孔を穿ける（単に傷つけるということでなく）という事は尋常ではない。鼻や耳への被虐願望ということではなく、マゾ望願の耽溺極致といえると思う。何故なら、鼻中隔や耳朶への穿孔は、他の諸行為と違って永久的だからである。孔を穿けられたその部分は日常の四六時中、他人の視線を意識しなければならぬ。M傾向の方方は時に露出症的な部分が多いものだが、それは実に「見られて恥しい！」という羞恥意識が深部に作用して、ゾクゾクする様な一種のマゾヒスチックな愉悦に直結するものであり、だから肉体に孔を穿けた皆さんは、寸分の休みもなく、自意識的な刺激快感を感受することが出来る。

（但し、皆さんの実際的な感受感覚は、私には判りません）

私なども、マゾ的な部分が空想的飛躍をすると、鼻や耳に穿たれた孔に通された金環から伸びる鎖を引かれて、四つ這いで歩かされる場面を心の中に画くことが度々ある。実際には、私には出来ない。実行すればきっと性向的な満足を得ることが出来ると思いつつも不可能である。これは、単に勇気とか、不徹底とかの問題ではない様に思える。勿論、空想だから、というのでもない。皆さんとの違いは、自分で（自虐的）というのと、強圧されて他人の手で（被虐的）という点の相違の様に思えるが如何なものだろう。兎に角、右の様な理由から、私には穿孔を実行された皆さんこそ、SMイズム実践の最右翼だと思うのである。

#### 4 穿孔術（続）

肉体の一部に穿孔するということを、人類の歴史から観ると、可成り古くから行われていたことが判る。SMという新しい分野の開拓されるまで穿孔は、『刑罰的』『装飾的』

『SEX的』と三分される様である。そしてその何れもが現代風に謂うと極めてSM的であることが判る。誰でも良く知っている事象では△元寇の役▽著戦（注・文永の役Ⅱ一二

七四年Ⅱ文永11年）で対馬、壹岐を侵した元軍が邦人男女に穿孔し虐殺している、最も残酷なS的（戦場に於ける戦士の異常行為はSMとは違った心理の所産であるが）な出来事といえる。

又、装飾という点になると近代ヨーロッパ（特に十八世紀頃のフランス）で盛んに行われたという記録がある。対象部位は乳首であり、クレオパトラの乳首にも環が嵌められていたという説もある。フランスでは婦人の間で乳首の根元に孔を開けることが流行したという。穿孔箇所へ金環を通したり宝石をつけたり、又、左右を金の鎖や真珠の鎖で連結した女優（英国人）の記録もある。目的は勿論装飾にあった訳だが、それ以外に、愛の行為中にその環を引張られることにより、衝撃的苦痛、即ちマゾヒスチックな感覚を享受したことも事実らしい。実際に、乳首穿孔は所謂艶本秘本類にも、しばしば登場してきている。（例えば「バルカン戦争」や「変態五角形」といわれるものなど）

次いで純SEX的なものも登場して来る。インドの性典△27年五光社発行。性典性風俗より▽の中で「Penisに孔を穿って用いる性具」というのがある——。



扱て、話を本筋に戻すことにしよう。穿孔ということについては、前記した奇クの愛読者の皆さんが、その動機、心理過程、施術法などについて可成り詳しく報告している。

綴られている文字の中に、むき出しにした深部心理や、強度の願望の実態が滲み溢れていて、私には真実の「人間の叫び声」と聞えたものである。そして私は、通例的な推移として、より強度の、更に刺激的な、という心理的希求変化から、他の部位への穿孔（例えば、前記した乳首やそのほか……）という事を考えられる場合も有り得るのじやないかと思ひ、その自分の想像（連想）から、思わずギョツとしたものである。考えて見れば有りそうなことである。若し私が、自分の鼻や耳に孔を穿っていたなら、当然、その事を思い実行するのに相違ない。鼻、或は耳にのみ特殊な感覚を持っている方なら別だが、そうでない場合の思考は大抵同じ様なものではないだろうか。

芳野さんの作品「悩ましのサディズム」で男性用の特殊拘束具が書かれている。「小さい首輪」とは甚だユーモラスなご婦人愛用具で、読んでいて、自分にも一度使って貰えないか、などと思うことさえある。首輪の様な

製品でなくても、縋帯でもゴム紐でも拘束目的の代用物はいろいろある。何が使用されても、当面する被虐者のマゾ的な心理に変化はなく、男性にとって、極めてSEX的な被虐感覚を味う事が可能である。それをもう一歩進めて完全拘束を意味するものとなると――。序でのことに、前述した「人性具性風俗」の一部を引用して見よう。

「――南方印度の人々は、男児の極めて幼少の頃、丁度耳朶に穿孔するのと同様に、Penisに施術する。又、若者はPenisの尖端を尖った器具で切り小孔を作る。つまり皮膚の部分を引き出し押えて穿孔する。（中略）孔を広くする為に其の夜、困難と苦痛に耐えずら使用する。その後改めて洗滌消毒し、ベータサやクタジャ（注・芦の類の様なものらしい）で作った楔で拡大し、洗滌には甘草の汁を用いる。拡大すれば更に太い耳環を貫通させる――」

以上の穿孔は性具装填が目的である。又、一事例として「男性用鎖陰」という記録がある。去勢と違って一時的に使用不可能にするのが目的で、近世ヨーロッパ中で富国強兵を強制した、旧プロシヤ軍国主義政府が一部の若者に加えたという。体力の消耗する程の行

為を禁じ、又、少年歌手に対して制限を加えた方が良くと考えられた為だそう。

「――皮を引張って閉じ、金属のリングやピンが刺し通されるという残酷さ……」併し、やがてその拘束物が他の目的に使われ出したので、プロイセン政府も中止した、という事が記されている。

## 5 肉体のリング

話の順序として、この辺で「O嬢の物語」を引張り出してくることになる。

「ハポアリーヌ・レアジュ女史」という無名の女性の作だと伝えられる、この本は一種の艶本ともいえる。

（ド・マールゴ文学賞が与えられ、その受賞式の日、顔を黒いヴェールで被った長身の上品な婦人が賞品を貰い、遂に顔を見せない俤会場を去ったという噂がある。一説では、フランスの知名推理作家、カトリース・アルレイの作だろうともいわれている）

SMマニアにとって、この本は甚だ魅力的な読物だといえるし、中でも「第三章」14・15・16・19・20「新流社35年発行セクシー文学全集所載」の部分、その実態がどういふものかと目を敬てたものである。



その実物はどんなものだろうか。と、これは読む人皆が読後に思う感慨だろうと思う。物好きな私は原本（に近いと思われるもの）を探し出し、その直訳を友人に依頼したことがある（私は語学が苦手です）。友人は丁寧にも、△世界……全集▽と△風奇所載△風奇は読んでないので訳者も不明。全集の方は皆さんもご存じの精力作家清水氏▽と△原本△英語▽の三つを比較検討して呉れた。

それによると全篇的に表現は原本が流石に強烈だが、筋書きは全集とあまり変りはなく訳の忠実さは全集にあるが、少し遠慮し過ぎている。風奇所載のものは一応筋を追っているが、一部描写の極端な省略と誤訳が目立つ風奇と世界を合せて読めば殆ど原本に近くなる。という結論を出して知らせて呉れたものである。問題の箇所については「――まぎらわしい文字の綴りになっているので誤解誤訳し易いし、この本も（英語のもの）正確な描写は検閲上避けている様です――」

私は非常に残念に思った記憶がある。少し△全集▽から引用して見よう。（前記14）

「――アンヌは、にぶい色の鋼鉄製のリングを見せた。クレヨンほどの太さがあり、長方形で、重い鉄の鎖の一部に似ていた――」

リングの描写で、太さは鉛筆（フランスではクレヨンという）位で楕円形をしていて、一つのリングに一つのメダルが入っている。（注・この部分誤訳だと彼は言う。原本に「二つ」という表現はなく、箱の中にリングがあつて△複数▽それにメダルがついている）

「――輪の直径と同じ位のメダルが両側からぶら下っていた。ひとつの方には――」△以上全集より▽△以下も全集より▽「――すると彼女のからだの一部に、パンチであけたような、丸い穴がひとつついているのが、○にはわかった――」

右の部分の原文を直訳すると、その部位は「丸い突起物」「耳朶」「葉（よう）」という意味になり、「彼女（イヴォンヌ）のSEXの裂片の一つ」のようで、結局彼女のLabium minus（ラビウム・マユス）の中心より下でそけい部に近いところ、であるらしい。友人は略図を書いて呉れたが、それは記すことが出来ない。

## 6 踊り子さん

近頃また、サーカスなどの読みものを書いて下さる方が多くなり、暫く誌上で見られな

かった分野なので、私は非常に嬉しく思っている。女性の肢態美に憧れるので自然に、アクロバチックなものを好み、純アクロバットをこの上もなく愛する私なのである。

以前に交信していた或る踊り子さんから此の程、丁度二年ぶりで手紙が来て再び文通を始めている。何でも所属プロの都合でこちらへ帰れなかったということであった。

この踊り子さん（アクロバットダンサー）と私の間には奇クが介在して、仲を取持っているともしえる。以前から奇ク誌上にアクロバットの読物があると必ず見せてあげることになっている。その彼女の最近の手紙の一部を紹介しよう。（原文のまま）

「――日本拷問刑罰史という映画は、私は予告篇を見ただけです……。裸の女優さんが三角馬に乗せられるところはぞくぞくしましたが、後の場面は恐ろしいようなイヤなところもありました。ですからとうとう見ませんでした。（中略）それから、この間、ナイトショーで、肉体の門を見ました。主演の方、野川由美子さんですか？、軀の美しいのには驚きました。それが裸で吊られるのですから男の人が見たら堪らないのじゃないかと思いましたが（注・私は見ていません）（中略）で



も私だったら、そり反った形で手と足首を一つに縛って吊られて見せますわ——以下略」  
私は読みながら軽い興奮を感じたものである。そして、彼女なら出来るッと思わず吹き、その姿を連想した。

小説の中へアクロバットを取入れることが私の念願の一つでもある。大分前からそれについて、アクロバットの名称などを調べていたが、バレー教本はあっても、アクロバットに関するものは殆んどなく、私は現在彼女から

細部を教えて貰っている。

アクロバットについてはまだ歴史が浅く、僅かに岡本八重子女史Vのつけた名称がある位で、教習所では割合不統一な名称を使用しているらしい。二、三紹介すると、

△フロントオーバーV前トンボ。△チェストロールV肉車。△バックレントV後曲げ。△サイドオープンV股開き。等々——

仮名の呼名は全部英語（バレーはフランス語）で、かえって日本語で呼んだ方が判り易

いということである。（動作・ポーズなど一通り纏まればまたこの『落穂拾い』で紹介しますが、ご存じの方があればご教示下さい）  
この踊り子さんについては、やがて、もっと、いろいろなことが報告出来ると思っている。若しこの『落穂拾い』が続いたなら、再び登場して貰うことをお約束して一まずこれ位で——。

## ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

## 新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。  
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。  
一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

あとがき——。始めの予定では半分位の枚数にするつもりだったのに、書き始めると、あれも、これも、と、何か連結性があるような気がして、その上、盛り沢山に、という悪い癖がその俣出てしまい、もともと上手でない文章が、尚更、まとまりのないものになってしまいました。これからは一層内容に注意し選び出すことにします。

併しこうして書くと、意外にその材料が数多く身近に置捨てられてあることを知り『落穂拾い』という意味が生きてくる様にも思えます。

出来れば、皆さんに安心して読んで貰える様な文章を綴れる様、これから勉強して行くつもりです。



## 懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 病院の一室にて

太田 尚 子<sup>(B二十一才)</sup>

うすら寒い梅雨どきの病室は、夜半の暗さが手伝って一層陰気です。まして開放された病棟で、雨足の音を聞こうものなら、女性の身には、しみ入るような淋しさを感じるのです。昨日訪れた晴間には、病む人たちは、その暑さに、ほとほと参っているのに、この湿った空気は一層体にはよくないようです。

それでも長い間、懸命に養生を心がけてきた私には、毎日の入院生活が楽しみにもなってきたようです。でもそれは、孤独な私には付き合い仲間との交遊でもなければ、隣のベッドで病む娘さんのように、親類の方々との一週一回の面会の日でもありません。それはむしろ、今では、毎日の診察や検査、それに

治療に対する期待です。でも、長い入院となると、却って急病や重症の患者さんのようには構ってはいけません。ですから、楽しみは案外、現実では、私が今迄受けてきた病院での体験の思い出のくり返しと、その期待に思わず頬を赤らめる時であるのかも知れません。

私が九州のK市に近いI町から上京して、Sという麻布にある商事会社にお勤めするようになったのは、高校を出た十九の時でしたが、若い私には、単調な毎日のお仕事と、決ったお給料では満ち足りず、ひそかにO町のKというバーにアルバイト・ホステスとして通うようになりました。バーといってもスタ

ンドだけのごく健全なお店でしたが、世慣れない私には、初めて身を以って味った消費生活の楽しさに、つい無理がたたったのでしようか、ある日突然、私は腹痛を起して国電O駅の近くのT診療所へ、ママに付き添われて行くことになったのです。

若くて元気の私でしたが、半面、大の恥かしがり屋で、それまで健康だっただけに、お医者さんに診察されたこともなく、その時、確か四十近くの体格の立派な先生に、お腹を診ていただいたのが、ずい分恥しかったことを覚えています。ところが、翌日、又同じような腹痛が起り、再び診察いただいたのですが、唯、便秘しているのです、そのせいとい



うこともあるから、下剤をあげます。少し様子を見て下さいとの事でした。

ママは、どうも婦人科の方かも知れないから、別の先生を紹介してあげようといって、無理やりに婦人科の医院へ連れていってくれました。待合室には勿論私のような娘はいませんでした。でも、とても明るい感じのよい診察室でしたので、順番を待つうちに気持は大分落ち着いてきました。

「婦人科だったって、あなたはまだ結婚しているわけではなし、お腹を診てもらうだけのことよ」というママの言葉に素直に耳を傾けていたせいもあったでしょう。そんなママでしたから、私の番が来ても、至極要領よく、先生——若い女の先生でほっとしました——に病状のことだの、生理や便通のことを話してくれました。かたわらには、例の両腕を拡げた診察台があったのですが、その頃の私にはどんな器械かすら知りませんでした。

「おや、娘さんの方でしたの？、可愛い子ね、それでは、お洋服を脱いでベッドに横になつてごらんさい」と、にこやかに私をベッドへ招き、一応胸も診てから、「やはり……の方かなあ」といったように後で思いましたが、今度は婦人科の診察台へ上るように、

そして、下着も全部とらなくてはいけないと言ひ渡されました。

こんな時、少しでも考える余裕があると、とても、すぐには着物を脱げないと今なら思いますが、うぶな女の子って、案外暗示にかかってしまうのか、命ぜられてみると、素直に、ママに「外で待っててね」と云って台へ上りました。台の上では、すっかり固くなってしまつて、同じことを何度も云われても返事も出来なかったことだけは覚えています。そして、ずい分長かったことです。診察はお尻の方でしたが、ひんやり冷たくて、力が入ると、痛かったことを思い出します。

耳から血を採るといふことも、この時が最初でした。お薬をのみましたが、のんだ後だけお腹の痛みが止るだけで、翌日はお小水の検査をしようといつて、コップを渡されましたが、どうしても自分ではとれず、それではと女医の先生が、私がとってあげるからと診察台に寝かされました。「お小水の出るところを出すのよ」と言われて、間もなく、今までと違った突然の疼痛に、思わず腰を浮かすと、「動いてはいけない」ときびしく叱られ泣き出しそうになりました。

このことがあってから、この医院へ通うの

は、これきりとなりましたが、今度は、やはりママの知り合いの方のすすめで、T病院という比較的小じんまりとした内科の病院へ入院することになりました。健康保険の入院でしたが、先生も看護婦さんも親切で、院長先生も私を見ると、しきりに亡くなられた娘さんのことを思い出されるらしく、何かと気を遣つて下さったのです。

そのせいか、検査も殆どなく、注射がいやなら飲み薬にするよ、ということとで、痛みつけられることはありませんでしたが、腎臓が悪いらしいということしかわかりませんでした。ところが困ったことに、背中から脇腹にかけて時々激痛の発作がくるのです。その度に、腎臓とか胆嚢の結石ではないかということとで、くり返しレントゲンを幾枚も撮りましたが、はつきりうつりませんでした。この時、お腹にガスが貯っていると、よい写真が出来ないので浣腸をするということでしたが結局、前夜にガス抜き剤をいただいただけで済みしました。

この病院には、週二回、I大学から若い先生が見えることになっており、私の病名がはっきりしないということで、ある日、回診の後で、下の外来の診察室に呼ばれました。ハ



ンサムの若いドクターは、同室の患者の話だと、アメリカの病院に勤めていたこともあるとかで、やり出すと、とことん迄やらないと気が済まない性分の方と聞いていました。

カーテンで囲まれたベッドに腰かけて、先ずいろいろ最初から、家族の病気のこととか今度の病気のことや、私自身の体のことを、くわしく聞かれました。要領よくてきばきした質問でしたが、そろそろくたびれてきた頃「じや着物を脱いで」と言われて診察が始まりましたが、何んと、眼と鼻の検査で、それが又入念を極めました。アメリカのお医者さんは内科でも一人一時間もかかって全身に亘って調べるのだという話を後で知りましたが咽喉・胸・乳房・皮膚・お腹・背中といろんな姿勢をとらされての、それこそ、頭のてっぺんから足の爪先迄の嚴重な検査でしたが、終りに、「君はまだ若いし、前に婦人科で診てもらったそうだから、その方はいいでしようが、一応そうだな、ちょっと横を向いてごらん。それから指囊を下さい」

看護婦さんについて、ゴムの手袋をはめ、「向うを向いて、足を曲げ膝をお腹につけて口をあーんとあいて。お尻を見ますよ」と、言われたかと思うと、お尻が上げられ

触診が始まりました。始めてではないので疼痛はありませんでしたが、いろいろ身体を動かしたり、お腹にも手を当てて診察されました。その後なにか言われたのですが、恥しくてとにかく逃出して大急ぎで病室に戻りました。

その日は大変でした。まず朝早く起されると、看護婦さんに、腕の静脈から血液が五C Cもとられたかと思うと、今度はガラス器具と赤いゴムののったお盆を持った別の看護婦さんが現われ、お小水のバイ菌を調べるといって、カテーテルで導尿されました。途中お室に人が来るのではないかと気が気でなかったのですが、目かくしをしてから、下着がおりされ、膝を立てて開くよう指示され、腰に枕が入れられ、いろいろ検査の必要なわけを説明して下さるのですが、却って恥しさが増すばかりでした。

ずい分気を使って下さったのですが、とにかく、いやなものでした。でも、これから後のことを思うと、まだ何でもなかったのです。それから今度は、二十C Cぐらいの静脈注射を打たれた後、お腹をベルトで圧迫して、又、レントゲン撮影をしました。これで腎臓の形がわかり働きもよくわかるのとこ

とでした。こんな検査があったのに、二日後の回診ではレントゲン写真の結果が、はっきり出ず、とうとうS大学の泌尿器科へ回されることになりました。I大学のベッドが一杯とのことで、安心していましたが、近くのS大学へ紹介されたのです。

私はまだ病院について何も知らない頃でしたので「ヒニョーキ科」って何に？と看護婦さんにたずねてみましたが、「さあ、ちよつと、あんたみたいな若い人には気の毒だけど一週間ぐらいの検査で、又すぐ帰ってこれますよ」とか「婦人科みたいなものよ」とか、あいまいな返事ばかりでした。知人に聞いても一向に要領を得ず、「普通、男の人ばかり行くようよ」「いやあねえ、あなた、へんな病気になったんじゃない」といわれたりで、不安でした。実際、一週間の検査でしたが、この一週間の思い出は一生忘れられない目にあわせられました。

忘れもしない、九月二十日の月曜日の日でした。S大学附属病院は近代的で明るい感じのクリーム色の建物で、四階建の清潔な病室からは、晴れた日には富士山もよく見える見晴しのよいところにありました。

保険での入院ですから、六人部屋で他の五





人の女性患者の中には、外科の患者さんも混  
っており、若いひとも多く、女同志のせいか  
気楽に自分の病氣のことや身体のことと話し  
合っていました。私が泌尿器科なの、とい  
うと、泌尿器科って検査がいやあねえって同  
情されましたが、新入りの私も大変なこと  
になったと思いました。皆親切で、病院のきま

りのことなど何かと話しかけてくれました。  
その矢先、夕刻になって、突然ナースが手  
に赤いゴム管のついたガラスびんをぶら下げ  
て入ってきて、台にのせたかと思うと、その  
まま何も言わずに出ていってしまいました。  
室の人は、「誰が高圧浣腸するの」「きつ  
と、今日入院した子よ」など話し合っていま

した。すぐナース  
が戻ってきてベッ  
スのまわりにカー  
テンを引き、「太  
田さん、明日レン  
トゲンをとるので  
今日はお腹を空に  
するのよ」と私に  
いいました。お室  
の中は急にしーん  
となっていました  
ようです。  
「さあ準備して」  
というのですが、  
赤くなって、もじ  
もじしていると、  
「あなた、お浣腸  
したことないの、

もたもたしてないで、早くパンティをとって  
私、忙しいのよ」というなり下着がはずされ  
私には、一言も言わず、横になったと思っ  
たとたん、あの太いゴム管が身体の中に、ず  
るずるとさしこまれました。声を立てそうに  
なりましたが、皆の手前、それも出来ませ  
ん。ずい分深く入れられたと思ったら、今度  
は予告なしに注入が始まります。「石けん浣  
腸だから、少ししみるかも知れないけど、我  
慢するのよ」というなりお室を出ていってし  
まいました。それからトイレに入る迄の時間  
は、本当に長く、苦しく恥かしかったのです  
が、もう夢中でした。

病院に来て、一日目は他の患者さんのよ  
うに、先生も見えず、唯いきなり浣腸された  
だけでした。翌朝、又「もう一度お浣腸よ」  
とイルリガートルを手にした別のナースがき  
て、カテーテルを目の前に見せつけられた時  
は、本当に泣きだしたくなりましたが、仕草  
がとても思いやりがあつて、私も少し周りを  
気にするだけの余裕をとり戻していました。

それからが大変なことになりました。大  
学病院なので、まず背中を叩かれながら、お  
それおそれる外来へ行きますと、医学生が沢山  
待ち構えていて、そのうちの二人が、私の掛



りになって、ベッドへ腰かけながら、いろいろなことをしつこくたずねてきました。あまりのしつこさに、つい、いい加減に答えていましたが、次の大男の外来医長の診察の時、ひどく叱られ「自分の体のことじゃないか、もう君のいうことは信用しない、その代り徹底的に検査するよ」と言われて、ちぢみ上りました。

実際、泌尿器科はおよそムードがありません。男の患者が多いことも手伝ってでしょうが、私もこれ位なら婦人科の方がよかったです。考えた程でした。全く私にとって、筆舌につくせないことの連続でしたから。そして遂には不思議と羞恥心が湧く余裕もなくなり、処刑されているようなムードに移り変わるのは、患者が女性であるという関係があるのかもしれない。

大男の医長が、学生を前にしてドイツ語で矢つぎ早やに質問をしながら、私の診察を始めました。ここでは胸の診察はありません。お腹から下で、背中の方に腎臓があるとかで両手で触診しました。私の腋の下をみて「君は薄いなあ」といったかと思うと、いきなり下着が下げられ「下はそうでもないけど」と学生に「君達も泌尿器科だから、ホルモンを

忘れてはいかん」と黒板に記号だの、ドイツ語だの、一杯書きながら説明しました。

その間、私は拡げられたままで、驚きと恐ろしさで、顔をかくす余裕すらありませんでした。しかし又、患者である私にとっては大学は悪くいえばモルツト扱いであるに違いありませんが、 unnecessary 感情を抜きにして医者も患者も一体になって、病氣と闘う所だと納得がゆきました。私も唯治りたいと一心に祈っていました。

これで今日は帰れると思っていますと、「一応教授に診てもらおうか」と言われ、別室で教授の診察がありました。教授は見るからに温和そうな白髪の紳士でしたが、目だけは鋭く威厳がありました。お二人でレントゲン写真を見ていましたが、「やはり私が診よう」と、私の方へ向き直り、「君、病室で浣腸してきたかね」と私にたずね、赤くなってもじもじしている、「じゃ、君、用意して」とナースに命じました。

隣室へ連れてゆかれると、「あなたは若いから、お気の毒だけど、すぐ終るし男の方に比べると、ずっと楽なのよ」と、しきりになぐさめながら、私の着物を脱がしにかかりました。下着をカゴに入れて寝台に上ると、顔

にタオルがのせられ、両足がもち上げられ、拡げられると、「用意はいいかね」とインターホーンで声がありました。

「さあ、楽な気持ちでいるんだよ」と教授がおっしゃり、冷たい水がかけられました。「そう動かんでいるんだよ」「ちよっとの我慢だよ」との声と同時に、頭のとっぺんに突き抜けるような疼痛が全身を貫きました。それから後のことは夢中で、よく覚えていませんが、腕に注射が打たれたようです。

二、三度同じ目にあいましたが、これが膀胱鏡検査というのだそうです。例の大男の医長先生にされたときに、「何が痛い、この位で痛いわけがないじゃないか」とどなられましたが、そういえば、決して、そんなに痛いというものではないのです。後で、やはり若い女性がされるのをナースに見せてもらいましたが、太さは鉛筆より太いのですから、びっくりしました。疼痛よりむしろ、異物感といった方がいいでしょう。

苦しい(痛いとは違います)のは、膀胱鏡をしておいて、そこから細く長いチューブを腎臓まで入れて、レントゲンのお薬を入れるときです。高圧浣腸の比ではなく、うずく苦しさで、身体がしんがゆすぶられる思いで、



す。この後が又大変、長い廊下を細長い管を二本、尿道に入れられたまま、目かくしをされたまま運搬車で運ばれレントゲン科のお室まで行くのです。このお室では、立ったり頭を下げたり、いろんな姿勢にされながら写真を何枚もとるので。その間、下着もすっかりはずしたままで、ここでは先生や看護婦さんの外、レントゲンの技師の方もいるので、一層恥しい思いをしました。

次の日は一日、お休みで寝たきりでした。お昼過ぎまで、ぐっすり寝たおかげで、前日

のショックも少しは回復しました。

隣のベッドに入院した娘さんは、とても素直なおとなしい方でしたが、腎臓に石がたまっているとかで、朝お浣腸されてから、午後になって蒼ざめた顔をして帰ってきました。

他人の事となると、お浣腸の時でも、ナースの声や、思わず洩らす溜息や押し殺した呻き声などで、その場面を想像できました。他人の処置のときは興味があるらしく、お室の中が急にいいんとしてしまい、ガラスのちょっと触れる音でも聞えてきます。でも思いや

## 文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上の発表につきましては、出来るだけの謝礼を差上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。

写真、絵画、文章、パンフレット、広告スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

## 「奇クサロン」原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読者通信欄」と共に、皆さまに親しまれてい

る「奇クサロン」の欄をこれから益々発展充実させてゆきたいと思ひます。マニヤ通信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際写真、絵、告白の便り等々、なんでも構いませんからお気軽に御寄せ下さい。

## 「読者通信」欄へ

読者の皆さまの共通の広場としての読者通信は、毎月多数の投稿文によって賑々しく飾られておりますが、広く読者の方々が読んで楽しい家庭的な雰囲気味わえるものの中から、つとめて選定してゆきたいと思ひます。従って三行広告的なものや自己宣伝に類したものは、ご遠慮いただきたく存じます。誌上に於ける明かると文通交際ください。本誌読者通信の使命だと考えます。どうか、その意味あいで、どしどし御投稿下さるよう、お待ちいたします。

(本誌編集部)

りもあって、手術の終わった方が帰室すると、みんなで見病したりしてあげます。

女性でも結婚の経験のある方になると、平気で自分で浣腸だの、カテーテルとかいう言葉が出るようになるものらしいですが、隣の娘さんは、まだ十八、九で「私ねえ、昨日背中から、こんな大きな注射されちゃったの」と私に話しかけてきましたが、これがきっかけで、反対側のBGで、二十三才になられる方が、「わたしなんかはねえ、空気入れられちゃってさ、お腹が張って、二日もお食事がとれなかったわ、きつと、あなたもやられるわよ、でも、そのおかげで私は手術は助かったんだけど」と教えてくれました。

次の日も回診だけで何事ありませんでしたので、少しお庭を散歩したり、発作の起きない間にと、院内の美容室に出かけたりしました。この日は、例の隣の若い子が臨床講義に連れ出されることになり、午前中、受持の医者が改めて詳しく病歴をとったり、大変で放置されたままの私は、少しやきもちをやいた程でした。しかし、みんなが同情した割には、うきうきした顔で帰ってきました。

「ちよっと顔を出しただけで、すぐすんじやった」との事でした。内科などでは、大勢の



学生の前で診察されることもあるそうで、前夜はずい分心配していました。三日目になって、やっと教授回診があり、「それでは、一つあれをやって終りにするかね。別に急いで切る程のこともないと思うがなあ」とおっしゃり、「切るのだけはいやよ」と、私がしきりにいうので、「じゃあ、とにかく、明日の検査は受けるね。そうしたら又相談しよう。」とのことで、例の「空気入れ」の検査をあっさり承知した恰好になりました。

この日は始めての絶食でしたが、以前あれ程つらかったお浣腸も、大して苦痛でなくなり、「出るかしら」なんて言いながら、自分で下着をはずす位になっていました。検査なら浣腸が前にある検査がよいと思うくらいでした。痛み止めの注射って、とても痛いのですが、お臀にうたれ処置室へ入りました。この時は注射のせいで、少しぼっとしていましたが、いろんな道具が並べてあるベッドの上に横になり、待っていましたら、今度は四つ這いにされました。お尻が持ち上げられると「指が肛門に入るからねえ」と先生が云われさぐりながら、尾骶骨のところに麻酔の注射が打たれました。

ここから太い針をずっと奥迄入れて、空気

が注入されるのです。空気ではんばんに張ったお腹でレントゲンをとりに行きます。

その日に、別の患者さんを見ましたが、若い女性（といっても、この方は三十台でしたが）が下半身をあられもない恰好にされ、四つん這いになって、お仕置をうけているのを学生が腕組みしながら、にやにやして見ているのは、患者の身になってみれば、ずい分不謹慎なことだと憤慨しました。全く泌尿器科というところは、男女を問わず病気のせいとはいえ、導尿、浣腸、膀胱鏡、腎臓カテテル、動脈撮影、空気入れだのが、下半身にくり返えし攻撃されるのですから、考えてみると、若い女の身には、拷問室のようなところであるわけです。

この他、外科の方と同じ、お尻からバリウムを入れる検査だの、直腸鏡だの、又手術前の高圧浣腸や除毛、又手術後のガス抜きだのいくつもあります。男の方には、もっとつらいらしく、どうしてか知りませんが、あまり麻酔しないせいかもわかりませんが、泣きだす方もあるとかナースから聞きました。もし私こそマゾと自認される方がありましたら、泌尿器科で一度お試し下さいませ。

私自身は、その後結局、腎臓結核と下垂と

いうことで、痛みの発作も次第にとれたため手術は止め、この今の病院で一年六カ月、入院することになったのです。入院してからは殆ど検査もなく、月に一度のレントゲン、血沈、血液検査、検便、位のもので別に病氣のない方以外は、ストマイの注射と服薬だけの単調な毎日です。

僅か一週間でしたが、泌尿器科に入院していた時のことが、なつかしくさえ思われるのです。もう一度お浣腸されてみたいと思っています。つか、こっそり処置室で看護婦さんに頼んでみましたが、面倒だ、汚ないというような顔をされ、下剤を渡された時以来、この望みもなくなり、いよいよ数日後には退院です。

どなた様か、お医者様（男）かナースになられて、私に浣腸して下さる方がいましたら、お便り下さいませんか。プレイというよりは、病院のムードの中で浣腸されたいと願っております。病氣の方は、もう大丈夫とのことと、その心配はありません。又、検診や治療のことで、私のわかることなら、何んなりと答えします。退院後の私の住所はまだ決まりませんので、当分編集部宛に願います。（東京都清瀬町療養所内八太田尚子V）



## SM入門講座

## 「若き友に与う」

## 第三回 V 『浣腸』への導入

栗 瀬 長

「浣腸なんて、汚らしくていやだわ」  
 こうした偏見―敢えて偏見というが―が  
 支配しているのを私は甚だ遺憾に思う。  
 結婚早々の君達は、今や欲喜の絶頂にある  
 と思う。前戯も何もないかも知れない、単刀



直入、それでいいのだ。しかし、三年、五年  
 と経つにつれ、夫婦の生活も、何か味気ない  
 ものに思われてくる時もある。所謂倦怠期  
 というのがそれだ。その時、夫婦生活のマン  
 ネリズムを救ってくれるいくつかの新たな方  
 法がある。「縛り」を中心としたサド的な  
 遊びもよい、妻に精力的満足感を与えるマ  
 ソ的ムードもよい。そしてこの「浣腸プレ  
 イ」も、その一つであろう。  
 「どうして浣腸なんかが面白いんだろう。」  
 この疑問にはまず心理的医学的な面から  
 お話しなければならない。

君は幼少時、いや成人に達してからでも  
 よい。母親に、叔母に、医者に、或いは看  
 護婦にお尻をまくられて浣腸された経験は  
 ないだろうか。なければなくてもよい。

お尻をまくられ、年若い美貌の女性に浣  
 腸器を肛門に挿入される姿を想像してみ給  
 え。どんなに羞づかしい思いがするであろ

うかということ。

その羞恥心、それが大切なところなのだ。  
 夫婦生活の最も恐るべき倦怠感とは妻が羞恥を  
 失ったところから始まるといっても過言では  
 あるまい。初夜の素晴らしさは、女性の花散  
 る羞恥あつてこそであらう。

度重なる夫婦生活によって、女性は案外早く  
 から、総てのものに対する羞恥心を失う。満  
 足と喜ぶ、それは勿論よいことだ。しかし、  
 改めて羞恥心をよびますのも決して悪くは  
 ない筈だ。恥部にはあまり羞恥を感じなくな  
 った人妻が肛門には殊の外、羞恥を感じるも  
 のなのだ。それが更に排泄に連がるというこ  
 とに。

更に、君が若し幼時浣腸された記憶がある  
 とすれば、その頃の事を思い出してみ給え。  
 浣腸とそれに附随した排便。不思議な羞恥と  
 同時に快感がなかっただろうか。

偉大なる精神分析学の泰斗フロイトが、乳  
 児期の口唇期性欲の次に、肛門期性欲をあげ  
 たのは周知の通り。口唇期性欲がそのままべ  
 ーゼの形で発展しているにもかかわらず、肛  
 門期性欲の発展形式が、あまり一般的に行わ  
 れないのは、どうしてであらうか。私は、浣  
 腸こそ、肛門期性欲の具体的発露として薦め



たいのである。

今一言つけ加えよう。女性の体は、各部一として性感帯ならざるはないといっても過言ではない。髪、うなじ、耳、鼻、口、腋下、腕、乳房、臍、腰、臀、内股、等々、君も恐らく覚えがあるだろう。私達、奇クファンは様々な方法で、女性の奏でる女体の神秘にふれている。そのやり方は、追々ふれてゆくとして、今日は肛門について述べるわけだ。

さて、ヴァギナ性感、これについても議論のある所だが、深部は別として開口部に性感のあることは言を俟たない。そして、直腸とそれとは、正に紙一重であることは御承知の通りである。嘘と思ったら、奥様に験してみ給え。直腸壁と腔壁、そこに分布している神経が、果して異質のものであるかどうか想像に余りあると思う。

「肛門なんて恥づかしいわ、浣腸なんて、きたらしいわ」

こうした固定観念が、折角ある筈の性感を阻害しているのだ。この抵抗をとり除くことによって、新しい肛門性感の眼を開くことが出来る、何と素晴らしいことではないか。

更につけ加えよう。君は浣腸することによって、奥様の最も素晴らしい体を、二つの真

白な盛り上った双曲を、余す所なく観察することの出来る喜び、男性が如何に視覚を尊ぶかは、今更附言するまでもなからう。

「前置きは分った。では、どうすればいいんだ。浣腸してやるなんていったら、家内は何んて言うだろう」

もっともな質問だ。浣腸にはいろいろな方法がある。浣腸器にしても、スポイト、軽便浣腸、ガラスピストン、エネマシリンジ、イルリガートル等々。浣腸薬にしても、十数種に及ぶ軽便浣腸、グリセリン、石鹼液、食塩水、塩化マグネシウム等々、又浣腸体位も様々であり、とても今ここに、この複雑なる組合せを詳述することは貴重なる誌面が許さない。月月の奇クが、それに答えてくれるだろう。私は君の質問に答えて、無智なる——浣腸に対して無智なる——君の奥様を浣腸に導入する、その一過程をのみ、お話ししようと思う。

先ず浣腸薬の用意だ。最初からゴム球のエネマシリンジや、イルリガートルは、奥様が見ただけで驚いてしまうだろうし、馴れないと操作もむづかしい。これはべてらんになつてからと諦めて、ガラス製ピストン式、所謂グリセリン浣腸器、三〇CCか五〇CC入り

が普通だが、大は小を兼ねるといふ、五〇CCを薦めたい。一〇〇CCも大きすぎてこれはマニア用と考えてよからう。薬局で三五〇円位で手に入る。この場合、同時にグリセリンも購入する。一〇〇グラムの小ビンもあるが、すぐなくなるから五〇〇グラムビンがよい。大体二百円前後。私などは器具も薬も、メーカー直接安く買うことにしている。よかつたら買って差上げるが、自分で、やや抵抗を感じつつ薬局で買うのも面白い。殊に年若い美人の店番のいる店で、

「浣腸器とグリセリン下さい」

などというのは、なかなか面白いものだ。武田薬品のドナンなる浣腸液もあるが、強烈だから初心者にはあまりお薦め出来かねる。五〇〇グラム一五〇円とだけ申しておこう。

それよりも、最初無難なのは軽便浣腸だ。君も勿論知っているだろう、ポリエチレンに入ったあの可愛いやつだ。有名なるイチジク、オロナイン、ハート十字、リスカン、明治、東宝等数え上げればきりがなが、先ず普通はイチジク浣腸、浣腸の代名詞でさえある。しかし、一寸面白いのは、エスエス製薬のウサギ浣腸だ。嘴管が一般のより長く、肛門深く挿入出来る、従って、あわせてやって



も液もれが防げるのが特長だ。有楽町のアメリカンファーマシーには、輸入の怪便浣腸、「フリート・エネマ」というのがあるが、量も多く、少し馴れてからがよいだろう。

さあ、浣腸薬の用意は出来た。これからが本命、注意深く、切り出すチャンスを見ようのだが、あせってはいけない。一言のもとにはねつけられては折角の道具が台なしである。浣腸薬は、わざと眼につきやすい所に置いておいて

「これなあーに、どうするの」

と言わせるのも一方法だが、下手をすると「いやあね、よしてよ、あなたヘンタイね」で追い払われる危険性があるから、眼につかない所に、さりとて、夜、いざという時にすぐ取り出せるような所に秘かに仕舞っておくのがよい。

兵法では己を知らずんばであるが、何といっても先ず敵を知らねばならない。敵を倒す条件は何といっても女性の大敵便秘である。御承知の様に女性は実に便秘し易い。下腹部の身体的条件がそうさせるのであり、又トイレにおける音に対する羞恥も、殊にOLなどでは便秘の原因となるという。

さて、奥様の状態をよく観察し給え。旅行

に連れ出すのもよい。旅行といった環境の変化は、よく女性に便秘を起させる。生理の前後には、便秘か、下痢状、何れかになる場合が多く、その状況もキャッチするのがよい。

又、敢えて肉食を要求し、野菜、殊に生野菜果物を食べさせないようにするのも便秘誘発に効果があるし、これから秋口の栗、殊に渋皮の少しついた栗は靨面に便秘を起す。下痢止めの収斂剤を秘かに飲ませるのも一方法だが、あまり薬に頼るのは、健康上好ましくない。こうして、二、三日便秘しているなど判断した時、チャンス到来と、宵の中から、愛情ムードをかき立てるのだ。

会社から帰宅するなり、ベーズもよい。夕食時の話にも、妻の気分をそこなわぬよう、軽くビール、ブドウ酒をのませるのもよいだろう。食事の後片づけなども手伝ってあげ給え。その頃には、そっと、お尻をなでる位の愛情あふれた行動をとることだ。

「いやーね、あなた、今から」

奥さんは、わざと拒むだろう。

『さわらねば、なおタタリあり、山の神』

(古川柳)

もう、この頃から奥様は、これから行われる夫婦の営みに希望を燃やしておられる。勿

論浣腸されようとは知る由もないが。

さて、寝室には、ピンクのスタンドもついた。ベッドのクッションも何時もより弾むかのようだ。

「君、今日はばかにきれいだね」

「いやよ、へんなこと言わないで、何時もはきたないみたい」

こんな齒の浮くようなお世辞も、不思議な快い音楽と聞けるものなのだ。その証拠には次に必ず、

「ウツフン」

という鼻声が返ってくることは必定だ。そこですかさず

「おや、額を一寸みせてごらん、こりや、ニキビだ」

「いやあ、ほんと、今頃ニキビだなんて」  
あってもなくてもよい。ニキビといわれていやがらない女はない。鏡だなんて騒がれないうちに、

「君、便秘してるんじゃないの、便秘すると靨面にニキビが出るんだよ。腸の中で毒素が出てね、便秘はほら女性の大敵だっていうじゃないか。どれ、お腹さすってあげよう」

君の手は彼女の下腹を五本の指先で少し押すようになせながら、時々少し強く押すのだ。



「こりゃいかん、こんなに便がたまってる」  
「あら、ほんと、分るの、お医者様みたいじゃないの」

「分るさ、その位のこと、普通は君のお腹、カステラみたいにふんわかしてるのに、今日は、直腸のあたり、ゴツゴツしてるよ、便がたまってるんだよ、こりゃいけない。そうだよし、お腹のお掃除してあげよう」

「お腹のお掃除って、どうするの」

「うん、一寸、お薬入れるのさ」

「え、お薬入れるの？どうやって」

ここで手早く、浣腸薬を取り出すのだ。ぐずぐずしてはいけない。勿論、寝室に入る前に、軽便なら先端両側に穴をあけて置くことだし、グリセリンなら浣腸器に、水と半々に割って三〇乃至五〇CC吸上げておくことだ。奥様の眼にふれると恐怖感をもたせるから、足もとの方、死角というか、見えない所にそっと置いて、

「横をむいてごらん、そして、こうやって膝を折りまげて」

「こう？」

「そうそう、もう一寸お腹の方へ膝頭をくっつけて、そうだよ」

やさしく背中、腰などをなせながら、ここ

で手早くパンティをずり下げる。これにはあまり抵抗はない筈だ。横に寝かせて膝をかかえ込ませ、パンティをずり下げれば、もう想像がつくというもの。もり上った二つの双丘が君の眼前に突き出される。

「いやあ、恥づかしいわ」

夫婦の行為にはあまり羞恥を示さなくなった君の奥様も、肛門を露出せられることには殊の外羞恥を示すだろう。その羞恥をかき立てるように、君は、お尻を軽くピチャピチャと叩くのも面白い。

「いや、いや、よして」

「だって、可愛いんだもの」

「いやーん、ウップーン」

ときた所で、素早く、用意のイチジク、或はグリセリン浣腸器の嘴管を挿入する。お尻を突き出させてあるから、よもや挿入に失敗することはあるまいが、若し心配なら、予め嘴管にワセリンをぬっておくか、咄嗟のことなら、唾液でしめしてもよい。ヌルツと肛門に嘴管が入りこみ、続いて冷い薬液が直腸壁を刺激するや、

「ア、いや」

奥様は軽い悲鳴をあげるだろう。あわててはいけない。急に動いて嘴管がはずれぬよう

左手で大腿部を上から押さえながら、ゆっくり終りまで注入する。この間僅か五秒か十秒位。

「さ、すんだよ、どう？」

「ううん、何だかぬるっとして気持ち悪いわ」

準備してある脱脂綿で、奥様の肛門を軽く

圧迫しながら、

「痛くもなんともないだろう」

「ええ、ちっとも。あ、いきたくなかったわ」

「え、なに？」

わざとしらばくれる。もっとも、ここで

トイレへ行ってしまったては、薬液だけ排泄されて浣腸の目的は達しない。

「いや、もう、しってるくせに、もういかせて——」

「駄目駄目、もう少し我慢しなくちゃ、よくお薬がきかないよ、折角浣腸したんだもの、よく我慢してお腹の中、全部きれいにしなくちゃ」

「ああ、もう駄目、お腹、痛くなった、寒気がする——う、許して、もう」

「よし、トイレへいっていいで」

奥様は洩れそうになるお尻を押さえ、へっぴり腰で、あわてて、トイレへとんでゆくことだろう。君は煙草でも一服つけて待つのだ。



三分、五分、トイレの扉の閉る音、廊下に奥様の足音がしたら、君はすぐとんで行って、両手を広げ、帰ってくる奥様をだきしめてあげるのだ。

「どう、すっかり出てしまつて、気持ちよくなつたかい？」

「え、とっても、すっきりして、いい気持ち」

「そう、そりゃよかった。さ、こっちへおいで——」

「ねえ、あなた！」

## △お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢達の住所氏名の照会には一切応じておりません。手紙の転送や文通の斡旋、或は読者の紹介といったことも原則として行っておりません故御諒解願います。読者間の文通交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願いします。

○如何なる用件に拘らず、電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固く御断り致します。発行所に対するご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上、阿倍野局私書箱第十四号天星社宛お願い致します。面談又は電話連絡の必要のある方には、編集部から電話連絡の方法或は面会の日時場所な

浣腸前戯は正に完了した。そのまま、今夜の本番に移行して成功疑いない、君も、君の奥様も充分に感情が高まっていようから。そして君は忘れずに奥様の耳元で軽くささやくことだ、

「ね、浣腸って気持ちいいだろう。今度、又、便秘したら、浣腸しようね」

「うん、してね、またね」

という返事が返ってくるだろう。それにしても、今夜のハッスルぶりはどうだろう。始

どお知らせ致します。勝手に直接訪問されたり電話されることは、固くお断りいたします。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼ご相談などがございましたら、事前に通信にてその旨お申出下されば、時間の許すかぎりつとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○分譲品に関するお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さい。尚未着などのご照会は、ご注文の月日、金額、品名をお書き願います。調査の上折返し御返事いたします。

○原稿のご送付（読者通信を含む）は第五種便（半分を開封にするか、封の中央一カ所をとめる開封便）を利用下さると、五十瓦につき十円にて送れます。但し封筒に第五種郵便と捺印又はペン書き願います。

めての浣腸は成功するし、君は満ち足りた眠りにつくことだろう。

こうして浣腸への導入は成功した。君の奥様が肛門性感を本当に感ずるようになるかどうかは、一にかかって、君の今後の努力精進にある。

君の努力は、やがて奥様に、足をあげさせたり、四つんばいにさせたり、立たせたり、様々な態位で浣腸する楽しみを会得させるだろう。エネマシリンジ、さては、イルリガートルまで使う機会も生じるかもしれない。便器に排便排尿させたり、オムツまでも使えたらもう最高のテクニシャンというべきだ。

それにしても、最後に一言、君は暴君であってはならない。女性にはムードが必要、特に羞恥心をかき立てるにはムードが大切だ。そしてその基本にあるものは、君の、君の奥様に対する限りなき愛、愛情そのものであることを銘記して戴きたい。

君の第二の人生の輝やかしい出発点に於いて、以上の心得を守るうえは、必ずやバラ色の楽しい生活が送れることを約束しよう。そして、更には倦怠期回避についての妙薬であることも附記しよう。



## 娘相撲物語

## 良男の体験

海<sup>うみ</sup>野<sup>の</sup>美<sup>み</sup>津<sup>つ</sup>男<sup>お</sup>

良男は風呂から上ると広縁に腰かけて、昭子からの手紙を読み返してみた。これで三度目だった。

それは『お手紙嬉しく拝見しました。私も良男さんが好きでした。喜んで結婚いたします。妹も大賛成です。いろいろお手紙に書こうと思いましたが、帰って直接お話しした方が早いと思って休暇を取りました。三日ほどして帰ります。ゆっくりお話できるのが本当に嬉しいです』という、簡単なものだったが何度読み返しても嬉しかった。

良男は、手紙を握りしめて、夏の夕空を仰いだ。

夕立雲が真赤な夕日を受けて美しく映え、

夕風が、土塀の向うから快よい青田の匂いを運んでいた。

風呂上りの上気した肌に、昭子の汗にまみれた肌の感触がよみがえってきた。彼は思わず上体を起し、ぐっと目を閉じた。

そのまぶたに、美しく凛々しい昭子の顔がありありと浮び、その小麦色のたくましい胸が、大きく覆いかぶさってきた。

彼は目を開いて芝生の一角を見た。二人の娘が、たくましいその肉体をぶつけ合っている姿が、そこに見えるような気がした。

良男は、二人の姉妹との間に、人には話せない体験を持っていた。しかし彼は、それを否定していなかった。その中で二人はたくま

しく育ち、昭子への恋も、その中で自然と芽生えたのだった。

彼は、再び目をとじ、二人の姉妹との間をじっと振り返るのだった。

## (1) 明るい姉妹

二人は、隣家の娘であった。

一つ違いのその姉妹は、姉の昭子が中学に入った年、両親を同時に失なった。交通事故であった。

良男は、二人に親類が少なく、適当な引き取り手が居なかったこともあったが、彼自身も父親を戦死させ、母も高校一年の時亡くすという境遇にあったので、二人を進んで引き



受けたのだった。

それに、きょうだいの無かった良男は、二人が幼ない頃から実のきょうだいのようにかわいがっていたので、二人も良男の世話になることを喜んだ。

良男はその年、まだ二十二才だったが、高校を卒え、一流会社の支店に就職して三年経っていたから、三人分の食費ぐらいはどうかできた。二人の親類からも援助が貰えて、経済的には心配なかった。

両親を失なって、暗くさびしい表情になっていた二人は、良男と暮すようになって、み

るみる昔の明るさを取り戻していった。

一年ほど経った、或る夏の夕方だった。昭子は中学二年になり、圭子も中学生になっていた。

良男が勤めから帰ってみると、二人は芝生の上で組んずほぐれつしていた。

二人がそうして取っ組み合いをするのは、そう珍らしいことではなかった。小学生の頃から二人はお転婆娘で通っていた。

娘を、元気な身体を持つ明るい性格の人間に育てようとしたその両親は、二人に運動をすすめて、自由に育てた。だから、人からお転婆と言われても何とも言わなかったし、取っ組み合いのケンカをしても、女のくせになどと言わなかった。

良男も、その両親の育て方を受け継いだ。彼は、二人に運動部に入るようすすめた。二人は水泳部に入り、ほかの運動もすすんでやった。

彼と暮すようになって半年もすると、元氣を取り戻した二人の間には取っ組み合いも復活したが、彼はいつも黙ってニコニコしながらそれを眺めていた。

二人とも、運動シャツにショートパンツという姿で、上になり下になりしていたが、やがて姉の方が馬乗りになった。

圭子はそれでも「姉ちゃんなんか負けるもんか！」と足をバタつかせて起き上ろうとしたが、昭子にグイグイ押さえつけられて、とうとう悲鳴を上げてしまった。

良男は、「昭子の勝ち！」と言って芝生に下りると、「今日のレスリングの原因は何だ？」と尋ねた。

圭子が「私、大鵬で、姉ちゃんとは柏戸が好きでしょう。どっちが強いかって言い合ってるうちにね」と答えた。

良男は笑いながら「なあんだ、そんならレスリングじゃなくて相撲で決めたら良かったのに。だってお相撲さんのこと言い合ってたんだろう」と言った。

彼はもちろん冗談で言ったのだったが、それが、二人に相撲を取らせるきっかけになってしまった。

圭子が「よし、そんなら姉ちゃん、もう一





度お相撲で勝負しようよ」と、姉の手を引いた。昭子も、妹の挑戦に応じた。

二人は、小学生が相撲を取る時よくそうするように、立ち上ると、突っ張りもせず直ぐ四つに組んだ。

二人は、お互いに相手の腕をしばらくこんでもみ合っていたが、昭子がいきなり右手で圭子の首を巻き、続けざまに首投げを打った。だが圭子は、夢中で昭子のシャツをつかみ、しがみつこうようにして残した。

今度は、押し合いになった。二人は息を弾ませて押し合ったが、やはり姉の方に力があつた。圭子は必死に押し戻そうとしたが、じりじりと芝生の端まで押しつめられてしまった。圭子はそれでも弓なりになってこらえ、昭子を打っちゃろうとした。

良男が、「土の上に倒れたら痛いぞ」と叫んだが間に合わなかった。ドシンと音がして、二人は折り重なった。

圭子はしばらく起き上れなかった。昭子が「圭ちゃん、大丈夫？」と言うと、妹をやさしく引き起した。圭子の汗まみれのシャツに土がべったりとついていていた。

圭子は顔をしかめていたが、「大丈夫よ」と立ち上り「姉ちゃんは、やっぱり姉ちゃん

だ。強いね」と言って笑った。昭子も「圭ちゃんの負けん気にも驚いたなあ」と、明るく笑った。

良男は、そんな二人を見て「きようだいて、いいもんだな」と、嬉しくなった。

## (2) 無邪気な申し出

二人が、相撲の稽古を本格的にやってみていから教えてほしいと言いだしたのは、その夜、三人で食卓を囲んでいる時だった。

良男は最初、どうして良いか迷った。

確かに彼は、二人を明るくたくましい女性に育てようとしていた。それは、二人の両親の育て方を尊重しようという気持ちからだけではなく、彼自身が、そういう女性を理想としていたことからもきていた。

彼は、色白の、どこか気取ったところのある女性には、それがどんな美人であろうと、全く興味を持たなかった。むしろ、顔はどうあろうと、小麦色の肌を持つ、生き生きとした表情の女性に魅力を感じた。その頃、秘かに恋していた勤め先の和子という女性のタイブも、後者であった。

良男はまた、男にできることで女にできないものは、ほとんどないと考えていた。

しかし、女性と相撲とを結びつけて考えたことは全くなかった。その日二人に「相撲で勝負をつけたら……」と言ったのは、あくまでも冗談で、フト口から出たものだった。

彼は、それを後悔し、迷い続けた。

若し、二人に相撲の稽古をさせていることがわかったら、人は一体どう思うだろうか？良男はその頃、見世物としての女相撲の存在すら知らなかった。

また、良男にとって、二人は何と言っても異性であり、若し稽古をつけていて自分自身におかしな気持が起ったらどうするか？、それも心配だった。

だが、二人は全く無邪気だった。圭子は、「お相撲って、気持が張りつめて好きだ」と言い、昭子は「身体がもっと丈夫になると思うから」と言った。

二人は、既に初潮を見ていたし、身体も一学年上の平均を凌ぐほどに発達していたが、あまりに純真であどけないその心には、まだ異性への関心は全く芽生えていなかった。そんな二人に、性に関係する彼の迷いを、そのまま話すことはできなかった。かと言って、彼には、女は相撲を取ってはいけないと言う決定的な理由は見つからなかった。



二人は、黙って考え続ける良男を、怪訝な顔をして見つめた。良男は焦っていた。かねてはどんなことにも即答を与える自分が、ここでモヤモヤしてはいけないと思うと、なお焦った。

だが、その日の二人の相撲ぶりをあらためて思い出した時、彼の迷いは一度に解けていった。

二人は、まるで男のように思い切った相撲を取った。そして、そのことを愉快そうに話し合っていた。彼はそのことに気付き、女性が本来持っている男と変らないものを、無邪気であるが故に、二人がそのまま外に出したのだと考えた。つまり、女も相撲が立派に取れるし、相撲を取って感じることも男と同じなんだと、彼は思った。

良男はまた、二人の相撲を見ている時、自分が、そこに「異性」を全く感じなかったことを思い出した。それは、二人が幼なくあどけない心を持っているからというだけでないものがあつた。彼は、何もかも忘れて真剣に闘う姿からは、異性を感じる余裕が無くなるのではないかと思った。

良男は、心を決めた。  
何ごとも実行だ、一体どこまでやれるか、

女性の可能性を追求してみよう。相撲が、女性のスポーツとしても成り立つかどうか試してみるのだ、若し二人が「やめる」と言ったら、その時はやめれば良いし、逆に「裸で取る」と言ったら、そうさせたら良いではないか……

そうして、若し自分が二人は異性を感じた時、それは自分を試す良い機会だ、耐え抜いてみよう、そして二人との間は、あくまでも現在の「兄と妹」の関係を貫いていくことだ……

彼は、そう考えた。

### (3) 始まった稽古

稽古は、次の土曜日から始まった。

二人だけの稽古を週二、三回やって、半ドンの土曜日の午後、良男が稽古をつけることに決めたのだった。

昔、郷土であったと言う良男の家は、母家は狭かったが、庭は広く、その周囲は高い土塀で囲んであった。

両隣りも同じ造りであった上、東隣りは老夫婦がひっそりと暮し、西隣りの、昭子と圭子のもと住んでいた家は、共稼ぎの若夫婦で土曜日も夕方しか帰らなかったから、隣りか

ら気付かれる心配は無かった。また、青田に面した南側の土塀の向う側には小川が流れていたもので、そちらから誰かに覗かれるという心配も無かった。

二人は水着で稽古することになった。

「水着がいい」と言ったのは、昭子だった。圭子が「つかむものが要るんじゃない？水着の上からベルトでも締めたら」と言ったが良男は「最初のうちは押しや突き合いだけだから要らない。そのうち稽古が進んだら何か考えてみよう」と言った。

良男は、水泳パンツを着け、その上からラニング・シャツを着た。

三人は、工夫して作った帆布の土俵を抱えて庭へ下りた。

それは、五米四方の帆布に、真徑四米の円を描き、そこに俵のかわりに帆布を丸めて縫いつけたものだった。それを芝生の上に敷くと、弾力もちょうど良く、ケガする心配は無かった。

良男は、基本から教えていった。

彼は、本格的に相撲は習ったことはなかったが、その町に古くから伝わる十五夜相撲に小学生の頃から出ていたし、高校に入ってから母から作って貰ったまわしを締めて部落



代表の一人として町大会にも出場していたから、型や技は一通りわかっていた。

最初は男でもそうだが二人は四股さえうまく踏めなかった。だが二人とも、何度も何度も踏み直し、けんめいに覚えようとした。

四股と作法を大体覚えたとところで、仕切りを教え、お互いを睨み合わせた。二人の表情は、日頃のあどけなさとは打って変わったようにきびしくなった。良男はフト、そこに美しさを感じた。

四股や作法は、毎回繰り返して覚えることにし、その日、最後に押し合い相撲を取らせた。

自分の胸を貸して方法を教えたあと、彼は二人に星を争わせた。

帆布土俵は、芝生の端の方に敷き、西側の土堀のきわに立つ大きな楠の木の本蔭になるようにしていた。それに、時間も既に五時になっていたが、夏の陽はまだ高く、二人の肌にはみるみる汗が吹き出した。だが、二人はそんなことに構わず、齒を食いしばって押し合った。冗談じみたところは全く無くなっていた。

やはり、身長、体重ともすぐれている姉の方が強かった。

その年頃では、一年違えば体格に大きな差があるのだから当然だったと言えよう。夏休み前に計ったところでは、昭子の身長は一五〇センチ、体重は四八キロ。圭子の方は一四七センチ、四四キロだった。昭子の体重はその学校の三年の平均を凌いでいた。

五回のうち一回しか勝てなかったが、その日の圭子は余り悔やしがらなかった。むしろ晴れ晴れとした顔で姉を見ると、「お相撲ってやっぱり気持ちいいね」と笑った。昭子も笑って妹を見返し、タオルを取ると、その汗を拭いてやった。

夏休みは、それから二週間しかなかったが二人の覚えは早く、休みの終る頃には、押しと突っ張りとをませた相撲が取れるようになった。

突っ張りが加わると、姉よりも負けん気が強く、動作も機敏な圭子が、三回に一回は勝つようになった。もちろん昭子も、普通の者より勝気がったから、二人はしばしばげしい突っ張り合いを見せて良男を驚かせた。

#### (4) まわしを締めて

ひと月目の土曜日、良男は四つ相撲を教えることにした。

それには当然つかむものが必要だったので三人はいろいろ工夫してみた。最初、制服のベルトを締めてみたが丈夫そうで弱く、思い切った引き合うことができなかった。ユカタの帯も締めてみたが、つかんで引くと直ぐずれ上った。

良男は、じっと考えていたが、思い切って「まわしを締めてみるか」と言った。彼は、その前の晩、二人にはやれるところまでやらせる決心を固めていた。二人のそれまでの相撲ぶりは、彼に、それができるという確信を持たせていた。だから、まわしについても思い切ってそれを締めさせようと思っていた。

また、本格的な相撲は、まわしなしでできるものではなかった。ただ、始めからそうしろと言うのは適当でないと思ったから、いろいろ試みて不便さを感じさせてから提案したのだった。

圭子は直ぐ、「うん、そうしよう」と言ったが、昭子は何故か黙っていた。だが、良男は構わず、「とにかく一度締めてみてから決めよう」と言って部屋に上り、高校時代に使った自分のまわしを取ってきた。

先ず圭子の方から締めてやった。圭子は、「ワー、何だか本当のお相撲さんみたい」と





言って、四股を踏んだ。

良男は昭子を促して圭子に組ませ、まわしを取らせてみた。そして、「どうだ組み易いだろう、力も入るし」と言った。昭子は黙ってウンとうなづいた。

昭子は、まわしを締めてやる時、フツと身を固くした。良男は思わず手をとめたが、そ

れはほんの一瞬であった。彼はホツとして肉付きの良い昭子の下腹にまわしを締めていた。

二人の相撲は、それ以後、水着の上からまわしという姿で行なわれるようになった。

まわしは、固過ぎても柔か過ぎてもいけないと、デニムの生地を買い、二人が自分たちで作った。

秋も深まって、肌寒い日が続くようになったが、二人は稽古をやめなかった。良男も、土曜日ごとの稽古を熱心に続けた。二人はぐんぐん技を覚え、力をつけていった。

年が明けて、一月の或る非常に寒い土曜日だった。

良男は、余りに寒かったので、その日は稽古をやめるつもりだった。だが二人は、どうしてもやると言った。昭子が、「決めたことはやるべきよ。男のくせに寒いなんて……」と言った。良男は、昭子にそんなに言われたのは始めてであった。きょうだいが彼に何か抗議する場合、大抵は口数の多い

圭子の方が物を言った。

それは、良男にとってショックだった。彼は怒ったようにパツと立ち上ると、自分の部屋に入り、何もかも脱ぎ捨ててまわしを締めこんだ。

「ようし、これでいいだろう。さあ鍛えてやるぞ」と言って部屋から出てきた彼の姿を見て、二人は目を丸くした。圭子が、「ワーノ兄ちゃんの身体逞しいなあ」と感心した。昭子は「さすがに兄ちゃんだね。さあ私たちも用意しようよ」と言った。

良男は、昭子から「男のくせに」と言われた自分自身に腹を立て、「よし、それなら」とばかり素裸になったのだったが、庭へ下りて四股を踏んでいるうち、そのことをフト後悔した。かねて稽古をつける時も、まわしさえ締めていなかった。だが、もう後悔しても始まらなかった。彼は、何も考えないことにした。

二人は、かわるがわるぶつかってきた。彼には、自分でも驚くほど遠慮会釈が無くなっていた。思い切って突き倒し、寄り倒し、投げ飛ばした。

だが二人は、そんな彼に気押されるところか、逆に斗志を燃やし、齒を食いしばってぶ



つかってきた。良男は、そういう二人に、言うに言われぬ満足感を覚えた。それは、「とうとうここまでやったか！」と言う気持ちだった。しかし、その気持ちを、彼はみじんも外に出さなかった。

昭子が五回目につかってきた時だった。昭子は、彼のまわしをつかむと、しがみつくようにして押してきた。疲れの出ている彼は全力をふりしぼったが、とうとう寄り倒されてしまった。

良男は、その時はじめて二人を最大限にほめた。二人は嬉しそうに笑った。

心から嬉しそうなその笑顔を見て、彼はそれまでやってきたことに、本当の確信を持つことができた。同時にまた、素裸で二人に対していても、何も感じないですんだ自分自身にも自信を持つことができた。

### (5) 素裸の取組み

三年の月日が瞬く間に過ぎ、圭子も高校に無事入学することができた。

二人に異性への関心が目覚めた。二人は良く「あの先生は好きだ」とか「俳優ならこの人がいい」などと、異性の品定めをするようになった。

だが、二人は相撲をやめなかった。

少なくとも週に一回は土俵に上らないと気がすまないようであった。水泳は高校に入ってからも続けていたし、学業も忙がしくなっていたから、帰りが毎日のようにおそくなることもあったが、そんな時は、二人は朝早く起きて土俵に上った。

圭子の身長が昭子に追いついて、共に一六センチとなり、体重も、圭子が五二キロになって、昭子との差は二キロに縮まっていたから、二人の相撲は全く互角になっていた。

また、性格のちがいが一層はつきりしてくると共に、取り口にも個性が出てきた。昭子は、どちらかと言うと、相手を引きつけて四ツ相撲に持っていくとし、圭子は反対に、相手を突き放して、早いこと勝負をつけようとした。差し手も反対で、昭子が左四つ、圭子は右四つであった。

二人は、異性への関心を持つようになって、良男に対しては、中学生だった頃と変らず「兄貴」としての感情しか持っていなかった。良男も、二人に「妹」以上の気持ちを持たなかった。求められれば土俵に上り、時には、いつかの冬のように、裸にまわしという姿で稽古をつけていた。

そればかりでなく、二人は或る日、とうとう裸になってまわしを締めることになったがそれでも、良男と二人との間は、「兄妹」の関係を一歩も出ず、何の感情も起さずに過ぎていった。

尤も、二人が水着を脱ぎ捨て、まわしを締めようとしている姿を見た時、良男に、全く抵抗がなかったわけではなかった。二人もまた、初めて良男に対して異性を感じ、羞恥の心を持ったようであった。

その日も、夏であった。

彼は、その日「残業が続いたから今日はもう帰って良い」と言う課長の思わぬ配慮で午後三時頃家に帰った。玄関の鍵が閉まっていたので、彼は、二人はまだ学校だなどと思って家に入った。

だが、二人は居た。

何気なく二人の部屋のフスマをあけた良男は、思わず「オツ！」と声を上げた。二人はそこで、真裸になってまわしを締めようとしていたのだった。

二人は、ボツと頬を赤らめると、良男にくるっと背を向けた。まわしをほとんど締め終っていた圭子は両手で乳をかくし、締めかけていた昭子は、まわしの端で胸を覆った。



一瞬、露わな胸を目にした良男も、ハツと立ちすくんだ。「妹」ではないか、と心に言い聞かせてみたが、胸の高鳴りを押さえられなかった。

沈黙がしばらく続いた。

だが良男は、思い切って部屋の中へ一歩踏みこみ、「構わんじやないか、どうせ相撲を取るんだ。裸になっても兄ちゃんは何とも思わんよ」と言った。その場合、遠慮して振舞えば、二人をかえって妙な気持に思うたからだ。

圭子が、ホツとしたような声で、「水着で取ってただけ、あんまり暑くて……汗で濡れた水着って、気持ち悪いでしょう」と言った。昭子は黙ったまま後ろを向いていたが、圭子の明るい声で緊張がほぐれたようであった。良男の緊張も解けた。

彼は、「そうだろう、今日は特別暑いからな」と言いながら昭子に近寄り、「どれ、兄ちゃんが締めてやろう」と、そのまわしに手をかけた。昭子は最初、その手を除けようとしたが、するがままに任せた。良男の心にも兄としての感情が戻ってきた。

「さあ、よし、これで本当の相撲になるぞ、思い切ってぶつかってみろ」と、良男は

昭子の背をポンと叩いた。

二人は、夏の太陽が照りつける庭に下りると、黙って四股を踏み、向き合った。

相撲と水泳で、数年間肌を灼いてきた二人の背には、水着のあとがくっきりと印されていた。良男はそれを見て、フトおかしさがこみ上げてきた。「二人とも見てみる、まだ水着を着てみたいだぞ」と言うと、二人も初めてそれに気付き、「マアノ」と言って笑った。良男と二人との間に、初めに流れた緊張は、それですっかり無くなってしまった。

二人はいつものように、遠慮のない相撲を取った。

発達した乳がブルブルとふるえるのを見て良男は、そこに「女」を感じていたが、はげしく取組む二人を見ているうち、それも忘れ去っていった。

何回目かの取組の時、前陣をぐいぐいと圭子に引き上げられた昭子が、下腹を露わにしてみせたが、良男は何も感じなかった。かねて目にしたことのない部分の筋肉の動きを見ても、たくましさを感じえこそすれ、男としての感情は全く起らなかった。

良男はむしろ、心からの嬉しさを覚えていた。

四年の間、相撲で鍛え、水泳で整えられた二人の肉体は、みるからに引きしまった立派なものになっていた。腕、脚、肩、そして乳のあたりまで、どこにもたるんだ感じはなかった。あどけなかったその顔も、みるからに凛々しいものになっていた。

七回の取組が、昭子の四勝で終わった時、圭子は「私たち、立派になったでしょう」と言った。良男は、「うん、すごいぞ。うっかりしていると高校の普通の男子なんか負けるかも知れんね」と言った。昭子も、良男に真直ぐ身体を向けると、「女でも、ここまでやれたんだと思うと、嬉しくなる。兄ちゃんに感謝しなけりや」と、胸を張った。

良男の喜びは、二人のその言葉と、明るく堂々とした態度によって一層大きなものになった。それは、理想とした女性像を現実に作ることができた喜びと言っても良かった。

二人の相撲は、その日から裸で行なわれるようになった。

良男も、月に一、二回は素裸で二人と対するようになったが、そこにはもう、何の感情も湧かず、ただ、もっと強く、もっと明るい二人をと願う気持だけが働いていた。

二学期もなかばの頃、二人の肌に、水着



のあとはもう無かった。

二人は、ぐんと成長した身体に合わせるために、まわしを作り直した。一本は、「どうせ作るなら本格的なものが良い」と値段は張ったが黒縹子で仕立て、もう一本は、白のさらしを二枚縫い合せて作った。昭子の提案で、黒縹子のものを「試合用」と名付けて、月一回の「星争い」の時使うことにし、普通は「稽古用」と名付けたさらしの方を使うことにした。

胸までこんがりと灼けた肌は小麦色に輝き、白のまわしがよく映えたが、黒縹子のものにも、白とは異なった趣きがあつて良男は好きだった。

## (6) 昭子のやさしさ

更に一年が過ぎた。

二人の肉体は、もう完全な女と言えるようにまでなっていたが、良男と二人との間には何の変化も起らなかった。

だが、昭子の就職が決まった夜、そこに、重大な変化が起ったのだった。

昭子の就職は、良男の会社の大阪本社に決まった。十一月の初めだった。その夜、三人



M.U

なかば夢心地になっていた良男は、驚いて起き上った。昭子は「シッ」とそれを制すと「真面目な話があるの」と言つて、良男の傍にきちんと坐った。

良男も、思わず坐り直していた。

昭子は、しばらく黙っていたが、思い切つたように顔を上げると「兄さん……結婚はどうなっているの?」と言つた。そして彼が結婚しないのは、自分たちが学校を出るまではと考へてのことだつたと思う、本当にすまなかつた、でも、自分に就職が決まつたことだし、ぜひ、すばらしい結婚をしてほしいと言つた。

「結婚してほしいなんて言い方は悪いね。若しかしたら、誰か居たのかも知れないのに、私たちのために……」と言つて、下を向いてしまった。その目には涙さえ光っていた。

良男は感動した。それは、自分のことをこれほど、心配してくれていたのかという気持ち、もうひとつは、たくましく育つた昭子にやさしさも育っていたという喜びだった。

だが、二十七になった良男には、特にこれという相手は居なかつた。以前秘かに恋していた女性も既に結婚していた。



昭子は、それを聞くとニコツと笑った。そして、「それなら良かった。早くいい人を見つけてね」と言い、スツと立ち上ると、後も振り返らず部屋を出て行った。

良男の胸は、感動で熱くなっていた。それはまだ恋と言えるものではなかったが、良男の昭子への感情は、その夜から大きく変っていった。

昭子の気持も、どことなく変っているようであったが、それは表面には全くあらわれなかったから、彼には判断がつかなかった。むしろ、それまで以上に「妹」らしく振舞い、たびたび良男にも相撲を挑んできた。

良男も、自分の気持の変化を表面に出さず挑戦されれば喜んで土俵に上りもした。そんな時、昭子の身体を抱きこみ、引きつけようとする自分にハツとすることもあったが、それは直ぐ乗り越えることができた。一つは習慣がそうさせたのかも知れなかったし、相手がますます力と技をつけて、うっかりしていると負かされるということも作用したようであった。

そうして年が明け、昭子の卒業の日は近づいていった。

就職してしまつたら一生できないかも知れ

ないと、昭子と圭子は毎日のように相撲を取った。

## (7) お別れ相撲

良男が、昭子への気持を決定的なものにしたのは、昭子が卒業し、いよいよ明日は大阪へ出発するという日であった。

その日、良男は朝から休暇を取った。

圭子の提案した「お別れ相撲」は、朝十時過ぎから始められた。

その日、二人は塩を用意し、どこからか手桶まで借りていた。土俵の雰囲気は、そのためか厳粛であった。

髪を後ろに束ね、陽灼けした肌にきりっと黒襦子のまわしを締めこんだ二人が、塩をまき、躊躇する姿にはきびしいまでの美しさがあつた。良男は、そうした姿を、或いは一生見ることはできないかも知れないと思い、じっと腕を組んで見つめていた。さびしさと満足感が去来して、言うに言われぬ気持になつていった。

二人の気持も同じであつたのか、かねて口数の多い圭子も、一口も口をきかなかった。始めは、二人が試合をした。

五回勝負で、圭子が三勝した。負けた昭子

は、むしろ嬉しうであつた。

しばらく休憩して、次には二人が交互に良男と組んだ。

良男は、昭子とはできるだけ四つにならずにおこうと思つていた。それは、素裸で彼女と向き合つて立った時、或る衝動が彼の身体の奥底から湧き起つたからだつた。それは、昭子以外の女性に対しては一度も感じなかったものだった。彼は、昭子を恋していることをあらためて知った。

良男は、立ち上り思い切つて昭子を突き放した。だが、昭子は良男に武者振りついてきた。彼は、もう一度突き放そうとしたが、その気持とは逆に、双差しになつた昭子の身体を抱きこんでいた。

昭子は、双差しに差した手で彼のまわしをぐいぐいと引き、頭を胸につけてすごい力で押してきた。良男は思わず二、三步後退してしまつた。このままでは寄切られるぞと思うほど、その寄り身は猛烈だった。

良男に戦意が湧いた。彼は、有利な体勢に変えようと、昭子の右腕をつかんでぐいと引き起すと、強引に左を入れ、右の上手も取つた。昭子も外された右腕で良男の上手を探りしつかりとつかんだ。



完全な左四つの体勢になった。お互いのアゴが、それぞれの左肩に押し当てられ、頬もピッタリと着いた。良男の身体の奥底で、再び何ものかがうづいた。

昭子の肌に、汗が次々と吹き出し、彼の肌を濡らし、良男の頬から流れ落ちる汗は、昭子の首筋を流れた。

昭子の、しっかりと結ばれた黒襦子のまわりの結び目が良男の目に入った。彼はそれにさえ何ものかを感じ、思わず上手をつかんだ腕をぐいと引いた。

昭子の肩口から、何かが立ち昇った。それは既に少女のものではない、まさしく「女」の匂いであった。

良男は、もう自分に耐えることができなくなっていた。彼は、思い切り大きく上手投げを打った。

二度目に昭子と組んだ時も、いつのまにか左四つになってしまっていた。良男にとって更に悪いことには、昭子が彼のまわしをぐいぐいと引いて寄り身に出てきたため、その乳が彼の胸にピッタリとつけられたことであった。彼は、昭子の気持を判断しようとしたがそれはわからなかった。はつきりしていることは、その日までと同じような体勢になって

も、どうということとはなかったのに、その日の良男には、それはたまらなく感じられるということだけだった。

良男は、自分の衝動を振り切るように、一挙に吊り出そうとした。しかし昭子は、外掛けにその足を掛けて吊りを防いだ。彼はやむなく寄り出すことにして、ぐいぐいと寄っていった。昭子の身体が弓なりになり、その胸が大きく良男の目に入った瞬間、二人は折り重なって倒れた。

「痛くなかったか？」といったわる良男に、昭子は「いいえ」と、明るい笑顔を返した。彼は、その身体を思い切り抱きしめたいと思った。

「最後の相撲だからって、私たちに遠慮したらいけないわ。徹底的に鍛えてね」と言うのが二人の言葉だったが、まだ、昭子と二回圭子と一回しか取っていないのに良男は相当な疲れを覚えていた。

いきなり突いて出てきた圭子に、良男は思わずよろめいた。圭子はその隙にさっと右を入れて、猛烈に寄ってきた。土俵際でこらえる良男の胸に圭子の胸が押しつけられ、お互いの頬がピッタリと付いたが、彼は昭子に感じるものを圭子には全く感じなかった。だが

それを確かめている間に、見事に寄り倒されてしまっていた。疲れのせいもあった。

良男は思わず苦笑した。圭子は嬉しそうだっ

た。彼は、「もう昭子と取るのはやめた方が良いい」と思ったが、「何度でも組みたい」という気持ちに、それは勝てなかった。昭子も、さあ！とばかり土俵に上っていた。

良男は、組むまいと思ひ、立ち上り低く当たって昭子ののど輪を攻め、そのまま押し出そうとした。だが、昭子の身体が浮き、その前禪が目に入った瞬間、右手でぐいとそれをつかんで押し上げていた。それは全く無意識だった。昭子は、その胸に押し当てられている良男の頭を持ち上げようとしてアゴに手をかけ、両脚を引いて、浮いた体勢を直そうとけんめいにもがいたが、そうすればするほど前禪は上にずれていった。

だが、その前禪が乳まで上り、昭子の下腹が露わになった時、良男は我に帰った。彼はハツとして力を抜き、前禪から手を放した。昭子は、なぜ彼が前禪から手を放したか気付かなかったようだった。昭子はその隙に、良男の身体をぐいと引き起すと、両の腕をねじこみ、双差しになって寄ってきた。彼は、そ



の腕を外から巻きこんでこらえたが間に合わず、見事に寄り倒されてしまった。昭子の胸が、彼の顔に覆いかぶさった。

良男は、何回でも昭子と組みたいという気持ちを押しえて「今日の二人は強いね。もうやめだ」と言って汗を拭いた。

圭子は、「またお昼から二人一取ろうよ」と言い、昭子も「ようし、クタクタになるまでやろう」と受けて、昼食のあと、二人は再び土俵に上った。

午後からのその取組は、それまでのうちで最も見事で、はげしいものであった。

二人は、突き合い押し合い、がっしりと四つに組み、投げ合った。猛烈な張り手の応酬で頬が真赤になっても、痛いと言わずたたかった。

良男は、その一番一番をしつかりと胸に灼きつけていた。

全身の力を出し尽して、これが最後という時、二人は四つに組んだままだままでも動かなかった。二人の頬には、汗といっしょに、涙が流れていた。

## (8) 良男の決心

翌くる日の夜行で、昭子は発った。

列車に乗る時、昭子は、「今まで本当にありがとう。一生けんめい働きます。圭ちゃんを、よろしくね」と言った。良男はその手をしっかりと握り、ただ「がんばれよ」とだけ言った。圭子はほとんど涙声であった。

昭子を送って家に帰りついた時、圭子は、ワツと泣いて、良男の胸に顔をうずめた。良男は、やさしくその肩を抱いてやった。

良男が昭子に、出発の前にその心を打ち明けなかったのは、昭子が彼をどう考えているのか判断がつかなかったからだだった。それに自分の心も、もっと時間をかけて確かめてみようと思ったこともあった。彼は、そういう点では、自分でも意外なほど慎重だった。だが、時が経つにつれて、昭子への思いは強まっていた。

また、昭子が、出発前から良男に「兄貴」以上のものを感じ始めていたこと、そして、それが一層強まっていることを、彼女からの手紙の、文面の変化によって知ることができ、良男の決心は固まっていた。

彼は、残った高校三年の圭子と、時折土俵に上ることもあったが、圭子に対しては、妹以上の何ものも感じなかった。そのことも彼の決心を強める作用をした。

圭子も卒業し、昭子と同じ彼の社の大阪本社に就職した。

彼が、始めて昭子への手紙で自分の心を打明け、結婚を申し込んだのは、それから四カ月目、梅雨も明ける頃だった。

× × ×

夏のおそい日も、とつぷりと暮れていたが良男は、まだ縁側に坐っていた。

良男は、フト我に帰った。

その掌の中で、昭子からの手紙がしわくちゃになって汗に濡れていた。

彼は、苦笑すると、その一枚一枚をていねいに伸ばし、きちんとたたんで立ち上った。

良男は、雨戸を閉め、二人の居た部屋に入った。タンスの上に手紙を置くと、ひき出しをそっとあけて「昭子」と縫い取りのしてある黒襦子のまわしを取り出した。

良男は、しばらくじっと、そのまわしを手にしていたが、やがて、それをゆっくりと締めつけた。

しめ切った部屋は、蒸し暑かった。締め終って腕を組み、じっと蹲踞する彼の肌には、汗が吹き出していた。

その肌に、昭子の汗に濡れた肌の感触が再びよみがえってくるのを覚えた。





△ S M 時 評 △

「奇ク花壇（論争の場）は満開前夜」

△告白物入選作発表もうれしく▽

ブラボー！ 奇ク！

——新刊九月号を見て——

橘 行 司 子

東西、東西、天下御免は S M 時評。いやはや、新刊九月号はどこからシャベロウカ、アレモコレモと——まったく、ほんまに眼がまわる。またもビールを取り出して、乾杯だ！ペンもインクをたっぶりのませて、さて、

これで五回目——。

「奇ク花壇（論争の場）は満開前夜!! 告白物入選作発表もうれしく、ブラボー！ 奇ク九月号！」

これが奇クは九月号のオセッカイ発言のボ

イントだ。

「失言はお許し下さい。どなたに対しても悪意はありません。お気にサワツタラごめんなさい」など、ぬけぬけと酔っぱらいの言いわけみたいなことをおっしゃり、しかも

「まだまだエンリョしているつもりです」

と、すごんでみたり、なかなか芸がこまかいなと感じいました。——これは久方ぶりの御登場である麻生保氏（「麻生保氏の生活と意見」）のホトケの顔も三度？ という

「敢て筆を執りました」という大上段のかま えからほとぼる舌戦？ の一節だが、この相手は名にしおう論客、芳野眉美氏。この所 芳野旦那、あちらからも、こちらからもお座 敷がかかる繁昌振りで、夢男にも意地はあ る」と、先月号で「濡れなくても、濡れる？ ということについて」と、公開状を夜乃探郎 氏から突きつけられ、つづけて、九月号、ハ 奇クサロン▽でも、「羞恥文学『花と蛇』に よせて——読物か、小説か——」夜乃探郎と



論壇提供のタネにされている。

——これらのチャンバラ？ 舞台を中心として、少し離れた観客席では、（これは、舌戦の一員ではないが）「交友秘録——芳野眉美氏と——」と、野中芳久氏が、芳野旦那に言及している。

「……私にとっては、夜乃探郎氏の御意見については、大いに共感をおぼえるものがありますが、さりとて、従来長らく書き続けておられる芳野眉美氏の明朗で軽快そしてモダン味あふれる文章にも」と「読者通信」（静岡県沼津市八府中逸夫Vの声もあり、「奇ク三匹の侍」八月号八夜乃探郎Vで取り上げられた一人、辻村隆氏は、相棒の芳野眉美氏と、ロープを贈られた夜乃探郎氏の花の舞台に近づきつ（サロン楽我記）「夜乃氏よ——芳野氏よ——」。結論として生意気にも私なりにいわせて頂けば、空想の中に現実を求め、現実の中に空想は更に飛躍して、吾等アブ党、それぞれの道を、ゴーイングマイウェイで行くのが一番いいのじゃないでしょうか」と、花も実もあるゆかしき言葉を投げかける。

とにかく、「編集後記」の「論争の場は十分に与えられるので、審判は読者の公平な判定に委ねたら」ということで、ますます奇ク

花壇（論争の場）は、満開に近づく。

大方マニヤよ、さア！ 書くべし、書くべし、大いに論争のお仲間入りを——。

ところで、ちょっと麻生保氏の発言で気付いたことであるが、「ガン作マニヤのノート」八濡れにぞ濡れしV主題と必然性」の中で芳野眉美氏が、明らかに麻生を指して甚だしく誹謗しておられます」と、「文中に麻生の名を一度もあげずにエイヤツと暗討を」とフンガイして居られる。はたして、芳野旦那が麻生氏、個人のみを批判されているのだろうか？

本誌六月号「精神分析学より見た耽美の世界」久我庄一・の中で、ワイルドもマゾッホも名前が出てくる。また七月号で夜乃探郎氏が「雑談的な「SM風俗」——あれこれ」でワイルドなどの言葉を使っている。被害者？は、いったいだれなんだろうか？ 芳野旦那の、これについての「拝復」一筆がホシイがこれはムリダロウな？

○

このような花壇も満開に近づく、編集子も、アチラコチラと奇クの世界をカケ廻り、世話役として忙しいことだ。「編集後記」の盛沢山な打あけ話やら投稿紹介ETC——。

扉「本誌の信条」の頁は、スッキリとした

構成で、言葉もカンケツに「読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます」と御立派である。（「社説」という所か）

「奇クサロン」編集子の言葉は、今回は八新興宗教の倒錯性V

この「教祖という人にまつわる数人の女性信者」うんぬんの宗教団体は、たしか「朝日ジャーナル」に、モデル小説として取り上げ連載されている。この教祖は、まさに現代の怪物的、スケールの大きい魅力のある存在だった。「法灯と勤行の中にこそきらめくような倒錯の甘美な法悦と陶醉があるのではなかろうか」だれか、告白なり、小説なりで、神秘のベールをのぞかせてくれませんか。編集子の言葉から、そのような新しいジャンルが生れるのも、また面白い。編集子よ。如何——。大方のマニヤよ、如何——。

◇懸賞（告白・手記・体験）の入選作品が二篇発表された。

『黒いコートの記憶から』小妻容子

『自己を分析する』

△珠江抄V以前 保藤久人

の各両氏である。

特に、保藤氏は「雑談的な散文」八通信V



と八文通Vと其の周辺から——」九月号、本文巻頭にも併載された好エッセイあり、七月号にも、「SMよ、今日は」八奇クよ、健やかであれVがあり、氏の健筆ある前途に注目したい。

また、小妻氏のは、「原稿と同送された写真数枚」カットとしてのせられ、真実の告白に、いっそうの生々しさをそえていた。

「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てたその伝統、実力が、「読む雑誌」への脱皮にともなうて、ますます発揮されるためにも、今回の入選者に拍手を送りたい。

◇愛読者告白原稿「ゴム裏草履に憑れた男の告白」須磨孝・の告白は、「履物崇拜癖症」という異色のなもので、これは八SM時評V——新刊七月号を見て——での「新しい発見ある本誌に」というカケ声が、いっそう裏付けされつつあるものと、うれしいことだ。須磨孝氏よ。さらに御健筆、御投稿を——。

◇編集部への頁。

今回の編集技術に感服させられたのは（特に読者へのサービス満点という所は）『ドラマ・奇譚クラブ』夜乃探郎・のカット・懐しの奇ク、旧号の数々の表紙を飾ったことであ

る。これは、まったく楽しく興味深い。新しい読者も、古い読者もそれぞれの意味で、ゴキゲンであろうか——『創作・伊藤晴雨画伯』久我庄一・の本誌旧号口絵に載せた晴雨画伯の絵が、数枚カットとしてのせられたことは、さぞかし作者（久我庄一）みょうりにつきるだろうし、読者の文章をよむ興味が倍することになろう。『デパート女子レスリング』芦浦素舞夫・の挿絵。これはケツ作である。編集部の挿絵に対するサンショウは小粒でもピリツ！とカライの努力が結実した一例だ。（「ゆきこ対みずえの女斗美死斗図」参照）。

『黒いコートの記憶から』小妻容子・のフォト・カットには含まれた一枚の挿絵。オッパの巨大な美女緊縛画は、これは、読者へのサービスと受ける。大人のお楽しみだ。（ホシガリマセン、コレ以上ハ、セメテコノ線マデハ……）

◇だれかさんの口ぐせのように、（これは増頁うんぬんとは違います）……私は枚数のことです。もう後、二枚半ばかり。チョット、おしやべりしすぎたネ。ペンをカケ足させよう。

◇『創作・伊藤晴雨画伯』久我庄一・は、い

つも「編集後記」にオカブを取られる。（また、それで重量級の久我氏の作品評をするりと行司子は逃がっているのだが）とにかく、氏の「責」の開拓者、伊藤晴雨画伯の八問題提起Vを労としたい。

◇『花と蛇』続（第九回）団鬼六氏の、掲載をよろこびたい。いずれ特別版八SM時評Vとして、作家論をやりたいつもりだが、まず第一候補者は、むろん団氏だ。

◇八本誌二〇〇号突破記念原稿Vのうたい文句もスバラシク、これまた久我氏と揃って重量級の作家・黒淵嬰一氏の、「アリアドネ」（希臘神話の再編成）。これは、奇クのはこる文献の最高クラス黒淵氏の御健筆を祈る。

◇「奇クサロン」について

○「世相診断室」の八木戸川健V氏よ、小説を書かれては。

横浜の南区高根町なる「セントラル劇場にて——」の文章は、思わずユカイになった。

（生きたドラマの一断面ですな）「芸術的に観てやろう！」といって、私はステージに半分身を乗り出すようにして、舌でなめる真似をした——などケツサクです。たしかに人間が、紙面の上でおほらかに呼吸をしている——



# 本誌既刊号在庫一覧表

残部僅少！ お申込みはお早く

○本誌の既刊雑誌は最近発行の分を除いて殆ど残り少なくなつてしましました。

○左記一覧表の中、価格の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。

○送料は当社にて負担いたしますが、定価一五〇円の雑誌のみは送料を含めてお申込み願います。

既刊号在庫案内

昭和35年6月号 (売切)  
昭和35年7月号 (売切)  
昭和35年8月号 (売切)  
昭和35年9月号 (売切)  
昭和35年10月号 (売切)

昭和35年11月号 (売切)  
昭和35年12月号 (売切)  
昭和36年1月号 (売切)  
昭和36年2月号 (売切)  
昭和36年3月号 (送共一七〇円)  
昭和36年4月号 (送共一七〇円)  
昭和36年5月号 (送共一七〇円)  
昭和36年6月号 (送共一七〇円)  
昭和36年7月号 (売切)  
昭和36年8月号 (売切)  
昭和36年9月号 (売切)  
昭和36年10月号 (定価二〇〇円)  
昭和36年11月号 (定価二〇〇円)  
昭和36年12月号 (定価二〇〇円)  
昭和37年1月号 (売切)  
昭和37年2月号 (売切)

昭和37年3月号 (定価二〇〇円)  
昭和37年4月号 (売切)  
昭和37年5月号 (売切)  
昭和37年6月号 (売切)  
昭和37年7月号 (定価二〇〇円)  
昭和37年8月号 (定価二〇〇円)  
昭和37年9月号 (定価二〇〇円)  
昭和37年10月号 (定価二〇〇円)  
昭和37年11月号 (定価二〇〇円)  
昭和37年12月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年1月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年2月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年3月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年4月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年5月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年6月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年7月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年8月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年9月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年10月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年11月号 (定価二〇〇円)  
昭和38年12月号 (定価二〇〇円)

昭和39年1月号 (定価二五〇円)  
昭和39年2月号 (定価二五〇円)  
昭和39年3月号 (定価二五〇円)  
昭和39年4月号 (定価二五〇円)  
昭和39年5月号 (定価二五〇円)  
昭和39年6月号 (定価二五〇円)  
昭和39年7月号 (定価二五〇円)  
昭和39年8月号 (定価二五〇円)  
昭和39年9月号 (定価二五〇円)  
昭和39年10月号 (定価二五〇円)  
昭和39年11月号 (定価二五〇円)  
昭和39年12月号 (定価二五〇円)  
昭和40年1月号 (定価二五〇円)  
昭和40年2月号 (定価二五〇円)  
昭和40年3月号 (定価二五〇円)  
昭和40年4月号 (定価二五〇円)  
昭和40年5月号 (定価二五〇円)  
昭和40年6月号 (定価二五〇円)  
昭和40年7月号 (定価二五〇円)  
昭和40年8月号 (定価二五〇円)  
昭和40年9月号 (定価二五〇円)  
昭和40年10月号 (定価二五〇円)  
昭和40年11月号 (定価二五〇円)  
昭和40年12月号 (定価二五〇円)

○極めたい、在庫の僅少な分がござい  
ますので、第二希望品がござい  
たらお書き添え願います。

○「サロン随筆」へ書くVという楽しさ・保  
藤久人氏よ。とにかく書かなくちゃ話になり  
ませんね。書く——投稿山積——増頁！——  
いっその本文充実ですか。「オール・読者  
よ、オール・ペン取れ！」行司子は、大いに  
保藤氏の言にサンセイ。

○「編集部たより」の、辻村隆、芳野眉美、  
夜乃探郎各氏の△三者？鼎談V提案、(何が  
飛び出すか?)その実現を期待しよう。ただ  
し、辻村氏の「サロン楽我記」の夜乃氏を指  
して「誌上公開主義者なので」と言ってるの  
をみると、実現は△奇蹟V?か——。

性をおぼく長篇推理——『蒼ざめた肌』戸川  
昌子・が眼につく。そう言えば「小説現代」  
も既刊号で△不毛の愛・倒錯の性・人間深奥  
の歪みを衝くVを特集していた。一般大衆雑  
誌のこのような傾向は、本元の「奇ク」から  
見てよろこぶべきか、悲しむべきか? (あま  
りオカシナ作品を他誌(「オール読物」ET  
C)で発表されるといたしかゆしである。



縣賞「告白、手記、体験」入選作品発表

蛭<sup>みみ</sup>蚓<sup>ず</sup>のたわごと

田代俊夫

—「ある夏の間奏曲（八月号所載）」に附して

一、はじめに

何から書き始めていいのか、試験の答案以外にほとんど文章というものを書いた経験のない私にはまるで見当もつきません。今、書いては消し、消しては書き直す無駄な作業を何回も繰返しているのです。拙劣な文章を長い時間に僅かしか書けない自分に苛立ちを感じます。

「ある夏の間奏曲」——ひどいショックでした。夏の海と草むらで作者はしばし胡蝶となつて甘美な幻想的世界に遊びましたが、私はそこに自分の夢と分身を発見したのです。息

が詰りそうでした。文章の一句一句が錐のようにな心に突きささり、その息づかいが私の心理の裏に密着してじわじわと喰い入ってきました。この作品の中に私は理想の女性と理想の「マゾなるもの」を見出しました。

十人十色といえます。マゾといい、サドといっても、各人その志向する所必ずしも同一ではありません。私は数年来本誌を読んでいますが、今まで本当にこれが自分の理想なのだと思える内容の作品に出合ったことがありませんでした。ある部分には共鳴しえても他の部分は好みに合わないというようなことがしばしばです。帯に短したすきに長し、その

上、最近M傾向の作品自体少いようなので物足りなく感じていたのです。

「ある夏の間奏曲」——これこそ私の望んでいたものです。そっくり、そしてそのままに。できれば全文を暗記したいぐらいです。八月号はこの作品だけあれば、あとは何も要らないとさえ思いました。

「間奏曲」での作者の体験は、あるいは事実そのままではないのかも知れません。しかしたとえ全くのフィクションであったとしても一向構いません。私はそこに、ただ自分の夢と理想を見ようとするからです。

はじめに断っておきますが、私はいわゆる



「マゾヒズム論」を始めようというつもりはありません。そのために必要な学識、才能を持たないし又興味もないからです。私は自分の欲する所に従って、自己の主観を押し通そうと思っています。

あらゆる人間的現象が歴史的であることを主張する社会学者は自分自身が歴史を超越する存在であることをいいたてる何の根拠も持たないように、ある対象の受取り方、理解のしかたは、畢竟その人の関心のあり方によって動かされることをまねがれません。少くとも本誌のように主として人間の異常な心理の世界を対象とするところにあっては、自分自身がどのような事に関心を持ち興味を抱いているかを正直に表明することが何よりも適切であると思うのです。

私は「間奏曲」を媒介として、自分（おそらく作者も）の心理構造を記述し且つ解明しようとするのですが、以下の内容には稚拙な表現技巧を別としても、多くの無知・独断・偏見・誤謬のあることを誰よりも私自身が認めます。ですが、私にはこれで精一杯のところなのです。



「何よりも私が……魅力を感じ、心のおの

きを感じたのは……娘が大柄なことであつた。いつのころからか、私は自分より大きく、強い女性にあこがれを感じるようになっていた」（五三ページ三段目、但し傍点筆者、以下同じ）

「強くも美しい女性が弱い男を支配し、膝下にとり押えて思うままにとり扱う」ということ程私を興奮させるものはなかった」（五四ページ一段目）

作者木原氏の根本的思想は、右の二つの文章に簡潔に表明されています。大げさな表現をすれば、クリスト教の「原罪」マルクシズムの「疎外」に相当する基本的「公理」ともいえるでしょう。「大きく重く強い女性」が「男を膝下にとり押えて思うままに取扱う」ことが最高の理想であり、最大の心理的快感を生ぜしめるという点に於いて、作者は完全に私と一致するのです。

このことが一体何を意味し、何に由来し、何を生ずるかについての下手な答案を書こうというわけですが、もとより「公理」である以上、それ自体の証明（懷疑）の存しないことは、改めていうまでもありません。

## 二、「大きく重く強い」こと

背の高い人からは一種の心理的圧迫感を受けます。特に女性の場合はそうです。私にとって、この女性から受ける圧迫感が極めて重要であり又好ましいものなのです。どこかで自分より背の高い女性をみかけることがあると、それだけで私は胸さわぎを感じ、或る快感を覚えます。彼女が人ごみの中で前を歩いているとその後をつけ、満員電車ですり皮を握って立っている時には、まわりの人をかき分けてまでもそのすぐ傍へ近づこうとします。

最近の若い女性は昔よりずっと体格がよくなったといっても、私の身長も男として別に低いほうではなく一六七センチあるのですから、それ以上に長身の女性がそう多くいるわけでもありません。それだけにそういう人を発見すると大変嬉しいのです。不思議なことに背の高い女性は概して美人でスタイルもいように思われます。

女の人によくハイヒールをはいていますから、一見私より長身に見えても無条件に信じこむことは危険です。私はそれぞれの場合に応じて抜かりなくハンディを目測し、正味私より高いのをAクラス、そうでないのをBクラスと勝手に分類しています。

何年も前のことですが、ある映画雑誌に、



内外女優の身体各サイズ一覧表が記載されてあったので、わざわざそこだけ写しとりしました。欧米の女優には私より背の高い人がザラにいますが、残念なことに日本の女優では、ほとんどいなかったようであらう。失望した気持ちになりました。

私達は日常背の高さをかなり意識することが普通で、そのため背の低い人はそれを大変気にすることが多いのですが、私自身も例外ではなく、自分の属する社会的グループの中に自分より長身の人が多くいると心穏かではありません。ただしこの気持は相手が男性のときにのみ生ずるので、背の高い女性に取囲まれている場合には、大変幸福に感じるだらうと思います。

日本人の身長は明治以来、どんどん高くなってきており、特に戦後はこの傾向が強くなります。もう十年もすれば二十才の男子の平均身長は一七〇センチに達するでしょう。

このことはもとより歓迎すべき現象ですが、平均が私自身を超えてしまうことには一面心残りを感じないわけでもありません。それより私は女性に、無理をいえば女性だけに、もっと高くなってもらいたいです。どの人種でも女の平均身長は男のそれよりも低いので

すが、生物学的根拠はどうであれ、その反対のことを望む私には非常に残念なことに思えます。一七〇センチ級の女性が私の周囲いたるところに見られるような時がくれば、どんなにか素晴らしいだろうかと、いつも考えているのです。

「重いこと」は、背の高さに比較すればいくぶんは第二義的ですが、（たとえば自分よりも「背が高いが軽い」ことの方が「背が低くて重い」ことより望ましい）やはり大切な要件です。

「重いこと」は単に体重の大きいこと、あるいは自分より重いことを意味しますが、正確には身長と「釣合いのとれた」体重の意味でなければならず、つまり単に不必要なほど太っているのが望ましいのではなく、自分より背が高いから、その結果当然体重も重いということになるのであって、この点で第二義的というのです。女子の運動選手の中には、水平方向への拡がりや垂直方向へのそれと甚しく均衡を失っている、まるで重戦車を思わせる人がいますが、もとよりそのような重さというのではないのです。オリンピックの女子砲丸投げで優勝したタマラ・プレス選手のようでは、それこそこちらがたまらない。

釣合いのとれたということは、少し違った意味で勿論身長の場合にも妥当するので、たとえば背の高さが二メートルもある女性ではかなわないということにもなりますが、現実にはそのような事例が滅多にないので、あまり意識してはいないだけのことです。

日本の女子バレーボールチームが宿敵ソ連を破って優勝した瞬間、情けないことに私はテレビの画面の選手達と共に泣いてしまいました。だが、バレーやバスケットの選手の中には「大きく重い」実に見事な体格の女性が数多く見受けられます。競技の性質上当然ともいえましょうが、ほとんど私より背の高い人ばかりで一七〇センチ級も大勢いますし、激しい運動で全身をくまなく動かせるせいか、その均整のとれた重量感溢れるボリュームには完全に圧倒されます。彼女達の躍動するはちきれんばかりの健康美は、本当に素晴らしい一言に尽きます。

若い女性は、太ることを大変気にして食べたいものも食べずに、口を開けば痩せたい瘦せたいといいます。太っていると周囲から冷められるからでしょうが、そんな馬鹿な話はありません。若い女性は幾分太っているくらいが自然で且つ健康なのです。とにかく女性



の痩せることへの執念には正に鬼気迫るものが感じられます。

女性をそのような衝動へ駆りたてるのは周囲の人達だけではなく、特に悪質なのが服飾雑誌です。そこに使っているモデルが間接的強制力を発揮するからです。けれども針金のようなファッションモデルに私は美を感じる事ができません。体質的に痩せているというのならともかく、大部分のモデルは、身にもとう衣裳を見せつけ売りつけるためにのみ痩せた体つきを強制されるのですから、不自然且つ不健康であるばかりでなく非人道的で醜悪です。

若い女性は太ることにもっと自信と誇りを持って下さい。昔の画家は肉つき豊かで豊かな女性像を好んで描きました。もし現代が痩せた女性に美的価値を認めるのであれば、この社会には何かしら不健康な精神の病が潜んでいるのです。

「強いこと」——これは、たとえばレスリングのように、一対一の対等の条件で力技を争った時に、相手を打負かすことができるという、純粹に物理的・力学的概念をいうのである。憲法十三条にいうごとく、人種、信条、社会的身分又は門地による政治的、経済的又

は社会的優位性を意味しないことはもとより明らかです。そしてこのことが極めて重要な意義を持つてくるのです。

サディスティンが「強く」なければならぬのは自明の理ですが、私は「強い」ことの本質を右の限定された内容に求めます。勿論その他の点（但し人種上の優位は無意味且つ不合理です）で優位であっても構いませんがあくまで附随的にそうあるべきです。

「大きく重いこと」と「強いこと」は明らかに範疇を異にする概念です。しかし、この場合、両者は出発点が違っただけで互いに緊密な関係にあり、「大きいこと」が「重いこと」に対して持つ先行性は持たず、又一方が他方の属性というのでもなく、更に原因と結果、主と副の関係にあるわけでもないのです。全く独立、平等で且つ渾然一体をなしており、いずれは具体的現象形態によって結合され帰一することを予定されているのです。どうしてサディスティンが先の意味で強い必要があるかという、もし弱ければ彼女とマゾヒストとの関係は当然「なれあい」となるからです。このことも後に極めて重要な意味を持つてきます。

ところで自分より「小さく軽い」女性が柔

道ややわらなどの格技を習得しているために「強い」ということも当然ありえます。こんな場合はどうなのか？

これは意地の悪い設問ですが、「大きく重いこと」と「強いこと」はどちらも独立の必要条件なので当然不可となるわけで、「大きく重い」が「弱い」場合も原則的には同様です。それに、たとえば五尺に満たない女性が六尺の大男を投げ飛ばしたりすることは、現実にそれが可能だとしても、どうしても或る不自然で滑稽な感じを伴います。この「滑稽」という言葉は、うまく説明することができませんが、私にとって絶対の禁物でありタブーなのです。

以前こんな実例を何かで読んだ記憶があります。会社重役の夫がマゾヒストで、毎夜のように自分を縛って鞭で打つように奥さんに要求するのです。奥さんはそのようなことを好まないのですが、要求に応じないと夫の機嫌が悪く、あげくの果ては殴られることもあるのでいやいやながら従っているというのです。これでは滑稽なばかりでなく悲劇ともいえるでしょう。

もう一つの例——女の方が背の高いアベックを時々見かけることがありますが、別に連



れの男に嫉妬するわけでないのに、何となく滑稽に思えます。そのくせ私自身は自分より背の高い女性と歩きたいのですから、明らかに自己矛盾となるのに、どうしてそう感じるのか自分自身にもよく分らないのです。

「大きく強く強い」ことは、もとより程度問題です。理想のサディスティンは自分より一センチでも低ければ、一キロでも軽ければ、又柔道や剣道の有段者でなければ絶対に駄目だなどと、非常識で厚かましいことを主張するのでは決してありません。ただそれが望ましい、極めて望ましいというだけのことです。「理想」とは当然こういう意味でも使っているのです。

昔の女学校ではな・ぎ・な・たを正科にしていたそうです。今の中学や高校でも柔道や剣道を女子の必修科目に取り入れたらいいと思います。少くとも痴漢撃退の実益ぐらいはあるでしょう。女優の万里昌代さんは柔道二段ですし、久保菜穂子さんも確か剣道の有段者だったと記憶しています。これからの若い女性達は遠慮などせずにとどしどし「強く」なってもいいと念願しています。

ところで、マゾヒストの理想とする女性が体格的に彼より優れ、且つ強くなければなら

ぬというのは、雨が降るから傘をさすといったような意味での必然的因果関係ではありません。事実そんなことに一向拘わらない人の方が多いでしょう。しかし、私はちがう。マゾヒズムは単に一定の心理的傾向にすぎないとしても、現実には、たとえそれが頭の中の空想でしかなくとも、いわゆるマゾプレイ（いやな言葉ですので、以後「行為」又は「儀式」と呼びます）という現象を伴います。そしてその際、私は女性の側からの「強制」を強く望むのです。

行為や儀式は本質的に擬制です。なれあいといっても、大した違いはないでしょう。私は擬制を嫌う。だから嘘だと分っているても本当だと信じたい、信じるためにその拠り所となるもの——強制——を強く求めるのです。擬制であることから逃れるためには、より強くそれに徹するか、或いは行為や儀式を、そのようなものとして割り切って考えるのも、一つの解決策でしょうが、私にはそれができないのです。そのため、少くとも「大きく強く強く」なければならぬということになるのです。

### 三、行為と儀式

木原宏子さんは、何と素晴しく理想的なアマツオネンであることか！

一六八センチ、六〇キロの大きく重い堂々たる体格は一六三センチ、五四キロの栄二君を完全に凌駕しています。私の実際の観察結果からいうと、身長が五センチも違えば圧倒的な威圧感を与えられるものです。彼女は年の頃二十一、二の「大きな目がきらきらと輝く、きりっとした顔立ちの美人」で、「カモシカのようにすらりとした、しかし丸々と太った四肢」を誇り、「荒っぽい処があつておてんばだが教養もある」健康美溢れる娘さんです。多分どこかの女子大生でしょう。その上いたずらで水泳がうまく、又「強い」のですから弱い栄二君を海の中へ沈めて思うままにいじめ、さんざんに苦しめます。

彼女の名前（姓）とイメージから、私は水泳の木原美知子選手を連想します。日本水泳界最大のホープ木原美知子さんは、宏子さんと身長が等しく体重が七キロほど重い、今年十七才になる高校三年生のお嬢さんです。御覧になった方もあるかと思いますが、先日テレビで「レモンの詩」と題して彼女の横顔を紹介していました。感傷に流れず、現実につきすぎず、たんたんとした散文的手法でう



まく表現されてありました。

レモン——そんな詩がありました。彼女をほうふつとさせるようないい題名です。美知子さんが宏子さんのようなアマツオネンであるかどうかは知りません。だが、そうであってほしいと願うのは、おそらくは何も知らないであろう純真な彼女に対する冒瀆となるでしょう。

宏子さんは栄二「君」といいますが、最近の若い女性の多くは同年輩や年下の男性をそう呼ぶようです。私にはその経験がありませんが、学校時代をふり返ってみても一般にそういう現象はみられなかったと思います。

（「間奏曲」での出来事が三年前のことなら、宏子さんと私の年令は二つほどしか違わない筈ですが）同級の女生徒に対しては男はみな呼びつけだったし、その逆は必ず「さん」づけでした。（大学では女子学生を呼ぶとき「さん」づけでしたが、逆の場合も「さん」だったのです）宏子さんのような勝気で男まざりの女生徒と、いつも彼女に圧倒されているおとなしくて気の弱い男生徒の間でも、このルールは厳密に守られていました。男生徒を「さん」づけで呼ぶのが、どうしてもいやな時でも「君」づけは絶対に許されなかったの

で、その場合にはあだ名でもいうより他はなかったのです。

言葉の使い方は時と場の法則に支配され、又その流れに応じて変わってもいきます。宏子さんのような女性が多くなってきたことは、ある意味で戦後の女性優位の風潮を暗示する象徴ともいえるでしょう。

宏子さんのようなタイプのサディスティンは何故か今まで本誌に登場しなかったようです。数年前、三隅千恵子さんが「女学生を組み敷く」という題名で体験記を発表されたことがありました。（その前にもたしか「変ないたずら」という作品がありました。そのころはまだ本誌を継続的に読んでいなかった。その作品は少し後になって発見したようです）私の知る限りでは、その作品の中にみられる三隅さんの心理が宏子さんのそれに最も近いように思えます。だが残念なことに彼女の対象となる相手は年下の可愛い感じのする「女性」に限られているため、彼女に組み敷かれて征服される女性を、いつも勝手に私自身に置きかえて読んだものでした。三隅さんがどうして男性を相手にしなかったのかは分かりませんが、おそらく、彼女のようなやり方で男を組み敷き征服することは実際上

困難であるし、又その場合には必然的に「なれあい」を伴うから不自然でいやらしいと感じたのではないかと推察されます。もしそうだとすれば、宏子さんは三隅さんの「壁」を打破ったことになります。彼女は「大きく重く強い」という条件を備えており、又そのことを自覚し、自信を持っているからです。だからこそ栄二君を力づくで征服しようとするし、又事実しうるのです。

宏子さんの実力と自信が「行為の強制」となって現われ、私達（作者木原氏と私、以下同じ）を強く興奮させる結果となります。一体、「強制」とは私達にとって、どんな意味をもっているのでしょうか。

多くのS女性とM男性（以下「一般」と呼びます。）の間には、お互いの性質について、事前に認識と了解が成立しているようにみえます。この点では私達も大体同じです。だがその後が全然ちがう。一般の場合には、認識し了解しあった時点で、同時に、両者の役割つまり支配者と服従者の関係が最終的に決定されてしまっているのです。性質の認識は役割についての合意をも意味します。だからその後は「儀式」が行われるにすぎない。「儀式」と「行為」はちがいます。儀式とし



て鞭打たれる男は、別に縛られていなくても抵抗する筈はありません。それは儀式なのですから。

私達はそうではない。合意は全然成立していません。儀式に対立する行為は必ず強制を伴わなければならず、もしそれが不成功に終れば両者の役割も又存在しなくなるのです。

(無論実際にはそんなことは起りません) 要するに私達は行為と儀式を価値の次元で峻別するのです。

宏子さんはこういいます。

「世のマゾヒストのように、わたしを『女王様』に持ち上げたり、御自身のことを、『奴隷』だなどと卑下しないで下さい。……わたしの『おみ足』とやらをペラペラ嘗められたりするとわたし、ぞっと身震いすることでしょう。考えただけでもぞっとするわ」(五八ページ二段目)

榮二君も同じようなことを考えます。

「いったい、最初から無抵抗の状態におかれた大の男がいかにもわざとらしく、しかも貧弱な体躯の女性に組み伏され鞭打たれるということに、果して喜ばしい感情が生れるものなのか。」(六一ページ一段目)

このように私達はわざとらしさということ

を嫌いますから、儀式自体に、それほど価値評価を与えません。一般の人達が儀式に全力を傾注するのに反し、私達は行為の必然性というところにエネルギーの大半を消費するわけで、この点が両者の根本的相異であると私は考えています。

わざとらしさを避けるため、私達は苦心します。「大きく重く強い」ことが、そのための一つの条件であることはいうまでもありませんが、その他にも次のような心の端的心理的諸条件を必要とするのです。

サディスティンは男を強制的に征服することによって優位に立とうと欲しますから、そのため、当然男の側からの反抗を前提とします。宏子さんにとって、自分が征服しようとする男が一般のマゾヒストであっては困るのです。なぜなら彼女は征服それ自体よりも、反抗の鎮圧、抵抗の排除の内により多くの喜びを感じるからです。当然これに対応する心理を榮二君のほうでも持っています。

「マゾヒストと呼ばれる者が、そうした場合にのぞんで、何故逆に相手の女性を支配しようとするのか……(それは)……全力をふりしほった戦いに敗れるということの中にこそ、より深い被虐の感情が生れるものなのだから」(六〇～六一ページ)

「弱い」ことです。

彼はいわば特攻隊の兵士です。敗れるということが分っていても戦わねばならぬ、いや戦うことを望むのです。この屈折した複雑な心理は、何もSMの世界だけに見られるものではなく、それだけにより深い緻密な分析を必要とするのですが、もとより私にその能力はありません。ともかく以上が第一点です。

次に必要なことは、相手の男が彼女よりも「弱い」ことです。

「わたしが勝つと分っていれば、わたしは喜びを感じません。……あなたが抵抗すれば、私の加虐欲は倍加されるのです。」(五九ページ一段目) 宏子さんはこういいますが必ずしも正確な表現ではなく、彼女の真意は「あまりにも簡単に勝つことには……」ということなのです。碁や将棋でも相手が弱すぎると勝った気がしません。つまり榮二君の強さは宏子さんに極めて接近していることが望ましいが、それを超えてはならない、という意味なのです。両者の強さは別に不変であることを要しません。かりにサディスティンの強さを1という大ききで表わしますと、マゾヒストのそれは $\frac{1}{n}$  (n…四捨五入)で示されます。マゾヒストの強さは、 $\frac{1}{n}$ にどんな大きい有限の数



を与えても、限りなく1に近づくが、1に等しくなったり、1を超えたりすることは絶対にはないのです。

激しい格闘の末、遂に力つきてしまった栄二君に、アマゾンの女王の相手の資格がないといってからかう宏子さんは、そんなことははじめから分っているのだろーという栄二君の反問に対して、そんなことは問題じゃないわ、と答えます。(六二ページ三段目)

どうして「問題ではない」のでしょうか。一見焦点をそらし逃げを打ったように見える彼女の答は、実は極めて重要な意味を持っているようです。私の考えでは、この瞬間に両人は心理面での行為と儀式とのぎりぎりの分岐点に立っており、一步誤れば、最も嫌う儀

## 挿絵画家 募集!

○本誌の挿絵をより充実させるため、読者の方々の中から腕に自信のある方の応募を求めます。

○自作画をお送り下さい。個性的な本誌向きのカット、挿絵、口絵を求めます。

○佳作は漸次誌上に発表の上、反響の如何により逐次御依頼いたします。

式の泥沼へ落ちこんでしまうのです。

「問題ではない」というのは、文字通り「勝つか負けるか予め分っていたのか」とか「もし私が負けていたら、私はあなたに服従する」とかいう意味でしょうか。絶体にそんなことではありません。

「今日は簡単に勝ちすぎたので物足りない。あなたはもっと強くなってほしい。けれどもなんに強くなったところで私はあなたに負けない自信がある」宏子さんはこう言ったのです。いずれにせよ自分の方が強いことを、彼女ははじめから計算の内に入れているわけです。もし栄二君がプロレスラーのような体格をしていたら、宏子さんは彼を選ぶ筈はなかったでしょう。

第三の要件は、栄二君が「マゾヒスト」であることです。このことは、第一の点から考えると、逆説のように思えますが、決してそうではありません。

よく、SM傾向を持つ夫が、何も知らない妻をそのように誘導し訓練していくというようなことを本誌でみかけることがあります。そんなことが本当にできるものでしょうか。結婚していない私に大きな口はきけません。が、非常に疑わしいと思うのです。もし訓練

によってそれが可能となったとしても、その場合彼女(彼)には本来そういう素質があったからだと思えるのが正しいと思います。無から有は生じない。金が入っていない引出しを何回開けたところで金は出てきません。

SM傾向を持つ人がある程度の感受性を備えていれば、同傾向の他人(特に異性)の言動から、その性質をかなり正確に嗅ぎ当てることができると思います。正常な人達はこの点で色盲なのですが、この人達はそうではなく、たとえば、一般には見分けることができないほど精巧に偽造されたニセ札を、熟練した銀行員が指先の感触だけで識別しうるようなことが、大体に於て可能なのです。もし彼が鈍くて相手の選択を誤ると、先の会社重役氏のようなことになるでしょう。

行為(儀式)は双方に満足を与えてこそ、価値あるものといえるので、相手の苦痛の上に自己の快楽を求めるのであれば、それは人間性を無視したエゴイズム以外の何物でもありません。自分の志向が相手と一致し、相手の同意が自己の満足となって再現されてこそ、我々はSM世界の正当性を、主張しうるのです。

宏子さんは栄二君に始めて会ったその日か



ら彼を征服しようとしたものではありません。彼の言動を慎重に観察し、その性質を見抜いた上、大丈夫という判断と確信に基いて彼を誘導していったのです。

私達はなれあいを嫌い擬制から逃れようとするといいましたが、以上の三要件（特に第三点）に明らかなように、所詮それは不可能であることを認めます。世界の果てまで飛んできたと思った孫悟空がその標識だと考えた五本の柱は、何のことはない、御釈迦様の手の指だったのです。行為や儀式などと大げさなことをいっても、それほど相違はないではないか！

事物の差異はすべて相対的なものにすぎないと主張する人は、確かにその限りでは正しいのですが、ただここで重要なことは、最終的になれあいや擬制から脱しきれなかったということではなく、できるかぎりそう努力したということ、そしてかなりの程度でそれに成功したということなのです。五十歩で百歩を笑うことはできませんが、努力して五十歩を二歩や三歩にまでもつてくれれば、まず笑うことも許されようと思います。

要するに、一般の場合には与件としての支配と服従の関係の下で儀式が行われるのに対

し、私達は支配と服従の関係自体を行為によって証明するのです。一般の場合は儀式がすべてですが、私達にはその儀式に相当するものがほとんどなく、又それほど大した意味も持ちません。そしてこのことが、別の角度から見る時、重要な意義を生じることとなりますが、それは組み敷くという行為自体の性質に含まれているのです。

#### 四、組み敷くということ

書物や雑誌、映画などで女性が男性を支配するような場面は、時々見受けることがありますが、それは主として心理的・間接的關係に限定されることが多く、直接膝下に組み敷くという生の形で表現されることは、ほとんどありません。だからそれに類似した場面では、その行為を設定し投影することが多いのです。

だれの思いも同じといいますが、木原氏もニーベルングンのグンテル王と王妃ブルンヒルトの初夜にそれを読みとります。幼いころ父の買ってくれた「ニーベルングンの歌」は子供向きに分りやすく散文形式に要約してありましたが、あの場面は、よく理解できないながら強くひきつけられたことをはっきりと

覚えています。組み敷くという明瞭は表現はなくても、当然そう理解すべき所です。

アラビアン・ナイト（千夜一夜物語）にははっきり組み敷くという場面が、私の知るかぎり二カ所あります。一つはオーマール王の話の中で（第四七夜・バートン版）、もう一つはアジーズとアジーサーの話の所で（第一二三夜）みられます。特に前者では、武力に秀でた若い王子シャルカーが、男まさりのアブリザー姫と組打をしてさんざんに打負かされて、胸の上にお尻をどっしりと据えられて馬乗りになり組み敷かれるという素晴らしい描写がみられます。

その他アラビアン・ナイトには数々の美しい物語が全編に亘って夜空の星のようににちりばめられています。美しいアマゾンと美少年の恋をテーマとした「若者ヌウルと勇しいフランク王女の物語」は、私の最も愛好する物語であり、汲めど尽せぬ空想の源泉となつています。

ところで女性が男性を組み敷いているような絵画や写真も滅多にみつきりません。私のアルバムには、何人かの乗馬姿の女優の写真に混って椅子に馬乗りのポーズで跨がり坐っているマイ・ブリットを上向きの角度で真正



面からとった写真が貼りつけてあります。そしてその椅子を、彼女によって組み敷かれた私自身に置換するのです。

女性の膝下に組み敷かれるということに、どうして、そんなに憧れるのか、自分でもよく分りませんが、私は一応次のように考えています。

「わたしのような型のサディスティンって、この前のようにあなたと対等の立場で斗ってわたしの体全体でああなたの全身を支配したいのよ。」(五八ページ三段目)

組み敷くということは、体全体を使って相手を物理的に圧倒する場合の最も自然な姿勢だといえます。第一にそれは「上になる」ということであり、第二には、体重を利用して、つまり臀部と脚と膝を使って相手を無抵抗の状態に置くことを意味します。第一は心理的快感を生じ、又第二は物理的実効性を有するといえます。

「上古ノ時、神ト言ヒシハ人ナリ」

江戸時代の大学者新井白石は、神は上にいるものだからカミというのだと考えました。彼の説は、後に上代音韻の研究によって、その誤りであることが証明されましたが、我々の周囲を眺めれば、一般に「上」という言葉

が広く優位にあるという意味で使用されていることが容易に理解されます。

組み敷くといっても、実は「うつぶせ」と「あおむけ」の二つがあります。物理的效果の面ではそう変らないでしょうが、心理的には大きな差異が認められます。「あおむけ」の場合には、人格の象徴である顔を、一方は見下し他方は見上げるという角度でお互いに見合うことになります。背の高い女性を眺める時の心理は、実はこのようにあおむけに組み敷かれた状態で見上げることに対応すると思われれます。その上、組み敷かれた男は自分の上に悠々と馬乗りに跨がっている女性の勇しい姿を、いやでも、はっきりと見せつけられるのです。このことが両者の征服感と屈辱感を強めます。だから単に組み敷くといった場合でも、原則として「あおむけ」を意味するといってもいいでしょう。

組み敷かれた男は、何とかその状態を逃れようとあばれ、もがきますが、もとより無駄な抵抗にすぎません。彼女は、「重く強い」のですから、このように女性が「大きく重く強い」ということは、「あおむけに組み敷く」という具体的行為と、完全に対応してくるのです。

組み敷くことのもう一つの特徴として、体と体、皮膚と皮膚との接触が指摘されます。

そしてこの皮膚と皮膚との接触は、跨がるという特異な姿勢を伴うことによって、明らかに或る強いエロティックな連想へと導きます。つまり騎乗位と呼ばれる女上位のスタイルを想像するのです。女性の乗馬姿に魅力を感じるのは何もマゾヒストに限ったことではないので、正常な男達は馬に跨がる女性のポーズ自体から、性的連想を連しくするわけです。一般に行為や儀式とセックスとの関係については、私はほぼ次のように考えています。

セックスをA、行為及儀式をBとすると、AとBの関係は心理的同一平面上における二つの円A及Bの関係を意味し、且つAの半径の方が大きいのだ、と。BがAに内包されている状態を「正常」と定義します。Bがどのような動いてもAの内部に含まれているかぎり、外からはAだけしか見えません。Bの存在は意識の表面に浮ばないのです。多くの人はこの状態に該当するでしょう。

BがAに内接する時、はじめてBが意識されます。そして次にBがAからはみ出して二円が二点で交わる時、現実のサディスト(サディスティン)とマゾヒスト(マゾヒスティ



ン)が出現するのです。A・B共通部分の面積の大小が行為及儀式の微温性・強烈性に対応します。いずれにしてもこの場合には、たとえばサディスティンはマゾヒストとの間に性的結合を有することになります。BがAから完全に分離して共通部分を持たなくなると、存在理由を失ったAは、同時に消滅します。Aのリビドーは異質化されてBに移転され完全に昇華されてしまったからです。

女性の排泄物にのみ興味を持ちそれを愛好するマゾヒストは多分この状態にあるのでしよう。たとえ彼が相手のサディスティンと性的関係を有するとしても、その時彼は別の人間ハイド氏になっているわけで、現実の必要に応じてジキエル博士と役割を分担し、両者を演じ分けているにすぎません。

組み敷くということは、明らかにAとBが大きな共通部分を持っている関係なのです。だから連想も容易に浮ぶし、その上実際には性的結合を生じにくい場合にも、強引にこじつけてそれを成立させようと努力します。

ブルゴンド国のグンテル王は、勇ましく美しいイースランドの女王プリンヒルトを妻とするために、卑怯な方法で勇士ジークフリートの助けを借りました。これで大丈夫と安心

していたのに、初夜の床で見事に化けの皮を剥がされてしまったグンテルが、彼女を自分の意に従わせるためには、赤恥をさらして、もう一度ジークフリートに頼まねばなりません。何と情けない男であることよ!

ところでもし二回目のカンニングの時、ジークフリートがいなかったと仮定すればどうなるでしょう。毎夜その度毎に組み敷かれ縛り上げられたうえ、カチカチ山の狸のように吊り下げられていたのでしょうか。そうかも知れませんが、それではあまりにも気の毒です。勇しいブルンヒルトもいつかは根負けして、弱いくせに諦めの悪い男に同情するだろうと思います。夫としての実際上の地位を与える代り、彼を自分の臣下の身分とし、自分がブルゴンド国の女王となって統治すればいいのです。もともとグンテルには王たる資格や素質がないのですから、そうされたところで当然だともいえるのです。

組み敷くということは支配と服従の関係、女性の男性に対する優位性を意味することは勿論ですが、私はその行為の性質上、お互いの人格を認めあい、人間性を尊重しようとする両者の意思をそこに設定します。「対等の立場で斗って……」という宏子さんの言葉

は同時に人間としても対等ということではなればならないと思います。行為―組み敷き―の前後を通じて両者が、対等の人間であることには何の変りもありません。より正確にいうと行為の時点では一時的に、たとえば主人―家来・召使のような関係にあるのですが、少くともそこでは人間としての対等の関係が保有されねばならず、又行為の前後ではいかなる意味でも同等の資格が要求され、まして主人―奴隷・家畜・「物」であってはならないということなのです。女性が男性を征服したという事実は、何の関係もない別の次元の問題なのです。アキレスに対するペンテズレーアの恋は、このようなものでした。相手を差別する心理からは、本来「恋」などというものが成立する筈はありません。

円Aと対立する円Bは必ずしもBに限りません。宗教Cや芸術Dなどという円も存在します。普通の状態ではCやDもBと同じく円Aに内包されており、それらの円がAから分離していく段階では、求心力と遠心力ともいうべき相対立する力が常に働いているように思われます。

円Aより円B・C・Dなどが離れていく全過程を、私は「人間性喪失行程」と定義し



す。人間性を放棄し、心と心との温い触れあいを失ってしまうことは私には耐えられないのです。この意味での人間性の喪失が、たとえば宗教のように、かえってより崇高なものへと深められ、高められるという逆説を生ずるかも知れません。その時には人間性の喪失

は同時に人間性の回復でもあるのです。だがこれは恐ろしい両刃の剣です。宗教の名に於ていかに多くの人間の血が流されたことか。歴史は、人間が人間に対していかに残酷な行為をなしているかを、多くの実例によって如実に教えてくれますが、いわゆるサディステ

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です  
毎月確実に二十五日発売!

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一月一冊三〇〇円、三ヶ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何月号分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。

は、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

インも枚挙にいとまがありません。中でも、前漢の呂太后は、その残忍性に於いておそらく筆頭に置かれるべき女性です。彼女は夫高祖の死後その愛人戚夫人を幽閉して、その手足を切り落とし、鼻をそぎ、目をくりぬき、唾にさせてから厠坑に押し込んで、人間豚と名付けたのです。私が献帝であれば、即座に自分の母親呂太后を殺したに違いありません。今世紀ではナチスの人種的偏見によるユダヤ人への集団的迫害が最大のものではしょう。呂太后に対して感ずる私の憎しみと反感は、榮二君が宏子さんに抱いたそれと本質的に異なったものなのです。ナチスや呂太后はもとより極端な例であるとしても、そこに見られる非人間性が、たとえ薄められた形であっても基本的に同じ性格を持ってSMの世界に見出される時、私はどうしても嫌悪の情を覚えずにはいられません。敬慕する従姉と結婚した有名な外国の小説家は、彼女に対する異常なまでの崇拜の念から、生涯事実上の夫婦関係を持ちませんでした。

私はそこに残酷なものを感じ、怒りを覚えます。彼のエゴイズムは、従姉を勝手に「人間」から「神」の座へ押し上げてしまったのです。



怒りに駆れた殺人は、ある程度人間的といえますが、金銭目当ての殺人は非人間的です。人間的だからといって正当だというわけでないことは勿論ですが、たとえば女性の入浴姿を覗き見したいという感情には、それを実行して不運にも捕まれば犯罪として処罰されるにせよ、極めて人間的なものが感じられます。これに反し自分の全裸の体を赤の他人に見られても平気な女性は、精神異常者やそれを職業としてやっている人を除いて、非人間的感情の持主といえるでしょう。

古代ローマ帝国の貴婦人や前世紀までのアメリカ南部の白人女性達は、自分の排泄行為を奴隷達に始末させて平然としていました。彼女達は奴隷を人間だと認めていなかったのです。

あなたの便器にして下さいというマゾヒスト(?)の心理は全く不可解です。女性のUrineやCopro(?)がどうしてそれほど美味なのでしょう。そばはうまいから好きなのだ。成程そのとうりですが、この人達が美味だと思ふのは約束(自分自身との)なのです。もし、女性のものだと思っていたところ後になって自分のものだったことが判明したような場合には、一体どうということになる

のでしょうか。

人間の文化は排泄物を汚いもの醜なるものと規定し、我々はそう約束しています。この人達は我々の約束を自分流に翻訳し、一般の約束を無視し破るのですが、破ることはその実守ることでもあるのです。なぜならそれを好むのはそれが汚いからであって、言いかけると、文化がそう規定せず、正常な男達がみな女性のそれを愛好するのであれば、彼等は自己の存立の基盤を根底から失うことになるからです。自己をただ卑しめることによってのみ快感を得ようとする汚物愛好者は、いわゆるSMの世界で最も非人間的なものだと私は考えます。

曾て本誌に連載された「家畜人ヤプー」はスケールの雄大な観念小説ですが、女性の尿と白人女性への狂崇を基本テーマとしている点及び全篇に流れる人間蔑視、人間物化思想にとうてい同調できず好きになれません。私は女性の排泄物には全く興味がありませんし、白色人種優越論は歴史的にも人類学的にも何の根拠もない明白な虚偽です。作品自体の価値は非常に高いものと思いますが、こういう小説が私のいう非人間的なものの一つの典型といえるのです。

羞恥心を少しも持たないサディスティンに魅力は感じられません。アマゾンは一つだけであっても乳房を持つ「女性」であるからこそアマゾンなのです。サディスティンに対して、男を圧倒しうる体力と支配したいという意思以外は、すべての女性的なるものを具備して下さいと望むのは、あまりにも虫がよすぎることでしょうか。

## 五、蛇 足

木原栄二さん、あなたは どうして宏子さんから離れてしまったのですか。あなたも言うておられるように、彼女のような理想的アマッオネンは滅多にいるものではないと思います。孤独で侘びしいなどと言っていないで、宏子さんの胸に飛びこんでいてはいけないのでしょうか。住所などを調べることは極めて容易な筈です。あまりに大きな幸福はその実現に逡巡を伴うのか、又何か別の事情でもあるのか、それともあの幻想的で甘美な体験はフィクションだったのでしょうか。

こんな下らないことをいうのが、野暮の骨頂であることぐらいは私にも分っています。ですが卑しくさましい私の性質が、そうさせるのです。気を悪くされたら、どうか許して



下さい。

私は宏子さんのような理想の女性を過去に見出したことがあります。そのような経験もないのです。私こそさびしい、あなたには少くとも思い出があるが、私にはそれもないのです。本誌を読む女性の中に、宏子さんのような方が一人でもおられたら、それだけでどんなに嬉しく感じることでしょうか。

つまらないことばかり、書いてしまいました。そんな人間だからでしょう。だが私は書かずにはいらなかったのです。

おそらく私は、自分でそう思っているだけで、いわゆるマゾヒストではないのかも知れません。夏の間に自分の唄を楽しめば、冬には凍え死んでもいい、と宏子さんはいいます。が、少くとも私は、この世界に人生にとって唯一最大の価値を認めることはできません。この社会には貧や病に苦しむ人が多くいますし、私利私慾のために公金を浪費して恥じない官吏や公吏もいます。公害は人を殺し又無辜の人間を殺すことに正義の実現をみる思想が正当化されます。これが理想のありう

べき社会だとは思えないのです。

今、夜中の四時です。少し明るくなったように思います。私の下宿の隣の部屋の人は、私が勉強しているものと信じ込んでぐうぐう寝ています。ここまで書いて私は、もう一度どうすれば理想の女性にめぐり合えるのだろうと思ひ、考え、諦めて悲しくなりました。時の流れはあまりに早く、人生はただ一度しかありません。

— 完 —

## 「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

A 1	フミツケ汚辱縛り	(新井)
A 2	手吊り乳房責め	(五月)
A 3	ハリツケ猿ぐつわ	(新井)
A 4	全裸正面柱しばり	(遠藤)

一組一枚	一五〇〇円
五組五枚	五〇〇〇円
十組十枚	九〇〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇〇円
四十組四十枚	三〇〇〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇〇円

A 5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)
A 6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A 7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A 8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A 9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A 10	全裸後手高小手	(遠藤)
A 11	膨隆臀部さらし	(長野)
A 12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A 13	うねる緊縛裸身	(長野)
A 14	色褪の開股しばり	(長野)
A 15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A 16	裸自慢縛りヌード	(長野)

A 17	正面アグラしばり	(長野)
A 18	正面大の字開股縛	(長野)
A 19	遅ましき裸しばり	(長野)
A 20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A 21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A 22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A 23	両手膝下しばり	(関谷)
A 24	瘡れんする裸身像	(関谷)
A 25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A 26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A 27	乳房晒し肉体自慢	(長野)
A 28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A 29	投げ出した全裸縛	(長野)
A 30	捕われの全裸緊縛	(梨花)
A 31	羞らいの両股縛り	(大塚)
A 32	猿轡乳房いたぶり	(遠藤)
A 33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)

A 34	盛り上る乳房縄目	(長野)
A 35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A 36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A 37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A 38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A 39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A 40	くさり乳房責め	(長野)
A 41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A 42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A 43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A 44	手吊りパンティ落	(絹川)
A 45	白バンド後手吊り	(東浦)
A 46	豆絞り高小手呻	(絹川)
A 47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A 48	ガンジガラメ立縛	(愛川)
A 49	亀甲本縄股間縛り	(絹川)
A 50	立木縛竹棒責め	(桜井)



# 「切腹供養」予行演習

## 宗 方 一 子

一子と一子（かずし）が身をと리카えてから十六年、それから私の体内には男女二人の一子が入り混んだ。（本誌七月号参照）

人の誤ちでぐう然にも戸籍簿は、この私を戦死とし、私の骨箱（中は空なのだが）を抱いて自決した一子は生きていることになっている。そしてその日から十六年、早い話がこの八月十五日は実際の十七回忌である。だがこれはどうしたものか、と考えた結果次の計画ができ、その予行演習を二カ月早い六月十五日にやることができた。わが体内に生き、また私の体内を墓としたわが愛妻一子は、どう思っているだろうか、これを思いたったのは実は六月十日の夜であった。その一子が夢に現れて、その幸福感に泣いて私に感謝していることから出たことである。このことにつ

いては義姉荒川夫人も喜んで賛成してくれたのだった。

八月十五日に行う本番も、実際には本番ではないのだ。只その十七回忌にもあたるべき日の供養行事を念入りに行うためのものである。義姉との結論では十六年後の八月十五日つまり一子逝きて三十三回忌の八月十五日こそ、われら二人の只一回の本番ときめていることである。そうすれば義姉の夫つまり義兄の荒川大尉の三十三回供養も、終るからである。この本番が本当に意義あるもの、そして私達二人の只一回の最終のものとして、聖く心に入れて、それまでは、たのしく生きようということである。

予行演習といっても、最後の夜宴は省略した。只その日は姉も店を早く閉じて、二人で

たのしんだままである。

思い切り念入りに、しかも全身化粧をし、香水までつけて香をただよわす二人、私はもう男ではなかった。このことは本誌にも報告してあるが、とにかくみずみずしく、そして若く（十五才は若がえる）美しい日本女性になっていた。

今更こんなことを言う必要もないのだが、毎日女装し、すっかり女になり切っている私であり乍ら、特に美しい一夜でもあった。

幾分赤い模様がはいった白まがいのお召しを着てピンクがかった名古屋帯をしめた私、肌にはもちろん肌着とお腰をつけただけ、それに夏とはいえ、白足袋という姿、髪は今はやりの洋髪のカツラ、首には真珠のネックレスがチラホラのぞいている。姉も同じの着物で、又すべてが同じだった。

そして二人とも三疊の地下室へ降りていった。静かに無言のまま、入口の扉がしまった。もちろん鍵もかけた。そしてその鍵を扉の上の棚まがいのところにはさんだら、力余ってか、外側に落ちてしまった。シマッタと思ったがあとのまつりである。二人共々の密室にとじこめられたようなものである。どうにかなるだろう。二人とも顔を見合わせるよ



り外なかった。あるいは心の中でこうなることをひそかに望んだかもしれない。何んとなれば、外界からはなれた二人の世界を期待する心があったからだろう。他人に見られず心静かに自分の肉体を自分で自由にするのである。心ゆくまで料理したいからだ。いずれ十六年後は本当にこうなるう。どうせ世にたよるべき人としてない孤独の私達である。

三畳間にはいると、先にすべて準備されたとおりになっていた。入口の重い扉をビシリッと閉めると、自動鎖錠である。鍵がなければ開かない仕組なのだった。もちろんこの時は鍵は姉が持っていた。十六年後の最終日における大事決行のときは、そんな鍵は持ち込む必要がなからう。姉もはつきりと言いつ切っている。内部は、つい立をもって二つに仕切っている。そのつい立は名古屋のある業者に注文してつくらせた両面鏡入りの大きなものである。その他の壁はコンクリートではあるが、いずれも鏡はめ込みなことは、先に本誌で報告したとおりである。内部照明はもちろんだら灯であるが、単に片側一畳半の部屋が鏡の為に広い感じを与えている。周囲には芳香を放つ草花がいっぱい飾られ、それが鏡に写ってかもし出す大舞台、私は奥の側に

はいった。

この部屋では、いかに大声をあげても外には絶対に聞こえる筈がない。特製の換気扇は音もなく廻っている。この小部屋の中央は、畳の上に十厘の厚さのマットレスが敷かれ、その上に白ビニール、そして高級座イスが置いてある。そして正面には白木の三方に白さやの短刀がのせてある。この短刀は実は最近入手したもので、新刀であるが美術的価値ありとして、そのすじに届け出て、許可されたもので、銘は関の字がはいっている刃渡り九寸五分である。思いがけなくも二振り入手したが一振りは姉が使っている筈である。

誰に気がねすることのない自分のこの席、しばらく鏡の自分に見とれていた。肉体的に女性の仲間入りして六年、そして今日の念入りの化粧、われ乍らははれはれる美しくさ、悲愴感も加ってか、特に美しく感ずる。やがて、この女性が自らをさいなむであろう。この清く美しい姿、まわりの花の如き姿、私は暫く立ちつくしていた。

気がついてみると、午後十時十分である。

姉の方はどうしていただであらう。明朝までは口を聞かないこと、のぞかないこと、どんなことがあっても手を出してはならないという

固い固い約束がかわされているから、聞くわけにいかない。只絹ずれの音らしいものが時折り聞こえる程度である。

私は恥かし乍ら長く正座して居れない。そこで考えたのが、座イスの脚を立てることである。そうすると二十センチばかり下があくので、その下に足を入れることとした。緒で両足をしばって立てひざのようにして入れ、イスにしっかりとしばりつけた。そういうようにして座ると、尻のところに座ぶとんを重ねると姿勢が正しい感じがしてすわってみた。

ひざの前には一応の救急具も置いてある。又薬品もあった。これ皆数日前からの準備である。そして一子（かずし）の骨箱も置いてある。中には私から抽出した六年前の睪丸が二個アルコール漬にしてはいっている筈だ。又位碑もあれば、遺書の道具も揃っていた。

姉との約束は十二時というだけである。やがて香炉がたかれた。ゆらゆらと上る香煙、時刻は十一時を過ぎていたのだ。はやる心をおさえ、ややもすると「ブルブル」とする膝を静止して、沈思黙考である。ああ、この密室、自分の肉体、否鏡の美人の最期を見ることができると思うと、その悲愴感にワクワクするのであった。



顔やくびの化粧なおしを行い、考えていくうちに横の鏡に私の襟足が美しく写った。

ああ、美しい。最終本番には最後のとどめをさすため、あるいはこの美しいくびすじにグサリとさすかもしれない。又あるいは姉が介錯人となってひと思いにスパッと切り落してくるかもしれないなど、世のわずらわしさからはなれての悲愴感に、次から次と思いは浮ぶのだった。

時計は十一時三十分をさしていた。筆をとって巻き紙に

うつしみて

清き姿は 心まで

花くれないに

さいて示さむ

一子

と即歌を記した。

ときどきする心をおさえつつやる、わが動



作。このまま本当に一子のところに行きたいと思う程であった。

やがて十一時五十分になった。十二時になれば、オルゴール時計が姉と私に時を知らすべく「螢の光」を奏するのである。私はすわったまま帯を解いた。女の着物というものは帯の外に意外にヒモでしめられているものがある。全部で六本あった。帯まで七本ということである。腰巻もといて前を全部開いた。すると象牙色の私の肉体が鏡に写っている。

未熟乍らも、よくこれまでに思ったと思われる胸の二つの隆起、そして真珠のネックレス。くびから、ずっと見ていくと、体毛も全然ない高級人形のような姿、「ああ、美しい」とわれ乍ら嘆息するばかり。この美しい美術品を切りさいなむ私の気持、誰が知るであろう。私は一本のヒモをヘソの少し上のところで胴を二重巻きにして、キリッと座イスにしばりつけた。私の腹はひょうたんのようになつて波うっている。否波うっているのは腹部ばかりではない。ドキドキする全身なのである。少しは苦しい圧ばく感があったが――。

私は実行時刻までの残す二分間を、全部電灯を消して、目をつむった。心を落ちつけようとする心算からと、どういふように切るかという最後の心への呼びかけとからであった。その切り方を確定しないで今まで来たのは、横一文字か、縦一文字か又十文字かというところで結論を出すためであった。姉はどう考えているかわからない。しかし今までは一子の一をとって横一文字にしていたが、今日は予行でもあるし、縦もやってみようという頭がもちあがっていたためでもあった。

オルゴールが鳴り出した。隣でも帯を解く



音がする。私は電灯をつけ、特にスポットを下腹部に向けて、改めて香を足し、そして睡眠薬を飲んだ。これは痛さから逃れるのでなく切ったあとを、そのままにして朝まで置くためのものであった。

私はふるえる手をのべて短刀をとって、さやをはらった。カミソリのようによく切れる刃なみ、それは昼のうちに確めておいたのである。右手に刀を持ち左手ではその丸くふくれた腹部を撫でまわしていた。三回なでるのだと誰やらに聞かされてそのようにやった。

フト隣の姉が、「ウーン」といううめき声をあげた。私は声をかけるなという約束を思い出し、心の中で「やったナ」と思い、よし自分もと思って、前にしるし（十文字にそれぞれ十五纏の間を置いて、口べにでしるしをつけていた）をつけてあった、真上のところに、刃を上に向けて擬した。そして柄を上下に動かし乍ら静かに押し込むと最初チカチカッ、とした痛みがあつて、身体全体がまるで電流でも通じたかのようにジーンと感じ、心臓のドキドキ、膝のブルブルが波うつようである。

一纏の深さに入ると、ひといき入れて、徐々に上へ上へと押し上げた。さすがに切れる

刀である。心なしかゾリゾリという感じ、スーッとするような痛さ、五纏ばかり切ると血管を切ったろうか、飛び出すような出血、太ももをそれがダラダラと流れていく、もう私は夢中であつた。十纏ばかり切ったときよくみると、傷口には白い脂ぼうがはつきりと見える。痛さは大部高まって来ている。ヘソに近くなった。アッ、又強力な出血、二十纏くらい先に飛んでいく、もうひざの上も、白い腰巻も、又先程の遺書までも血がはね、私の手はすっかり血に染ってしまっている。あと一纏というときに、ヘソにそのまま入れるのはむづかしいものである。左手で腹部をおさえて、遂に目ざすヘソまで切り終った。

刀をぬくと少くはなつて来たが出血はしている。刀をそのまま三方にもどし、暫く鏡の彼女を見ていたが、切り終えた安堵感から、急にねむくなり、近くにあったナイロンの大風呂敷を掛け、その上に毛布をかけて、座イスのもたれを倒し、そのままおむけに深い眠りについたのだった。どうせ二カ月もすればこの傷はなおり、そうすれば又できると思ふ気持、聞く人は変態というであろうが、それはどうでもよいのだ。

ちょうど度十時に眼が覚めて起き上ると、姉

がはいって来た。青ざめた幾分上気した顔は微笑していたが、下腹部は横一文字にしかも約三十纏切っていた。深さは五ミリ余だったとか、それでも左右の腰骨のところは少し力を入れたので一纏余にはなつたろうと、筋肉まで入ったらしく、大分痛かった由で、ヘソの附近から足にかけて、血だらけであつた。このはじめての密室での切腹、痛さを忘れて二人は抱き合つた。誰にはばかろう、私共は姉妹の二人なのだ。

それから二人はお互いに傷口を消毒し縫合し合つた。しろう人ではあるが、消毒は医者にまけない程立派にやつた。そしてそのまま身を正式に休め、その密室を出てくるときは、最初の入口は細い鉄の先をもってやつとあけて出ることが出来たが、もう夕方になつていた。

八月十五日にもやってみるが、どの程度にやるか、しかし十六年後の最終本番は、この要領ではらわたまで出す考えで、姉も大賛成している。その時は救急用具も、又この世に出てくる為の扉の鍵もいらぬであろう。

(おわり)



## 私流アブ的解釈

## 「地獄」メ・モ

久 我 庄 一

△私は、お前の導者となつて、お前を案内しながら、あの不朽の地たる地獄を廻ろう。▽

——ダンテの「神曲」地獄界より——

## 「序曲」地獄界限

作家の水上勉の人氣（創作的秘密）は、その小説に子守唄がきこえてくるからだと言われている。それは、仏説が読み込んであるからで、例えば彼の最新作『坊の岬物語』（『小説現代六月号』）を見ると、地獄には血の池・針の山・三途の川・サイの河原といったような恐ろしい所があつて、死んでからその責苦にあわねばならない。菩提寺である西安寺の本堂の内陣に、そのような地獄極楽の絵が描

かれていたと一節があるように、因果応報的な思想が折り込まれ、それらが独特の旋律をともなつてにじみ出ているからでもあるのか。「地獄」という表現は、なにか、ものかない、またはおそろしいものを、のぞきみたいという感をいだかせる。それは、あの秋祭りなどの夜、アセチレンガスの香りを背景に毒々しい泥絵看板による「地獄極楽」の見世物への郷愁でもあるようだ。

「新辞泉」などの辞引で「地獄」の項の解説をよむと、仏教で罪惡あるものが死後におちて苦しみを受けるところ▽となっている。

◇筆者註・『往生要集』は仏教的な色彩をもつ東洋の古典で、地獄に関する一大文獻。平凡社の東洋文庫として、全二巻現在発刊中

成程、地獄という言葉は、元來は仏教的な専売特許？用語で（特に私たち日本の葬式仏教的な精神風土にあつては）どなたも一つや二つ、これに関する予備知識はあると思う。現代にあつては、もう、だれも地獄の世界を、宗教的（信仰的）な意味で受け取るよりは、むしろ思想的・文学的、神学的な方便として使用する位になつてしまつたようだが——、それにしても、この地獄という音感からよみ取れるものは、アブノーマルなスリルをもたらせてくれることは、たしかだ。早速、本誌に例を取ろう。

まず、昭和三十六年一月増大号で、伊藤晴雨画伯の、その晴雨画稿の題が「地獄宿」であり、同号に、懸賞応募作品、花巻京太郎氏



の題が「柔肌地獄」となっており、「ある無惨画絵師の生涯」と副題ある「火あぶり女房」緑猛比古氏も、その文中に「この世のものとも思われぬ地獄図を」と、表現している。その他（同号掲載の）「本誌最近号主要目次」によると昭和三十三年二月号に「探偵小説に現われた地獄絵巻」高崎勉となっており、昭和三十三年八月号にも「女殺油地獄」

南方純など。

全盛時代と評せられる、昭和三十年新年特大号にも、口絵として「地獄変相図」、杉原虹児画「針之山・火末虫」などが見られ、最近号（六月号）でも、夜乃探郎の文中に「パピルスは、その小説『地獄』で」と、「のぞき趣味に哲学的な思想まで付け加えた」地獄題名の書物の紹介をしているなど、ETC。

——とにかく、

「地獄」と人間との関係は、例え、

空に月ロケットが飛び、地に新幹線「ひかり号」が疾走する世の中になっても、なかなか消えそうもないようだ。

一般社会にあってもそうであるがこれがSMマニヤの世界にあってはより残酷美をこれからも提供してくれることだろう。

そんな意味で、私流解釈による新しい「地獄発見」も、興味のある問題ではなからうか。以下、メモ程度に地獄についてのあれこれを記し考えてみようと思うのである。

## 「第一楽章」 タブウ

地獄に関する世界的な書物としては、文学作品にダンテの「神曲」地獄篇があるが、（これは翻訳出版されたものは単行本、文庫本版と数多い。手軽に購入出来るものとして岩波文庫、ダンテ「神曲」・山川而三郎訳を上げておく。）

ミルトンの「失楽園」にも、地獄の魔王たるサタンの活躍が描写されている。近代の偉大と悲惨とを一身に体现した作家といわれるストリンドベリイは、惨憺たる記録「地獄」（昭和二十七年版、山室静訳、河出書房刊世界文学全集にある）を残しており、宗教的な異色あるものとしては、狂人か、超一流神学者か？と不思議な人物として、二百数十年たっても、いまだに、そのナゾがとけないスエーデンボルグ（一六八八—一七七二）が、特殊な霊的経験（天界と地獄見学とも言ふべきもの）をもとに著述した「天界と地獄」東京都多摩郡小平町大沼田一三六「新教





恵心僧都著「往生要集」上「地獄物語」より



品として、評判をよんだことがあ

る。私は、五月のある夜、「タブウ」という長篇記録映画（多分、イタリア物？だったか）を見ている内にふうーっと、……タブウ……地獄……SMマニヤ……という文字が頭に浮んだのである。

私は、この一つの刺激によってきたま連想させら

る。会、鳥田四郎訳、昭和三十五年版がある。ぐうーっと、ゴラク的なところで、黒沢明の「天国と地獄」という映画は、読者の記憶にも新しいところだろうが（よく、富者と貧者の世界を区別するのに昔から使われている表現でもある）

たしか、新東宝映画として、何年か前に、「地獄」という総天然色映画が、異色的な作

れる事柄を大事にしているのだが——この時も、ハ「タブウ」+「地獄」+「SMマニヤ」の二つの問題を映画を見ながら、あれこれと考えひねくりまわした。（これが、いまペンを走らせている「地獄メモ」となって具体化されつつあるわけだが）

「タブウ」それには禁じられた、神聖なるもの——という意味が秘められている。この映

画のタイトルバックからして、まことにショッキングなもので、全裸の狂女が、白昼、街の真ん中で、ねころがっているシーンが映される。その狂女のそばを、自動車が走る、人々が何気なくすれ違う。解説によれば、その国の宗教（多分、ヒンズ教といったか？）によると、狂人は無心であるだけ、より神に近い存在であるとして、タブウ的な世界のものとして、考えられた処置（そっとしておく）であるとなっていたが——、観客たちの中には、そのあまりにも異常なこのシーンに、まゆをしかめる人たちも見受けられた。

全篇これ、このようなタブウ的な場面の連続ではあったが——。深く考えさせられたことは、社会にはこれに類するような、八当事者にとっては、はなはだ真実的な事柄が、第三者から見れば、とかくナンセンスであり、異常であり、デカタンであり、狂的であると見なされがちな事実が多分にあるということである。SMプレイ、浣腸責、生首狂崇、妊婦嗜好、切腹、女斗美、フェティッシュETC——など、みなこの言葉に当てはまることではなからうか。そして、「地獄」という表現には複雑なSMマニヤにとっての、心理が投影されていると思うのである。



## 「第二楽章」地獄とSMマニヤ

SMマニヤの立場からみて、私は、「地獄」という事柄を二つの世界に分類してみたのである。

一つは「孤独地獄」であり、もう一つは、「耽美地獄」である。前者の説明からはじめよう。判りやすいように、本誌掲載の内容から例を取ってみると、昭和四十年三月号に、

芳野眉美氏が「SEXの考え方に就いて」

「蛇のような革帯」を拝見して——で、福田久文さん（同年一月号掲載、愛読者原稿「体験」の文章に触れて、「読んでいて、なんとまずしい、重苦しい「SMの情事」なんだろうと思った。別に批評するわけではない。感想」と、まず、芳野氏が、こんなことを書く気になった（「SEXの考え方に就いて」）動機を記し、「SMの情事などに没頭……」（傍点は筆者）「の行は納得できない」と述べ、「前進的ないぶきは感じられなかった」と指摘している——が。

私はこのような福田さんの精神的な状態を「孤独地獄」とよびたいのである。ただし条件付きでだ。例えば、福田さんの言葉「あなたの秘めた性癖は奇クに親しむだけで癒すこ

とができるし、できるならばそうされた方が賢明で」（傍点は筆者）について、芳野氏は「私も同感だ。そういう人もおることだろう。」と肯定し、さらに「「賢明である」と思った方はそれでいい。御自分のSEXに自信が無くなったときは、静かに去ればいい。自分のSEXを裏切るのが最も罪悪だと私は信じる」と付け足しているが。——

私は、残念ながら、そのような信じ方は出来ないものである。自分自身でもはっきりつかめないのが、SEXの実体でもあると思って、いるからであり、（よく判らないのでは、裏切る理由も付けがたい）またSEXとは対象がともなう現象にもある意味で「去れば」なおさら孤独感が深められると考えられるからでもある。では、私の云わんとする孤独地獄とは何か、という裏付けがある問題になってくるわけだが——

私は、（奇クの読者という範囲で）福田さんの書かれた、「賢明」という言葉に、その手がかりを見出すのである。「奇ク」との結び付きは、賢明であるか、どうかというようなソロバンづくめの問題でなく、奇クを仲介として、欠点だらけの人間が、裸になって、「異常」という言葉を、「特に選ばれたる」という（別稿私の「狂人学」参考、ただし、この稿執筆の今は、投稿のみで、未発表）スリルあるるまんを、みんなでつかみ取ろうという道にある。（一人で一步をあゆむより、十人で十歩をあるこう！）

「男女のいかなる情事よりも、もっとすばらしいものが、世にいくつもあり、SMの情事などに没頭しては」という福田さんの言葉は、「作った者にとって何の感想も聴けなかったら、読まれなかったと同じである」という、他の福田さんの創作、読者通信への投稿に対する反響のすくなかったことへのうつぶんも含まれているであろう？と推察されるが……。

一眼見て、相手が判らないときは、十年たっても……のことわざ通り、いくら長い読者歴があったとしても、投稿のどこかにまだまだ何か欠けたものがあり？、「奇ク」のよみ方の点に足りないことも？。——真実は、必ず「答え」があろうと私は信ずる。

「奇クに親しむだけで癒すことができるし」この福田さんの言葉は、「奇クの発行所や読者層とかかわりなく」マゾヒズムへの孤独な願望を、なかばいやす機会を与えてくれた——という一節とムジュンしている、自分ノ



恵心僧都著「往生要集」中／＼六道物語／＼より



コトハタナニ上ゲテという意味まで。以上、種々な点に私なりの、福田さんへの「孤独地獄」という解釈が成立するのである。

『孤独地獄』——それは「奇ク」を世界として、同じ地点で、（共に妖しきスリルを、共に感動する）ようなことができない、S M マニヤの仲間（読者）を、どこまでも信じようとしないう自分勝手な人達が落ちこむ地獄であ

「タイクツは敵だ！」。

#### ▽久我庄一謹白

この章に、福田・芳野各氏の文章を引用し、寸感させていただきましたが、これはあくまでも「地獄」的モチーフを展開させるための方便であり、悪意あるものでないことを、前もって、お断りして置きます。もし、そのように取られますとしたならば、多謝、御了承

る。ただし、この地獄では「去れ」という言葉は「タブウ」だ。いつも奇クが、背景になっているからでもある、

『耽美地獄』——お湯の中にも花が咲く——ではないが、地獄の中にも「美」が、「ろまん」があることを発見しつづける奇クの読者のみが知る地獄の世界。常にスローガンは、

乞うものである。

#### 「第三楽章」地獄未成交響楽？

地獄的などという表現は、元来、悪魔的などという意味も含まれている。（これは、キリスト教的な聖書観からとついたサタン／＼悪魔／＼は、地獄の王であるという解釈からきているようだ。）悪魔派の作家と評せられた当時の谷崎潤一郎の初期の作品などには、耽美S M 的なものが多いが、特に『少年』は、女性のサディストと、男性のマゾヒストをあつかった物で、その後の作品にも、この傾向は後を引いた。（現在の作品たる『鍵』などには「少年」にみられた足のフェティシズムが、五十数年たったいま、再現している）また、探偵小説（現在は推理小説）雑誌の「新青年」に発表された『武州公秘話』は、いままなお文庫本となつて、そのサディズム的殺人の連続は、新規の読者を、異常なこうふんにまきこませている——。

また、「人生は地獄より、地獄的である」といった芥川竜之助は、アブ的な作品「地獄変」がありまことに作家と地獄的な関係は、興味のある問題を提示してくれるようだ。この「第三楽章」は、「未成交響楽」のよう



なりもので、(といっても、何も、大作曲家のような芸術的なエピソードが、からまつている意味でなく、ここまで書いて、ふと設定せる貢うんぬんについて、考えをめぐらしたからで) 急いで、冒頭より読み返してみる

と、大体? 私の云わんとするような地獄に

### 「終曲」

「地獄未成交響楽」? が余韻を残して、読者の頭にあるだろうに? 何を、いまさら付

け足し、書けようか。ただ、「序曲」があるから、「終曲」と付けただけである。要は、メモ程度ではあろうけれど、何んとか、 $\Delta$ 「マンドリン」+「琵琶」+SMALL「V」の? が、少しでも、解明、それが、「奇ク」の発展にもつながればうれしいことなのである。

### ☆浣腸関連資料の部☆

#### 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(かみ) 三〇〇円  
東浦ひかる

#### 強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(かく) 三〇〇円  
東浦ひかる

#### 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(かな) 三〇〇円  
東浦ひかる

#### 浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(かむ) 三〇〇円  
東浦ひかる

#### 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一〇〇〇円  
梨花悠紀子

#### 強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 三〇〇円  
絹川 文代

#### イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いるり) 一〇〇〇円  
梨花悠紀子

#### 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 三〇〇円  
東浦ひかる

### 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 三〇〇円  
遠藤百合子

#### 浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 三〇〇円  
絹川 文代

#### エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 四〇〇円  
大塚 啓子

#### イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 五〇〇円  
大塚 啓子

#### 女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 三〇〇円  
大塚 啓子

#### 進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 三〇〇円  
大塚 啓子

#### 浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 五〇〇円  
大塚 啓子

#### 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 五〇〇円  
大塚 啓子

### ☆女体切腹資料の部☆

#### 血紅女体切腹腸露出

大手札十二枚一組 略号(せい12) 一〇〇〇円  
大塚 啓子

#### 血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 略号(せん) 四〇〇円  
梨花悠紀子

#### 血紅切腹祭壇の女体

大手札三枚一組 略号(せぬ) 三〇〇円  
大塚 啓子

#### 禪裸女血紅切腹

大手札五枚一組 略号(おお) 五〇〇円  
大塚 啓子

#### 血紅使用苦悶悦楽表情

大手札五枚一組 略号(くえ) 五〇〇円  
大塚 啓子

#### 肉体美全裸女体切腹

大手札五枚一組 略号(なせ) 五〇〇円  
長野 良子

#### 瘦身女体切腹姿態

大手札二枚一組 略号(ねは) 三〇〇円  
細川アヤ子

#### 瘦身女体自刃姿態

大手札三枚一組 略号(ねに) 三〇〇円  
細川アヤ子

### 血紅切腹血塗れ下腹

大手札五枚一組 略号(わい) 五〇〇円  
大塚 啓子

#### 殿中の女性切腹

大手札三枚一組 略号(わこ) 三〇〇円  
大塚 啓子

#### 切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 略号(わは) 五〇〇円  
大塚 啓子

#### 豊満の下腹を切る

大手札五枚一組 略号(えん) 四〇〇円  
東浦ひかる

#### 女体介添切腹

大手札四枚一組 略号(あか) 四〇〇円  
甘木 春子

#### 下腹を切り裂く

大手札三枚一組 略号(やい) 三〇〇円  
大塚 啓子

#### 下腹に刺す氷の刃

大手札三枚一組 略号(やお) 三〇〇円  
大塚 啓子

#### 柔肌を切り裂く女

大手札三枚一組 略号(やえ) 三〇〇円  
大塚 啓子



# 死刑される歓び

黒田 寿

## 1

わたしは死刑の執行を明朝に控え、独房のなかでひとりトントン、トントンと言う音を聞いていた。あれは絞首台を作る音だ。あと十二時間が、わたしに残された、この世の寿命である。

突然戸があいて刑吏が入ってきた。手には長いロープを持っている。

“まだ早いわ、明日の朝でしょう。それともリハーサルでもしようと言うの?”

わたしはこう言ってやったが、彼の返事には驚いた。

“そうだよ”

冗談じゃない。本当にリハーサルするつもりらしい。

わたしはヘンリー八世が、その妃キャサリ

ン・ハワードを処刑する前夜、独房に斧と首斬台をもちこんで、念入りにリハーサルした話を知っている。その甲斐あって彼女の首はただ一撃で落ちたと言うが、その晩の気持はどうなだったろう。おびえきっていたか、それとも思わぬ歓びを感じたか……。しかし、わたし自身が彼女と同じ運命にあおうとは、夢にも考えてもみなかった。

彼はわたしを立たせると、首にロープをひっかけ、しきりにその結び方をどの様にするか考えている。単に輪を作って首を通せばよいのに、何度かこころみているうち、わたしの身体の中からは、なにかゾクゾクするものがこみあげてきた。

“女囚の身長、体重、それに絞首台から地上までの高さ。これによってロープの結び方がいろいろ変わるんだ。そうしないと余計な苦しみを与えることになるんでね、結び目がちょうど右の耳の下にすれば一気に締ってオダブツになるが、なかなかうまくいかない”

彼は言う。

“なんと言っても、締めやすいのは八頭身だね。デブややせたやつだと頭と胴体の重さの比が違うのでやりにくい。お前はきつとうまくゆくよ。なんせ必要以上に苦しませるのは絞刑吏の恥と言われてるんだ”

わたしも、そう願った。

約二時間ののち、この研究熱心な刑吏は自信ありげに帰っていった。あと十時間!



朝がきた。係官がわたしを外につれだす。絞首台はもう出来ていた。見あげるばかりの絞首台からぶら下っているロープは三本だ。してみると死刑になるのは、わたしだけではないらしい。しかも、そのロープは三本とも長さや形がちがっている。

十六才位のかわいい少女と、二十才位の美女がつれだされていた。このふたりがわたしの道連れか。少女はしきりに泣きじゃくり、刑事がその小さな身体を抱きかかえるようにしてなだめている。

やがて少女は泣きやんだ。こっくりとうなづくと、ふるえる足でわたしの前を通り十三階段へ歩を進める。ああ、かわいそうに、いったいどんな罪をおかしたというのか。

太いロープが、少女の首にまかれた時、恐ろしい悲鳴があがった。とたんに踏板が落下する。

「クウ」

幸い、ただ一気に少女の首は締められた。ショックもあったのか、完全に意識を失っており、すこしもがかない。刑事はホッとした顔で額の汗をぬぐった。

続いて二人目の執行だ。彼女も猛烈にあばれてみたものの、抵抗空しく手を取り足を取

りして絞首台の頂上へ引きあげられる。

その身体が台上より消えた、と思ったとたん、彼女は自分の頸を締めようとするロープにとびついて、両手でしっかりとつかんでぶらさがり、一時でも長く生きようとした。おそろしい執念だ。

だが、次第に力つきてズルズルとすべりおち、首がすこしずつ締まってくる。

「手を放した方がらくだ」

「もうあきらめろ」

刑事たちが口々に叫んでも、彼女の耳には入らないのだろう。実に三十分以上もがんばったのち、ようやく彼女の身体はダランと宙に浮いた。

それでも彼女はまだもがいている。ロープの結び目がずれてしまっているのだ。もはや正視できぬ有様だ。

断末魔の苦しみを軽くしてやろうと、刑事がロープを伝っておりてゆき、両脚を彼女の肩の上にのせてぐるぐるまわし、助手には彼女の脚をつかんでぶらさがるように命じた。つまり彼女のやさしい頸に三人分の重量がかかったのだ。

喉がグツと音をたて、続いてガクツと頸骨の砕ける響と共に、彼女の首は三センチほど

長くなったように見えた。刑事と助手が急いでとびおりる。もう少し長くのっていたら首がちぎれたかもしれない。目鼻口からタラタラと血汐が流れていた。

「さあ、お前の番だよ。心をおちつけて、そんなに長い時間じゃないよ」

絞首台にさげられた三本のロープ。中央のがわたしのためのものだ。十三階段の頂上に立つと、両側のロープはすでに犠牲者を得てピンと張っている。

昨夜の刑事がわたしの傍にきて、わたしの頸のまわりにロープをまきしめる。その時、絞首台の下に見なれぬ人間がいるのに気がついた。

「ねえ、あれは誰なの？」

刑事はちよつと答えたくないようだった。それでもわたしがもうすぐ死ぬ人間なので、結局は教えてくれた。

「あれはお前たちの死体の引取人だよ。普通は医科大学位しか望み手がないんだが、若くて美しい女となると、方々から引っ張りだこさ。何倍もの値段でね。用心しないとへんな奴がとびだして、死体をさらってゆくこともあるんだ」



わたしは前に、どこ  
の誰が女体の剥製標本  
を持っていたとか、生  
首のアルコール漬を集  
めているとかの話を聞  
いたことがある。それ  
は事実なのか。

わたしは嬉しくなっ  
た。死体となってもま  
だ人の興味をひくこと  
ができるのだ。わたし  
の死体は誰が買い取る  
のだろう。出来るだけ  
多くの人に見てもらえ  
るところがよい。デパ  
ートのショウウィンド  
ウに、かざられてもか  
まわない。

「さ、早く吊して！」

わたしは勢こんで言った。刑事は気の毒そ  
うな顔をして

「お前はいちばん重罪なので、生れたままの  
姿で死ななくてはならないんだ」

わたしはちょっと驚いたが、これこそ女性  
の誇ではないか。



「いいわ」

次の瞬間、わたしは一糸まとわぬ姿にされ  
ていた。わたしは思わず膝をつぼめ、台上に  
かがみこもうとした。が、その時、わたしは  
何の支えもない空中に放りだされていた。

「クウ！」

ああ、わたしの死体を奪いとうとして争  
いがおきている。まだ死んでいないのに。

わたしは満足して目を閉  
じた。

2

わたしの名はミレーヌ。  
ことし二十二才になった。  
外国の言いなりになってい  
る政府を倒そうと革命運動  
に加わり、成功直前までい  
ったのに某大国が介入して  
きたため、ほかの仲間と共  
に簡単に捕まって、結局ギ  
ロチンによる死刑を宣告さ  
れた。そして今日これから  
処刑されようとしているの  
だ。

その数は三十六人。すべ  
て若く美しいものばかり、  
なかには十七才になったばかりの少女も含ま  
れている。

「ズシン」

「ポロリ」

早速ひとつの首がころがりおちた。あれは  
オードリイだ。なんとあっけないのだろう。  
あれが人間の首なのだろうか、まるで人形の  
ようだ。



ギロチン死刑も始めのころは、斬り落した首を刑吏がひろいとして、群衆にさしめしたものだ、今日この頃は斬り放し。見物人もあまりこなくなったが、今日は若い娘ばかりというのが評判になって、かなりつめかっている。そのなかから「ひとおつ」と声がかかった。

デボラが、しっかりとした足どりで、首をしゃんと立てたまま台上へ、そしてその首は永遠に斬りはなされる。

エレオノラが、わたしたちをふりかえり、高らかに叫んだ。

「皆さん！ 早くいらっしゃいね」

とたんに、美しい首は惨酷な刃のもとにおちた。

「サクリ」「サクリ」と気持よさそうにおちてゆく首。誰もが楽しんでる。見る方は勿論斬る方も、そして斬られる方も？

「ズシン！」「じゅうにー」

「ズシン！」「じゅうさーん」

いま台上にのぼったのは双生児の姉妹だ。ふたりは一緒に生れたのだから、一緒に死なしてくれとダダをこねている。どうせ三十秒位の差なのに。刑吏もとうとう折れて承知したものの、首穴に二人は入らない。結局横に

なりお互いに抱き合うようにして、やっとつめこんだ。

こうして同時に刎ねられたふたつの首は、いかにも仲が良いように、もつれ合いながら宙をとり、斬口を下にしたまま地上にピタリと並んで舞いおりた。おそらくこの二人は、獄門台の上でもふたつ並べておかれることだろう。

「じゅうはち、じゅうく」

死刑になる女があまりにも従順なのは、見物人にとってはつまらないものだ。一度にふたつの首がとぶ場合があっても、そろそろ退屈しかけてきたようだ。

ピアが台上に投げあげられ、首をつきだそうとした時、どうした間違いか巨大な斧がその髪をかすめてすべりおちた。もうすこしで彼女の頭は半分だけ斬りとられたかもしれない。従容と刑をうけようとした彼女も、これには驚いたらしい。さっと顔色を変えると台からとびおり逃げだそうとした。

油断していた刑吏たちは、あわてて追いかける。だが、彼女は足が早く、なかなかつかまらない。思わぬ番外劇に群衆は、どっとどよめいた。

とうとう追いついた刑吏が長剣をさっと横にふれば、見事にピアの頸すじを断ち切る。美しい首は弧を画いてすつとび、胴体は首のあったところから血を噴きながら、尚も何歩か走ったが、そのままだおっとたおれた。

「にじゅうよーん」

と叫ぶ声。

次は最年少のジャクリーヌの番だ。すこしの怖れる色もなく、死ぬことなど何とも思っていないようだ。刑吏もさすがに同情したのか、その耳もとでささやいている。

「痛くもかゆくもないようにしたげるから、おとなしくするんだよ」

彼女はニッコリとほえんだ。そしてたちまちあの世へ行ってしまった。

「にじゅうごー」

ああ、わたしが最後になったことは何という幸運だろう。友達の首が次々とおちるのをこの目でたっぷりと、しかもつい目の前で終りまで見られるのだ。

後をむいて、ちょっと片目をつぶってみせたアンが、どっとけおとされる。その身体にはもう首がない。

「さんじゅうー」

まるで大根か人参でも切るよう……。



キムも比較的落ちついた態度をとっていたが、おおむけにねかせられ三角の断頭刃をまのあたりに見た時、はりつめた気がゆるんだのか絹を裂くような悲鳴をあげた。だが次の瞬間落下するギロチンの刃は、彼女の首を胴体から切断していた。

「さんじゅういち」

声をそろえて叫ぶ。

おや、もうわたしの前のフランソアーズが台上にのぼり、首穴の前にかがみこんでいるではないか。

「ズシン」

にぶい響がたったひとつあがっただけで、彼女の首は忽然と消えた。とたんに死体となった筈の彼女の身体がスックと立ちあがる。一秒か二秒、首のない身体がつっ立っていたが、やがてドサツと横ざまに落下した。

「さんじゅうごー」

いよいよ、わたしの最期か。首なし死体の山を横目でみながら台上に立つ。刑吏たちも意識してかゆっくりとした動作をしている。群衆のなかから

「なにをしてる。早くやれ」

「さっさと片づけろ」

と声がかかった。

無理もない。三十五の首を斬るのには二十分以上もかかっている。そろそろ家に帰りたいくなったのだろう。美女の処刑といっても何も今日だけじゃない。明日も明後日もあることだし。

しかしわたしにとって、これは大きなブジヨク。いちばん美しいわたしを、早く片附けろだなんて……。

「ありがとう。あなたたちは、ひどいことを言うのね」

わたしは言ってやった。

「わたしの首はひとつしかないのよ。それもとびきり上等のものだわ。その首のおちるところを、よくごらんさいね。末代までの語り草になるわ」

言いたいだけのことを言ったら、サッパリした。あとは死ぬだけだ。

首穴に首をつっこみ、顔をねじまげて上を見ると、巨大な刃がわたしの頸に接吻しようと舌なづめりしながらまっている。その刃を伝った血汐が一滴、ポタリとわたしの頬におちた。フランソアーズのものだろうか、それとも……。

下をみると血汐の海のなかに首また首が浮

いている。こんなすばらしい眺めがあるだろうか。血汐の香も十分に味わったし、もういつ死んでも思いのこすことは……いや、もうすぐ死ぬのだった。

首は思いきり遠くとんでやろう。この首の山をとびこす位に。血汐もあらんかぎり遠くまで噴きあがらせたい。

長い獄門台にズラリ並んだ三十六箇の生首が、わたしの目の前に、ぼうっと浮かんできた。すべて知っているものばかり、わたしの首もそのなかに混って……

その時、幅八十センチ、六十キロの重量をもつ巨大なギロチンの刃は、二メートル二十の高さよりわたしの頸すじに落下してきた。

「ズシン！」

「さんじゅうろおーく」

3

わたしはふっと気がついた。ここはどこだろう、薄暗いし、それにとっても寒い。

身体をうごかそうとしたが、どうしてもうごかない。まるで全身に鉛でもしぼりつけられたようだ。

わたしは自分がまっばだかにされているのに気附いた。しかも、ここはタイルの上だ。まさか、わたしを解剖してしまおうわけではあ



るまい。

やっと、記憶がもとに戻ってきた。わかった！ここは死体検死室だ。わたしは今日死刑を執行されたのだ。

わたしは、まだ十九才だが、殺人をはじめ数々の罪をおかし、電気イスによる死刑をうけた。その時の模様が次第に思いだされてくる。

冷たい鉄のイスに坐ると、両手両足と額が次々とバンドで固定され、ふくらはぎには海綿でしめらした電極をつけ、もう一つの極のついた鉄の帽子をかぶせられた。

執行官が最後に言うことがないか、と聞い

たので、わたしは

“停電になるといいわね”

と答えてやった。

執行吏は苦笑しながら、わたしの肩をたたいて場をはなれ、死のボタンを押す。

わたしの頭のなかに閃光がきらめき、四肢がピンと強直した。声もせず、自分の身体ながらどうにもできない。恐怖さえも殆ど感じなかった。

二、三秒か、それとも三十秒も続いたのかよくわからない。強直がとけて、わたしはイスの上にぐんなりとなった。ホッとする間もなく、今度は胸が圧迫されるような感じ。肺

## 女性写真モデル募集

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年齢略歴記載の上編集部宛お申込み下されば、報酬そ

の他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽

臓も心臓もしめつけられて、息がとても苦しい。続いて二度目のショックがきたが、前よりも弱いな、と、ぼんやり感じたのを最後にわたしは気を失った。

検屍官はタイルの上にはこばれたわたしを調べ、確実な死を宣したものだろう。それなのにわたしは息をふきかえした。今頃は夕刊の記事にわたしの死刑執行の様子が書かれてるに違いない。

“十九才の美少女ナタリーは、本日電気イスによる死刑を執行されました。彼女の最後の言葉は……”

なんて言う記事が。

突然恐怖がわたしを襲った。これは大変なことなのだ。検死がすんだあとは冷凍室に送りこまれることになっている。生きながら冷凍人間にされてしまう！

わたしは一度ここに来たことがある。昨年デビーがガス室で二十一年の生涯をとじたとき、わたしは唯一の友人として、その執行に立ちあった。

八角型のガス室。その外側の窓から眺めていると、デビーはガスのたちこめるなか、懸命に息をこらえていたが、遂に死のガスを吸



ってしまった。はじめに小さく二、三度。そして大きく肺のすみずみまでも。とたんにデビーの身体はぐったりと床にくずれおちた。

青酸ガスを吸ったデビーの死体は、美しい桜色を呈していた。スラリとのびた二本の足も、ふくよかな下腹も、深い形のよいおへそも、ふたつのまるい乳房も皆な印象に残っている。顔にはべつに苦悶の色もなく、むしろ大往生の方だった。

検死がすむと、まるでパン焼きかまどみたいになった冷凍室に送りこまれた。零下五十度という低温だ。翌朝もう一度わたしが会いに行くのをまってとりだされたデビーの死体は、石のようにカチカチになっていた。保存室にはこぶ途中、どうしたとか輸送車から床におち、ドタン！ゴロゴロとすさまじい音をたててころがった。係官はその死体にワイヤーを引っかけて引きあげる。まるで冷凍マグロのように。

保存室の光景がまたものすごい。ここは零下五度にすぎないが、処刑された女囚の死体がズラリと並んでいるのだ。いずれは医科大学その他の機関に希望に応じてゆずり渡すという。

デビーの死体は、両方の耳にフックをかけ

て、直立姿勢のまま壁にもたれるように吊された。まるで肉屋の店前にある牛や豚の肉片のような形で。三カ月ほどたってから、某市の犯罪博物館に送られたと聞いている。

ほかの死体をみると、絞首刑にされたのだろう。頸のまわりに赤黒い絞めあとがついていて、両の耳の下が消えているものもある。左の乳房がふつとばされているのは銃殺された死体か。斬首されたものは逆吊りにされ、首は柵の上に並んでいた。獄門は廃止になったのに、こんなところで晒されたわけだ。

わたしが帰ろうとすると、係官はわたしを呼びとめて

「お前は、ここにこないようにするんだぞ」と言ったが、その係官があとで

「あの子は選挙権をもつ前に、ここにくるだろう、」

と仲間に語ったのをわたしは知っている。

いや、こんなことを今考えている時じゃない。何とかして自分の生きていることを係官に知らせなくては。そのあとどうなるのかは知らない。もう一度焼き直されるのか、病院に運んでいったん回復させてから、あらためて処刑するのか、それとも釈放か。

もう一度死刑になるのにしても、冷凍人間にされるよりはましだ。だがどうしても身体はうごかない。電気ショックで運動神経がマヒしたのだろう。勿論声もでない。

その係官がわたしのすぐ傍に立っている。口のなかになにかつつこまれた。体温計らしき。つづいて腋窩、肛門、その他の温度を測っている。

「平均体温。死亡直後六十八度。一時間後五十二度。二時間後四十度」

測定後も、しきりにわたしの身体をなでている。

「こんなに若くて美しいのに、死刑にするなんてもったいない話だ。だがあんなに悪いことをしながら、処女だとは意外だったな。焼かれたせいもあるが、まだあたたかくて生きているようだ」

ふと彼の目が輝いた。ああやっと気がついたのか。彼はわたしを抱きかかえると、あたかい自分の部屋につれていった。

わたしの望みは消えた。彼は処刑マニヤだったのだ。自分ひとりの当直なのを幸い、自分の欲望を十分に満足させようと言うのだ。わたしはまず絞首台にかけられた。太いロープが、わたしの頸に喰いこんでくる。苦し



い、このままでは死んでしまう。もっとも絞首刑なら軽い方だ。

「モデルもいるんだが、完全に宙に浮いた場面は、死体でも使わなくちゃ、とてもできない

## 四馬孝

### 倒錯美緊縛画集

(題名) 美女のいけにえ

大中判印画紙焼付五枚一組 一〇〇〇円

略号(えと)

## 一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台上に逆エビ縛り首縄姿で載せられてるのは、齡二十才の美女。身体の前面をむきだしにして、台上にころがされたのに対して、これから加えられようとする虐待のあざむきを暗示する恐ろしい道具が彼女を冷たく見下している。

## 二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしかも、妻はホステスのナンバーワンであってみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然であろう。これは若くして美しい妻を持つ夫が、その閨房に於て浮気の相手を白状させるシーンである。

## 三、鼻料理プレー

顔は女性の生命であるが、鼻は又、その大切な顔の中心に位して女性変貌の中心を

いんでね」

ひとりごとを言いながら、カメラのシャッターが切られる。

いっそのまま吊しておけば、死ぬことが

なすもので、男心をそそのかせる中心でもある。美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

## 四、涙を舐める男

ぱっちりとした瞳。房々とした丈な黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むっくりと肉がついていながら、全体にはほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けた麻縄、そして身体を真二つにするばかりに締めつけた革紐の首縄、股間縛。今や皮ムチの鞭打にあつて、苦渋に流した大粒の涙を、男はペロペロと如何にもうまそうに舐め続けるのだ。如何にもうまそうに

## 五、山小屋の一夜

リュックを担いで楽しい山登りの一日が終って、山小屋で一夜の宿泊を求めた乙女。山のけがれを知らぬ清純な空気と同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であった。しかし山小屋の一夜は、彼女にとつては怖い悪夢の一夜であった。その受難のいまわしい悪夢の一夜が、ここに展開されている。

できたのに、絶息する一瞬前、わたしの身体は床におろされた。

次はギロチン台にねかされる。頭上に輝く巨大な刃。これがおちてくればよいのに……パチパチという音が聞えてくる。

四肢をのばしハリツケ柱に縛られた場面。

火刑台にのせられた場面、その他いろいろな処刑風景が彼のカメラにおさめられた。

次第にわたしの胸はふくらんできた。死刑になるということは何と楽しいことだろう。今になってやっとわかってきた。ああ、早くわたしが生きていることを知らせたい。そしてすばらしい死刑にしてみよう。

「さあ、これ位にしておかないと、充分に凍らないぞ」

わたしの喜びはたちまち絶望とかわった。こんな形で死ぬのはイヤだ。

「生きているのよ、生きているのよ。せめてあなたの手で殺して」

心のなかで叫んだが、彼は冷凍室への戸をあけると、零下五十度の室内にわたしを送りこむと、ガチャンと戸を閉めた。

(終)



## 女斗美ファンタスティック・シリーズ

## デパート女子レスリング

芦 浦 素 舞 夫

## △ゆきこ対みづえの死斗V (その二)

八、長身みづえ、胴絞めの  
猛攻惜しくも体固めを  
逸すること

ここで、彼女たちに一分間の休憩時間が与えられた。長身みづえは、相当疲れている様子だった。肥満ゆきこの執拗なネルソンが効いたのである。長身みづえは、セコンド係のさし出した椅子にぐったりと腰を下して、首うな垂れて肩で大きく息をしている。同僚の女店員たちは、彼女の身体の汗を拭いてやつたり、首や手足を揉んだりして甲斐甲斐しく介抱している。長身みづえが疲れているのも無理なかった。彼女は、もともとファッション・モデルに向きそうな美貌と八頭身の女性

だったのだ。いかに彼女の運動神経が発達しているとはいえ、レスリングのような荒っぽいスポーツには不向きだったのである。

一方、肥満ゆきこには、大して疲れた様子もなかった。彼女は、セコンド係の同僚の女店員たちと笑いながら何か話をしている。

最後のスタンド・レスリングは、どうやら体力に優る肥満ゆきこに有利なようだった。非力な長身みづえは、はたしてどこまでテクニクでカバーできるだろうか。

「チーン！」

ゴングが鳴った。

いよいよ残り二分間のスタンド・レスリングの開始である。超満員の場内から、いっせいに拍手がまき起る。グリーン・コーナーの肥満ゆきこは、元気いっぱいマットの中央に

飛び出した。レッド・コーナーの長身みづえも、最後の勇を鼓してマットの中央にオン・ガード・ポジションで構える。

「みづえさーん、しっかりっ！」

「ゆきこさーん、がんばってえ！」

場内から盛んに女店員たちの声援が飛ぶ。肥満ゆきこがパツと組みついた。そして、両手で長身みづえの両肩を掴んでグイグイ押し立てる。この激しい押しに、長身みづえは、たちまちマットの隅に詰ったが、彼女は、いきなりマットに両膝をつくや、長い両腕で肥満ゆきこの太い両脚を抱え込み、一気に彼女の足を掬い上げた。長身みづえのこの鮮やかな両足タックルに、肥満ゆきこもついにたまたまず、マットの上に仰向けにドット倒れる。

「ワァーッ！」



場内から歓声が上った。長身みづえは、すかさず肥満ゆきをレック・ロックでホールドしながら、すばやく足取り固めに持ち込もうとしたが、惜しくもマットの外に出てしまった。私は、直ちにホイッスルを吹いて試合を中断させ、彼女たちをマットの中央に戻した。二人は、ふたたびスタンディング・ポジションで向い合って構える。

肥満ゆきこが攻めて出た。彼女は、いきなり右手を伸ばして長身みづえの首を捲くや、立腰まま強引な首投げをかけようとした。だが、この体勢からの首投げはちょっと無理だった。肥満ゆきこは、逆に相手に長身を浴びせられ、マットに横倒しになって倒れてしまったのである。長身みづえも肥満ゆきこに首を捲かれていたため、彼女の上に折り重なって倒れたが、すばやく体固めの態勢に持ち込む。

長身みづえは、腹這いになった肥満ゆきこの背中に乗って、長い両脚を彼女の胴に捲きつけて足を組み、上体を伸ばして肥満ゆきこの頭の上にのしかかり、長い両腕で彼女をマットに抑えつけた。これは、四点体固めといって、長身みづえのように脚の長い選手にはもってこいの技だったのである。肥満ゆきこ

は、膝をつかって懸命に立ち上ろうとするが長身みづえは、右足で肥満ゆきこの右脚をフックしてこれを許さない。止むなく肥満ゆきこは、背中を揺さぶって長身みづえを前に落そうとするが、長身みづえは、両脚で肥満ゆきこの胴を力いっぱい絞め上げて、尚も抑え込みを続ける。長身みづえは脚が長いだけにこのボディ・シザーズは相当の威力があった。

肥満ゆきこの顔が、みるみる苦痛に歪む。彼女は、必死に長身みづえの脚をはずそうとしている。一方、長身みづえも必死だった。すでに、体力をかなり消耗している彼女は、何とかしてこのあたりで勝負をつけたかったのだ。長身みづえは、細長い両脚にありったけの力をこめて、肥満ゆきこの胴を絞め上げた。まことに強烈なボディ・シザーズだった。もし相手が、ほかの女性だったら、ひとたまりもなく音を上げていたに違いない。だが肥満ゆきこは、顔を真赤にしながら歯を喰いしばって懸命に耐える。

「ワーッ！」

彼女たちの凄絶な寝技の攻防に、超満員の場内は興奮のルツボと化した。  
「ゆきこさーん！」

「みづえさーん！」

女店員たちの声援も狂気じみていた。長身みづえは、両足の爪先を立てて肥満ゆきこの両足を浮かせ、彼女の上体に自分の全体重をかけながら、マットをつっぱっている彼女の両手を払って、肥満ゆきこを完全にマットに平たく抑えつけてしまった。

「キヤーツ！」

女店員たちの間から悲鳴が上る。肥満ゆきこは、まさにフォール寸前だった。場内の誰しもが、長身みづえの勝ちと思ったに違いなかった。

だがこの時だった。肥満ゆきこは、万身の力をこめて長身みづえを持ち上げるや、右肩から転がり、一気にローリングしてマットの外に逃れ出たのである。彼女のこの鮮やかな早業に、超満員の場内は思わず「アッ！」と声を上げた。いままで、このデパート女子レスリング選手のうち誰一人として逃れることの出来なかった長身みづえの体固めを、肥満ゆきこは美事にエスケープしたのである。

皆んなが驚いたのも無理なかった。それにしても、長身みづえは、まったく惜しいチャンス逃したものである。彼女にもう少し体重があったら、完全に肥満ゆきこを体固めで



フォール出来ていたに違いない。だが悲しい哉、長身みづえはあまりにも軽量だったのだ。だがいまの場合は、むしろ、肥満ゆきこの技を褒めるべきだったろう。

長身みづえは、さすがにガッカリした表情だった。彼女にとって、いままで絶対的な自信を持っていた、切り札とも言うべきボディ・シザーズを肥満ゆきこに逃れられたことは、何としても痛かった。長身みづえが心理的に動揺したのは、たしかに否定できなかった。一方、肥満ゆきこにとっては、デパート随一と評されていた、長身みづえの強烈な胴絞めをうまく逃れたことによって得た自信はたしかに大きかった。こうした二人の微妙な心理が、はたして、この後の彼女たちの斗いにどのような影響をもたらすだろうか。

## 九、肥満ゆきこ、得意の 首投げで長身みづえ を倒すこと

さて、試合はまた振りだしに戻って、スタンディング・ポジションから再開されることになった。超満員の場内から盛んな拍手が送られる。

両女性は、まるで申し合わせたようにパッ

と組み合った。そしてお互い、相手の肩を掴んで激しく押し合う。肥満ゆきこが、右手を長身みづえの首に捲いて、またもや首投げにしようとした。だが長身みづえは、咄嗟に首をすくめてこれをのこすや、すばやく右手を伸ばして肥満ゆきこの股を取る。

これは首投げ返しと言って、いわゆるカウンターである。このあたりのテクニクは、やはり彼女のほうに、一日の長があるようだった。長身みづえは、肥満ゆきこの太股を持ち上げ、彼女の足を払って倒そうとしたが、縫れ合ってマットの外に出てしまった。

私は、彼女たちをまたマットに戻す。

二人の女性は、スタンディング・ポジションから、ふたたび組み合った。肥満ゆきこが例によって、右手を長身みづえの首に捲きつけると、長身みづえも、左手で肥満ゆきこの右肘を掴んで抑えつける。この体勢から、彼女たちは、押したり引いたりして激しく揉み合った。肥満ゆきこは、何回か首投げにいうとしたが、その都度、長身みづえは、腰を引いて巧みに逃れる。こうして、相手に容易に決定打を与えないところは、さすがに長身みづえだった。しかし、首投げこそは、肥満ゆきこの切り札だった。

肥満ゆきこは、右足を一步踏み込み、右腕に長身みづえの首をじゅうぶん抱え込むや、鋭い気合を掛けながら、大きく腰を捻って強い首投げを放ったのである。この思い切った大ワザには、さすがの長身みづえも耐えることが出来なかった。彼女は、遂に肥満ゆきこの腰に乗せられてしまい、その長身が宙に美しい弧を描いた。そして次の瞬間、悲鳴を上げて、長身みづえの身体は、もんどり打ってマットの隅に叩きつけられたのである。マットから、パッと埃りが舞い上る。

「ワァーッ！」

超満員の場内が熱狂した。

まるで首投げのお手本のような、まことに美事な肥満ゆきこの首投げだった。彼女は、すかさず長身みづえを首固めでフォールしようとしたが、惜しくもマットの外に出てしまった。『ピーッ！』私は、直ちにホイッスルを吹いて試合を中断させる。肥満ゆきこは残念そうに、右腕に抱えていた長身みづえの首を放して立ち上った。長身みづえは、相手に組み敷かれた時に乳房を強く打ったらしくすぐには起き上れなかったが、勝ち気な彼女は、唇を噛んでよろよろと立ち上った。彼女のくやしそうな表情が実に印象的だった。



人一倍プライドの高い長身みづえにとって自分よりもはるかに背の低い肥満ゆきこに、ものの美事に、首投げで投げつけられたことは、よほどくやしかったに違いない。

さて私は、彼女たちにスタンディング・ボクシングを命じ、試合を再開させた。

肥満ゆきこは、ふたたび首投げを狙って、またもや右手で長身みづえの首を捲こうとする。——もともと肥満ゆきこは、相手の首を捲いて投げるのを最も得意としていたが、これに長身みづえに対しては、好んでこの手を用いていたのである。例えば、女相撲の対戦でも、肥満ゆきこは、しばしば首投げで長身みづえを破っているのである。(二月号の「デパート女相撲参照」ことに女子レスリングの場合、首投げは、タックルとともにスタンディング・レスリングにおける最も重要な技とされている。なぜならば、首投げは、倒したらそのままの体勢で抑え込む、つまりフォールに直結した技だからである。

肥満ゆきこが、意識して長身みづえの首を捲くのに、もう一つ理由があった。それは長身みづえの首は、鶴の首のようにほっそりとしているので捲き易い上に、彼女は背が高くて腰が弱いので、首投げで倒しやすいのである。

ある。それに倒した後も、首固めで抑え込むのには、肥満ゆきこの六十キロの体重が絶大な威力を発揮するのだ。一方、長身みづえの方でも、肥満ゆきこに首を捲かれるのを非常に嫌がっていた。

もともと首投げで投げられるのは、あまり恰好の良いものではない。まして長身みづえは、人一倍背が高いだけに、よけいにみっともないのだ。しかも相手が、彼女よりも十一センチも背の低い肥満ゆきこだから、なおさらだった。これは、プライドの高い長身みづえにとって、たまらなく羞しいことだったのだ。だから彼女は、肥満ゆきこになるべく首を捲かせないようにしていたが、やはり最後には力負けして、首投げで倒されることが多かった。もっとも、長身みづえも、逆手を用いて肥満ゆきこを首投げで倒そうとしたことは、いままでにも何回かあった。だが一回も成功しなかった。肥満ゆきこの首は、太くて短い猪首という奴で、アゴも二重になるくらい肥えているため非常に捲き難く、たとえ首を捲いたとしても、重心が低くて腰の強い肥満ゆきこには、首投げはちょっと通じなかったのである。

さて、肥満ゆきこは、相変らず右手を伸ば

して、長身みづえの首を捲こうとする。長身みづえは、左手で肥満ゆきこの右手首を掴んで、これを防いでいる。が、ともすれば、力負けしそうだった。しかし、長身みづえは、肥満ゆきこの右手首を掴んだまま、巧みに彼女の背後に廻り込んだ。そして、左手で肥満ゆきこの右手首を持ち上げ、右手で彼女の肘を押し下げて、相手を肩から落そうとする。これは、ひじ下げという手である。この場合相手の腕を九十度以上ねじ曲げなければ反則にはならないが、デパート女子レスリングでは、なるべく使わないことになっていた。しかし、さきほどからの肥満ゆきこの首投げの猛攻で、形勢が悪くなっている長身みづえは、敢えてこの手を用いたのである。

長身みづえに、右腕を取られた肥満ゆきこは、さすがに痛そうだった。彼女は、顔を真赤にしながら、何とかして自分の腕を振りほどこうと懸命である。一方、長身みづえのほうも必死だった。もしここで肥満ゆきこの右腕を放せば、彼女は、きっとまた首を捲きにくるに違いないからだ。長身みづえは、肥満ゆきこの右腕を強く握り上げて彼女の背中に押しつけた。この強烈なハンマー・ロックに、肥満ゆきこの顔が、みるみる苦痛に歪



む。だが、これは明らかに反則だった。

肥満ゆきこに首投げで投げつけられて、かなりエキサイトしていた長身みづえは、ついルールを犯して、肥満ゆきこの腕の逆を取ってしまったのである。私は、長身みづえに警告を与えて、直ちにハンマー・ロックを中止させた。彼女は、素直に相手の腕を放したが肥満ゆきこは、憤然として長身みづえを睨みつける。よほど痛かったらしく、彼女は、右腕をしきりに打ち振っている。日頃は、おだやかな肥満ゆきこも、さすがに興奮した様子だった。

## 十、肥満ゆきこ、ヘッドロックで長身みづえを苦しめること

現在までのところ、二人の優劣は全くつけ難く、このままだければ、この試合は引分けの公算が大であった。試合時間も残り少なかったが、私は、彼女たちにまたスタンディング・ポジションを命じた。二人の女性は、マットの中央に相対して構えたが、二人とも相当にエキサイトしている様子だった。

「ピーッ！」  
私は、ホイッスルを吹いて試合再開を告げ

た。

肥満ゆきこは、またもや右腕を伸ばして、しゃにむに長身みづえの首を捲きにいった。だが長身みづえは、これを嫌って左手で激しく突き放す。長身みづえは、すでに顔面蒼白眼をつり上げて必死の表情だった。肥満ゆきこも、顔面真赤にして斗志満々の表情。なおも執拗に長身みづえの首を捲こうとする。長身みづえは、左手で必死にこれを防ぎ、遂に二人の女性は、手四つの体勢に組み合った。まさに殺気横溢の一瞬である。

「ゆきこさーん、がんばってえ！」

「みづえさーん、しっかりっ！」

場内の興奮も、ついにクライマックスに達した。二人のレスリングは、すでに喧嘩に近かった。彼女たちは、お互いに相手を押し伏せようと必死に争っている。だがこうなると力の強いほうが有利だった。激しく揉み合うことしばし、ついに肥満ゆきこは、長身みづえの細長い腕をはねのけて、右手を彼女の首に捲きつけた。長身みづえは、アゴを引き首をすくめて、必死に逃れようとしたが駄目だった。肥満ゆきこは、その太い右腕で、長身みづえの細い首をがっちり抱え込んでしまったのである。

これぞ、肥満ゆきこ十八番のヘッド・ロックだった。長身みづえは、右手で、自分の首に捲きついている相手の右腕を必死にはずそうとしたが、肥満ゆきこのヘッド・ロックはまるで万力のように強力だった。長身みづえは、やむなく左手で肥満ゆきこの太い腰に抱きつき、腰を落し重心を低くして相手の首投げに備える。

長身みづえに、これだけ慎重に構えられるとさすがの肥満ゆきこも、あまり強引なことには出来なくなった。うかつに首投げにいかばさきほどのようにカウンターを喰う恐れがあるのだ。

肥満ゆきこは、右腕に長身みづえの首をしっかとロックしたまま、慎重に機を窺っている。こうして、二人の女性は、しばらく、じっとして動かなかった。静かな裡にも、さまざまな殺気が流れる。超満員の場内は、息を呑んで二人の動きを見守っている。彼女たちの組んだ恰好は、ちょうどローマ字のhのような型だった。だがこの体勢では、長身みづえのほうが、はるかに苦しかった。自分より十一センチも背の低い肥満ゆきこにヘッド・ロックをかけられた彼女は、一六六センチの長



身をエビのように折り曲げて、不自然な体勢を強いられているのである。

肥満ゆきこの丸っこい右腕の中から、長身みづえの苦しそうな紅潮した顔がのぞいている。彼女は、すでに全身汗みどろだった。額には玉のような汗が吹き出ており、肥満ゆきこが右腕に抱え込んでいる長身みづえの首も汗でヌルヌルとして、滑りそうだった。長身みづえの背中から、そして太腿から、大粒の汗がマットの上に滴り落ちていく。だが、それにもましてひどいのは、彼女の足の裏の汗だった。長身みづえの脂足は、彼女が足を動かす度に、足の裏にマットがくっつき引っ張り上げられるほど、べとついていたのである。思わず私は、マットに眼を落した。そこには、彼女たちの四つの足が、まるで仲良く並んでいるかのようなだった。肥満ゆきこの九文半の幅広い足は、その太く短い拇指がマットに深くめり込んでいる。これは、彼女が足に相当力を入れている証拠である。これに対して長身みづえの十文半の細長い足は、その細長い拇指が逆に上に反り返っている。女性の足指のポーズとしては、理想的な型だが、女斗美の場合は、あまり力の入らない感じだった。

さて、長身みづえは、へ、ッ、ド、ロ、ック、の苦しさに耐えかねたのか、長い右腕を伸ばして肥満ゆきこの太腿を取って反撃にしようとした。だが肥満ゆきこは、慌てず、逆に長身みづえの首を握って彼女を押し潰そうとする。これをきっかけに、彼女たちの斗いは、静かから動へ、たちまちにして一変した。強引に首投げで倒そうとする肥満ゆきここと、投げられまいとして必死に耐える長身みづえの間に、すさまじい投げの攻防戦が始まったのである。

肥満ゆきこは、強引な首投げを連発しながら、右腕に長身みづえの首を抱えたまま、彼女を引きずるようにしてマットの上をグルグルと廻った。二人の汗が飛び散って私の顔にかかる。超満員の場内は、すでに総立ちだった。肥満ゆきこは、腰を充分入れるや、強烈な首投げを打った。長身みづえは、危うく相手の腰に乗せられそうになり、彼女の両足の爪先が、マットから浮き上がりかけた。

「キャーッ！」

場内から女店員の悲鳴が起る。だが長身みづえは、よく耐えた。彼女は、マットにお尻がつくくらいに腰を落して、必死に耐えたのである。この長身みづえの捨身の防戦に、思わず場内から拍手が起る。

必死に耐える長身みづえを容易に倒せずとみた肥満ゆきこは、両腕で長身みづえの首をロックしたまま、体を左に捻っていきなりマットに右膝をつくや、彼女の頭を下に押しつけるようにして、自ら同体我倒れ込んだ。これはニー・ドロップといって、レスリングにおける首投げの正しい掛け方である。こうして相手に、腰を入れて急に坐り込まれると、首投げしが出来なくなるのだ。この肥満ゆきこの巧妙な首投げには、さすがの長身みづえも耐えることが出来なかった。彼女は、マットにガックリと右膝をついて倒れてしまったのである。肥満ゆきこは、すかさず長身みづえを首固めで抑え込もうとした。だが長身みづえは、右手でマットを支えて、しゃにむに起き上ろうとする。彼女の、ムクムクと持ち上げる大きなお尻と、細長い足の裏の動きはことに私の眼を惹いた。

「みづえさん、しっかりっ！」

場内から女店員たちの必死の声援が飛ぶ。長身みづえは、一度は、よく立ち上りかけたが、相手に右腕深く首を抱え込まれていたために、つい腰が砕けて、ふたたびマットに膝をついてしまった。肥満ゆきこは、自らマットに右肘をつくようにして強引に倒れ込み、



長身みづえを組み敷いて一気にフォールしようとした。この強引な首巻き落しに、さすがの長身みづえも、右肩からマットに崩れ落ちる。

「キャーッ！」

場内から、女店員たちの絹をつんざくような悲鳴が起った。だが長身みづえは、さすがに機敏だった。

彼女は、マットに転がり落ちたバウンドを巧く利用して、右足で思いっきりマットを蹴るや、すばやく左にローリングしてフォールを逃れたのである。肥満ゆきこと長身みづえは、組み合ったまま二、三回廻転しながら、一気にマットの端まで転がった。そして、しばらく争っていたが、ついに彼女たちの足がマットの外に出てしまう。

私は彼女たちをマットの中に引き戻して、ふたたび試合続行を命じた。

## 十一、肥満ゆきこの九文半の

幅広い足の裏と、長身みづえの十文半の細長い足の裏のこと

二人の女性はマットに両膝をついたまま、ちょうど、坐り相撲のような姿勢で組み合っ

た。肥満ゆきこが、なおも執拗に長身みづえの首に右手を巻きつけければ、長身みづえも、左手で肥満ゆきこの髪を鷲掴みにして、お互いに相手を押し伏せようとして争った。しかし、美人だが華奢な身体つきの長身みづえは力づくでは、とうてい肥満ゆきこに敵うはずがなかった。しかも、相手に首を捲かれていた不利も手伝って、長身みづえは、横倒しにマットの上に押し倒されてしまった。肥満ゆきこは、すかさず首固めでフォールしようとしたが、長身みづえは、巧みにローリングして逃れようとする。

二人の女性は組み合ったままマットの上を転り、上になり下になりして必死に争った。何とかして相手を組み伏せようと必死に闘っている二人には、すでに、女性としての羞らいはなかった。だが、潜在していた女性特有の斗争本能をムキ出しにして、凄まじく組み討ちしている彼女たちの姿に、私は、女斗美の真髄を見出したのである。

ピンクの水着の長身みづえと、黄色い水着の肥満ゆきこの二つの女体が、しなやかな四肢をからませながら相争うさまは、さながら二匹の蝶の戯れ合っている姿にも似て、悩ましくも美しく、女子レスリングでなくては絶

対見ることの出来ない、エロチックな場面だった。しかし、寝技では、力と体重に優る肥満ゆきこが圧倒的に有利だった。肥満ゆきこの執拗な首攻めで苦戦に陥った長身みづえはなんとかマットの外に逃れようとした。だが肥満ゆきこは、そうはさせじと、長身みづえをマットの中に引き戻す、そして、彼女を向仰けに組み伏せて強引にフォールしようとする。

長身みづえは、相手のフォールを一時的にでも逃れようとして、マットに俯伏せの姿勢をとった。すでに試合時間は、あと僅かしが残っていた。長身みづえとしては、ここで何とか時間をかせいで、この試合を、せめて引き分けに持ち込みたかったのだらう。もしこれが一般のレスリングだったら、彼女のこうした行為は、消極的なエスケープと見なされて、当然警告を受けるべきケースだった。

一方、肥満ゆきこにとっても、長身みづえをフォールしないことには、完全な勝利は望めなかった。フォールこそは、女子レスリングにおける、勝利の、絶対的な条件だったのである。

肥満ゆきこは、長身みづえのアゴに右手を



かけて、彼女を仰向けに引き倒そうとした。だが長身みづえは、肥満ゆきこの腕を振り切って、必死にマットの外に逃れようとする。しかし、肥満ゆきこは、攻撃の手を緩めなかった。彼女は、長身みづえの背中に、おぶさるようにして馬乗り、に跨がった。長身みづえは、背中を揺さぶって、肥満ゆきこを振り落そうとする。それはちょうど、彼女たちが、お馬ゴッコかなんかして、ふざけあっている

ような恰好だった。しかし、身長一六六センチもある長身みづえの、大柄な馬にとっても肥満ゆきこの六十キロの体重は、さすがに重荷だった。肥満ゆきこの重味で、長身みづえの細い身体は、乳房がマットにつくくらいに押し下げられた。

長身みづえは、細い両腕を突っぱって身体を支えながら、大きなお尻をムクムクと持ち上げ、肥満ゆきこを振り落そうともがいた。

## ◎本誌二〇〇号突破記念◎ ▲原稿募集▼

### ▽内 容△

- 一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
- 一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
- 一、SMの他、フェテツシュ、切腹、女斗美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
- 一、形式は創作、小説などのフィクションも結構ですし、自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を発揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

### ▽規 定△

- 一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
- 一、枚数は一切御自由です。
- 一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
- 一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
- 一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
- 以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

▲奇ク編集部▼

その度に、彼女の十文半の赤黒く汚れた足の裏の脂が、白いマットにこすりつけられる。振り落されまいとして肥満ゆきこは、両腕で長身みづえの首にしがみつき、大根脚で彼女の細い胴を挟みつけた。肥満ゆきこの重量に耐えきれなくなった長身みづえは、彼女をおぶったまま、マットの上に横倒しにと倒れる。

そのはずみに、肥満ゆきこも思わずマットの上に投げ出されたが、彼女は、太っているくせに驚くほど敏捷だった。肥満ゆきこは、すばやく身を起すや、右腕に長身みづえの首を抱え込んで仰向けに組み敷き、すかさずフォールの態勢に持ち込んだのである。長身みづえは、長い両足でマットを蹴って、必死に跳ね起きようとしたが、肥満ゆきこの六十キロの体重を跳ね返すのは、なかなか容易なことではなかった。

私は、フォールの瞬間を見逃すまいと、すばやくマットに腹這いになり、長身みづえの両肩を注視した。彼女たちの、ムツとするような汗の匂いが、私の鼻をつく。

彼女たちは、試合前に、身だしなみよく高級な香水をつけていたのだが、いまはすでに何の役にも立たなかったのである。



肥満ゆきこは、右腕で長身みづえの首をこね上げて、彼女の両肩をマットにつかせてやうとするが、長身みづえが脚をばたつかせて必死に抵抗するのでなかなかフォールすることが出来ない。そこで肥満ゆきこは、長身みづえの抵抗を封ずるため、自分の太い両脚を彼女の長い両脚に巻きつけた。長身みづえは、足をばたつかせて、これをはずそうともがく。マットの上で、肥満ゆきこの大根脚と長身みづえのカモシカのような脚が悩ましく絡み合った。

マットに腹這いになっている私の直ぐ眼と鼻の先で、彼女たちの十文半と九文半の大小四つの足の裏が激しく縋れ合い、ムツとするような臭い匂いが私の鼻をつく。言わずと知れた長身みづえの脂足の匂いである。彼女たちの足の裏は、顔を見なくてもそれが誰の足の裏か、私には直ぐ分かった。細長くて汚れているほうが長身みづえの足の裏なのである。美人である彼女のほうがかえって足の裏は汚ないというのは、まったく皮肉な現象だった。長身みづえの十文半の細長い足の裏は彼女が人並みはずれたひどい脂足のため、しみ出た汗と脂にマットの汚れがくっついて、赤黒くべつとりと汚れているのである。もと

もと彼女が色白で、土ふまずの部分が抜けるように白いだけに、その汚れがよけいに目立つのだ。しかも、その足の裏全体から、脂足特有の蒸れたような臭い、匂いをプンプン発散させているのである。

足のスタイルからだけ言えば、たしかに長身みづえの足はスマートだった。よくきれた細い足首にはアキレス腱がくっきりと浮き出ており、土ふまずもたいへん彫りが深く、足指もほっそりとして長く、足幅のたいへん狭い、それは靴の生活に慣れた典型的な現代女性の足ではあった。しかし、長身みづえの十文半のほっそりとした足は、女斗美をやる女性の足としては何となく弱々しい感じを受けるのである。

これとは全く対照的に、肥満ゆきこの九文半の幅広い足の裏は、ほとんど汚れてはいなかった。もちろん臭い匂いは全然せず、小麦色のすべすべした清潔な足の裏である。短い足指が、まるで豆を五つ並べたようでもとても可愛いかった。だが、長身みづえのスマートな足に比べて、肥満ゆきこの足は、足首も太く、足の裏も肉付きが良過ぎて彫りが浅く、どちらかと言えばベタ足に近かった。それに足指もむっちりとして太く、足幅もたいへん

広くて、お世辞にもスマートな足とは言えなかった。しかし、肥満ゆきこの九文半のむっちりとした足は、女斗美をやる女性の足としては、たいへん力強い感じを受けるのである。

「女性の足には表情がある」

と、よく言われているが、いまの彼女たちがそうだった。マットの上で絡み合っている彼女たちの足の裏は、二人のレスリングの優劣を明白に物語っているのだ。すなはち、長身みづえを首固めで抑え込んでいる肥満ゆきこの、勝ち誇った九文半の幅広い足と、肥満ゆきこに首固めで抑え込まれている長身みづえの、苦しそうな十文半の細長い足の、対照的な二人の足の裏の表情だった。

## 十二、遂に、肥満ゆきこ、

### 強引な首固めで長身みづえを討取ること

さて、試合時間は、あと一分しかなかった。肥満ゆきこは、ここで一挙に勝敗を決すべく丸っこい右腕に、長身みづえのほっそりした首をせいっぱい深く抱え込むや、彼女の胸に自分の全体重をのしかけて強引にフォールしようとした。

「ムウーッ！」



肥満ゆきこの太い腕で首を強く絞められた上に、彼女の六十キロの体重で乳房を強く圧迫された長身みづえは、その苦しさに思わず呻き声を発し一瞬気が遠くなりかけたが、勝ち気な彼女は、長い左腕を伸ばして肥満ゆきこの髪を掴むや、力まかせにこれを引っ張った。これは明らかに反則だった。痛さに、さすがの肥満ゆきこも思わず「アアッ！」と叫び声を上げて顔を仰け反らせたが、彼女も負けずに右腕に力を入れて長身みづえの首を絞め返す。

「ムウッ！」

長身みづえは、苦しまぎれに左手で肥満ゆきこの髪を鷲掴みして夢中で引っ張った。「ヒエッ！」これには、さすがの肥満ゆきこも悲鳴を上げる。二人のレスリングは、すでに喧嘩と言ってもよかった。「ワァッ！」遂に、熱狂した女店員たちが数名、リングに殺到した。

「ゆきこさん！やっちゃえっ！」

「フオールフオール、もっと首を絞めてっ！」おそろくこの連中は、S傾向の女性たちで

## 春川ナミオ画 分譲用 蔵版

### 女体の下敷力作M画決定版

大判判画紙極鮮明焼付

七枚一組

三〇〇〇円

略号（ぬけ）

Mマニヤである春川ナミオが、常に豊満な女性の臀の下にありたいという見果てぬ夢を画筆に托して、ものにした傑作M画M派マニヤなら、二度と手に入らぬこの一組を！

- 一、若き女の股間で圧死する
- 二、行水する美女の尻に敷かれる
- 三、見事な美女の臀部の下敷き
- 四、人間ハンモックになる男
- 五、尻の下に喘ぐ人間椅子
- 六、逆エビで蠟燭責にあう
- 七、臀の下に埋れて法悦に泣く

（以上七葉のM画決定版）

一概にM趣味といっても、いろいろ多種多様な傾向があります。本画集はその中でも、若くてはち切れんばかりに豊満な女性の臀部の下敷になって屈伏することに喜びを感じる男性にピントを合せてあります。この種嗜好の方にとっては、唯一無二の文献となるでしょう。分譲中止にならぬうちに、どうぞ。

あろう、彼女たちは、口々に狂気の如く叫びながら、拳を振り上げて肥満ゆきこに応援している。美貌を鼻にかけてお高くとまっているミス・デパートの長身みづえに対して、日頃から少なからず反感を抱いていたこの連中は、いま目の前で、肥満ゆきこに首固めで抑え込まれフオールされようとしている長身みづえを見て、溜飲を下げているのであろうか。或いは、自分たちがまるでレスリングしているような錯覚に陥って、美貌の長身みづえの首を絞めて散々苦しめているような快感を味っているのかも知れなかった。

いずれにせよ、日頃から長身みづえに対して抱いていたコンプレックスを、いまこそ吹っ飛ばそうとしているのは間違いないかった。だが、場内の女店員たちの中には、リング上の凄まじい格闘を正視することが出来ず、両手で眼を覆って顔を伏せている女性も少なくなかった。明らかにM傾向の女性たちである。彼女たちは、まるで自分たちが肥満ゆきこに抑え込まれ、首を絞められて苦しんでいるような錯覚に陥っているのかも知れなかった。

さて、長身みづえは、肥満ゆきこに首固めで完全に抑え込まれていた。もはや非力な彼



女にとって、体重六十キロの肥満ゆきこを跳ね返すのは殆んど不可能に近く、フォールを逃れるのが精一杯だった。長身みづえは、長い左腕を伸ばして肥満ゆきこの髪を必死に掴んでいるため、左肩が自然とマットから離れる結果となり辛うじてフォールを防いでいるのである。長身みづえとしては、何とかこのまま時間切れまで頑張って判定に持ち込みたかったのだろう。もしそうなれば、いままでに彼女がかなりポイントを上げているだけに勝敗の帰趨はまだ分らないのである。

みづえさーん！　しっかりっ

長身みづえの悲壮な抵抗に、彼女ビィキの女店員たちの悲痛な声援が飛ぶ。一方、肥満ゆきことしては、何としてでもフォールで勝ちたかった。フォールなくしては、女子レスリングの完全勝利はあり得ないのである。

肥満ゆきこは、必死に抵抗する長身みづえに最後の止めを刺すべく、その太く短い右腕に渾身の力をこめて、長身みづえの細長い首をぐいぐい絞め上げながら、自分の六十キロの全体重で彼女の胸にのしかかった。

ゲーッ

長身みづえの口から苦しそうな呻き声が洩れ、彼女の全身が苦痛で激しく波を打つ。白

い、マットの上で、長身みづえの赤黒く汚れた十文半の細長い足の裏が、苦しうにのた打った。恰好の良い長い拇指は、ほとんど直角になるくらい真上に反り返り、小指は、逆に喰い込むように内側に折り曲げられている。さらに苦痛のため、その細長い足指の股の間から、べっとりとした脂汗がどっとまた滲み

出てきた。そして、脂、足特有の蒸れたような臭い、匂いをブンブン発散させている。まさに肥満ゆきこに首を絞められて苦悶する長身みづえの、汗と脂で汚れた十文半の細長い足の裏の表情だった。と、この時だった。長身みづえは、もがいているはずみに、お尻からブウッとおならを出してしまった。

臭い。まったく何とも言えない臭い匂いだった。これは、首を強く絞められて呼吸困難になると起る生理的現象で、長身みづえはついにたまらず放屁してしまったのである。私は、慌てて彼女の顔を覗き込んだ。肥満ゆきこの丸々と太った短い腕の間から、長身みづえの苦しそうな顔がのぞいている。眼がつり上り、唇をひん歪めて苦悶の形相である。

もともと彼女が美人であるだけに、その苦痛に歪んだ顔がよけいに印象的だった。

肥満ゆきこは、腕の力を少しも緩めず、尚

も長身みづえの首を絞め続けた。長身みづえの色白の顔が、しだいに紫色に変わってきた。だが、それでもなお、彼女は、参ッタとは言わないのだ。私は、どう女性のすさまじい執念を、まさまじと見せつけられる思いがした。ところが、ここで長身みづえは、苦しみのあまり、たいへんな反則を犯してしまった。彼女は、右手で肥満ゆきこの左の乳房を鷲掴みするや、鋭く爪を立てて掻きむしったのである。これは、デパート女子レスリングでは絶対に禁じられている手だった。

髪を掴まれている上に、さらに女の急所を衝かれた肥満ゆきこは、悲痛な叫声を上げて仰け反ったが、彼女も、苦しまぎれに長身みづえの首を骨も折れんばかりに絞め上げた。

ギャーッ！

ヒエーッ！

二人の女性は、獣のような呻き声を上げながら、マットの上をのた打ち廻った。それはもはやレスリングではなく、女豹同士のすさまじい死斗だった。

止めて！。お願い、止めてっ

さすがに、さきほどの連中も見るに忍びなかったのか、リングサイドから必死に叫んでいる。だが、遂に勝負のつく時がきた。



肥満ゆきこは、右腕に左腕も添えて、長身みづえの首を両腕で締め上げながら、自分の全体重をのしかけるや、彼女の首を強引にこね上げて、そのはっそりした両肩をマットにピタリと押しつけてしまったのだ。

フォールである。遂に、首固めが決ったのである。だが、エキサイトしている二人の女性、なおも凄絶な死闘を続けていた。私は急いで試合を止めさせようとしたが、なかなか彼女たちを引き離すことが出来ない。

やっこのことで、長身みづえの細い首に巻きついている肥満ゆきこの太い腕をはずさせることが出来た。ようやく抑え込みを解いた肥満ゆきこは、やがて、放心したようにフラフラと立ち上った。髪は乱れ、彼女の汗のしんだ黄色い水着も、胸と背中あたりに裂け目ができている。そして、むっちりした手首には、長身みづえの爪の痕が生々しく刻まれており、斗いのすさまじかったことを物語っていた。

私は、肥満ゆきこの右手を掴んで高々とさし上げ、彼女の勝利を宣した。いま私が握っている肥満ゆきこの太く短い右腕こそ、つしさきほどまで、長身みづえの細長い首を捲いて締め続けていた腕なのである。事実、彼女

の腕には、長身みづえの首の汗がべっとりとついていた。

一方、敗れた長身みづえは、ぐったりとして、まだ起き上れない。やがて、彼女は、ようやく身を起し一度は立ち上りかけたが、ふたたび、マットにガックリと両膝をついて崩れてしまった。長身みづえは全身汗みどろだった。彼女のピンク色の水着は、まるでいまブルから上ったばかりのように、びっしょりと濡れており、マットの彼女が組み敷かれていた辺りには、汗がいっぱい溜っていた。

長身みづえのアップしていた美しい衿足も乱れたおくれ毛が、べっとりとまつわりついている。しかも、そのほっそりとした首筋には、肥満ゆきこの太い腕の跡が、まだくっきりと残っており痛々しかった。そして、白いマットの上にぐったりと投げ出した彼女の、赤黒くべっとりと汚れた細長い足の裏が印象的だった。美貌の長身みづえの、ほっそりとした十文半の、臭い足の裏が全ても物語っているようだった。

## あとがき

もともと女子レスリングは、一般のレスリングとは、まったく異質のものである。そこ

には、エロ、サド、マゾが多分に含まれており、これらが、女子レスリングの魅力を形成する重要なポイントになっているのだ。だが私は、ここでもう一つ、フェチを加えたいのである。それは、すなはち女性の足の裏だ。それも、女性の足の魅力としてよく表現されている美しい素足ではなく、汗と脂で汚れた臭い、脂足という特殊な足の裏である。

かくて私は、もともと好きなタイプである背の高い女性と、太った女性にレスリングをさせ、太った女性に、背の高い女性の首を徹底的に攻めさせることによって、サドへの欲望を充たし、首を絞められて苦しむ背の高い女性のサイズの大きい脂足の足の裏によってフェチを満足させているのである。

私にとって、首投げ（サド）と足の裏（フェチ）は女斗美の魅力のすべてなのである。今後も、女斗美を通じて、SMFへの追求を続けていくつもりである。（終）

### 【註】

九月号所載「デパート女子レスリング」  
△前篇▽ 御参照下さい。



本誌二〇〇号突破記念応募原稿

# アリアドネ

ビブリオテケー  
△希臘神話の再編成▽

「二、クノスス」

黒淵 嬰 一

此の物語は「歴史」ではない。通常「有史以前」と表現される時代に属する。併しその時間と空間は「昔々或る所に」と書き始める程に不確定でもない。

三分の一はビブリオテケー（希臘神話）

に基く伝承。三分の一は発掘で確認された考古学的なもの。そして残る三分の一は（線文字Aが解読される迄は）自由な想像の許される未知の部分である。年代を厳密に決定する事は出来ないが、大体紀元前千五百年頃と推定されるから、筆者はミノス五十二世のアツティカ討伐を紀元前一五一五年と暫定しよう。以下、本篇の地名や人名は主としてアポロドロスに依って伝えられた伝のものであるが、事件の年代や主要人物の年齢はビブリオ

テケー（希臘神話）を合理的に解釈し得る範囲で筆者が勝手に算出したものである。

九年の歳月が流れて今年は紀元前一五〇六年。という事はエーゲウスの部衆がミノス大王に二回目の貢納を送る期限が来たという事になる。

此の九年の間には種々な事があった。

ミノス五十二世は艦隊を諸地方に導いて幾多の植民地を拓き、商船は地中海の両端を劃する海峡を越えて飛躍し、クレテ王国の極盛時代が樹立された。

ミノス大王はアツティカから連れ帰ったカルキオペーを第二夫人に取り立てた。十四人に如何なる調教課程が施されたか、色々空想してみたい所だが筆者は想像力を欠くので裏

面を書く事が出来ない。

ミノス五十二世の王后はパーシファエーであるが、紀元前一五一五年当時既に四十才でダー（地母神）の祭祠長を兼ねて権威も高く且つコルキウス地方出身女性通有の荒い気象を有したから、豪勇のミノス大王も幾分敬遠気味だった。カルキオペーはクレテという高貴な名を与えられて八年間に一男二女を生んだ。その長女が本篇の主人公アリアドネであるが、今年まだ八才で重要な人物に成長するのは次章からである。

ビブリオテケー（希臘神話）のポセイドン（海神）はミノス大王の風格を持っている。ポセイドンの妃はネレイデスのアムピトリテであるが、時にはクレイトーとも呼ばれる。



これはカルキオペーの別称クレテと同じ人物かもしれない。

ビプリオテーケー（希臘神話）に於てハデス（冥府王）は、デメテル（地母神）の娘ペルセフォネ（プロセルピナ）を誘拐して妻にした。これはクレテ王国でダー（地母神）の祭司長を務めるパーシファエーの運命を暗示しているのではないかと思われる。尚、蛇の形をした地母神は古代オリエントで基本的な原始神であり、ギリシャのデメテル（農業神）もローマのダイアナ（狩猟神）も、ダー（地母神）の変化した語形である。

紀元前一五〇六年十月末。ミノス五十二世ラダマンテウスは貢納受領の航海を終えてクノスに帰着した。大王は今年五十一才。古代では老衰の年齢であるが、多年の海上勤務で鍛えられた身体は愈々壮健で、眼光冴え、色黒く、四肢逞しく、海上帝国の王者たる風格が迫りを圧していた。

大王の傍に王太子グラウコスが居た。次男だがアンドロゲオースがアッティカに死んだので、代って王位後継者となっていた。今年二十八才で未婚。ミノス大王にも故アンドロゲオースにも似ていない。パーシファエーの私生児という噂さえあった。クレテ青年の風

俗を知らない者が見たら女と思うかもしれない。優美だが細かった。眼鼻は整っていたが鋭さも固さもなかった。髯は一本も無く、手足の毛も同様で、剃るのではなく抜いてしまいうらしい。クレテ海軍の制服である青い胴着型の軍服に青草の帯を締め、金のバックルで将官の地位を示し、金柄銀鞘細身の青銅剣を吊っていた。頭には低い円柱帽をかぶり、髪は肩の辺にまで黒い房になって垂れていた。露出した皮膚は艶があつて滑らかだった。「陛下、恙なき御帰還。併せて御事業の達成を心からお慶び申しあげます。」

出迎えの列から進み出たのは王后パーシファエーだった。当年四十九才。併し精一杯に若作りして十年程は欺く事が出来た。但し身体が緩んでいないのは、或る種の体技を若い頃から続けている為でもある。黄金の蛇頭が八方に附いた冠を戴き、手に蛇形の杖を持っていた。着ている衣裳は余りにも近代的だった。渦巻貝を金糸で一面に刺繍した半透明の上着は半袖形で身体に密着し、裾は襷で広く拡り、地に曳く程も長かった。腰が細く締まっているのは近代のコルセットと同形式の下着を用いている為らしい。帯は金糸を編み合わせた蛇で、その眼球は夜光石だった。更

に近代の感覚を以ては理解出来ない事だが、クレテ婦人一般の風習に随つて胸全部を一杯に開けていた。肩から胸下にかけて銀の透し彫を襟のように付け、それが自慢するに足る部分を一層形よく整えていた。ペクノススから発掘された人形は正しくこのような服装をして盛装の中から乳房だけを露出させている。「貢納品はあの船に。アケーヤ人の新しい奴隷もこの通り連れて参った。エーゲウスは当分背く気配もない。して、余の留守中何か変った事はなかったかな。」

大王の背後には、新しい年代の犠牲者達が並んでいた。

七人の少年達は腰の後に当てて首から吊つた青銅棒の両端に手を繋がれていた。

七人の少女は革紐を以て両手を背に高く縛られていた。

少年達は何れも獣皮を腰に巻くだけの裸であり、少女達は樹皮と草の繊維を編み合わせた短い単衣で肩から膝迄を掩うだけだった。

麻でさえ着ている者は誰も居なかった。アケーヤ人の貧窮化が此処にも表れていた。

事実、アッティカ地方ではクレテ王国の手先となったパラースが次第に強力となってエーゲウスの部衆を圧迫しつつあり、マラトン



に山寨を構えたクレテ脱兵の匪賊も依然として暴威を振っていた。

「変った事と申されますか、色々ございました。目出度い事も、悪い事も。それは車中で申し上げる事として、その前に先ず新しい奴隷達を見せて戴きたいと存じます」

パーシファエー王后の言葉は丁寧だったがその態度はミノス五十二世よりも威厳があった。併しこれは性格の差というより、クレテ王国の社会制度に依るものらしい。

七人の少年と七人の少女は純アケーヤ種の容姿優れた者ばかりが選ばれていた。白色・金髪・碧眼はミノス大王の好みであり、クレテ王国にとって珍重すべき奴隷でもあった。

子供達の頸には、真鍮の環が熔接してあった。首が締る程ではないが、切断しなければ抜けない太さだった。その前部と後部は鍵形になって青銅の鎖が取り付けられるようになっていた。鎖は頸環を連結し、三キュービットの長さで少年達七人と、少女達七人二群に繋ぎ合わせていた。頸環の側面には文字が彫ってあった。後年、線文字Aと呼ばれるようになるクレテ文字である。これが子供達の名前だった。(一キュービットは四十五糎)

パーシファエーは、少年達を一人宛吟味し

た。王后はその性や年齢に似合わず強い腕力があった。俯向いている頸を押し上げて顔を正面から凝視した。肩から腕へ撫で下し、名を読みながら筋肉を調べた。少年達が反抗や嫌悪の態度を示すと、凄い微笑を浮べて抓ったり、軽く頬を叩いたりした。併し、決して乳暴はしなかった。楽しんでいようでもあり、何かを連想しているようにも見えた。

少女達の方は無難作に見て廻った。何れも美少女で体格も立派だったが、故意に無視したのかもしれない。

七人の端に群を抜いて傑出した美貌の少女がいた。王后は頸環の名を、パレイアと読んだ。何を思ったのか、少女の両肩を掴んで半回転させた。パレイアは足を踏み違えながら背を見せた。パーシファエーは少女の後ろ手を強く引き上げた。パレイアは呻いた。王后は少女の固く握った拳から指を解き、掌を開かせて眺めた。掌紋を観察しているらしい。

「其方の年齢は」

王后はアケーヤ・ギリシャ語で尋ねた。少女は唇を半分開いたが、突然の事なので言葉が出せずに慄えていた。

「答えなさい。」

パーシファエーはパレイアの両手首を頸の方へ持ち上げた。手の骨が音を立てた。

「十五才です。」

少女は爪先で立ちながら細い声で答えた。

「アッテイカで何をしていました」

王后は手を緩めずに畳みかけた。

「漁師です。水に潜って、素手で魚や貝を獲る仕事をしていました」

パレイアは半分泣くような声を出した。涙が一筋流れた。

パーシファエーは手を離した。

「道理で、ニンフのような肢体をしている。

併し只の海女ではあるまい。エーゲウスの食卓に魚や海藻や貝を捧げていたのであろう」

そしてパレイアを再び正面に向け直し、金髪を拳に巻きながら、指で高い鼻を弾いた。

「美しい牝獣であること。陛下が又してもクレテ王家の御胤を蛮族の腹に宿させるのでしよう。わたしの子に若しもの事があつたら、野蛮な髪の子の混血児がミノスの王座に坐るかもしれないのに」

ミノス五十二世は赤面しながら言った。

「もう言うな、カルキオペーの子は必ず差別して王位には近寄せぬ。成人したら海外の領土を授けよう。側女としての異国女はカルキオペー一人居ればよい。あとはオケワヌス(



「海神」の巫女にして手をつけない事にする」

パーシファエーは夫である大王を見た。

「そのカルキオペーが死んだのです。代りが御入用でしょうに」

ミノス大王は驚愕の表情を走らせた。

「死んだと。余の留守中に、何があったと言うのか」

「次女のファイドラが、今年の夏に生まれました。それから二箇月しか経たないのに、陛下がお歸りになられたら御覧に供する練習をするとして、止めるのも聞かずに牡牛の舞を始めましたが、産後で身体が効かなかったのでしょうか。黒母と呼ばれる猛牛に踏み殺されてしまいました。残念な事でしたが」

ミノス大王はパーシファエーの言葉の裏の意味を感知した。カルキオペーは或は王后に殺されたのではないか。併し王后の言にはもう一つ、裏の裏がある事に氣附かなかった。

ミノス五十二世はゼウスのように精力絶倫だが、パーシファエーも亦ヘラのように嫉妬深く、且つ国内で権力があつた。カルキオペーを単なる側室にしておくだけなら事件は起らなかっただろう。寵愛の余り、クレテなる高貴な名と重要な官職を与え、八才の長女アリアドネをオケワヌス（海神）の巫女に任じ

長男カトレウスを第三王子として認めたりした事が王后を怒らせたに違いない。その性格を以てすれば、証跡は跡形もなく消されている事だろう。

「陛下は黄金色の髪をした野蛮娘がお好きなのでしょう。お隠しになるには及びませぬ。浮気の虫は抑えようとすれば却って反発するもの。パレイアなりと誰なりと、側室にお加え下さい。わたしは此の年齢ゆえ、閨の伴としては引退致しましょう。アンドロゲオースは亡くしましたが、未だ王子が二人と娘も二人あります。なれど陛下。クレテ王国の王座を思われるならば、髪の赤い混血の子ばかり殖やされませぬようお願い致します。わたしの侍女デクシテアをお譲りします故、わたしの代りと思って下さいませ」

デクシテアは十四才だが、その妹エウクシノミアと共に王后侍女中の雙璧と言われた。パーシファエーと同じくコルクユスの出身で気性も特質も王后を凌いでいた。然かも王后の忠実な臣であり、ミノス五十二世に対する枷の効果も充分だった。

「解った、言う通りにする」

ミノス大王も陸上では、王后の言う俣らし。パーシファエーは始めて快活に笑った。

「悪い話はこれ位にして、次に慶事を述べさせて戴きます。途中迄進んで居りました縁談は御留守の間に全部纏まりました。陛下とわたしの間に出来た子供四人の内、三人が同時に結婚式を挙げるわけでございます。嫁二人と婿一人は既にラビリンス（迷宮）に到着致して居ります。陛下、直ちに宮殿へお入りになつて新しい子供達に御対面なさいますか。それとも港から工場、農園を御巡察になりますか」

王后は話題を転じた。大王も応じた。

「三日間休養したら次の航海に出る。冬季に入る前にもう一仕事出来よう。ミレトスに寄つた後、キリキヤ方面を巡航してフェニキヤ人の密貿易を取締つて来よう。故にあと一月は国内を見廻る機会もあるまい。半年ぶりでもあるし、今日は夕方迄巡察する事としてよう。案内致せ。国内の取締りは余の仕事ではないが見ておきたい。」

「承知致しました。」

王后の両側に一人宛、若い女性が立っていた。長女クセノデイケーと次女アカレーである。パーシファエーはその二人に命じた。

「アカレー、其方はアケーヤ人の奴隷をラビリンス（迷宮）の牢獄へ連れて行きなさい。」



陛下がお戻りになる迄監視するよう。調教は其方に任せるが、傷をつけてはなりませんぞ。クセノデイケー、貴女はグラウコス殿の御相手をなさい」

アカレーは今年十七才。貴婦人の中で彼女だけが本格的に武装していた。クレテ王国の特殊な地位か職を持っているようだ。王后にとって、一番気に入りの女性でもあった。グラウコスの海軍制服と同じ作りで赤紫色の胴着。赤革胴と青銅の胸甲を重ね、胸甲には金銀の薄板で蝶と百合を彫ってある。黄地に七彩の花鳥を描いたマント（外袍）。兜は馬尾を垂らした真鍮製。青銅の大剣を吊り、手には銀側に獅子面を表した楯と蛇桿の投槍を持っていた。

クセノデイケーは王后と同じような裾の広い衣裳から胸の隆起だけを露し、髪は沢山の捲毛にして高く結い上げていた。

パシファエーには、以上のグラウコス、クセノデイケー、アカレーの他にもう一人、三男のデウカリオンが居たが、海上勤務に出ているので此の場に来合わせていなかった。

王后が手を上げて合図すると、幕の隠に待機していたチャリオット（二輪馬車）が三輛舗装した石畳に轍の音を響かせながら現れ、

国王夫妻の前で止った。檜の車体。前額板は金の薄板と象牙で彫刻を施してある。車軸承は硬質の青銅鋼で、四本のや（幅）のある柳の車輪には金属のタイヤ（外輪）が巻いてある。（ホメロスの詩では八本のや（幅）であるが、発掘された実物は何れも四本だった）国王用のは銀のタイヤ（外輪）。他の二輛のは真鍮製だった。

各二頭の小さな馬が挽曳していた。驢馬より少し大きい位の馬である。併し紀元前十五世紀は未だ中央アジア種とアラビヤ種の交配が行われていなかったから、これが西方世界に知られた最良の軍馬で、且つ貴重な畜獣だった。野性から慣らされたばかりで、車を挽曳させる事は出来たが、人を直接乗せ得る程には大きくも従順でもなかった。轡と手綱に加えて鞍と鐙なる大発明が行われたのは紀元前八世紀であり、それが騎兵として組織化されたのは紀元前七世紀である。裸馬でも乗れない事はないが軍用にはなり得ない。本篇から三百年後に行われたトロイ戦争に於ても、ホメロスの謳うアキレスやヘクトルはすべてチャリオット（二輪馬車）に乗った「騎士」である。

チャリオット（二輪馬車）は本篇の時代に

於て最高速の交通機関だった。ボールベアリング発明以前の事とて、車体の軽量化も耐久力も不充分だったが、クレテ島内には舗装道路が縦横に走っていたから迅速な通信連絡が可能だった。戦時には重装兵を輸送する兵器たり得た。故に古代世界に於ける自動車でも飛行機でもあり、戦車の性格も僅かながら備えていた。その操縦士は現代の航空士官に相当した。

前提が長くなったが、これはチャリオット（二輪馬車）が高価で貴重である事と、それを運転する者が単なる馭者ではなくて、中世騎士にも比される社会的高位に属すべき事を強調したかったからである。さて、国王一家の前に止ったチャリオット（二輪馬車）の馭者台を見ると、驚いた事にその全部がアカレーと同年輩の女性だった。

貴族の娘である事には違いないようだ。軽い革鎧や裾の短い制服には、金糸の刺繍があり、頭には羽毛を飾ったヘルメット（兜）をかぶっている。革の編靴にも金彫が見え、揃いの短剣を吊り、同じ型の金腕環をしている。然も全員が優れた容姿と体格を誇る事が出来た。

アカレーは最後尾のチャリオット（二輪馬



車に乗り、槍と楯を傍の台に固定した。アカレーと同じ形の制服と武装をした兵士又は警官が八人現れた。華美な装飾がない点でアカレーとの区別がついた。半数は槍を持ち、半数は答を持っていた。この八人も亦女性だった。年齢は一定せず三十才近く見える二人は下士官級らしく、十五才位の少女も混っていた。王女アカレーが此の一隊を指揮した。

アケーヤ人の子供達を海路護送して来た軍艦の乗組員は、青色の制服を着た水兵で、これは男性だった。クレテ王国の社会は男の職業の方に但し書きを附けなければならないように、逆の構成みたいに思われそうだが、これが不自然でない事は後述する。アカレーの率いる一隊が、貴重な奴隷を陸上に引き継いだ。数珠繋ぎにされた七人の少年と七人の少女は二列縦隊に並べられた。アカレーと馭者のチャリオット(二輪馬車)が嚮導し、二人は前、二人は後について鎖の末端を把った。答を持った他の四人は両側に位置して警護した。十四人の犠牲者は南へ向う大道路を、衆目に曝されながら、曳かれ、追われて歩いて行った。

国王夫妻は先頭の豪華なチャリオット(二輪馬車)に乗った。ミノス五十二世が左側の

客席で、パースファエー王后が馭者台に乗って手綱を持った。他の一輛にはグラウコスとクセノデイケーが乗ったが、これも操縦するのは王女で、王太子は同乗者だった。

二輛のチャリオット(二輪馬車)は港の岸壁に沿って西へ向った。クノス外港の東半分は軍港で、西半分は商港だった。停泊している船。入渠修理中の船。荷揚中の船。動いている小舟。軍艦数十隻と商船数百隻。それに小舟艇がやはり数百隻。合計約一千隻の艦船が認められた。

港には倉庫が並んでいた。接岸した船は、或は荷を揚げ、又は積み込んでいた。解や交通船も見えた。半裸体の港灣労働者が荷物を肩に担いで運び、車に積み替えて送り、動滑車を利用した人力起重機を操作し、解の上でも本船の上でも働いていた。陸揚げされる荷物は金属素材、皮革類、穀物、麻の類が多く船載される商品は概して油や酒の壺、陶器、金属製品の如くだった。働いている労働者は皮膚、体格、髪色、年齢とも一定せず、諸地方から駆り集められた男達と思われた。而して、最も注目すべき事は、沖仲士や人足を監督する軽武装の者達がどうやら全部女性であるらしい点だった。

港の西端にはクレテ島脊梁山脈から伐り出された材木が集積されていた。此の一角は造船所とその附属工廠に当った。働いているのは奴隷達であろう。巨材を整形して竜骨や柱に加工し、桡や板や舵などの艤装品も此処で作られた。大釜には熱した瀝青が沸騰し、真黒になった奴隷がそれを掻き廻していた。これは塗料工場だった。艦底に張る銅板、碇、軍艦搭載用の重兵器、帆布のようなものから釘、旗綱具類迄一貫工程で作られた。その末端に十隻の大艦船を同時建造し得る船台があり、起工直後や進水直前等、種々の工程の艦船が見えた。造船所の続きに艤装工場があり、帆や碇や船内工事が行われていた。その外側の水面は試運転場だった。全部で数千人の船大工や職工が働いていた。その大部分は奴隷らしかった。棟領らしい者や職工頭のような者も少し見えたが、概して老人であるから、年期を務めあげた有能な解放奴隷の如くだった。その上に、粘土板に線図を引いた設計書を見較べる技師や、半武装の現場監督達が居た。何れも明色の短衣に軽いマント(外袍)を掛けた女性だった。

ミノス大王一行のチャリオット(二輪馬車)は幅百キュービットの舗装道路を南に向っ



た。途中何輛かのチャリオット（二輪馬車）と擦れ違ったが、何れも女性の馭者に運転されていた。十人位の卒と士官らしい嚮導者で編成された巡邏隊にも出会ったがこれも悉く女性だった。車も将士も一般の通行者も、国王一行を認めて道を避け、挨拶した。併しオリエント風の土下座拝礼ではなく、神性を備えた王に対するにしては親愛の籠った立礼だった。ミノス五十二世もその家族も愛想のよい礼を返した。

南方の丘陵から海岸迄、人工水路で正方形に区分された農場が広がっていた。作物は麦、葡萄、麻が多く、薄荷や胡麻の畠も散見された。高い土地は悉く橄欖を植え、低い所はすべて無花果の栽培地になっていた。農園には粗衣を着た奴隷達が働いていたが、これは港湾や工場と違い、全部が女性だった。クレテ王国では奴隷が一種の社会階級として存在し男は工業や重労働等の公共目的に使役し、女は家庭単位に分配して農業に従事させるらしい。

水路の補修に働いているのは男の奴隷だった。丘陵は果樹と潤葉樹に掩われ、遙か南には針葉樹の繁った脊梁山脈が見えた。これは造船に適したレバノン杉を含み、材木は水路

に依って造船所へ運ばれていた。処々に国内を巡察する士官以下十一人編成の女性警備隊の姿が見えた。

遂に首都クノススが見えて来た。市域は直径約二軒。古代最大の都市である。これを発掘したエヴァンスは建築物や設備を詳細に計算して人口八万二千と推定した。（エジプトの首府テーベが人口八万に達したのは二百年後の第十九王朝時代だった）此の重要な首都には当時の常識を破って城壁も城門も無かった。望楼も兵營も見えない。兵隊らしい者が何処にも居ない。武装した少数の女性が往還し、チャリオット（二輪馬車）が通行するのみである。これは軍隊と言うより警察だった。クレテ海上帝国はその強大な艦隊を以て外敵を寄せつけず、船隊を以て富源を海外に求めた。全島に財宝が満ちていながら、これを侵す外敵は過去二千年間現れなかった。軍事力は海軍のみで足り、国内の治安は女性の警官が居れば充分だった。

市の東と西は職人の住居。中央大街を挟む両側と南の一角は市場や商店。中央部は色大理石造りで二階・三階建の貴族邸宅が並んでいた。建築原理は他に見られない独得のもので、平屋根を中太りの円柱が支えていた。そ

して、市の北部、丘陵に接する所にラビリン（迷宮）と呼ばれる王宮があった。

宮殿の玄関にも、如何なる防禦施設もなかった。王と貴族と平民を区別するものは相対的なものに過ぎないらしい。門を守る者は甲冑剣楯弓槍で武装しているが悉く女性だった。それも王宮だけあって貴族の娘を、これに任じているらしく、容姿整い、体格優れた若い女性が揃っていた。

武装した者の数は決して多くなかった。クレテ風の華美な衣裳と軽い帽子を着飾った女官、女祭司、巫女其他一般婦人が宮殿にも邸宅にも商店にも見られた。男は余り見えなかった。すべての者が現世の快楽に満悦している顔をしていた。クレテ王国に於て、男は貴族も平民も冬の航海不適期間を除いて海外又は船上で働き、島の内は殆んど女ばかりになるようだ。

斯う書いた処で、クレテ王国が女護島か又は女権万能のM派向き社会と誤解されては困る。実にクレテ文明こそは新石器文明から直接に発達した最も原始的形態を留める文明だった。原始社会に於て、労働と管理は女性の担当であり、男性の任務は戦闘に限られた。（狩猟は広義の戦闘である）クレテ王国は二



千年間外力の歪曲を蒙らずに進歩し続けた。

斯して男は貿易と海軍に働き、それ以外の生産、流通、管理から行政、祭祠、司法、教育等のすべてが女性に任される社会が出現した。奴隷すら、男はガレスレイブ（桃漕奴隷）や工鋳業、女は農牧水産業と区分された。女性が家庭を守り、男性が外で働くのが自然の姿なら、クレテ王国はクレテ全島が一箇の家庭のようなものだった。全部の自由民が勤労義務を有したが、すべて楽しんで働いた。七百年後に発生したドーリヤ人の軍国スパルタが全国を一箇の兵営化したのと好対照である。而してクレテ王国の人口構成は海上勤務の危険や過労の爲、壮丁の消耗多くして明らかに男不足だったから、陸上に滞在する期間中、男は大いに尊重された。満五十才を越えれば海上義務を解放され、安楽な余生が約束されていた。以上はアンドレエヴァの説を多少潤色したクレテ王国の社会である。

「陛下。お疲れでなかったら競技場にお廻りになって、わたしの牛跳びを御覧戴ければ光榮に存じます。」

王后が言った。但しパーシファエーの依頼は常に強制だった。ミノス大王は同意した。

王宮に接して広大な競技場があった。数万

人を収容するに足る観客席に囲まれて、芝生と砂地を配した楕円形の空間が見えた。王后はチャリオット（二輪馬車）の中に冠も衣裳も脱ぎ棄てた。クセノデイケーが脱衣を手伝った。ミノス大王の后が下着一枚になり、裸足で地面に立った。併し不自然な風は少しも見せなかった。

「陛下は彼方の御席へどうぞ。クセノデイケー。木牛を出させなさい」

競技場附の管理者も、すべて若い女性だった。彼女達は巨大な木製の牛を運び出した。その四脚には車輪が附いていた。

「建築家のダイダロスは、このような発明にかけても天才です。この木牛のお蔭でわたしの牛跳びも上達しましたから」

パーシファエーは手足を拡げて身構えながら、高い観覧席のミノス大王に呼び掛けた。「憶えて居るぞ。その為に余がアツティカより連れ帰った娘の一人ナウクラテーを褒美としてダイダロスに遣したではないか」

「左様でございました。では先ず足慣らし」

競技場附の女性二人が車附木牛を全速力で押し進めた。パーシファエーは四十九才の年齢とは思えぬ敏捷な動作で木牛の額に飛び上った。と見る間に双角を掴み、脚を揃えて美

事な垂直転回を見せつつ牛の後方へ下りた。牛を押す二人の娘は、左右の脚の脇に居たから、王后の運動の邪魔にはならなかった。

パーシファエーは続けて三度跳んだ。体調充分と見たか、木牛を去らせ代りと呼んだ。

「黒莓を出しなさい」

ミノス五十二世が聞いて驚いた。

「待て待て。あの猛牛を出すと言うのか」

王后は笑っていた。

「陛下、御心配には及びません。わたしが牛に恋したという噂を生じた位に練習した相手ですから」

ヒブリオテーケー（希臘神話）では、パーシファエーが牡牛に恋し、ダイダロスに木製中空の車附牝牛を作らせ、王后がその中に入っていると、木牛を本物と思った牡牛が仕掛けて王后と交ったとなっている。その結果生れたのが人身牛頭のミノタウロスだとされているが、真相は解らない。

怒ると三度色が変わるという変種の大牛が曳き出された。古詩に、真鍮の蹄、青銅の角、日月の眼、火焰の吐息と譬えられたコルキュスの牛も、斯くやと思われるばかりである。その猛牛がパーシファエー目掛けて駆け寄った。王后はこれを間近に引きつけ、角を外し



ながら軽く頭を越えた。

「旨い、依然衰えてはいないな」

ミノス大王は感嘆した。王后は観客の三人しかいない広大な座席を見上げて微笑した。

併し二度目は跳び損った。身体が傾いて斜に落ちた。片膝ついた脇を牛角が流れた。

「危い」

ミノス三十二世は乗り出し、剣の柄を握ったが、王后は無事だった。場内係の娘達が八方から投縄を沿びせて牛を取り抑えた。

「年齢のせいですね、大祭の主宰は出来なくなるかもしれないせぬ」

王后は苦笑しながらクセノデイケーに汗を拭かせた。冷汗だったかもしれない。

「其方の技が拙いのではない。黒薔が野性に過ぎるのだ。オケツスス（海神）に捧げた牛でなければ射殺してしまうのだが」

王后は衣冠を着けながら、ミノス大王に見えないように笑った。此の演出でパーシファエーは二つの目的を達した。

産後二箇月のカルキオペーがこの牛に突かれて死んだのも無理はない。と王は信じた。

「陛下、矢張り年齢には勝てませぬ。牡牛の舞に主役を演ずる名誉は誰かに譲らなければなりませんまい。併し娘達は皆、他に職を求め

てこの神聖な踊りを覚えようと致しませぬ。

オケワヌス（海神）の受納し給う高貴と容姿を備えた者は一人しか見当らないのです」

「誰に譲りたいと申すのか」

「カルキオペーが死んで後に遺されたアリアドネです。オケクスス（海神）の巫女ですから牡牛の舞を覚えさせるに丁度良く、年齢も八才ですから申し分ありません。あそこ（娘）はわたしの手元に引取って育てるのが最も良いと存じますが」

「宮廷内の事は其方の専権に属する。よいように致せ」

「有難うございます」

王后は第二夫人の娘を手の中に握った。アリアドネの処分は思う存分に出来る筈である。

ミノス五十二世の一行四人は競技場から宮殿の正門に廻った。

金の牡牛と鷲が左右を固め、大理石の階段は幅百キュービット。高さ二十五段。その上にエンタシス（中太円柱）二百本が並んで四階建の宮殿を支えている。柱と壁は銀を張り破風は金板に宝石を飾り、扉は純金。敷居は青銅、鴨井は真鍮。柱と環は銀である。扉の表面は海草魚、貝、軟体動物を天然色で描いてあった。

チャリオット（二輪馬車）が止ると、百人の女性文武官が階段を下りて来て敬礼した。

その中央に、異国風の服装をした美青年が一人と、見分けがつかない程よく似た娘が二人居た。

「陛下、此の青年がクセノデイケーの婿にと撰んだシチリヤ総督の息子です」

王后が紹介した。

「土地を流れる河の名によってアシユナロスと申します。今年二十三才です」

青年は先ず国王夫妻に敬礼し、次いでグラウコスとクセノデイケーの兄妹に挨拶した。

大陸風の髯が少し生え、白のベブロス（長衣）を着て、髪は短く刈っていた。

「此方の姉妹はグラウコスとデウカリオンの嫁に迎えたわたしの姪達です」

「テミスキーラの女王ヒュツポリテーの娘、アンテイオペーでございます。二十才です」

「同じくメラニッペーで十七才になります」

二人を別々に説明する必要はない。姉妹は容姿も体格も服装も酷似していた。

単眼だが大きな瞳。高い曲った鼻。顔色は浅黒いが形よく整い、豊富な黒い髪はクレテ風に高く捲き上げないで、束にして後に垂らしていた。丈は高く、肩幅は広かった。輪割



だけ見たら男に見えるかもしれない。

白一色の短衣を着ていたが、クレテ風の胴着でなく、腰から下は襪になっていた。裾は腿の半ば迄で、腰を太い革帯で締め、八寸位の短剣を吊っていた。襟はないがクレテ風に胸を大きく開けず、代りに袖がなかった。従って腕の全部と脚の大部分が露出していたが何方も黒いながら艶があつて光っていた。ビリオテーケー（希臘神話）に於て黒海沿岸地方は幾多の特筆すべき女性を出した。アマゾン族の故郷はタナイス河（現ドン河）地方だし、女魔法使いのキルケーやメデイアはコルキユスの出身で、本篇のパーシファエー王后はキルケーの姉、メデイアの叔母に当る。コルキユスの位置に就いては数説あるが、筆者はタナイス河地方と同じものではないかと思う。その都テミスキーラはクレテ王国の植民地で現ハリコクの下流に当り、東方貿易の重要基地だった。ビリオテーケー（希臘神話）に於てテミスキーラがアマゾン族の都とされ、祭神がアルテミスと伝えられている事もクレテとの関係を暗示するようだ。

テミスキーラが何故重要な港だったか。それは単にドン河上流の毛皮を船載する港ではなかった。東方遙かに航海する為の中継港

だった。当時アゾフ海は東に長く腕を伸ばし

てカスピ海北部と連結し、カスピ海も北部に於てアラル海に達する水系を持ち、更にアラル海は東方に二本の枝を出してバルハシ湖附近とパミール高原の麓に及んでいた。即ち地中海の東にもう一つ広大な東地中海とも言ふべき内海があり、クレテ王国の船舶は此の海を通過して中央アジアの軟玉や馬を輸入する事が出来た。テミスキーラの王家はクレテ本家と代々通婚し、貴族男子は熟練せる航海者として知られ、女性は勇敢な戦士として有名だった。クレテ本国と違い、テミスキーラは四方の異民族に接した河口の島だったのが、女性を戦士とする原因になった。

「アシユナロスにアンティオペーにメラニツペー。何れも余の為に良い孫を生んでくれたが此の姉妹は余りよく似て居るので困る。何とか見分けのつくようにして貰いたい」

ミノス五十二世は、クレテ王国の習慣に従い、配偶の選定に関する母親の専権を承認した。但し此の結婚は王后の権限を極限迄上昇させた事になる。クレテ王国では国内及び家庭内の諸事すべて婦人の手中に属したから、パーシファエーは海軍と貿易以外の全権を各々二人の娘と姪を通じ掌握し得る立場にあつた。

た。

「クレテ王家の王孫はテミスキーラ王族の妃から生れなければなりません。なれど王子達が互の妻を取り違えては大変ですから、嫁達にはクレテ風の衣裳を作って見分けられるようにして遣しましょう」

パーシファエーは穏やかに言ったが言葉の中に針があった。ミノス五十二世ラダマンテユス自身が混血児であり、前王ミノス五十一世アステリオスがフェニキヤ王の娘エウローペを強奪して生ませたものだった。然も正統王子サルペドンを追放して王位を奪った僭王でもあった。此の二代経過すれば、千年の伝統を誇るミノス王位の実権がテミスキーラに移るかもしれない。

斯くの如く複雑な利害や野心が絡んではいたが、三組の集団結婚式は九日間に亘り盛大に行われた。ラビリンス（迷宮）全体。クノスス全市、クレテ全島が祝典に賑った。パーシファエーは数十人のオケツヌス（海神）巫女と共に牡牛の舞を踊った。

二日の後、ミノス五十二世は中座して東方へ出航した。三組の新夫婦とそれを囲む若い連中は宴遊を続けたが、王后は疲労と称して退出し、一人だけ結婚に預らなかつた末娘の



アカレーも警備の任務の爲と言って席を外した。母娘は打ち合わせてあった如く、競技場に現れた。

「アカレー、競技場の四門を固めなさい」

腹心の武装女性八人が四門を閉し、場内係の者も宮殿の宴席に追いやられた。

「母上様、旨く行きましたね。黒莓を相手に練習させられて、アリアドネはあとの位生さられるでしょう」

「技巧を施す必要もありますまい。自然に任せておけば望む通りの結果が出ましよう」

二人は惨忍な眼を見合わせて笑った。

「で、憎いカルキオペーを如何なさいます」

アカレーは剣の柄を握って言った。

「カルキオペーは牛に殺されたと陛下に申しあげました。嘘を通すのはよくありません。時間の前後はあっても言った通りに致しましょう」

パーシファエーは凄い含み笑いを見せた。

アカレーも意を察して頷き返した。二人は倉庫から木牛の一頭を運び出した。

「陛下を手管に巻いたアケーヤ女が此処に閉じ込められていたとは誰も知りませんまい」

舌の部分で鎌を外すと木牛の胸が左右に割れた。中からは幾重にも折り畳んだ肉塊が転

り落ち、微かに呻いた。何うやら生きているらしい。これがカルキオペーだった。

王后は足を揚げて蹴った。アカレーが蹴返した。三度折り曲げた人鞠は弾みながら転った。何の位の時間、木牛の中に入れられていたのか。

両手は背に高く縛られていた。足首も膝も揃えて縛られ、腹に押し附けるように太綱で締めあげられていた。首は前に向って足首と連結され、口には海綿が詰めてあった。亜麻の下着一枚を身に着けていたが背も裾も破れ果てていた。嘗ては輝くばかりだった金髪も汚れ損じ、転る度に頸や身体に巻きついた。

「此の蛮族女が陛下を誑かしたのですね」

「今日迄生命があった事を感謝するがよい」

本来は美しかった筈のカルキオペーの顔は汗と埃に黒変し、苦痛に歪んでいた。併し、体力の消耗と厳しい縄目は抵抗を許さない。

王后母娘に依って如何なる待遇が加えられたのか。裂けた衣の下には一面に赤い条痕があった。よく見ると手足の指二十本は根本から失われ、猿轡を締め直す際に開けられた口を見ると、一本の歯も残っていなかった。

「母上様。何故眼を見通されたのですか」

「自身の末路を終り迄見せてやるのです。ア

カレー。黒莓を出しなさい」

末娘は牛舎の方へ走って行った。王后は短い赤色のマント（外袍）を出してカルキオペーの背に結びつけ、足と膝を縛ってある縄を切った。

競技場の端に猛牛が現れた。アカレーが追いついた。パーシファエーは鞭を把ってカルキオペーの背を撻った。叩かれた女体が転ると、赤のマント（外袍）が地に翻えった。猛牛黒莓がそれを見た。視神経を刺戟された牛は猛然と駆け出した。

パーシファエーとアカレーは、素早く逃げた。走りながら嘲笑した。カルキオペーも危険を悟った。逃げようとしたが足が痺れて動かなかった。走りかけては倒れた。跳く度に赤色が踊った。牛は挑発され、且つ怒った。青銅剣よりも鋭い角が、真鍮よりも固い蹄が一直線に迫った。だが悲鳴も絶叫も猿轡に遮られて外部に洩れなかった。

パーシファエーは軽妙に観覧席へ跳び上った。アカレーは年齢の割に身体が重く、完全武装してもいたから、王后が手を貸して引き上げた。二人の眼の前でカルキオペーが転倒した。猛牛の巻き起す土煙が一切を包んだ。王后母娘は地獄図を見下しながら、は（爆）せるような高い声を揃えて哄笑した。

（続く）



# 〔最新版〕 女体悦虐写真集印画紙版

## G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身嚴重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しほり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しほりと浣腸器	(玉田)

G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しほり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる女	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しほり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)

G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカバー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胸絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)

G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に嚴重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺禪巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)



## 〔愛読者原稿〕

亜<sup>あ</sup>紀<sup>き</sup>子<sup>こ</sup>奇<sup>き</sup>譚<sup>たん</sup>麒<sup>きり</sup>麟<sup>りん</sup>児<sup>じ</sup>久<sup>ひさし</sup>

——(モデル五月亜紀子のことについてなど)——

## 一、五月亜紀子嬢へ

五月亜紀子が奇ク誌上に登場してから久しいが、読者はまだパンティを脱がされた彼女にも、その初々しい肉体美を本格的に緊縛された姿にも、切腹フォトにも、お目に掛けていない筈である。

奇クは絹川文代、大塚啓子、愛川悦子、遠藤百合子を始め容姿に恵まれたモデル嬢を誇っている。その他各嬢とも、いちいち枚挙に暇がない。しかし此等大勢のモデル中でも、その豊満な隆起、恰好のよさ、程よい大きさといひ——五月亜紀子の乳房が、筆頭と思うが諸君はどうであらうか。物に譬えるなら

ば、カメラを深く絞って、完全にピントが合った感じの乳房と言えよう。

また、その容貌も新鮮な美しさに輝いている。円顔豊頬で愛嬌のある感じの顔立ちに、いつもはにかんだように固い表情を浮べている。そこには、生娘らしい純潔さと気品さえ感じられる——その美貌は体と一緒に、いや彼女のすべてが私を魅惑しきるのである。

奇ク誌上で私が始めて彼女のおで姿に接した時——亜紀子は立ち吊りに縛られて、その豊かな丸味を帯びた魅惑的な乳房を公開していた。その胸乳と、やや薄い腋毛を見せたのを恥しがるように、彼女はあどけない円顔に困惑の色を浮べて、伏目勝ちにしていた。純

白のレースで飾られたパンティから、微かにおへそが覗いていたが、これはさぞかし美しく可憐であらうと想像するしかなかった。

その時、本屋の店頭で、私は異様なショックを受けた。胸が締めつけられ、指先が顫える——その感動は恋の靈感に似ていた。

それと同時に、どうしてもこれほど美貌と肉体に恵まれた女性が裸にむかれて、我等S趣味者の前に肌をさらさなければならぬか。もっと映画女優か、一流ヌードダンサーとして外に生きる道もあらうに、と私は新しい発見に狂喜させられる反面、何んとも表現し難い——散る花を惜しむ哀切の情。いやもつと、こうもやとした胸を掻きむしられるよう



な切ない気持を覚えたのである。

そしてもう一人別の私は、悪魔的な構図を想像していた。あの純白のパンティをむしり取って一糸纏わぬ裸体が見たい。——緊縛、木馬、鞭打、浣腸、排泄責め、乳房責め、切腹——あらゆる限りの責め苦によって嗜虐心を満足させたい。私はそう願った。

——その見果てぬ夢が、意外に早く実現した。私が今夏、南紀の勝浦温泉に遊んだ時の話である。

それを、私は「亜紀子奇譚」と名付ける。若し此処にエリザベス・テラーか、山本富士子のヌード写真があると云ったら、諸君の誰しもが、どれどれと膝を乗り出すであろう。そして直ぐ「何んだ、首のすげ換え写真か」と例えそれが本物であっても、そっぽ向いて信じようとしないう。そういう諸君はきつと「まさか、あの五月亜紀子が、あほらしい」と相手にしないかも知れない。私の貴重な体験談を信じようと信じまいと、それは諸君の勝手だが、一つ欺されたと思って、私の話を聞き給え。下手なストリップより、こっちの方がよっぽど面白いかもしれない。

## 二、洞窟泉の遭遇

その観光ホテルは、大きな天然洞窟に湧き出る温泉で有名であった。

昼間ならば、この岩窟風呂から、茫漠たる大平洋が一望できるのだが、その夜はすでに0時に近かったし、台風六号の影響で、あいにく南紀地方にも、お昼前から波浪注意報が出されていて、沖合いは真暗で波が高い。宿客も少なく、広さ三百坪という広大な浴場には、私以外に人影はない。

二流雑誌記者の私は、原稿を書き終った神経を鎮めようと常用の睡眠剤を服用したが、慢性になって一向に効き目がない。寝つかれない俚、夜の温泉に浸っていたのである。滾々と噴出する湯は温く新鮮で、身体の芯まであたたまる心地だ。私は快い睡りに陥り始めた。

沖合いは真の闇につつまれ、波音だけがすさまじい。ゴーと響く強風と一緒に怒濤が洞窟泉から三メートルばかりしか離れていない荒磯に当って飛び散る。その沙煙が温泉まで侵入して、うとうと夢見心地な私の意識を呼び戻した。

その時、岩道を伝う下駄の音がして、何気なく脱衣所の方を振向くと、仄暗い照明下に浮び上った浴衣姿の女があった。

此の風呂は男女混浴ではない。横に広い瓢箪形の湯舟を、背伸びすれば盗見できる高さだが、真中に数寄を凝した岩石を積んで男女を区別してある。

それを知るか、知らぬか、女は男湯の脱衣所でサッサと帯を解き始めた。

「もしもし」

声を掛けようとして、私はやめた。

広い浴場で十メートル近く離れて、薄暗い中ではあるが、遠目にもハッキリ判るほど、女は若かった。私の視線は彼女の立像から離れない。胸の隆起があくまで高く豊かなのが印象的であった。

私はこういう情景に接するの、湯治客の楽しみの一つと考えている。誰も居ないと安心し切っているのか、女は私に正面向いて脱衣した。慎しやかな立膝をして、肩からお湯をかぶると、静かに浴槽に身を沈める。潮騒いが途切れると、湧湯の音だけが快いリズムを響かせる。湯気に煙った中を、まろやかな肩から上を出して、女は私の居る湯口の方に近寄ってきた。

「アッ」

二人は同時に声を上げた。しかし同じ驚きでも彼女と私では意味が違っていた。心臓が



ときめき、知らず知らず言葉が出た。

「五月亜紀子さんですね——」

「エッ？」

名前で呼ばれて、亜紀子は俯向いた顔をあげた。彼女との間は一メートルと離れていない。男湯と女湯を区別する岩壁には等間隔に黄色やピンクの灯りが点いている。場内は薄暗いが、その灯りは亜紀子を見違えるほど暗くはない。

湯気の霧の中で私達は一瞬顔を見合せた。

亜紀子の顔には、明らかに狼狽と困惑の色があった。黒いつぶらな瞳が、盗見した私をなじるように一瞬険しくなつて、私を睨みつける。やがて直ぐ、恥じらいに耳たぶまで真赤に染めて、眼を伏せ、顔を外らせる。湯からはみ出しそうな豊満な胸元をタオルで隠し背中を縮めてしまった。

「夜の海は不気味で不安なものです。特に今夜のように荒れている時は」

私はこのきつかけの言葉が多少気に入っていた。つとめて平静を装って話し掛けたが、声が上わずって願えてくるのを、どうすることもできなかった。息が詰まって、照れ隠しに何度もタオルで顔をこすった。

亜紀子は顔を伏せたまま、返事をしない。

時々私の方を上眼使いに盗み見て、隙を窺っている。どうやって此の場を逃げ出そうか、それだけを思案している様子であった。緊張した顔から肩にかけて、私に対する不信と警戒心が露骨に感じられる。

しかし私は、気転をきかせて私の方から逃げ出す事もできない状態になっていた。先刻見た裸の映像に『五月亜紀子』という個有名詞が重つて——その稀少価値と幸福感が、私を去り難くさせていた。

——ここにいま奇ク読者の誰も見たことのない、全裸の五月亜紀子が入浴している。こゝも体の隅々まで、奇クの写真家だって知っているだろうか。

その想念と一緒に、私は亜紀子と時を過す歓喜に体中が慄えた。何か目には見えない力が、私の瞳を浴槽に釘付けしているかのようである。

確かに亜紀子は、写真で見た以上に若々しくて、美しい。想像していた以上にいま私の目の前にある乳房は、豊かに見事な隆起を見せて、タオルの下でひくひく起伏している。いまお湯の中に隠された白く丸々とした腹部も、生娘らしく適当に引締って悩ましい。肌身には馥郁とした色香が漂い、しかもそこに

は侵し難い神聖さがある。いま私の眼を逃れようと、固く閉ざしている緊張した全身の表情には、処女の生硬さが、それだけにひたむきな抗議の想いが窺われる。

私は妙に腹立しい気分になった。その裏面にはただ見るだけでは済まされない黒い欲望が恋慕の情となって内向していた。

「貴女を奇クのグラビヤで見た時、私は一目で愛してしまいました。実際、貴女は私が想像していた以上に、顔も身体も美しい。それなのに貴女はどうして我々のようなサド趣味がかった男達の前で裸になるのですか。貴女のグラビヤ写真を見て、男達がどんな欲望を抱くか、お考えになった事がありますか。貴女はもっと自分を大切にしなければいけません。といっても私には貴女にそう忠告する資格はありません。確かにさっき私は貴女の肌を盗見しました——ああ、そうして離れられなくなりました。どうか私を一生貴女のそばに置いて下さい。私は貴女の乳房を太陽のように、詩人のように崇めます。お願いです——どうか貴女の奴隷として奉仕させて下さい。私は生命も髪の毛一本に至るまで貴女に捧げます」

私は二十八才という齢も分別も忘れてしま



った。こうして文章にすると齒の浮いたような調子になるが、嘘偽りのない敬虔な気持ちで愛の告白をした。

その熱情に、亜紀子はいくらか気を許したかのようだった。顔を上げて、思い詰めた哀切な眼差しをして、私を睜める。突然やや受口の唇を開いた。

声は低いが、ヒステリックに叫んだ。「いえ、わたしは貴方が思っているよりうな女ではありません——わたしは、もうすっかり墮落してしまっています」

それだけ言って亜紀子は瞳を潤ませ、淋しげに唇を噛んだ。それでも胸の中のもやもやを吐き出したい劇しい衝動にかられたように、啞然として眺めるだけの私に向って、彼女は涙と共に悲痛な話を続けた。

「二日前わたしは或る男に、此のホテルへ連れ込まれて、思いの俤にされてしまいました。精力絶倫なケダモノのような男——その男にわたしは純潔を捧げてしまいました。それから昼となく夜となく身体を求められて、ああ恥しい浅ましい真似ばかりさせられて、今夜もまたそういう遊びの相手をさせられるのです。こんな汚れた亜紀子に、貴方の言葉は苦しみとなるだけでございます」

その時始めて彼女は自分を『亜紀子』と呼んだ。けがされた亜紀子……私の方でも声を挙げて号泣したかった。

「どんなご事情か知りませんが、貴女はそれで満足していらっしゃるのですか——そうとは思えません」

亜紀子は何んとも表情しようのない悲痛な顔をして、力なく首を振った。

「いいえ、つらくて苦しいばかり、一刻一刻が地獄です。いっそのこと舌でも噛んで死ねたら、どんなに幸福かと思えます」

私は亜紀子の手を引き寄せ、顔を覗き込みながら、強いしつかりした口調で言った。

「それなら、私と一緒に逃げましょう。私は貴女のためなら、どんな事でもします。若し貴女が、その男を殺せと云われるならば、そうもしましょう。亜紀子さん——勇気を出して下さい」

両手を私に委せたまま、亜紀子はうなだれた首を再び振った。

「そうできたら、どんなに嬉しいでしょう。でも、そうする事も、自殺する事もできない悲しい事情があるのです。どうかその事情はお訊ねにならないで下さい。わたしは五百万円という大金と引換えに、操も女の一生

も、その悪魔のような男に売り渡したのです。つい二日前までのわたしには、夢も理想も、心から愛する人もありませんでした。しかし、その人の前にも二度と出られない体にされてしまったのです」

感極まって、亜紀子は激しく嗚咽した。その咽喉を顫わせ、間歇的にしゃくり上げる絶望的の顔を見て、私は何を言っても無駄だと悟った。滅び行く者の美しい憂愁を、一緒に悲しんでやる事しかできなかった。

私は目の前が真暗になった幻滅の悲哀を味わった。更に続く亜紀子の言葉は、決定的に私を打ちのめしてしまった。

「どうかわたしの事は忘れて下さい。若し貴方が昼間、わたしを御覧になれば、きっと嫌になっってしまうでしょう。こうして夜の仄暗い灯りの下でお逢いできたのが、せめてもの幸せでした。わたしは昼間ではお風呂へも入れない体にされてしまっているのです。お乳にもお腹にもベツタリ毒牙の紋章をつけられて——咬まれたり、鞭打たれたおぞましい創跡が——わたしの事は忘れて下さい」

何か言い出そうとする私をさえぎって、亜紀子は淋しそうに微笑んだ。その眼にやさしく哀願をこめて、恥しそうに言った。



「貴方が亜紀子を愛して下さるなら、後生ですから、亜紀子がお湯から出るまで目をつぶって御覧にならないで下さいませね。貴方の睨の中だけに奇クの写真に撮っている奇麗な体の亜紀子を、そっとしまっておいて下さいね。いまの亜紀子は全然別人なのです。貴方の愛に応える資格も、お見せする自信もありません——ではお元気で、さようなら」

「亜紀子さん——待、待って下さい。私には貴女は、今でも天使のように気高く、美しいのです。どうして、どうして、そんな風に卑下なさるのですか」

「いいえ、いまの亜紀子には、どうせ男の思い通りにオモチャにされるなら——恥しがったり、泣いたり苦しみもだえたり、無駄な抵抗をするより、そういう世界に平気で身を委せることのできる女になればと願っています。——そういう風に身も心も割り切る事ができたら、こんなに苦しむ事もないのに——亜紀子にはどうしてもそうする事ができないのです」

亜紀子の告白に、私は何んとも居たたまれない、胸を抉られるような苦痛を味った。それは愛人をむざむざ人身御供に見送る男の心境というか——亜紀子が責めさいなまれるの



を知りながら、どう扱う事もできない口惜しさと絶望、自分自身に対する不甲斐なさ。その亜紀子の可哀そうな女心を想って、私の男心が忍び泣きしているのであろうか。

しかしその反面に、言葉の内容が妙に嗜虐心を刺戟して、私は抵抗し難い、黒いむらむらとした欲情と嫉妬に、身を焦がされる思いであった。その更に奥底には——どんなケダ



者じみた老人か知らないが亜紀子をそんな風に自由にできる男への羨望がひそんでいた。

私が両眼を開けた時、亜紀子の姿は、岩窟風呂から消えていた。

### 三、凌辱のあと

亜紀子の部屋は一晩中、電灯が消えなかった。

私は床に入っても先刻の興奮が悪酔いのように残って、寝つかれなかった。腕時計は午前二時を指している。私はカーテンを開いて窓を開けた。

やや荒れ模様の内海の向うに消え残った対岸の灯りが見える。いつもなら、その灯りがチラチラ映って揺れている波間に、一晩中漁船のポンポンというエンジンの音が絶えないのだが、今夜はそれもない。ほてった頬に汐風が快かった。

しかし、私の頭にあるのは海の夜景ではない。あの部屋——不寝番のフロント係からチップを握らせて聴取した三階の十号室には、カーテンも下していないのか。海面に窓明りが鮮明に映って、波頭にもまれている。それを眺めると思ひなしか、黒い人影さえ動いているようだ。

——いまあの部屋では何が行われているのか。若く美しい女奴隷と、その裸身にたわむれ、いじめぬく醜行によって、枯渇して冷えた血を若がえらせ、男の機能を取り戻して随喜している老人との組合せ。その光景は当然嗜虐的な様相を帯びて私に迫ってくる。

十号室は私の部屋から三つ隣の、叫べば聞える近きにある。いま亜紀子は泣きの涙で、どんな屈辱的な奉仕を、強要されていることか。必死に助けを求めながら。それなのに、私はただ手を拱くだけで、どうする事もできないのか。

三階の各部屋はいずれも二部屋から構成され、すべてバス・トイレ付きである。総ガラス戸の屋外には一坪ばかりのテラスがある。そこに忍ぶ事ができれば救助できずとも、何とか様子を知らずにはきよう。テラスは各部屋とも海面に突き出したコンクリートの側壁によって区切られている。だが手摺りにつかまって、精一杯手を廻せば、隣室の手摺りにかすかに指先がかかる。

私はあえて冒険をおかす事にした。亜紀子への愛情が、常識では不可能な障害を克服させた。そのために私は全身に冷汗を流し、掌を数カ所傷つけ、親指の生爪も一つ剥がした

が、慕情と緊張感に痛みは感じなかった。予想した通り窓にはカーテンはなく、室内の様子は手に取るように眺められた。

——畜生。思った通りだ。

一瞬心臓が止ったような衝撃を受けて、気を落ちつかせようと、生ツバを飲み込んだ。手前の寝室を兼ねた八帖の間には男の影はない。向うのバス付きの部屋で湯を使う音がしていた。八湯殿の中で、男は萎びた毛足を悠々と伸ばして、さぞかし御満悦している事だろう。その情景が、私にはハッキリ想像できる。

私は確かめる眼差しで、ゆっくり室内を見渡した。

部屋と部屋の間、鴨居には滑車を取り付けられて、長いロープが二本ぶら下っている。下の方は畳の上で纏れて、とぐろを巻いている。取り散らかった下着や、押しひがれたイチヂク浣腸の殻と、洗面器。まるめられて散乱した意味ありげな紙屑。大きな黒檀の机には、喰い荒された伊勢エビやハム・ソーセージ、チーズ、それに生のセロリとアスパラガスの缶詰。倒されたビール瓶やコップに、舶来品のウイスキー。灰皿には吸殻が一杯詰って、そこには吸い差しの外国煙草が一本くす



ぶっている。

そして八畳の間の約半分を占めるダブル・ベッドの上には、亜紀子が仰臥していた。花模様の豪華な掛布団は下にずり落ちて、枕は飛び、乱れたシーツには汗で人模様がにじみ出ている。亜紀子はまるで死んだようになつて忘我の境地にあった。

「バカ、馬鹿、亜紀子の莫迦者！」

私は声をあげて呪いたかった。こんなに気絶するほど征服されるなんて——。両脚は私の方にしどけなく投げだされている。

煌々と輝く電燈の下で眺める亜紀子は、岩風呂で彼女が告白した通りの肌をしていた。

亜紀子は一刻一刻が地獄だ、できれば舌を咬み切つてでも、死にたいと沈痛な調子で語った。

しかし、これは一体どういうさまだ。全身の表情から、亜紀子の言葉に不信を覚えた。

確かに彼女は気絶も、眠つてもいない。白い胸乳はかすかに鼓動し、けだるいように洩れる吐息。掌で眼鼻を隠し、時々わけざらした喉もとを引きつかせて、思い出したようにすすり泣きしている。

それにしても、この陶然と放心したような表情はどうしたことか？——老人の好みなの

か、毒々しい感じの橙色のルーージュは脱げ落ちて唇の地肌が覗いている。彼女はそれを誘うように薄すら開けている。雪白の美肌は、体内の火照りを発散するかのよう、悩ましい桃色に染まっている。全身にポツポツ吹き出して光っている汗——それは室内一面に散らばった責め具にいかにも感応し加虐の中で抗し切れずに老人の物となりきった随喜と諦念を訴えるかのようなものである。

私は抑え難い嫉妬と怒りを覚えた。

「亜紀子！」

大声を張りあげたつもりだが、私の背たけより高いガラス戸は部厚い。私の声は室内に満足には届かない。私は拳骨で力まかせに叩いた。

「アッ、貴方！」

長い夢見心地から醒めて、亜紀子は自分を取り戻したようだ。

「見、見ないで、ワッ」

亜紀子は咄嗟に大きなダブルの枕を抱いて無防備の裸身を蔽うと、髪を振り乱し、額をベッドに打ちつけて、慟哭した。

その狼狽ぶりと狂気じみた形相は、数刻前老人の前で見せた筈の痴態を、私に知られる屈辱——それを思い出して、そんな彼女自身

を呪う痛恨と、悔悟を、私に鮮明に感じさせるのである。

「亜紀子さん、一緒に早く逃げよう」

これまでの会話は、外気を遮断するガラス窓を透して、一種のパントマイムとしてしか双方に通用しない。

その時、亜紀子は一刻も早く私の前から身を消したい、はじらいの一念であつたと思われる。彼女はとめどなく歎息して、何んとも云えない悲哀な色を浮べて「いや、いや」と首を振る。前屈みの体に枕を挟んで、早く帰って頂戴と云わんばかりに合掌した。

「ああ、よい湯じゃった。亜紀子、お前も一風呂浴びんか。どうした、急に泣き出したりなんかして……」

隣室で湯殿のガラス戸を開ける音がして、御気嫌な様子をした相手の男が顔を出した。

私は男の顔を一瞬確かめると、冷いコンクリートのテラスに身を伏せた。しかし、そんな隠れ方では、老人が窓を開けずとも、寝室から立上って覗かれるだけで、発見される不安は充分あつた。

#### 四、寝ものがたり

私が勝手に想像していた老人像と、実物と



は大分印象が違っていた。老人には違いなかったが、彼の体から衰えは殆んど認められない。

名前も素性も判らないが、仮りに鬼頭老として置こう。彼には体力的にも金銭的にも相当な自信が窺われた。鬼頭は湯上りの体をベッドにどっかり腰を下すと、片手で亜紀子を抱き寄せ、片手で脂身の一杯ついたロースハムの塊りをムサボリ食っている。

鬼頭の体は色はあくまで黒く、湯に浸って茹蛸のようになった赤銅色の肌からポツポツと湯気が上り、いかにも健康そうである。それに肥満型の体は何処にも贅も弛みもない。齢は六十をとうに越えていると推定されるのに、老人特有の汚斑一つなく、頭こそ禿げ上ってテカテカ光っているが、その顔色は酒灼けして艶がある。

亜紀子が精力絶倫といった意味が解った。

鬼頭が命じたのか、亜紀子がガラス戸を半分ほど開けに来た。私は見つかるまいかと冷汗をかいたが、鬼頭は全く気づかず、悠然と構えている。亜紀子が再度立去るように必死の胸を送ってきた。——畜生、こうなったら

それで、室内の会話が明確に聞き取れる。

「嫌っ、わたくし、もう……」

「もう満足したというのか——そんな若いピチピチした体をしていて。いい耳の恰好をしているじゃないか」

嫌やがる亜紀子を強引に抱き上げてベッドに運び、二人で寝ものがたりが始まった。

亜紀子は、その膝に老人のテカテカ光った頭を載せて、耳の孔を掃除している。

鬼頭は決よげに眼を細めながら、

「こうして眺めると、わしも齡甲斐もなく、ひどく痛めつけたもんだな。悪く思うなよ、

亜紀子があんまり美しすぎるからだよ」

そう云って鬼頭は、手を廻してヒップから背中一面の条痕となった鞭創を調べるように指さきをからませる。

「アッ、ツツー痛い。どうか手をおどけになって。そんなに見詰められると、亜紀子、どうしたらよいか、ただ無精に恥しくて……」

鬼頭は一段と上気嫌になって、

「ハッハ。可愛い奴だ——自分で痛めつけた疵跡を見るのもよいものだ。最初はある手にこずらせたお前が——ついさっきの変り様はどうだ。自分から夢中で悩ましい声を出しおった。お互いに離れられない仲になったんだ。今更恥かしがる事もあるまい」

「嘘、嘘です。でたらめばかり云って」

「そうして、むきになって弁解するのが、何よりの証拠だ」

鬼頭の手が何か悪戯をしたらしい。亜紀子は、さもけがらわしいという風に顔をしかめる。それでもされるがままに身を委せていたが、突然声を高くして、悲痛に叫んだ。

「ああ、もういやいや、もうたくさんです。

あの時は、わたしの背中やお尻のムチ傷がシートで擦すられて、痛くて痛くて、ああする外はなかったんです」

そこで鬼頭は、亜紀子の膝の上で禿頭を回転させて、別の耳を掃除させる。

「フッフ、それも仕方なからう。その御奉公も、五百万円の身代金中に入っていると思えば我慢もできよう」

九月の声を聞くと、夜はさすが南紀海岸も冷えこみ、特に今夜のように荒れ模様な天候だと悪寒を覚える。コンクリートに接した下腹部に鈍痛を覚え、風邪でも引いたか、頭痛がした。——それに引き換えて、色魔の狒狒爺め！すっかり大名気取りでいやがる。

私の胸の中では激憤、嫉妬、羨望、欲情、そういう感情がドス黒く渦巻き、室内の老人に狂暴な殺意を覚えた。



諺に敗軍の將、兵を語らずとか。数分後、私が不甲斐なく鬼頭の手に乗縛された事情については、女々しい弁解は言うまい。一時は私が優勢に立ち、坐椅子を鬼頭の脳天めがけて振り上げた時、亜紀子が私に取りすがって「許して、殺さないで」と懇願した。その一途な瞳には、操を捧げた男に対する情愛に似た感情——愛情の裏にある憎しみ、憎しみの裏にある愛情、その紙一重の微妙な感情が潜んでいた。その顔を見て、私は完全に闘志を失ない、膝からガクガクと崩れ落ちた事を附言したい。

とにかく、そうして直径二メートルほどの黒檀の円卓を裏返しにして、四本の足に四肢を縛り付けられて、仰臥させられてみると机も意外な重量があつて、裏返された亀のように立上る事もどうする事もできなかった。口には亜紀子のパンティを詰められ、ホテルのタオルで猿轡されて、私は怨めしげに、声にならぬ呻きをあげるだけで鬼頭の意の尽にされてしまった。

逆上した鬼頭は簀巻きにして海に投げ込んでやると脅したが、これは亜紀子の取りなしで許された。しかし、その代り一層つらい屈辱を受けねばならなかった。

「亜紀子、この男を裸にするんだ。さあ、何をグズグズしている」

反射的にためらい、逃げ出そうとする亜紀子の髪をわし掴みにして、鬼頭は私の上に押しつけた。鬼頭は、直感的に私の彼女に対する愛情の深さと、亜紀子の方も万更ではないと邪推したようだった。忽ち老人特有の執念深い嫉妬心を燃やして、颯に青筋を立てる。亜紀子は真赤にした顔を外らして顫える指先で堅縛された私を裸にしていた。

「こら、目を離すな」

それから老人の陰気な笑いが、天井に反響した。

「フッフ、そら、亜紀子、よく見てやれ——上品ぶった正義づらをしていても、この若造も、わしと同じ男だって事が判っただろう」私は屈辱に手足をバタつかせ「殺せ殺せ」と猿轡の中で、言葉にならぬ呻き声をあげていた。

## 五、鞭打の催淫剤

「亜紀子、その戸棚の中に昼間、女中から借りて置いたスリ鉢と播粉木がある。トロロ芋とニンニクも入っている。芋は洗う必要はない。ニンニクと一緒によく下ろすんだ」

亜紀子は上眼使いに鬼頭の顔を窺って、不審げな顔をした。

「フッフ、今に判るよ。トロロ汁とニンニクに鞭と若い美貌の裸女。新しい遊戯が始まるんだ。その間にわしも答の手入れをしておこう。どうだな、わしのムチ打の味は……」

「亜紀子には、痛くて苦しいだけです。いまでも身体中がヒリヒリして灼けるようです。だけど御命令なら——」

「ハッハ。五百万円の魅力に眼をつぶろうというのか。悲鳴と一緒にのた打ち回る肌身を鞭打つのもよいが、それでは寝床の中で女の喜びを知らぬ女を抱くのと同んなじでつまらん。たまには毛色が変わった、ムチ打ちに喜び泣く——亜紀子の姿が見たいのだよ」

「だって、そう言われても、わたし……」  
「まあよいわ。黙ってトロロを下せ——それはな鞭打の催淫剤なのだ」

何んの事かサッパリ判らないと首をかしげる亜紀子に向って、ベッドの上から鬼頭は煙草の煙を吹きつける。

「お前だって催淫剤くらいは知っているだろう——マムシとかホルモン焼、朝鮮人参などそういう特效があるが、それは飲むんじゃないぞ。播鉢一杯にトロロ汁が溜ったら、そいつ



を身体中に塗るんだ。そうすると亜紀子の身体中がムズ痒くなって耐らなくなるんだ」

耳を傾けて聴入っている亜紀子の顔が、はじらいと恐怖に引きつるのを、鬼頭はさも面白そうに眺める。

「そんな怨めしそうな顔をして、俺を睨むなよ。そうすると、あっちこっちが火照り出して——つまり催淫剤の効果が始まる。亜紀子は一生懸命こらえようとするが、段々辛抱し切れなくて、早く早くと笞打ちを手を合せてせがむようになる。その時の亜紀子の姿が目に見えるようだ。その催淫剤のトリコになったお前を、わしがこの鞭で慰めてやるんだ」鴨居からは滑車がロープをからませて取りつけられてある。その時、亜紀子はこういう恰好にされて、鞭を受けるか、私はよく理解できた。

「ム、ムウ、ウウ」

「バカヤロウ。貴様に聞かしているんじゃない——変な唸り声なんか出しやがって」

怒声と一緒に、机の足に磔にされた私の胸に鞭が飛んだ。細く軽いしなやかな笞だが、肌に巻きついてシュツとしごかれると、灼熱の痛みと一緒に皮膚がパツと割れて、鮮血が迸ったのである。

「亜紀子、よく見るんだ。これは秘蔵の特殊な鞭だ——軽くて細いが使い方によってはカミソリのようによく斬れるのだ」

おそろおそろ鬼頭の顔色を覗いて、亜紀子が腰を上げ、私の鞭創の手当に駆けつけた様子を見すと、その目前に制止の鞭打ちが鳴った。

それだけで軽い悲鳴を上げ、亜紀子はおびえたようになって、笞が走った場所から一瞬身をずらせる。豊かな胸を抱いて慄えている彼女に向って、鬼頭は滔々と説明した。

「この鞭はな——わしに処女を捧げた女どもの黒髪で編み上げたものだ。それに生ゴムを加えて適当な重みと弾力がつけてある。ゴムが伸びて身体にまつわりついたところで、引張ると髪の毛が柔肌を斬り裂くのだ。八処女号Vと名付けた秘蔵の鞭だ——この黒髪の本一本に生々しい処女の思い出と、わしに初物を摘まれた女の執念や愛憎、怨みが籠められている。亜紀子がトロロ汁で燃えたところ——一つこの笞を受けてみるか！」

「いやっ、そんな恐ろしい鞭で亜紀子を……もうこれ以上いじめないで。亜紀子——ほらもう身体中が、こんなに蚯蚓服れになってお尻のところなど、まだ血が出ているのよ、こ

れ以上、そんな笞でぶたれたら、亜紀子本当に死んでしまう」

「フッフ、心配は無用。催淫剤のお蔭でいまにお前の方から、ぜひにと懇願するようになる。さあ精を出してトロロを下ろせ」

そうしてこの老人は、また新しい処女号を編み上げようというのか。

奇ク読者の誰もがまだ見た者は居ない恰好で、亜紀子はトロロを下している。無防備な内腿にスリ鉢を抱くように挟んで、泥まみれのトロロ芋を底で擦すったり、ニンニクを投げ入れて、スリコギで押しつぶしている。

鬼頭はベッドの中で阿呆枕をして、その先を楽しみにして北叟笑んでいる。時にスリ鉢の中を覗き込んで——頭の毛と顔の外は全身にくまなく塗り込むんだ。と言ったりして氣勢を上げていた。

「もうそれ位いでよかろう。少し醤油と水を入れて薄めておけ。ついでに胡椒も入れてなピリッと辛くて効果が一段と挙がろう」

自分でも起き上ってきて、鬼頭はスリコギで中身をこね廻し、溶き加減を調べる。ついには指先を入れて毒味して、

「丁度いい味だ。ニンニクと胡椒がピリッと効いて塩辛い——こりゃ強力催淫剤だ。さあ



スリ鉢ごと亜紀子の物だ。早く身体に塗り込むんだ」

「そ、そんな——ハ、ハイ……」

返事だけはしたが、嫌悪の念を顔一面に出している。亜紀子は瞳を曇らせて、哀願するように鬼頭を睨める。それを有無を言わさぬ非情な眼で睨みつけられて、スリ鉢にそっと亜紀子は指先を入れた。

「さあ、掌一杯にトロロを掬え——それでまず乳房から塗りこめろ。いいか五百万円も出してわしはお前を買ったんだぞ、もっと嬉しそうな顔をせんか。たっぷりねだくって——乳液かオーデコロンでマッサージする要領でやるんだ」

しかし亜紀子は、益々畳にへばりついて、離れようとしない。若くて美しい女奴隷が御主人の折檻に慄き恐れて平伏しているかのようである。背中を極度に丸めて裸身を隠し、そうすると自然ヒップが持ち上って丸出しになる。

両掌で掬ったトロロ汁だけは、ほんの少しでも肌身につけまいと、蹲んだ両手を鼻先に差し出している。まるで生きた小鳩でも両掌で囲むように後生大事に捧げて、首をねじって横から上眼使いに、睨んで見物している鬼

頭の顔を凝視している。

その白眼になった亜紀子の黒瞳には、万が一にも許されないかという、真剣で哀切な祈りが籠められている。

しかし亜紀子は、そういう屈辱的な姿勢や哀願の表情が、更に一層男の嗜虐心や征服欲を増進させる事に気付いていない。

## 六、トロロ汁の化粧

トロロ汁の色と感じが、亜紀子に或る種の連想を抱かせるのだった。それは女にされてしまった時の口惜しい思い出に繋がる。それで乳白色に輝く美肌をけがす事は、女にした鬼頭の征服感を、一層満足させる事になりはしないか……。

亜紀子は蒼ざめていた頬がひとりでに上気して、屈辱と口惜しさに唇を噛んだ。

その悪感、肥溜に裸身を首まで漬かる恐怖である。思わず鼻をつまむ。胸が悪くなつて自然胃袋からこみ上げてくる吐き気。毛穴の一つ一つに侵入してくる汚物の生暖い湿気と感触——亜紀子には、掌の中身が一瞬変化して黄褐色の糞尿に見えてくる。

果してそこまで鬼頭が計算し尽していたかどうかは疑問だが——、感じ易い亜紀子はス

リ鉢の内容物から、そういう過剰な受け取り方をしてしまうのだ。このドロドロネバネバと糸を引く液体が、縄やムチ、木馬より一層恐ろしい拷問具に思われてくる。

——諸君は私の表現をオーバーというか。それなら夕餉の前に、諸君自身がトロロ汁の中に掌を入れて見給え。何んなら君の妻や恋人を裸にして同様な実験をして見給え。君の妻や恋人がどんな反応を示すか。どうだ、そう想像しただけで、諸君はもう身体中がムズムズと痒ゆくなってきたであろう。

鬼頭は荒々しく、亜紀子の手首を掴んで引き起す。亜紀子はそうされると両掌の中身がこぼれてしまうので、首をのけぞらせ、いやいやをしながらも、ズルズル立上がらされてしまった。

「いやっ、いやっ、ひどいわ、こんなものをあんまりですわ」

それでも鬼頭から強引に掴まれた両掌を乳房の谷間に押しつけられると、亜紀子はもう仕方がないと観念と嫌悪の入り混った表情をして、自分から合わせた両手で乳房を下から抱くような姿勢をした。

——奇ク誌上随一の乳房の持主である五月亜紀子が、その魅惑の隆起を抱きながら、い



かにもいやでいやで耐らないという風情で、自らの柔肌にトロロ汁を塗るといふ受難図は痛ましいというか、何よりも悩ましく、妖しい光景であった。

最初に亜紀子は胸の谷間で組合せた掌を解くと、左掌で凹みをつくってトロロ汁を溜め右指四本に白い粘液を掬くって乳房をもみ上げるように塗り始めた。

何処かあどけない顔の残った円顔をちよっ

とかしげるようにして、伏目勝ちに亜紀子は高く反り返った乳房を見詰めている。左指の隙間からポトポト音を立ててネバネバした雫が落ちる。いまは涙も枯れ果てて、時々クツクツと思い出したように声だけで嘔り泣いている。

「乳首も忘れるなよ」

白い粘液質は摩擦されて、細かい泡沫となつて乳房に附着したのもあるが、大半は雫や

## 女性切腹（時代篇） 絵巻

### 四馬孝画

略号（えま2）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求めて、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものです。今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

## 女性切腹（現代篇） 絵巻

### 四馬孝画

略号（えま1）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を発表して斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やし、うら若き現代的な女性が絶対絶命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定して、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿態を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

筋になって、畳に敷いた大きなビニール布の上に流出している。その跡がナメクジが這ったような何本もの縞になって、亜紀子はそのむずむずする気持の悪さに、全身を小刻みに慄わせて、耐えている。

「そろそろ催淫剤が効き始めたかな。スリ鉢には未だこんなに残っているぞ。今度は脇腹だ——フッフ、わしは頭と顔の外は全部に塗れといった筈だぞ、その可愛らしいヘソにもよく擦り込んでおくんだ」

「ああ、そんな——お乳だけで許して」

手を合せていくら頼んだところで許してくれる相手ではない。再びうずくまってスリ鉢の中味を掌一杯に掬い上げると、鬼頭が熱っぽい視線を注いでいるヘソを中心とした腹部に恐いものにも触れるように、塗り込んでいく。

「何をグズグズしてるんだ、よく毛穴に透み通るまでマッサージするんだ」

私は二メートル位離れた場所に仰向けに緊縛されて、奇ク誌上ではいつも純白のパンティに隠された下腹部に、残酷な化粧が施されていくのを、下から眺めていた。

それはヘソ穴を中心にポツテリふくらみ、丸々と美しく豊満だが、下腹によくある贅肉



が一つもない。柔かそうで掌に吸い付きそうに肌は白くて細い。それでいて引締った感じの娘らしい清純な腹であった。ヘソ穴も形よく凹んで、一段と腹部全体の美観と惱殺的な効果を形成している。

首から臍、爪先までコッテリと白く塗り上げると亜紀子は——これでどうでしょうかと含羞の色を瞳に浮ばせて、少し媚びるように鬼頭の顔を覗き込んだ。

「約束通り顔だけは勘弁してやろう。だが、何度も言う通り、わしは全部だといった筈だぞ——」

鬼頭は意地悪く眼球を輝かせる。

「いやです。そ、そんな事、死んだって、できません」

カッと眼尻をつり上げて亜紀子は鬼頭を睨みつける。白眼になった瞳には、恐怖と憎悪が激しく燃え上がっている。

氣持が鎮まると今度はしゃがみ込んで、トロロにまみれた掌を顔に当てて、しくしく泣き出した。

「ハッハ。そうムキになるな。亜紀子が柳眉をさか立てて怒るとこなど、一段と艶めかしいわ。よしよし最後の仕上げと、背中とお尻はわしがやってやろう。——それも頼まれられ

ばの話だな。それとも、いやなら自分でやるか——イッヒッヒイ」

からかい半分に、捕えた鼠に猫がじゃれるような調子で、鬼頭は涕涙する亜紀子の背中に、軽い鞭打を加えた。

「——アツ、ヒイ」

「どうだな、今度は、この処女号で本当に柔肌を引き裂くぞ」

「アツ、で、では——お願いします。背中とお尻と、そ、それから……」

「それから何んだ」

「それから、もう言えない。いやっ、赦して前、前の方も是非お願いします」

「よし、それでは其処に四つん這いになれ」老人は亜紀子に悲鳴を挙げさせては悦に入っている。

鬼頭は老齡なのに、片手だけでスリ鉢を軽々と持上げて、ヒップに、少しずつニンニク臭いトロロ汁を流し始めた。

「ア—ア。氣持が悪い——」

「コレ、そんなにあばれてはいかん。じっとしておれ。」

「アツ、アツ。身体中がムズムズして痒くて痒くて——ね、お願い、もうトロロ責めは、これくらいにして……」

本来白い筈の粘液質が酸化して赤褐色に濁ったのが、ポトポトと雫になって、両脚の間のビニール布に落下する。

その耐え難い悪感と痒みに、彼女は顔をしかめ、トロロの衣を纏った肌は全身ブツブツ鳥肌立っている。

「さあ、残り少なくなったぞ。これは最後のスペシャル用だ」

「亜紀子、もう結構——氣味が悪い。痒くて、痒くて、止めて止めて」

ついに忍耐の限界が来て、亜紀子はビニール布の上からトロロ汁をネバネバ引摺りながら、泣声を挙げて逃げ出した。鬼頭も両手を拡げて中腰の浴衣の膝を引きづって執念深く追いかける。

重い机に仰向けに縛り上げられた私の視界には、二人の様子は見えなくなった。しかしそれから数分間、部屋の片隅では亜紀子の長く尾を引く悲鳴と鳴咽。

鬼頭の苛立しげな叱咤や鼻にかかったなだめすかすような口調。彼特有のイッヒッヒという忍び笑い——それは重なり合った音声として私の耳に届いた。それは見る以上に、二人の間の淫戯を私に想像させるのであった。

(続く)



## 【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

## E組百花選

大手札印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 12	逆エビにもだえる (大塚)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	厳重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	臍そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけたれた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ (東浦)



## 浪江大五郎

△悦虐絵灯籠（その十三の三）▽

万田不仁

☆

芝居茶屋藤尾の離れ座敷で脇息によつてい  
る大柄な美女にかしづくようにして酒をつい  
で「ほんに、今夜は秋らしい爽やかな晩でこ  
さいました。つたない私の芸をごらん頂いて  
ありがとうございます。うけたまわりますと  
浪江さまは、お酒はいささかお強いそうで、  
ハハハハ」

と、辞を低く、こびるしなを作った大島大  
五郎。広東織の着付に小紋の羽織、モールの  
帯をしめている。白粉を落としたあと、薄く  
化粧をほどこした女のような顔の何とも言え

ず艶やかさ。

「これ、大五郎、ぶしつけなことを申上げて  
はならぬ。しかし浪江さま、この大五郎も今  
度の狂言『神靈矢口渡』のお舟の役で、だい  
ぶ男を上げたようでございます。どうかこれ  
をしておに何分ごひいきに。ほかのお女さま  
がたにもよしなに……へへへへ」

傍から脂光りのする広い額に手をやり、気  
味悪いほどの低い、猫なで声で物を言うの  
は、両国の小間物商長崎屋吉兵衛である。

浪江はただ頷いて盃に唇をつける。

浪江は元来芝居好き。が、父親が永年の労

咳で手許が苦しく、他の女中たちが宿下りの  
折りに芝居見物を楽しむのを唯羨むばかりだ  
った。吉兵衛は浪江の芝居好きを知って早速  
一席招待したのであるが、彼は浪江から厳し  
い奢侈の禁を犯す絹物や金銀鼈甲、貴金属類  
を買っている。それは浪江が穆翁から女相撲  
や盲人との組討ちで拝領した品々で表向きは  
禁制品でもともと贅沢好きな江戸の富裕な家  
の娘たちがひそかに買い求めることまで止め  
ることはできなかった。極端な奢侈禁令は所  
詮下は江戸の庶民にも、上は大奥の女人たち  
にも憎まれるだけだった。

「浪江さま、この大五郎は、芸の方も仲々に  
上達して人気を集めておりますが、女にかけ  
ても相当な者らしゅうございます。ひとつ今  
宵はぐつと碎けて下世話の話などお聞きくだ  
さいまし、武家のご奉公のかた苦しさ、たま  
にはよろしゅうございましょう、へへへへへ  
……いや、これははや永原さまのお嬢さまに  
私としたことがとんだ失礼を、へへへへへ、  
年甲斐もない、汗顔の至りでございます。へ  
へへへ」

吉兵衛は押れた物ごしで浪江と大五郎を等  
分に眺めて卑しい笑い声。

浪江は久々の芝居見物は楽しかったが自分



を見くびっている吉兵衛の態度が腹立たしく  
てならぬ。禁令の奢移品を買ってもらって父  
の薬代を捻出しているのがこっちの弱味で、  
腹も立てられぬ。それにひいき役者の大五郎  
を招んで、何やら取りもとうとするような氣  
配も面白くない。吉兵衛は知らぬようだが、  
大五郎は穆翁に招かれて、浪江たちの女相撲  
や盲人相手の姫御前のあられもない組み合い  
もつぶさに眺めている。それに何時か夏のこ  
ろ板倉周防守の屋敷の三階から穆翁の遠眼鏡  
を借りて見た光景。あの二匹の美しい蝶の戯  
れと言えはきれいでだが、二人を知ってい  
る身には生々しくも妖しい、みだらな男女交  
歓図が今も脳裡に鮮かに蘇ってくる。

——萩路の食い荒したあととぞ……。

苦い微笑が自ずから唇辺に漂う。

「いや、浪江さま、てまえ只今用を思い出し  
ました。どうかごゆっくり、お帰りの駕籠は  
申しつけてございますから。これ大五郎、精  
々ごきげんを取り結ぶのですぞ」

程よい頃と見たか、吉兵衛は立派な金の象  
眼入りの煙草入れをしまつて座を立った。

「ああ、どうもあの長崎屋のご主人は口やか  
ましい方で、よく何かと叱られます。さて  
さて浪江さま、ごゆるりと過ごさせられませ」

うるさい親爺が居なくなった気安さを露骨  
に顔に表わして、大五郎は浪江の傍ににじり  
寄った。開いたままの狂言の絵本のけばけ  
しい色がこの場合、彼の心をそそる。

「ハハハハ、そう手前をさげすむ目でごらん  
なさいますナ。私はそれ例の女相撲、それに  
あのおめくら衆を相手どった男まさりの力わ  
ざ、いやもうお勇しいことで、私のような非  
力な者は本当に敬服いたしております。穆翁  
さまもおよろこびでございましょう。あなた  
さまはお女中のなかでも分けてお強い。この  
間の何とか申しましたナ、座頭の、それそれ  
秀の市、あれなど実に屈強な男でしたが、そ  
れが、ハハハハ、浪江さまのお尻に敷かれて  
気絶したさまなど、あれが力自慢の座頭とは  
思えぬほどの力の違いでございましたナ」  
「そんな話はよしなさい、主命だからするも  
の、あんなことは恥ずかしいことじや」  
「いや、おそれ入りましたでございます。しか  
し、お話に聞く板額、巴などの勇ましさを思  
い描きます。それに何と申してもお女中は禪  
いっばん、またなまめかしいことで」  
「だまりなさい。そなた私をなぶる気かえ」  
「いえ、いえ、とんでもない。私はただ穆翁  
さまのお招きで、めったに見られぬお女中同

志の相撲や、盲人との一騎討を拝見できる果  
報を喜んでおるのでございます。あの秀の市  
という男も五人力の荒療治なぞとうそぶいて  
いたそうで——。でもまあ浪江さまの柔の一  
手で投げつけられ跳ねおきようとするところ  
を綴子の禪をしめた浪江さまががッと馬乗  
りに……」

「もうやめぬか、大五郎、無礼じゃぞ」

「ハハハハ、これは、これはお怒りとは恐れ  
いります。いや、なに大五郎も男冥利に、い  
ちどくらい浪江さまに投げつけられ、いたぶ  
られてみたいと時々へんな気持ちになるので  
ございます。したが、あなた様のような美し  
い方に、ああして馬乗りで責められてみたい  
などと考える男も世間には、まああるもので  
ございますよ、フフフフ。」

「ばかナ。私は本当はあのようなあられもな  
いことはしたくないのじゃ。じゃが……」  
「お父上のご病氣のためでございましょう」  
「そなた知っているのか？」

「ハハハハ、吉兵衛さんに伺っております。  
ご禁制の品々をひそかに売り買いする者があ  
ることは御奉行所でもかねて御存知とか」

こう言つて、大五郎は伏目のまま、膝を進  
めて浪江の膝近くすすんだ。

「浪江さま、私は前からあなたさまをお慕い



しておりました」

女形は、町家の浮気娘を口説きなれたやり方で、しかも相手の弱味を握っている心強さから女に言い寄る階段を一段も二段も飛び越えた性急な仕方であつていった。

「ええ、身のほど知らずが、私はもう帰る」  
しつこくまつわりつく大五郎をふり払って浪江は座を立つ。つきのけられた大五郎はよろめきながら行燈の灯をふっと吹き消した。

「浪江さま、浪江さま」

暗がり到大五郎のこびを含んだ声。と、どたりと人の倒れる音がして

「げえッ」と、大五郎の悲鳴。

☆

穆翁は不興だった。

市村座の女形大島大五郎が推挙した神田の座頭源心という大男が萩路と勝負を前に俄に腹痛を訴えた。こやつおじ気づいてけ病を使ったと思ひ、無理に組ませたところ、ひとたまりもなく萩路の膝下に押伏せられ忽ち目を白黒させてのびてしまったからだ。源心はその前には時絵といううら若い女中を見事に組伏せて悶絶させているだけに穆翁は小気味よい女責めの場面を期待していたのだ。彼はもう女中が盲人に勝つ光景は見飽きていたし、

本来彼の胸の裡にうづいてゐる欲望は若い女が逞しい盲人の力わざに責め、しいたげられる無惨絵にあつたのだから、急に闘志を失つた源心の胸のうちは計りがたいと共に肝癪にもさわつた。

「よい、よい、源心がやらねばよい、面白い座興がある。大五郎、汝、裸になつて、まわしひとつで萩路と戦え」

大きな声を出した。房事と飲酒をできるだけ慎むよう侍医から云われている穆翁の永い間の不健康な生活で疲れた頭は濁っている。何か刺激を求めずにはおれないが、刺激を与えてくれるものは、亦すぐに飽きのくるものである。

「ど、どうかご容赦を、手前は役者でございます」

大五郎の哀訴が穆翁に受け付けられる筈もない。老女にうながされて彼は追剥ぎに会った優男ながら忽ち白羽二重の褌一本の姿にされてしまった。

穆翁のよどんだ薄暗い頭の中の幕には、あの板倉周防守の屋敷から見た萩路と女装の大五郎の濡れ場が歪んで映っている。皮肉な笑いが自然にゆるんで涎の出そうな口元に浮かぶ。

緋もうせんの上で萩路は大五郎と対した。

萩路はむろん穆翁の心のうちを知るべくもない。ただ困つたことになつたと眉をひそめた。萩路は寧ろ控えにゐる浪江が意地悪い笑みを浮かべて見守っているのが氣になった。

勝負は簡単だ。何の武芸の心得のない女形と男まさりの武芸自慢の萩路。忽ち大五郎は押倒されてしまふ。

「萩路、手ごころをしてはならぬぞ」

穆翁のしやがれた声がひびく。座には女相撲に見る明るさも、座頭と女中の組討に見る滑稽もなく、何か陰気な、にこった空氣が流れた。小姓や老女の中には顔をそむける者もある。

萩路はとも角、大五郎の胸板に馬乗りに跨つて両手で男の喉をしめた。そして、小声で「はやくぐったりするがよい、氣を失つたふりをしなさい」

と、足をばたつかせて儚くあがいている大五郎に言った。大五郎は心得て、両足で空を蹴り、やがてぐたつと伸びる。萩路は、尚も念入りに男の喉輪を絞めつけている恰好をつづけた。

薄笑いをかくさず萩路が立ち上がると、近侍が二人、大五郎の頭と足を持って次の間へ



下げようとした。

「待て、待て、大五郎は気絶してはおらぬ」  
さすがに穆翁、萩路の絞め様にまやかしの  
あるのを見破って大喝した。益々不興になっ  
た彼は、

「萩路は謹慎せよ、余をたばかったナ」  
と怒鳴る。近侍たちは雷に打たれようにお  
ののいた。

「よい、大五郎はまだ退出してはならぬ、浪  
江、大五郎と取組め」

鶴のひと声。大五郎の顔はくしゃくしゃに

なった。浪江が冷たい笑みをかくさず、ゆっ  
くりと立って大五郎の前に来た。白い裸身に  
朱緞子の褌が灯に鮮かだった。

☆

市村座の人気女形大島大五郎の急死は、江  
戸の芝居好きの人々を驚かせた。それも病死  
ではなく、変死ということ様々な噂がとん  
だ。

ひいき筋の穆翁の邸で乱酔し、お女中の一  
人に無体なことをしかけて無礼討ちになった  
という噂が他の穆翁の逆鱗にふれた為めの手

討ちとか、俄に気がふれてお庭の井戸に飛込  
んだなどという噂を抑えて専ら伝えられた。  
相手は萩路とか、浪江とか言われた。

翌年の春、浮世絵師自笑軒英千の筆になる  
女形大島大五郎の最期とでも題すべき絵がひ  
そかに版行された。その画柄は褌をしめこん  
だ大柄な裸の女中が大五郎を馬乗りに組敷い  
て、弓の折れを男の喉に当てがっている、極  
めて猟奇趣味に富んだものであったと言われ  
ている。

△完△

# 「最新版」女体緊縛フォト五十選

## B組五十集 大手札判印画紙(9×13 種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)	一組一枚	一〇〇〇円
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)	五組五枚	四〇〇〇円
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)	十組十枚	七五〇〇円
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)	二十組二十枚	一四〇〇〇円
		三十組三十枚	二〇〇〇〇円
		四十組四十枚	二五〇〇〇円
		五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め(竹野)	B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剥いだバタフライ(関谷)	B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)	B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)	B 12	糸纏わぬ股間縛り(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り(関谷)	B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)	B 16	手錠にもたえる(竹野)

B 17	尻突出エビ責め(水本)	B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ狼轡(竹野)	B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)	B 22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)	B 24	強制鼻挟水呑ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)	B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)	B 28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)	B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)	B 32	全裸逆エビ片脚挙(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)		

B 34	すべてをさらけて(関谷)	B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)	B 37	台上的マゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)	B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)	B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	炎責めに悶える(梨花)	B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)	B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)	B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)	B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)		



☆本誌を舞台として生きた人間ドラマが……

## 実録「奇譚クラブ」

夜 乃 探 郎

△通刊二百号を突破したとは、奇クを舞台として数々の生きた人間ドラマが展開されたことを意味しているのだ。そしてさまざまなストリーは、本誌の発刊が続けられる限りいつまでもマニヤの間に懐しく感動をもって語りつづけられるであろうか——。▽

### 『探郎いわく』

このドラマは、『全盛期から（昭和二十七年）三十年代上半期にかけて』『白表紙時代』（復刊第一号・昭和三十年十月号より三十五年度上半期まで）・ようやく『百花撩乱期』（昭和三十六年度）表紙は八度刷・ドイツ製金パク使用・色刷口絵・オフセット・グラ

ビヤ・本文充実」といわれる新年増大号（二七二頁）を読者の前にドカン！と一発。躍進の年を迎えるのだが……『漸進主義時代』神奈川県及び広島県福祉審議会からの勧告文より端を発した、制約下の昭和三十七・八・九年度を経て。——『見る雑誌より読む雑誌時代』への昭和四十年代その前夜（作者註『読む雑誌への脱皮』前後の動きは、別稿「ドラマ・奇譚クラブ」を参照されし）までを、パノラマ的に展望してみようとする試みである。△設定せる頁・所持するバックナンバーの関係もあり、ごくアウトラインにとどまったことを御諒承乞う▽

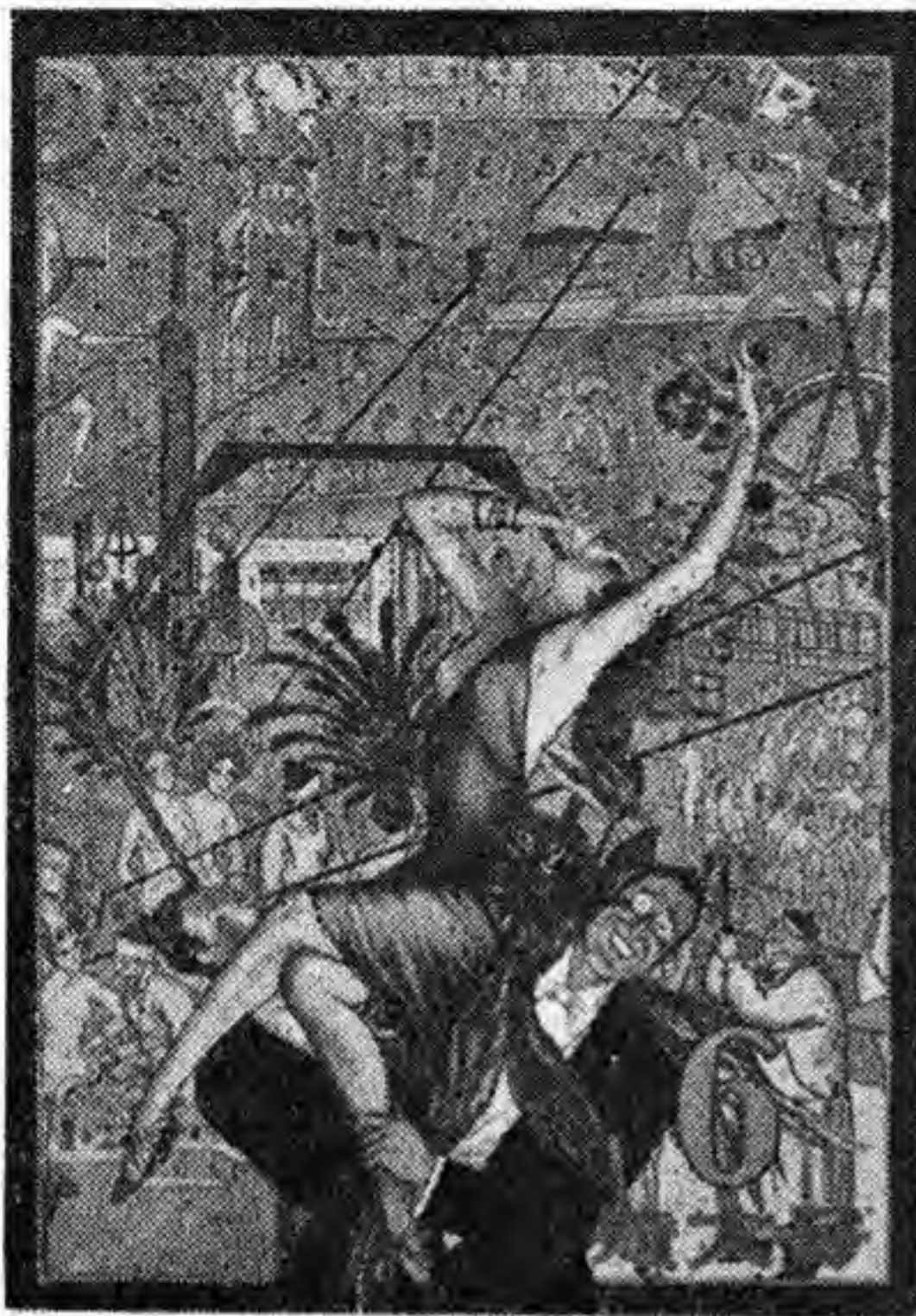
◇

### 全盛期

「私は、女のあたたかい……がのみたい。ほしい。ほしい」（作者註。原文より勝手に一字をカットしたことを諒とされたい。「神酒」とかいふ便利な表現が使われてなかったのだ）このセリフは、昭和二十八年二月号・『硝子便所（Taboret de verre）』・芳野眉美氏の物である。氏はこの他に『孤独なファンタジー』・二十七年十二月号、ETC——など、奇ク・全盛期の舞台に登場している。

この芳野氏に対して、  
「僕は君を救いたい。然もそれは『昇華』な





30年6月特大号 定価 140円

というごまかしではない。メフィストソエレスではないが君に望み通りの飲物を心ゆく迄飲ませてやろうというのです。」と、沼正三氏は『神の酒を手に入れる方法』—芳野眉美君に—二十八号四月号で、答え、支持ある一文を掲載していた—。

いま（昭和四十年八月号で）『神酒の好きな私は、神酒小説を書く』と、ハガン作・マニヤのノート・濡れにぞ濡れし／＼十年一昔と印刷されながら遂に発売されなかった涙の六月特大号

いうが、相も変わらず神酒一本槍で進まれているのを知ると、氏のマニヤ振りはホンモノだ—と、信じられる。それにしても、当時の私はどこまで行くのだろうか。そして今、私はどこに在るのだろうか。という、まるで夢男・夜乃探郎氏の如き孤独の人・芳野氏が、現在『パンチ』ある作品を望みます」と、ユーモラスな筆致で健筆をほこっている活躍振り、まさに興味がある。（このドラマのプロローグに芳野氏に登場して頂いたのは、後輩の礼儀上として諒とされたい）

「執筆者より編集者へ」として、これは創作ではありません。資料は確実なものです。—中略—思い切って投稿して見ました。『珍奇文庫・人間便所の妄想狂』—汚物愛好症のマゾヒスト青年が某一流女優に出した手紙と、彼女が彼女の家の便所で体験したことの手記—筆者は現在ある新制大

学で教鞭を執っているものであるが、近頃珍らしい手紙を手に入れたから、奇譚クラブ愛読の諸君に紹介したい」と、二宮忠一氏の登場振りは、注目された。しかも、二宮氏は、筆者は専攻は生物学であるとして、手紙の内容の分析まで付け足し解説の労を取っていた。（二十七年五・六月合併号より）

### △探郎いわく▽

そこに事実がある。それを肯定した所に真実も新しい生き方もある。眼をそむけることは敗北を意味することになる。

「事実」を、そのまま誌上に反映させる生きた編集振りは、今日の通刊二百号突破の発展を裏付ける。

### ◇「大判よりA5判へ」

「読者各位の熱烈な要望を反映致しまして本号より雑誌の大きさをA5判とし」——の（編集後記）二十七年五・六月合併号にもあるように、この号より奇クも創刊以来の大判時代（B5版）より現在のA5版となった。

「大正十一年、官吏の一人娘として東京に生る。東京某薬専中退、二十才にて結婚、約三カ月にて破婚となる。戦災後某運輸会社に勤



## 奇譚クラブ



30年4月特大号 定価 140円

念十万円懸賞原稿募集”

を背景に、奇クの舞台より退場するまで（二十九年三月号）「続・囚衣」・「凌辱の幻想と期待」・「慟告の記」・「裕子とお仕置」・「猿ぐつわと私」・「わが心の記」など、麻縄が肌に喰いこみ両手首は背中に固く固く括りあげられ、口の中には一杯の布きれ、口と鼻とを、しっかりと蔽うている厚い猿ぐつわ。一切

「古川裕子さんへ与える」の名文章は読者を打つものがあつた。そして、佐治氏はこの中で、八貴女はマゾの牢獄に於て、終身刑を運命づけられた女囚です。……罪人の中を無形の鞭に追われつつ今宵も又悦虐の刑場へとぼとぼと歩んでいる事でしよう。と、古川裕子への印象を述べていた。（二十八年八月号）

「古川裕子が恥じさらしな告白文をお目にかけることが再びあるかどうか、さようななら皆さま・裕子」という言葉入りの挿絵、白いマスクにシヨール、和服コートをまとった彼女の姿が三十九年三月号・本文、巻頭に「告別の言葉」に付けてのせられていた……。

務しのち現在の夫と結婚・東京西郊T町に住、夫は独立して陸上運送会社を経営す——この略歴は、今なお八マゾヒスト・古川裕子Vとしてその強烈な足跡を残し、事あるごとに話題を提供している彼女が、切実な告白「囚衣」を発表の際、付けられたものである。

この一文が掲載された昭和二十七年十二月号は、その意味でも記念すべき号ではあつた。それ以後、

「私を愛して下さった皆様へ」——裕子の告別の言葉——古川裕子・として、創刊七周年記

の自由が奪われている。何という屈辱、何という、はずかしめ！しかし、これこそが、女である私の憧憬の姿であるとは、何という宿命でありましょう」と、というような体当りの血のにじむような告白を、さけびつつけてきた——。

八大阪の今宵は雨が降っております。貴女は又囚衣のゴム引のレインコートを着て、フードを冠り、貴女が責めらる可き記念の責道具の入った小さな革カバンを持って雨に打たれ乍ら何を考えているのですかV佐治須十氏の

「どうやらわれわれは偶然に支配されたようです。昭和二十七年十二月号にのったあなたの『囚衣』が私を刺激し、本誌に執筆する動機となりました。」（三十六年五月号）、吾妻新氏の「古川裕子への手紙」が示すように、SM小説の長篇傑作「感情教育」または、古川裕子をモデルとした創作「夜光島」・ETCが、全盛期の本誌上を彩り、読者の好評を拍すことにもなった。

× × ×





29年1月号 定価 100円

「贋作・悩ましいのサディズム」ハ森山美歌夫人に  
関する小品Vとして、森

X X X

心理」三十八年新年号）  
小説家でもあり「闇雲博  
士の回想」二十九年四月  
号・最新作としては長篇  
連載小説・三十九年十一  
月号で完結・「奇譚三十  
九夜・物語」などETC  
エッセイ・「サロン楽我  
記」・自称・雑文家でも  
ある。そして詩人だ。

X X X

☆KK通信☆増頁断行・内容刷新・第三号  
は大好評！——と、広告されてある。

昭和二十八年度、新年号は、たしかに、読

◎編集方針について・ハ読者の御意見御希望  
には誌上を以て御回答申し上げますVとなっ  
て、

- 一、縛られた女の写真に関して（辻村隆）
- 一、男子同性愛の件について（染田玄）
- 一、縛られた女の絵について（喜多玲子）
- 一、編集方針の一般について（箕田京二）

現在、「SMカメラ・ハント」で活躍の辻  
村隆氏の名が、すでに（二十七年十二月号）  
に見られる。この当時より、緊縛フォートの

ベテランでもあり、読者のこの方面の相談役  
でもあったわけだ。

この「編集方針について」がのってある十  
二月号には、「縛った女を写す」辻村隆・と  
なって解説文までそえてあるグラビヤ・フォ  
ートがあり、奇クの緊縛モデルの草分けとも  
評せられるナンバーワン川端多奈子嬢の「逆  
さ吊り」が紹介されている。辻村氏は、多趣  
味な人でフォートばかりでなく司会もやられ  
る」（読者座談会・「交悦に伴う責めの衝動

山美歌夫人に対する永遠の憧憬を、めんめん  
として書きつづけた芳野眉美氏の好読物は、  
四十年六月号でやっとザ・エンドを告げたが  
——、ホンモノの森山美歌夫人は、二十七年  
十二月号で、

「若しもロマンチックな悩ましいサディズム  
という形容があるとしたら妾はきつと此の言  
葉に当てはまる女だと思います。それはいく  
ら普通とは一風変わった性欲を満足するにし  
ても、妾は余りにも不潔なのや、程度を越して  
血を出したり傷つけたりするのは嫌いなんで  
すもの。」と言っている。この「ロマンチック  
なサディズム」の一文は、終りに（編集部よ  
り）として「森山美歌さん御住所をお知らせ  
下さい」とあることからして、美歌夫人初舞  
台というところであろうか——。

（さしずめ、いま、羽村京子改め羽鳥水江女  
史として、カムバックされているように、こ  
の美歌夫人が再登場？ともなれば、「実作・  
森山美歌夫人の優雅な生活」でも、発表され  
るでありましょうか。）





38年7月号 定価100円

ゾヒズム作家、(一見非情に見える所にロマンを見る世界)として、奇ク「全盛期」を、その多彩な筆致で活躍された。

「読者通信」二十八年四月号・よりバツスイ

△羽村京子さんへ、川端多奈子より▽

「……わたくし内気で

人に逢うのは好かないんですけど、お姉さまでし

たら本当に親しみが持て

て、どんな遠いところへでも飛んで参りますわ」

△松井頼子さま、赤城とめ▽

「淫火」はなんと素晴らしい小説でしょう。私は今までこんな心をゆすぶる迫力のある小説を読んだことがございません。」

× × ×

○モデルとして、また文筆家としての「川端多奈子」嬢のプロファイルについて——。

「読者通信」二十八年二月号

「新年号に『桃色のベールに包まれて』——縛られてみて——を書かれた川端さんの手記を読ませて貰いましたが、——以下略」(A・Y生)

「編集部より」として、本号(二月号)から川端嬢の「破った日記帳」を連載しますが——以下略。

●二月号には一三〇頁「去年のお正月からずっと毎日欠かさず書き綴っていた私の分厚い当用日記」という書出しで『破った日記帳』川端多奈子・として掲載・連載はじまる。

× × ×

「責め絵の開拓者」伊藤晴雨画伯は、二十八年新年号より、『女の責場を描く時の心境』を引っさげて奇クの舞台に登場。「私が女の責場を画きたいと思いついたのは年僅かに十七才」とアイサツ程度の告白をされる。特に「女の責場」は春画では無いが醜を化して美と為すという点に於ては彼此一致して居ると思う」という言葉につけて「奇譚クラブ」という責物専門(?)の雑誌が東京に生れずして関西に生れたという事は、関西人の頭腦のよさ、言い換えれば商業都市に住む人の商業意識の鋭さを示すものである。ETCと、画伯の奇ク観も述べていた。

者の意気盛んな年を迎えた。KK通信の充実振りに伴って、本誌も「机上に山積された原稿の中から皆様の期待にそうべき粒選りの力作を掲載」と、より発展を裏付けしていた。

早くも、二月号には『妖花』(心の悪魔)羽

村京子・『淫(みだらび)火』松井頼子の、

二大SM小説の傑作が並んだのである。(前

者は読切・後者は連載・新年号より)

松井頼子女史は特異なSM小説をものする作家として、また羽村京子氏は、鋼鉄製のマ





38年10月号 定価100円

「女王様ごっこ」それは一人の美しい早熟な十六才の少女と、その召使いである十四才の気弱な一人の男の子と——ではじまる『女王様ごっこ』二十八五年五月号・は、飛田良二氏の物で、氏は、ロマンティックな男性マゾ短篇も書くが、後年（昭

和四十年八月号、「サロン」に）「山原清子後援会の件」についてあり、座談会「のことが、編集部として掲載されてあるが、新しい読む雑誌としての発展、第二の全盛期近しの足音をよみ取るのである。（本文充実を縦糸として横糸に、座談会ETCの行事が活発になることはとりもなおさず躍進を意味するものだ。）」

× × ×

「戦後の挿絵に現われた女の責め場」構成・高月大三・も巻頭口絵として「戦後に発行された大衆小説の挿絵に現われた女の責め場、特に時代物」を紹介、文献的に評価できる物だった（二十八年五月号）。

× × ×

いま（昭和四十年）度）毎号、「ボクの責め方」として「手錠をはめられたみどりのあて姿」など、かれんな乙女たちを、せつせと責め、フォートを紹介、発表しつづけている宝塚二三夫氏は、KK通信第八号出来！（二十八年五月号）の広告の中にも、チャンと八ボ

たまたま、同号誌上に、△此の一文に対する読者の反駁を期待する▽「僕の記録」黒井珍平氏が、晴雨説を批判したところから翌二月号で「黒井珍平氏に答う」伊藤晴雨氏が一読者としての但し書が付けられて投稿され、大方マニヤの反響をよんだ。

論争のポイントは、日本髪と責めの惨虐さETCにあったようだが——、ともかく、三十六年新年号「新草双紙『地獄宿』」が、本誌寄稿の絶筆となり、昭和三十六年一月二十七日に生涯の幕を閉じるまで、奇クとはなじみ

の深い人物でもあった。

○「松井頼子女史を囲む第二回読者座談会」と「女体の緊縛に関する読者討論会」のお知らせが、二十八年五月号にのっている。

いま（昭和四十年八月号、「サロン」に）

和三十四年六月刊）悦特二・三集にも、掲載収録されたS小説の傑作『蜘蛛と蝶々』二十八年十月号より二十九年四月号まで連載・の作者でもあった。

× × ×

昭和四十年八月号で切腹に関する研究論文を発表され（切腹研究夜話「切腹の研究」）その健在振りを示めされている中康弘通氏はこの全盛期にも「切腹史談」二十八年三月号・四月号連載・と、博学な所を見せていた。（中康氏には、二十八年五月号に「少年及び女性の切腹」など特殊な研究文もある）





クの責め方・(三)Vとして顔をのぞかせている。辻村氏と共に、宝塚氏の責めへん歴も古いものだ。

○沼正三氏の奇クに対する功績。

「マゾヒストの一人として私は奇譚クラブに注目して来た。―中略―私は在外中、捕虜になった時、相手の司令官夫人から訓練を受けて生れもつかぬマゾヒストとして復員して来たので」ではじまる、△奇書紹介V足舐め小説・「マゾヒストの会・ソフィア伯爵夫人著・沼正三訳・二十八年五月号、作家としての

て貰います。―以下略

△編集部よりVとして、最近に至り、中央公論社に於ても、沼氏の「手帖」を発行したという意志のある「うんぬん」となっている。◇筆者註・中央公論社うんぬんは、後はどうなったか不詳、沼氏は二十八年四月号、「神酒を手に入れる方法」を投稿発表しているが、これは「芳野眉美君に」の試作品、手紙形式であり、作家としての初登場として、五月号「マゾヒストの会」を注視・沼氏の本

35年 特集 別冊〔告白、手記、体験〕

初登場を振り出しに、  
「あるマゾヒストの手帖から」・「新稿・ある夢想家の手帖から」ETCと、氏この道一流の寄稿は数が多い。

☆昭和三十五年十一月特大号を見ると、「沼正三」  
「新稿・ある夢想家の手帖」次号より本誌に連載として―△作者からV中絶していた「手帖」を来月号から、また書かせ

スタートと見る。

―ともかく、沼氏の「手帖」が外部にあっても高く評価されたことはたしかである。  
(同氏の長篇小説「家畜人ヤプー」(昭和三十三年当時連載)も、三島由紀夫氏の推薦によって、中央公論社から、単行本化の話もあった。結果は不詳。なお、「あるマゾヒストの手帖から」は、二十八年六月号より連載された。

× × ×

塚本鉄三氏の、辻村氏と足並揃えて、緊縛フォート紹介は、全盛期前より現在まで、その息は長い、昭和四十年五月号には、氏の手になる「撮影者より見た緊縛モデルの横顔」が発表され、懐かしの回顧がなされているので、ここでは名のみ上げ、その労苦に拍手を送りたい。

× × ×

「甘美なるアリスの降伏」寒川緑・訳が二十八年八月号より連載。「クリスチーヌの受難」・キドロドシュトック・吾妻新訳、同年六月号より連載など、SM珍書文献紹介なども、全盛期を彩る呼物の一つであった。特に



にリ記  
回ク全  
3たの  
のし難  
号博受  
月をの！  
7評又る  
6好一成  
誌りちに  
本亘ス遂

クリスチーヌの受難全記  
キドロドシュトック 被虐の家  
吾妻新・訳 B6判二二六頁  
可憐なる美女クリスチーヌに對する緊縛と猿ぐつわは汚辱と鞭打と凌辱の地獄図絵……

——と、臨時増刊号！

『アリスの人生学校』サディズム文学の決定版、発行は、当時の読者の熱狂的な支持を受けた。

× × ×

『変態讚美論』と題し、△アブニスト諸公よ！羞恥の衣を捨てよ！▽とさけば、颯爽として鬼山絢策氏が登場、それは昭和二十九年三月号の舞台であった。『変態』とズバリ投げ出したところに、逆説的な諷刺がうかがわれた。

序論・第一部「アブ排斥」否定論△第一章何故恥じるのか、何故隠すか▽などより、第三部讚美論に至る、長文の講座である。これは五月号まで三回連載。私は本論によって多くの悩めるアブニストがその暗うつと羞恥を拭い去ることの出来る人が一人でも多かれと念じ」と、——堂々と論証していた。現在（四十年）七月号では、保藤久人氏が『S

Mよ、今日は』と明るいエッセイをのせてあり、八月号にも『SM入門講座・若き友に与う』栗瀬長氏が「円満且つ健全なる家庭を築く根本は」と聞かれた時、私は躊躇なく奇クをあげたいのである」と関連して、奇クはマニヤの共通の広場という、変らぬ流れを見るのである。

× × ×

○「現代マゾヒズム芸術時評」——映画及出版物等によるマゾヒズム——原忠正の連載が二十九年新年号よりはじまる。

○SM小説の異色作家二俣志津子の『悪の部屋』が二十九年一月号より四月号まで連載。

二俣氏の作品は、吾妻新氏が激賞しているが、作者自身も「私は告白を書くまいと思う。あくまでも小説は小説であり、私の小説の中に出てくる二俣志津子は絶対に私ではないことを断っておきたいのです」と、正しい散文精神を持つ人でもあった。（現在、小説陣の不振を言われている時、二俣氏の言は注目すべきものがある。）

× × ×

「高橋鉄大先生？が、フェティシズムを、変痴崇物症と訳し、スカタロジイを排泄物狂崇

と訳していることで、芳野さんは「何事か」と、大分オカムリのようなですが、大人気ない。大先生？は、SMマニヤではなく研究家ですから——これは、昭和四十年六月号掲載・「SM時評」橋行司子の言葉だが……。二十九号四月号に「スカタロジイ」という語について——高橋鉄氏に問う——沼正三・とあるのも、興味が深いものがある。そして……先ず、その標題において引掛ってしまった。排泄物狂崇の五文字に振仮名してある「スカタロジイ」という外来語らしきものについてである」と、やはり、沼氏も、スカタロジイに触れているのである。高橋鉄大先生？とは、奇クはたいそう昔からなじみの深い？もののようだ。

× × ×

昭和二十九年十月特大号から、いよいよ三百頁余で、定価一四〇円という大冊版が、翌三十年五月号までドサリ！ドサリと読者のお手許に届くということになるわけだが——。読者の声を中心として、見るとしよう。

『異端文学へ』淡美一郎・

三十年五月特大号・これは△編集者と読者への公開状▽。

先ず、その創作態度としては、一般文学を



志すものと全然同じである。生ぬるい桃色の思考を排除しよう。変態性欲に基いた、ぎりぎりの、やむにやまれぬ意欲をぶちまけよう。……これを、もっと具体的に言えば今迄のアブ小説に心理的な描写を加え、一流の心理派探偵小説からトリックを抜いた新らしいジャンルと言う事になる。” または “人間の心の奥底にひそむ、変態な忌わしい性癖を赤日の下に晒し、それをそのままにせず、人間の心理の相剋の形で表現する”。この淡美一郎氏の提言は「読む雑誌」へと脱皮したと評されながら、未だ小説形式のジャンルの、より強化をさげばれている現在にも、生々しく訴えるものがあるようだ。

× × ×

『破壊本能の文化的理由』——ある種の誤解に答えて——林弓志雄・は（三十年新年特大号）巻頭論稿である。

「性犯罪が直ちにサディズムと結びつけられることの愚かさを指摘したいのである。」と林氏は、そのことについて種々と論じ、「責め図は、人間の原始的な破壊本能を、サディズム的な、マゾヒズム的な範疇で、人間的愛情によって浄化された、一つの愛情表現——なのである」ETCと論証していた。

× × ×

○△倒錯の英雄、織田信長を完膚なきまでに撥扱した新研究▽・「倒錯の英雄・織田信長」笠置俊郎作・は、注目すべき文献。（二十九年十一月特大号より連載）このジャンルは「人間、梅原北明伝・試作メモ」昭和四十年八月号・久我庄一氏に受けつがれつつあることを見、興味がある。

○『裏返しのア感覚』（羽村京子さんに）吾妻新・二十九年十一月特大号・

『A感覚の秘密』（吾妻先生に）羽村京子・三十年新年号・

『孤独の広場』——古川裕子さんへ——吾妻新・三十年五月増大号・

『性への一考察』——Mへの手紙、第一信への附言——

二俣志津子・三十年五月増大号。  
——などが、奇ク論壇をにぎわした。

### 『探郎いわく』

『奇譚クラブ』。通刊二百号突破の出版史を忠実に仕上げるならば、一冊分に対する解説を約三十枚としても、原稿用紙で六千枚余は必要である。それをたった四十枚位で（全盛

期）読む雑誌前夜まで）すませようとした私は、ムチャである。いくら前書で、”ごくアウトライン”うんぬんとすまして断り書しても——だ。ダイジスト版という言葉があるようだが、この『実録・奇譚クラブ』は象（奇ク）にノミ（探郎）がたかったようなものであるうか。後十枚位で（ここまで書いて、原稿用紙で三十枚）ザ・エンドとしたいカンジョウだが、そのような意味で、すべての不備は、御諒承乞うものである。



### 白表紙時代

この時代は、いわゆる復刊第一号（昭和三十年十月号）から三十五年九月号にかけてを「白表紙時代」と評されるわけだが、いまなお、その評判が伝えられる。

『家畜人ヤブー』沼正三・

『潰滅の前夜』土路草一・ETCなどが、この舞台に登場した。また、

『時評・麻生保氏の生活と意見』麻生保・

『切腹随想「乗馬ズボン」への憧れ』藤山秀緒等の活躍がめだった。

伊藤晴雨画伯の『残酷芸術展覧会』も掲載された。



「作者註」。特にこの時代の号は、所持せず欠号だらけ、諒とされたい。

### 百花撩乱期

昭和三十六年度は、一陽来復の年であり、新年号から多色刷の表紙・金色もうれしく、二七二頁。本文充実の増大号が出された。創刊より昭和四十年まで、おそらくはこの年が口絵及グラビヤ・フォートが最も油の乗った作品がつづけざまに発表、掲載されたのでは——。全盛期とは違った意味で、新しい躍進期でもあったようだ。特に「奇ク」論壇の活発さは、マニヤの活気を裏付けていた。この

#### ☆既刊号（旧号）の在庫について☆

昭和36年、37年、38年、発行の既刊号の在庫品も、現在残存部数が各十冊となっていてしまいましたので、近いうちに全部売切れになるものと思われれます。38年2月号（定価二〇〇円）が十冊ばかり出てきましたので、お分けいたします。35年6月号（定価三〇〇円）及び「悦唐写真」と悦唐小説特集号「第一集から第五集までは、全部売切れしました。尚、最近号誌上に広告してありませんものは、たとえ旧号に広告してありましても、在庫のないものがありますから一応御照会下さい。

章では、四月号の「読者通信」によせられた「東京・小林孝」の、一文が投じた波紋についてを焦点にしほり、眺めてみようと思う。

小林氏は「エロ本であるべき本誌が純文学ないしはそれに類する小説もしくは週刊誌の小説よりも遥かにエロ色を帯びていないということ。まさか本誌がエロ雑誌じゃないとおっしゃらないでしょう。又、愛読者は勿論、一般の人々もそう思っているのですから、もっとどぎつくすべきだと思います」と論断した。

これより六月号には本文巻頭「奇ク随想」——エロとどぎつくということ——中谷正夫氏が、「小林孝氏の意見」——四月号の読者通信欄に、小林孝氏が興味ある一文を寄せておられます——として、論戦の火ぶたが切られたのである。中谷氏は、妖奇、獵奇ETCの風俗雑誌を取り上げ、その潰れた原因は「其の中の極く一部のものは、誌面が一握りの専門家の高踏的な論議の遊び場所」になったことを、または「他の大多数のものに就ては、度ぎつい描写と表現で飽くなきエロとグロとを追っ掛けたところに、没落と破滅の原因があった」と、十数年の生命を保った許りでなく尚、発展を続けている「奇ク」につい

て考えれば、その解答は自ら明らかになるだろうと結んでいた。

またしても、八月号に、

『奇ク私見』「エロとどぎつきについて」として、千草忠夫氏がこれ又、本文巻頭で意見を発表していた。一、エロについて、二、どぎついという事について——と、なっているが「奇クにもっと美を——これが私の結論といえようか」で終わっていた。

その後には「編集部註」として

「本誌四月号の読者通信欄（二四七頁）にて小林孝氏が寄せられた一文に対して、本誌六月号巻頭（六二頁）に中谷正夫氏が『奇ク随想』「エロとどぎつくということ」と題して意見を述べられました。本稿、千草忠夫氏の『奇ク私見』は、以上の二篇に関連して奇クのあり方についての見解を吐露していられますが、反駁或は賛成等の御意見をお持ちの方々は、どうかどしどし御寄稿下さるようお願いしております。」——と、編集部も乗り出してきたことが、よりこの論争に拍車をかけた。

九月号の「奇クサロン」に、

『奇ク私見』に寄す——として、岩崎一生氏いわく。

「私は奇ク編集部の方々に全面的に賛意を



表したい。」

十月号、本文巻頭に、

『読者と奇ク』——奇クはエロ誌か——またも、中谷正夫氏が再登場。読者の声をきけ！として、約十頁に亘って、「読者通信」からの原文抜スイ・引用していた。

同号に、

☆『奇ク太平楽』へエロとどぎつさ考▽

「奇クよ、貴族的たれ」として、榊一氏の投稿もあった。

十一月号には、本文巻頭。

☆『奇譚クラブの性格について』

——「エロ」も「文献も」——衣軍一。

十二月号、本文巻頭。

☆『千草氏の論理』宇宙人。

この論壇は、年を越して

昭和三十七年二月号、

『私の意見・KK誌はマニヤ誌である』との南村俊平氏の意見が出るにおよんで、一つの結論らしいものが、ようやく生じた。KK誌は巷間に流布されているエロ誌とは違った性質のものである。別の目的を備えたものである。と南村氏は「KK誌はマニヤ誌である」ことを強調したのである。そして、同号「奇クサロン」には、中村清氏が「論稿」奇ク論争に寄せて「で、

「中谷氏が奇クの在り方として論ぜられたものが口火となって、千草忠夫、衣軍一、榊一、岩崎一生、宇宙人の各氏が参加して奇ク史上大きな論争に発展したもので、これは論争されるだけの意味と価値が充分あった」また、「奇クの性格や在り方がより深く掘り下げられたし、今後再び起るかも知れない嵐に対する思想的基盤も強まった」として、その長い間の論争の幕引き役を買って出ていたのが、印象的だった。



### 『読む雑誌』前夜

——そして、『漸進主義時代』（昭和三十七年より、三十八年、三十九年）を経て、新しい風俗文献誌、『奇譚クラブ』は、見る雑誌より「読む雑誌時代」前夜を迎えることになったのである。

#### 『終りに、探郎いわく』

いま、「読む雑誌への脱皮成る！」と、ハSM時評▽——新刊七月号を見て——橋行司子氏がうたい文句を投げかけているが、これは、通刊二百号突破という底力が、裏付けされていることで、その背景には、編集部を先頭として、多くのマニヤの人達の生きた足跡

が物を言っているのだ。「読む雑誌」への発展は、奇クの出版史上に登場された人達の、旧号よりほとぼしるいまも生きた言葉と、現在、大方読者の支持とによって、新しい第二の全盛期に入ること物語るものである。さあ！『実録・奇譚クラブ』のファイナーレだ。

#### 「追記」

『奇譚クラブ』十一月号（創刊号）

昭和二十二年十月刊、曙書房、二十三頁、

定価十八円

第二号、

昭和二十二年十一月刊、二十七頁、

定価十八円

#### 「訂正」

「ドラマ・奇譚クラブ」九月号の本文中、一〇九頁、下段左より七行目から九行目にかけ、  
「見る雑誌」への「は」「読む雑誌」への「が」が正。——なお、この訂正ある章は、（昭和四十年三月号・通刊二百号・口絵並にグラビヤ写真が全廃された）まことに奇クにとってふくぎつな時期で、編集子の「本年の課題としてグラビヤ写真と口絵の絵画をどのような形で皆様の前に提供するか」の呼びかけが、後に（四月号）になって、かえって、  
「本文を充実した方が得策だ」という『読む雑誌』としての読者の声はね返ってきた。



限定版……………写真集

## 美 し き 縛 し め

## 第四集

頒価 一〇〇〇円 (送共)

略号 (美4)

## △華々しき女体緊縛の組写真集△

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フォトに加えるに、ベテラン大塚啓子の極最近撮影のフォトなど、ここ数カ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存してきた写真を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アト紙によつて、皆様にごらんにおきれます。写真はいつでも未発表のとおき

の傑作ばかりです。各モデル嬢の特徴をそれぞれに十二分に發揮した文獻的価値豊かなフォト揃いで、春の暖気に匂う花の如く全紙面から、いづれもこりと皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に見て頂けるといふことだけで、彼女たちも嬉しいのです。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフォトアルバムです。この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

待望久しきアルバム「美しき縛しめ」(第四集)ここに完成、御注文下さいました皆様へいち早く発送いたしましたところ、予想通り、素晴しい出来栄と讃辞を頂いており、す。目下のところ、本誌に於けるグラビヤ写真の掲載が自粛せざるを得ない情勢です。マニヤの方々のコレクション用としての写真集の充実が叫ばれる所以であります。

本誌内容の充実と相俟って、限定版の写真集によって、部数は極めて少くはありますが、秀なフォトを盛沢山に収容して同好の方々の御期待にそいたいと考えております。今後順次発売してゆきます写真集を全部お揃え下さいますと、本誌女体緊縛の主要なものも網羅されることになり、文獻蒐集としても極めて有意義なものとなることでしょう。

## ◇写真集(アルバム)内容◇

刺青女体の逆エビ責め (山原清子)  
鉄扉に緊縛晒し責め (玉田美佐子)  
ブロック石抱き責め (木村洋子)  
箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)  
両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)  
古墳後手吊り組写真 (木村洋子)  
両手吊りに悶える組写真 (山原清子)  
逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)  
猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)  
革拘束具による組写真 (大塚啓子)  
柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)  
セーラー服緊縛組写真 (大塚啓子)  
野外に於ける晒責写真 (玉田、木村)  
刺青女体の柱縛り責め (山原清子)  
捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)  
入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)  
両足吊りの表と裏 (山原清子)

## △以上緊縛写真八十葉△

以上の通り、本誌のグラビヤにして、何カ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特アト紙に對する鮮明なるグラビヤ印刷によつて、写真集を完成いたしました。必ずや皆さまの御満足を得ることと信じます。限定版につき一般書店には姿を現しません。数にも限りがあります故、売切れにならない中、お早くお申込み下さい。



花

と

蛇

団

鬼

六

## 続篇 (第十回)

花 と 蛇

## 鬼女の嬌声

千代は、田代と森田に注がれるブランドーを飲みながら、大声を立て、笑いつづける。それは、あたかも勝利に酔った魔女の嬌声にも似ていた。

川田と伊沢に責められる静子夫人は、最初は狂乱したように悶え、恐怖と屈辱にがくがくと歯をかみ鳴らしていたが、次第に頬は上気し始め、もう備えを忘れ、何時しか攻め手の中へひっぱりこまれてしまったのである。

完全に責め手の術中に陥って、艶やかなうなじを大きく見せ、美しい顔を切なげにゆがめて歯ぎしりをする。心とは逆に、二十六才の豊満な肉体は、どうしようもなく燃え立ってしまふのだった。

「さすがはベテランの伊沢先生と川田兄さんだ。うまいものだわ」

銀子と朱美も、二人の男の手練手管に舌を巻いたようにいう。そして、柱に緊縛されたまま、何ら抵抗する術もなく、そういうあくどい責めを受けて、次第に燃え立ち始めた静子夫人の美しい肉体をしげしげと見て、

「フフフ、奥様、御気分はどう？ もうそろそろ、取りつけてもらっても、いいのじゃないのかい」

静子夫人の胸の豊かな隆起を、うしろから責めつつつけていた川田が、夫人の耳もとに口を寄せていう。

「さ、奥さん、これだけサービスしてもらえばもう充分だろう。千代夫人にお願いして、しっかりと取りつけてもらいな」

「ああ——」

静子夫人は、真赤になった美しい顔を再びうしろへねじ曲げるようにし、眉を寄せて泣



きじゃくる。

遠山家の女中であつた千代に、そんなことをされる——身体中の血管が破裂するような屈辱感に、静子夫人は、もうどうしようもない境地に追いこまれているものの、狂乱したように首を振るのだった。

「やい、乙にすましていねえで、千代に、いや千代夫人にお願いするんだ。いわれた通りにしねえと、桂子をさかさ吊りにして責めあげるぜ」

川田は、そういうながら一層力を入れて揉みあげる。

銀子や朱美も加わって、身体のおちこちをつつき出すに及び、遂に静子夫人は屈伏して川田や銀子の命令を承認するのだった。

「どうやらこれで充分のようだね、と伊沢も立ち上る。」

「さ、奥さん、千代夫人に願するんだよ」

朱美は、くすくす笑いながら、夫人の火のついたような頬をつつくのだった。

銀子や朱美が面白半分にもとに吹きこんだ言葉を、口にしなければならぬ口惜しさは、腸がひきちぎられるよりも、静子夫人にとっては辛い事である。それも、今までの使用人千代に対してそんな辱しめを受けるなど

静子夫人は、もう声も出ず、涙も出ない。気も狂うばかりのおぞましい責めから解放されたものの、今、静子夫人の目の前には、銀子や朱美よりも恐い鬼女、千代が口元に冷笑を浮かべて立っているのだ。

「さ、奥さん、早くおっしゃいてば」

銀子がくすくす笑いながら、横手より静子夫人の艶やかな肩をつつく。

「——千、千代子さん」

静子夫人が涙にうるんだ美しい切長の瞳を哀切的にしばたきながら、眼の前に立つ千代に向けると、

「千代子さんじゃないよ。千代子奥様だよ。」

まだわかんないのかい」

朱美が、びちゃりと静子夫人の盛りがあがった尻をたたく。

静子夫人の美しい頬に屈辱の口惜し涙が一二筋糸をひくように流れ落ちた。

「——ち、千代子奥様——し、静子は只今よ

り、桂子と——女同士のショーを演じます。

お、お酒の余興に、どうぞ、ごらんになって下さいまし——」

静子夫人は、わなわな肩のあたりを震わせながら、息もたえだえといった調子で、そういったが、

「ホホホ、それは、ぜひとも見せて頂くわ。」

奥様とお嬢様のショーで、私にとっては、何よりも面白いものですもの」

千代は、おかしくてたまらぬようハンカチで口を押さえて、くすくす笑う。

銀子と朱美は、再び、静子夫人にまといつくようにして、次の言葉を教えているようであった。

「——し、静子、千代子奥様に、お、お願いが——ございます」

「ええ、何なの」

千代は、伊沢に火をつけてもらった煙草の煙を吐きながら、愉快そうに静子夫人の美しい顔を見る。

静子夫人は、ぶるぶる唇を震わせたが、どうしても、次の言葉を口にする勇氣はなく、思わず顔を横へそらし、身体全体を震わせて号泣するのだった。

「何をもちもたしてるんだよ。次を続けなきや駄目じゃないか。」

「生娘きむすめみたいで、何時までも羞しがらんじゃないよ」

銀子と朱美は、盛んに静子夫人の尻をたたいたり、乳首をつねりあげたり始める。彼女達の陰險な拷問に静子夫人は、抗し切れず、



遂に観念したよう眼を固く閉じたまま、

「——ショーをお見せするにも、このままの姿では——ですから——お願い、箱の中のもの静子の、静子の身体にしっかりと——」

静子夫人は、やっとそこまでいい、がっくりと首を落して、号泣し始めるのだったが銀子は、高笑いしながら、残忍な蛇のような目で美しい静子夫人の横顔を見つめる。静子夫人に恋情を抱き、いい寄ったものの、すげなく拒絶された恨みを果らすのは、この時と思っているのだろうか。ニタリと口元をゆがめ、そんな姿に仕上げられた時の令夫人の姿を想像して、思わず吹き出してしまふ銀子であった。

何よりも傑作なのは、そんな姿にされた静子夫人と桂子とのプレイである。銀子はグラスのウイスキーを一口飲んで、朱美をうながして、消えいるようにうなだれ、すすり上げている静子夫人のあごに手をかけて、正面へ上げさせ、おどろに乱れた艶のある黒髪を撫ですきあげてやり、口紅をひき、手早く化粧をほどこしていくのだ。

色香あふれる雪白の首筋から、豊かな二つの乳房に至るまで乳液をぬり、  
「さて、元通り、山本富士子そっくりの美人

になったわ」

銀子と朱美は、しげしげと正面に廻って、化粧された美女の全身を見つめ合う。

銀子は、千代に向っていった。

「それじゃ千代夫人、お願いしますわ。この元遠山夫人は、可哀そうに、このようにお手を後手に縛られているので、御自分じやりつけるわけにはいかないのよ。お手数でしょうけど、昔のよしみで、しっかりと取りつけてあげて下さらない」

ふざけた調子でそういうと、千代も、「いいわ、私もこの奥様には、ずいぶんとお世話になったし、優しくして頂いたの。それ位のサービス、喜んでさせて頂きますわ」

そういった千代は、静子夫人の前に立ち、桐の箱を開けて、その中身を夫人の鼻もとへこれ見よがしに押しつける。ちらとそれに眼を走らせ、耳たぶまで真赤に染め、はっと顔をそむける静子夫人。

「よかったね、静子さん。鬼源さんが、苦心して貴女のために作って下さった、この素晴らしい芸術品を千代夫人が特別に取りつけて下さるそうよ。心から感謝して、お受けしなさいや駄目よ」

銀子と朱美は、そんな事をいい、その場は

千代一人に任して、川田達のいる酒の席に戻るのだった。

静子夫人と千代との奇妙な争いが始った。

「——あっ、や、やめてっ、やめて！」

静子夫人は、絶叫し、激しく身をくねらせ始めたのである。

「ま、奥様、御自分で頼んでおきながら、みっともないじやございません。大きなお尻をお振りになったりして」

千代は、くすくす笑いながら、しかし、眼だけは蛇のように光らせて、静子夫人をそういう姿に仕上げようとして必死になる。

美しい顔を紅潮さし、毛穴から血でもふき出しそうな憤怒に、静子夫人は最後の氣力を振りしぼるようにして身をよじったが、千代も何かに憑かれたよう必死だ。その執拗さに静子夫人は遂に根負けしたのか観念の眼を閉じ、身をゆするのを止め、千代のなすがままに任せようと覚悟をきめたが——。しかし、千代が笠にかかったように取りつけにかかり出すと、思わず、頭に血がかったのぼり、

「嫌っ、嫌よっ」

静子夫人の肉づきのいい美しい曲線を持つ肢は反射的にはねあがり、千代の顔を白い脛は押しのけるようにしたのである。



ぺたんと尻もちをつく千代。それを眺めていた銀子や朱美は、思わず、キヤッキヤッと笑い合った。だが、大切な金主の千代に対しては失礼な笑いだったと思ったのか、あわてて、二人のズベ公は立ち上り、肩で息づき、美しい切長の瞳を憤怒に燃え立たせている静子夫人の前に立ちはだかる。

「遠山新夫人を足で押し上げるとは、静子、何て事をしてくれるのよ。あたい達の顔に泥をひっつけたのも同然よ」

と銀子が凄めば、朱美も、

「きれいに顔も化粧してやったし、伊沢先生や川田兄さん方に、あんなすばらしいサービスをしてもらったくせに、まだ貴女、駄々をこねつつける気なの」と、つづける。

静子夫人は、これらズベ公達の恐いしつぺ返えしを予想して、思わず身をすくませ、ただ、肩を震わせて、すすりあげるだけであったが、銀子は、ギラリと眼を光らせ、朱美に向っていう。

「伊沢先生のサービスが、少し紳士的すぎたんじゃない。こうなりや仕方がない。一度、させちゃおうよ。」

「何をさ」

フッフ、と銀子は笑いながら、静子夫人の耳もとに口を寄せて何かささやく。

静子夫人は、ピクッと身体をけいれんさせ、打ちひしがれたように首をのけぞらす。

「ね、いいでしょ、もう一度、川田さん達に責めてもらって、一度、完全に――」

「嫌っ、嫌っ、銀子さん、ど、どうして、私に、それほど赤恥をかかせるのですっ、後生です。もうこれ以上、罵りものにしないで」

静子夫人は、激しく首を振って、わめくように銀子に哀願するのだったが、満座で、そういう状態にされる事が最も辛いのだと知った銀子は、むしろ北叟笑んで、川田の方を振り返える。

「ね、川田さん。何時かのように、例のクリームなんかを使って、一度、この元遠山夫人を完全にノックアウトしちゃってくれない。どうもまだ身体が固くて、千代夫人が手古づっておられるようなのよ」

それを聞くと、川田は、よし、わかった、と立上り、クリームをとってくるからな、と急いで廊下へ飛び出して行く。

「嫌ですっ、お願いっ、そ、それだけは、やめてっ」

静子夫人は、逆上したように、柱に固定さ

れた身体を悶えさせ、泣きわめく。

「よほど、皆んなの見ている中で、そんなことになっちゃうのが辛いようね。フッフ」

銀子は、そういつて笑い、朱美をうながして、隣の部屋から、大きなテーブルを持ち運んで来て、静子夫人の前へ置く。

「横になった方が楽でしょ。この台はね、美津子を女として開眼させた台なの。静子夫人を今更、開眼させる必要はないけど、今夜はお客様も見物してられるんだから、女盛りの女らしく、見事に――して頂戴ね」

銀子と朱美は、静子夫人の縄尻を柱から外しとり、どんと彼女のすべすべした白い背を前へ突く。静子夫人は、両手を後手に縛しめられた夫人を台の足のあたりにかがませ、びったり立膝をして、すすりあげるのだった。

「さ、立つのよ」

銀子は、静子夫人の肉づきのいい肩に手をかけて上へ引きあげたが、

「何しろ、あたい達が美津子を楽しませた時と違って、その道のベテランが熟れ切った奥さんを責めるんだ。喜びすぎて、台の上で飛んだり跳ねたりして、縄がゆるむかも知れないから、しっかり縛り直しておこうよ」

銀子は、意地悪く、そんなことをいい、朱



美と二人、手に唾して、更にきびしく、静子夫人を緊縛し始める。

「さ、乗っかるんだ」

銀子と朱美が、静子夫人の麗身を台の上へ乗せ上げようとし、静子夫人が激しくすすり上げて、それに抵抗していると、田代や森田が立ち上って近づいて来ると、ズベ公達に手をかして、遂に夫人を台上へ乗せあげてしまったのである。

「ああ——」

静子夫人は、台の上で、柔軟な白い足の指先をくの字に曲げて、白い頬を冷たい板にすりつけている。

「さあ、鯉がまな板に乗ったように、おとなしくするんだよ」

銀子と朱美は、別のロープを使って、夫人の乳白色の肩をがちりと台に固定し、仰臥させてしまった。

両肢をぴったりと閉じ合わせ、台の上で石のように固くなってしまっている静子夫人。「ほんとに、奥様は、お美しい身体をしてらっしゃいますわね」

千代は、また板に寄せられた美女を眼を細めるようにして眺める。

銀子も台に乗せられて観念の眼を閉じ、小

さく息づいている美女を、小気味よさそうに眺めながら、

「せっかく、千代夫人が取りつけて下さろうとしたのに、どうして、さからったりしたのよ。千代夫人は今までは、貴女の女中だったかも知れないけどさ、これからは、貴女の御主人も同然の方よ。なさろうとする事に、一々さからったりすると、あたい達が承知しないわよ」という。

鬼源や川田の数々のむごい調教を受け、精神的にも肉体的にも別個の人間に作りかえられてしまった筈の令夫人が、今、使用人であった千代のなぶりものになろうとして、必死になって反抗を示した事に、むしろ、銀子や朱美は、一種のハリアイのようなものを感じだしたのである。

京子と二人、地獄の調教を受けた身でも、さすがに、女中として使っていた千代に、数々の羞恥責めを受ける辛さには耐えられないものらしい、そう感じた銀子は、自分の意に従わなかった腹いせもあり、千代の見ている前で、静子夫人に女として最も辛い責めにかける骨抜きにして、千代に対して心より屈服させてやるのだと意気どむのであった。

銀子は、朱美に目くばせをして、台の末端

に縄かけをし、

「さ、静子夫人、も一度、川田兄さん方に徹底的に責めてもらってあげるわ。貴女が本心から千代夫人のため、親娘ショーを演じる気持になるまでね——さ、足を開いて——しっかり縄をかけてあげるわ」

静子夫人は、全身鳥肌の立つ思いで、はっと一層固く両肢を閉じ合わせ、歯ぎしりをしながら、台上の身を硬化させている。

「まだ、貴女、あたい達にさからう気なの。あたい達は、元遠山夫人が、あたい達の仕込みで現在、どれほど進境したか、千代夫人に見て頂こうとしてるのよ。あたい達に恥をかせる気なの」

銀子は本当に恐ったような顔つきになり、頬を台へ押しつけるようにして、すすりあげている静子夫人の横面を手荒くひっぱたくのであった。

鬼源が、まあ、待ちねえ、と銀子をうしろからなだめるようにして、

「おめえは気が短くていけねえ。何かといやすぐに商売ものをなぐったり、けったりするんだから始末が悪いよ」

そういつて、鬼源は、台のまわりを一廻転し、仰臥している静子夫人の両足首を両手で



握る。

「——嫌、嫌っ」

静子夫人は、電気に打たれたように身体を硬直させた。

「後、後生です。もう、もう私を責めないで下さい」

静子夫人がこれほど、哀願し、反抗を示すのは久しぶりの事だと田代も森田も、酒を注ぎ合いながら話し合う。

「へへへ、そりや、今まで、あごで使っていた人間に、そういう身体にされちまったところを見られるのは辛えだろうけど、まあ、これも修業だと思ひねえ」

鬼源は、そういつて、強引に力を入れ、割り開かせようとしたが、静子夫人は、泣きわめいて足を悶えさす。

「ねえ、京子を、ここへしよっぴいておいでよ。この奥さんと同じように台にしばらくつけるんだ。何しろ、恋人同志なんだからね。二人一緒なら、そういう責めを受けるのも楽しいもんじやない」

銀子がいい出したので、それは妙案だと、朱美が飛び出して行こうとする。

「待、待って下さい」

静子夫人は、激しくすすりあげながら、部

屋を出て行こうとする朱美を呼び止めた。

こんな野卑で残忍な男女のなぐさみものに地獄の調教でくたくたになっている京子を巻きぞえにしたいくない。ここにいる千代は、長年仕えていた女主人の苦しみ悶える姿を見ただけなのだ、そう思うと静子夫人は、もう一切をあきらめ、千代の前に生恥をさらす方法はないと、悲痛な決心をしたのであった。

「——京、京子さんには関係ありません。わたしが、千代——千代夫人のいう通りにすればいいのです」

静子夫人は、わなわな唇を振るわせながら、そういい、堰をきったように泣き出すのだった。

ホホホ、と千代が金歯をむき出して大声で笑う。

「そうよ、奥様、私は、奥様とお嬢様が、このお屋敷の中で、どれ位、御修業されたのかそれを見せて頂ければ満足ですよ。他の人には興味ございませんわ」

唇を噛み、息もつまる屈辱を全身で耐えている静子夫人のまわりに、銀子、朱美、田代に森田、鬼源、そして、伊沢達が取囲む。

「おっと、桂子が一人ぼっちじゃ、可哀そう

だ。ここへ連れて来て、ママがどんな風になるか見物させようぜ」

森田と鬼源は、布団の上へ仰臥している桂子を抱き起し、二人でかかえるようにして戻って来た。

静子夫人は、ふと、それに気づくと、はっと青ざめた顔になり、

「——お、お願い、桂子に、桂子に見せたりしないでっ」

「何いつてるんだよ。あんまり注文が多すぎるわよ。いいかげんにおし」

と朱美は眼をつりあげたが、すぐ、そうだいい事がある、と銀子にいい出した。

「ね、何時か、京子と美津子を並ばせて、浣腸してやったように、この静子夫人に桂子を並ばせて——」

そりや傑作だ、と森田に鬼源は、更に一台の卓を持ち出して来て、静子夫人が乗せられている卓の隣へ置く。

静子夫人は、必死になって、桂子だけは許してと頼むのだったが、もとより、そんなことにかまう鬼達ではない。

「さ、桂子も乗っかるんだ。今まで散々こきつかった千代夫人に、どれほど成長した身体になったかを見せてあげるんだよ」



桂子は、森田と鬼源に遂に卓の上へ乗せあげられ、素早く縄止めされていく。

「——ああ、ママ、助けてっ」

「——け、桂子さんっ」  
桂子は、馬鹿力のあ  
る鬼源と森田の手で、  
遂に人の字型に卓に固  
定されてしまったのだ  
った。

銀子は、それを見る  
とニヤリとして、静子  
夫人の方へ向き直る。  
「ごらんよ。桂子の方  
がずっと聞きわけがい  
いわよ。さあ、ママさ  
んの方も娘に負けない  
よう、しっかりと開いたり、開いたり」

銀子の手と朱美の手が、夫人のびったり閉  
ざしている足首にかかった。

もう静子夫人は、哀願も哀訴も空しい事と  
観念し、キリキリ歯を噛みながら、銀  
子と朱美の手で、左右へ大きく開けられてゆ



くのであった。

それを見つめている千代は、勝ちほこった  
ように大声で笑いつづける。

銀子と朱美は、卓の両端へひっぱった夫人  
の足首をしっかりとロープでつなぎ終わると  
ほっとして、固く眼を閉ざしている美しい静

子夫人の顔を両手ではさむ  
ようにして、

「フフフ、ずいぶんと手間  
をとらせてくれたわね。だ  
けど、もうどうにもならな  
いわ。あとは、うんとい  
いで泣いて貰うだけよ」  
そこへ、川田が戻ってく  
る。

「おや、へへへ、なるほど  
な。たしかに、その方が面  
白いぜ。」

遂に、静子夫人は、桂子  
と一緒に、卑劣な男女の手  
で、言語に絶する責めを受  
ける事になったのである。  
「さあ、千代、こいつをた  
っぷりと静子夫人にぬりこ  
んでやりな」

川田から、渡された茶色の小さな壺に入っ  
たクリームを千代は指先にたっぷりとりなが  
ら、静子夫人に近づき、

「ホホホ、色々、お世話になった御恩返し  
という意味で、うんとサービスさせて頂きま  
すわよ」



銀子も、千代から、壺を受取り、桂子にい  
 どんでいく。

「嫌よ、嫌っ、ああー、ママ、どうしよう」

「——桂、桂子さん、が、がまんするのよ、  
 負けちゃいけない——あっ、うっ、うう——」

静子夫人も千代の攻撃をまともに受け、眉  
 を寄せて、首を切なげにのけぞらせるのだっ  
 た。

## 地獄の花嫁

何時か静子夫人と京子が、葉桜団と森田組  
 の手で、血も凍るばかりに恐しい断髪式を行  
 わされた離れの密室——その奥の一段高く作  
 られた台の上の二本の丸木には、美津子と文  
 夫が、がっちり立縛りにされている。

二人とも申し合わせたように、ぴったりと  
 両足を閉じ合らし、がっくりと首を垂れて、  
 これから始まるズベ公達の責めを観念して待  
 っているという風情であった。

美少女と美少年が、さらしものになってい  
 る台の下——つまり、静子夫人と京子が、断  
 髪されたあと、屈辱の演技を強要された場所  
 では、義子、悦子のズベ公が、ちんぴらやく  
 ざの竹田、堀川達と花札トバクをして遊んで  
 いる。

「何してるんだらうな。姐さん達は？」

悦子が花札をはげしく敷布にたたきつけな  
 がら、そういった時、マリが入ってくる。

「傑作なのよ。静子夫人と桂子が——」

悦子と義子は、マリの話を聞くと、花札を  
 投げ出し、声を立てて笑った。

静子夫人が千代に取りつけられる事をこば  
 みつつけたので、今、人形責めに桂子も一緒  
 にかけているというのだ。

「へえー静子夫人も桂子も、さぞ口惜しいこ  
 とだろうね。長い間、自分の家で使っていた  
 女中に、そんな姿を見られるなんて」

悦子がいうと、マリもうなずきながら、  
 「そうよ。でも、銀子姐さん、近頃、静子夫  
 人をまるで目の敵のようにして責めるわね。  
 鬼源さんの作ったゴム人形で責めるなんて、  
 ちよっと残酷すぎやしない」

「フフフ、今更、残酷もないものだわ」

義子は笑い、

「ところで、台の上のお坊ちゃんとお嬢ち  
 ゃんだけど、いいつけ通り、断髪式を行う準  
 備はしたけれど、お客さん方は見に来るのか  
 こないのか、どっちなんだよ」

とマリに聞く。

「社長がいわれるんだけど、まだ、これから

静子夫人と桂子のショーがあるので大分時間  
 はかかりそうなの。だから、予定通り、先に  
 すすめて二人の結婚式をやれて。ただし、  
 美津子と文夫のプレイだけは、必ず、客と一  
 緒に見るから、土俵の仕度だけはして置くよ  
 うにということよ」

よし、わかった、と義子は竹田と堀川に、  
 床の支度をするようにいうのだった。

オーケーと二人は、隅へ行き、積み重ねて  
 ある布団を運んで来る。ズベ公達も手伝って  
 以前、静子夫人と京子が夫婦ショーを演じた  
 床の上へテキパキと敷き始める。

「静子夫人と京子の時と違って、今夜のショ  
 ーは、年は若い本格格的なものだよ。おい、  
 その御兩人、しっかり頼むよ。恋人同志だ  
 けに、ぴったり息も合うはずだ」

悦子は、台の上にさらされている美少女と  
 美少年の方を見ながら、そんな事をいうのだ  
 った。

青のカバーと赤のカバーをほどこした枕が  
 ぴたりとくっついて敷布団の端へ揃えられ  
 る。恐しい準備がズベ公とチンピラ達の手で  
 出来たわけだ。

美津子は、ふっと眼を開けて、それを見た  
 が、途端に、あっと小さく声を出し、美しい



顔を朱に染めて、首をねじる。

何という恐い事であろう。鬼女達の、美津子と文夫の結婚式をするという事の意味がはっきりわかった二人の美しいさらし者は、柱に縄をきしませて、震え出す。好奇の眼を光らせる野卑な男女の前で、無理やり、そのような事を演じさせられるのだと思うと、おぞましい羞恥の戦慄が全身を走るのだった。義子や悦子達は、審査席を作らなきやといながら、敷いた寝具の周囲に座布団を敷きつめる。

それが終ると、義子は、かっちりと立縛りにされている美津子と文夫の足もとへ、洗面器を一つづつ置くのだった。

一体、何をする気なのかと、文夫も美津子も新たな恐怖に見舞われて、全身を硬化させたが、義子が、くすくす笑いながら説明し始める。

「幹部の人達が色々協議した結果、特別の情によって、熱烈に愛し合っているあんだ達二人を、結婚させてあげる事になったの。つまり、そうすれば、貴方達は、相思相愛の仲だけにすばらしい息の合ったコンビになる事が出来るでしょう。私達の特別の計らいに感謝して、これからは大いに稼ぐんだよ」

美津子も文夫も、恐怖のために肩のあたりをがくがく震わせている。

「これから、貴方達を仕込むのは、あたい達の仕事なのよ。腕によりをかけて、すばらしいコンビに仕上げてあげるわ」

マリは、そういつて

「静子夫人と桂子のショー、どれ位、進行してるか、ちょっと見てくるわね」

といつて、廊下へ出て行くのだった。

「ね、二人とも、わかったわね」

義子は、立縛りにされている二人の間に身体を入れてニヤニヤしながら、つづける。

「じゃ、結婚式を始めるけど、まず、三々九度の盃をしなきゃならないでしょ。でも、普通のお酒じゃ芸がないわ。そこで、あたいが思いついたんだけど、お神酒は、二人でそれぞれ作って貰うのよ。この洗面器に注ぎこまれた二人のものを、あたい達がミックスして杯に入れてあげるから、それをお互いに飲み合う。愛の誓いを立てる意味からいっても、すばらしい方法だとは思わない」

ズベ公達の考えている常規をいっした恐ろしい着想に、狂ったように真っ赤になった顔を振りつつける美津子と文夫。

そんな二人を楽しそうに悦子は見て、

「それに、あんだ達、今日はお昼からまだすましていないんでしょ。プレイの最中、粗相があっちゃ大変だし、先にすますものは、すましておきましょうよ、ね」

と笑いこける。そして、二人の足もとにかがむようにして、文夫の洗面器を少し前へずらしてやり、美津子の洗面器は、ぴったり彼女の足指の前へ置くのだった。

「さ、始めるのよ、二人とも」

義子は、文夫の背と美津子の背を同時に突いた。

反射的に美少年と美少女は、石のように体を硬くし、ぴったりと両肢を固く閉じ合わしってしまう。

「ちょっと、あんだ達。まだ、あたい達の命令が聞けないっていうの。この間は銀子姐さん達に責められて、あれだけ素直に色々な事を演じたのに、あたい達なら相手が不足というのかよ」

義子は眼尻をつりあげてどなった。

抵抗すれば、それだけ、折檻が苛酷なものになってくるという事は、美津子も文夫もわかってる。だが、どうして、そんな事が演じられよう。しかも、器に投入したものを互



いに飲み合わねばならぬなど、これらのズベ公達は気狂い以外の何ものでもないのだ。

美津子と文夫が、互いに歯を喰いしぼり、命じた事を演じようとしないうちに業を煮やした義子と悦子は、文夫を指ではじいたり、美津子をひっぱったりして、悲鳴をあげさせていたが、なお、それでも、頑強にこばみつづける二人に舌打ちして、竹田や堀川に、地下牢にいる美津子の姉の京子と文夫の姉の小夜子をここへ連れて来るようにいう。

「二人とも、姉のしている前で、この間のよくな責めにかけてやるよ。京子や小夜子は、さぞ、びっくりすることだろうな」

美津子も文夫も、はっとしたように顔をあげる。あの人間として耐え得る限界を超越した辱しい責めを姉のしている前で――。

美津子は、嗚咽しながら、部屋より出て行くこうとする竹田と堀川に哀顔するのだった。

「御生です。姉さん達を――こ、ここへ呼ぶのだけは――やめて下さい」

「そうなの。じゃ、あたい達にさからわず、いわれた通りにするんだね」

義子は、ぞくぞくした気分になって、美津子の頬をつつくのだった。

美津子は、激しくすすりあげながら、うな

ずき、たまらなくなったように、

「ああ――文、文夫さん」

口には出さねど、文夫の覚悟を求めたのであろう。京子や小夜子が引き立てられてきた前で、数々の辱しめを受け、姉達を驚かせたり、悲しませたりする事を思えば、むしろ、二人だけで耐え忍べるだけは耐え忍ぼうと悲痛な決心をしたのであった。

文夫とて、同じ思いである。姉の小夜子の前で、そのような言語に絶する責めを受けるよりは、このまま、鬼畜の責めを我身で受けとめた方が――と、決心をしたのである。

「さあ、始めて始めて――」

義子と悦子、それに、竹田、堀川までが、ニヤニヤしながら、二人の足下に身をかがめるようにして、仔細に観察しようとする。

「何をぐずぐずしてるんだよ。あたい達も気が短いんだからね」

悦子が業を煮やして、立ち上り、美津子と文夫の耳を同時にひっぱるのだ。

「――文、文夫さん。ああ――」

美津子は、もうこれ以上、ズベ公達の気分を高ぶらし、姉達が引立てて来られることになつてはと、身投げでもするように羞恥地獄へ飛びこんだのである。

「美津子さん、美津――」

文夫もまたはざくように泣き、美津子のあとにつづく。

ズベ公もチンピラも、どっとわき、美しい二つの若い肉体からはとばしり出る火爆布を眺めるのだ。

美少年と美少女にとっては、それは、実に長い苦しい時間であった。その間、心臓は高鳴りつづけ、二人の美しい顔からは血の気は消えた。

文夫はとにかく、悲惨だったのは、立縛りにされたまま、そういう地獄図を演じた美津子の方である。まるで蔦がまきつくように若々しい弾力のある太腿から脛のあたりにかけて、幾筋も水が流れつづけている。

「まあ、お行儀が悪いわ。ちゃんと、洗面器に入れなきゃ駄目じゃないの」

悦子はそういい、義子の顔を見て舌を出して笑う。そして、二人で、台の上へおいた掌ぐらいの盃の中へ、文夫のものと美津子のものを少量づつ入れ、その盃を、まず文夫の口へ――。

うっと、一瞬、文夫は、首をねじったが、「三々九度の盃をこばんじゃ、結婚式にやらないじゃないの、さ、一息に飲んで」



悦子と義子は、やっと、文夫に御神酒を飲ますと、次に、美津子の口へそれを運ぶ。

「ああ——」

美津子も、嫌々をするように首を振ったが悦子に鼻をつままれ口を開く。

やっと流しこみ、ごくりと飲みこむところまで念を入れたズベ公達は、

「さて、これで、三々九度の盃は終ったよ」

とんでもないものを飲まされて、もう反抗する気力もなく、ぐったりと首を垂れてしまっている二人を見くらべるようにしながら、「お互いに愛し合っているんだから、今更、くどくどいう事もないけれど、まあ、末長く円満にやっておくれ。ただし、自分達がこれで森田組のショーのスターになったという事を忘れないようにね。つまり、あんた達が愛し合うプレイそのものが、今後大事な商売ものになるんだからね」

義子はそんな事をいって、くすくす笑い、

二人を見くらべるようにしながら

「理想的なカップルのようね。一応二人のサイズを竹やんと堀やんに、くわしく計って貰う事にしようじゃないの」

義子の眼くばせを受けた竹田と堀川は、待ってましたとばかり、巻尺をとり出し、ずか

ずかと美津子の方に近づいていく。

自分の肩に頬をうめるようにして、小さくすりあげていた美津子であるが、二人の不良がニヤニヤして眼の前にやってきたのに気づくと、再び、別の衝動に打ちのめされたように耳たぶまで朱に染めて「いや、いや」と首を振る。

そんな美津子を楽しそうに見ながら、義子と悦子は、何時か銀子や朱美がやっていた事を真似て、美津子の背後に廻り、若々しい黒い髪をかきわけて、彼女の耳もとに、色々なおどましい言葉を吹きこむのだ。

「お兄さん方が、わざわざ計って下さろうっていうのに、美津子。すましこんでいちゃ失礼じゃないの」

そして、こういうのよ、ああいうのよ、と二人のズベ公は、言葉による一種の拷問を始めるのだった。

「ね、お姉さん方に来られるのは、嫌なんですよ。だったら、いわれた通りの事を、おっしゃいな」

美津子は、もう抗し切れず、涙に光った美しい黒眼を前に立つ竹田と堀川に向けるのだった。その瞬間、柱にかちり立縛りにされている美しい乙女の全身から、十八とは思え

ぬムンムンとする女らしさが立ちこめてくるのを不良二人は感じて狼狽する。自分達が立ち入り、犯すことの出来ない気品のある色気というものを感じとったのだ。

美津子は、首も顔も燃えるように赤くしながらも、冷静な、人間的思考を投げ捨てた表情をして、義子や悦子に耳もとへ、吹きこまれた事を口にするのだった。

「——竹田お兄様、堀川お兄様、以前は、美津子に素晴らしい浣腸を下さり、あの時の感激は、未だに忘れられません。——その上今日は美津子のサイズを計って下さるとの事お、お礼の申しようもございません」

美津子は、わなわな唇を震わせ、涙にうるんだ黒眼勝ちの瞳を、二人の不良少年に向けながら、やっというのだった。

「さ、次をつづけて——」

義子と悦子、くすくす笑いながら、次をさいそくする。

「さ、お兄さま、くわしく、計って下さいまし。でも、美津子、まだ十八、おとなしくしようとしても、つい羞しくなって身体を固くしてしまいかも知れませんわ。ですから、しっかり縄をかけて下さいませ」

竹田と堀川は、ぞくぞくした気分で、台の



うしろに立てかけてある木材を取り出し、美津子を立縛りにしている丸木の根元に、それを横木にして打ちこみ始めたのだ。

悦子と義子も、それにならって、文夫の方の丸木の根に横木を打ちこみ始める。

「お坊っちゃんの方のサイズは、あたい達が計ってあげるわよ」

美津子と文夫を人の字の形に縛り止めるべく、ズベ公もチンピラも身をかがめる。

悦子と義子の手が足首にかかる、文夫はぴくっと身体を震わせ

「は、はなせっ、けだもの！」

と叫んで、一瞬、抵抗を示したが、竹田や堀川が手をかして、まるで、タックルでもするように文夫の足もとへ襲いかかり、有無をいわせず左右へ大きく割り開かして、横木に縛り止めてしまうのだった。

「く、くそっ」

文夫は、息もつまるばかりの憤辱に、必死になって身体をゆすったものの、全身にがちりとかけられた縄は、びくともゆるむものではなかった。文夫は、もう抵抗の空しさをはつきりと悟ったように、がっくりと首を垂れて、おとなしくなってしまう。

ほっと一息ついたズベ公は、再び、美津子

に攻撃のほこ先を向けるのだった。

「さあ、貴女の恋人も、堂々と縛られたわ。貴女も負けないように大きく開いて」

美津子は、竹田と堀川の手が足首にかかる、一瞬、電気に打たれたように身体を震わしたが、もうどうしようもないように力を抜き、不良少年のするがままに任せてしまったのである。

「まあ、いい子なこと。これから何時も、そういう風に、素直にならなきゃ駄目よ」

美津子の足を難なく八の字に開かせた竹田と堀川は、しっかりと縄止めをし、ニヤニヤ笑いながら、その前に立ったり、しゃがんだりして美しい身体を凝視する。

「普通なら、鼻もひっかけてくれない夕霧女子高校の才媛を、こういう姿にして観賞出来るんだ。あんた達も本望だろう」

義子はガラガラした眼つきで、美津子の全身をなめるように見廻している竹田と堀川にいい、

「さ、くわしく測定してあげな。あたい達は文夫の方を調べるからね」

チンピラ二人は、美津子を、ズベ公二人は文夫を各々、手に巻尺を持って、仔細に調べ始めるのだった。

美津子も文夫も、がくがく歯をかみ鳴らし額に脂汗を浮かべて、この言語に絶する屈辱を全身鋼鉄のようにして耐えている。

「——ああ、も、もう——やめて——」

美津子は、い——と白い歯を唇の間からぞかせ、不良少年達の執拗さに耐えられなくなったように大きく首をのけぞらせる。

ようやく、ズベ公もチンピラ達も、仕事をすまして立ち上り、巻尺を指で持って、サイズを示し合い、笑い合う。

「それならびったりよ。いいコンビになれるわ」

悦子が大きな口を開けて笑った時、マリがウィスキーびんをぶらさげて入って来た。

「いよいよ、お客様の御入来ね。いいわよ。準備は出来てるんだから」

義子が、放心したように首を垂れ合っているさらし者の美男と美女に眼をやってそういうと、

「今ね、社長と親分の意見が出て、童貞と処女のショーを今夜してしまうのは惜しいというのよ。どうせ、散らすものなら、明日の夜のショーに出して、客を喜ばせた方が得だという考えなのよ。たしかに、その方が愉快じゃない。すばらしいプログラムになるわよ」



とマリはいうのだった。

なるほど、と悦子も義子もうなづく。

水揚げショーなどという言葉はおかしいが  
童貞と処女を今、ここで失わせてしまうより  
明日のショーでそれを行えば、たしかに、観  
客の度肝をぬく事になるとズベ公達は了解す  
るのだった。

「じゃ、そういう事にしましょ。二人ともい  
いわね」

義子は、台の上の美しいさらし者に向って  
そういう。文夫も美津子も、もう一言も発す  
る気力もなく、ただ、申し合わせたように首  
を垂れつづけているだけであった。

「ところで、静子夫人と桂子のプレイは終っ  
たの」

義子が聞くと、マリはウイスキーを悦子や  
チンピラ達にすすめながら、

「ところが、それがまだ、お人形責めの最中  
なのよ」

「まあ、まだ、そんな事やってんの」

「桂子の方は、スパークして完全に往生しち  
やっただけだね、奥様の方は、汗まみれに  
なってるのに齒を喰いしばって、がまんして  
るのさ」

「明日のショーの主役なのに、そんな責めを

つづけちゃ身体が痛んじやうよ。いいかげん  
に解放してやらなきゃ」

義子もマリに注がれたウイスキーをなめな  
がら、台の上に腰をおろしているのだった。

「私も、そう思ったんだけどさ。何しろ、銀  
子姐さんが、どうしても、千代夫人の眼に、  
静子夫人の降参した姿をはっきり見させるの  
だといって、やけになって責めるんだもの。  
あの千代夫人だって、達者なものよ。自分も  
銀子姐さんに調子を合わせて、キャッキヤッ  
いって責めてるのよ」

「まあ、あきれた。フッフ、でも、静子夫人  
そんなにまでされても、がんばりつづけるの  
は、よっぽど嫌なのね。元女中に、そんなに  
なった身体を見られるってことが」

恐らく静子夫人にしてみれば、銀子や千代  
の待ちうけているそんな状態に陥らないよう  
必死に耐える事のみが残された最後の抵抗な  
のであろう。だが、それならそれで、銀子や  
川田、それに千代などは一層意地になって責  
め抜くであろうし、つまり、マリにいわせれ  
ば、静子夫人が赤恥をさらけ出すのも時間の  
問題だということになる。

義子は、台の上の美しいさらし者にふと眼  
を転じ、ふと何かを思いついたように、

「でも、明日が本番なら、少し、この初心な  
二人、教育しとかなきゃいけないわ。実際の  
プレイなんて真似事もろくにしていないうし、見  
せてもないんだから」

勉強のために映画を見せてやろうよ、と義  
子がいい出し、チンピラ二人は、グッド・ア  
イディアだなどといいながら、表へ飛び出し  
て行き、どこからか八ミリ映写機とフィルム  
を数本とって帰って来た。

義子と悦子は、この密室の隅に立てかけて  
あった映写幕を距離を見計いながら、台の上  
の、つまり、美しいさらし者の前三米ばかり  
のところに椅子をつみ重ねて、はりつける。

映写機は、人の字型に立縛りにされている  
文夫と美津子の間に配置された。

「森田組が制作して、あっちこっちの温泉場  
に流しているフィルムなんだ。勉強のために  
よく見るんだよ。あんた達もやがて、こうい  
う映画に出演させて貰えるんだからね」

悦子は、クスクス笑いながら、密室の電気  
を消し、豆電球一つが台の上にともった。

映写機が回転し始めると、映写幕に『ある  
夜の出来事』というタイトルが、あざやかに  
うつし出された。

ズベ公達は文夫の側に、チンピラ達は美津



子の側に寄り添うようにして、映画観賞を始める。

あごを指でこじあげられ、強制されて眼の前の映写幕を見る文夫と美津子。

あっと小さく叫んで美津子は眼を閉じた。

映画の中に正視出来ない場面が現われたのである。美しい十八の乙女は、思わず顔を熱くして、首をねじ曲げようとしたが、竹田は美津子の熱くなった頬を手ではさむように持って正面に向けさせ、

「見なきゃ駄目だよ。せっかく勉強させてやろうとしているのに」

強引に顔を正面に向けられたものの、どうしてそんな映画がまともに見られよう。

固く眼を閉ざしている美津子に気がついた竹田と堀川は舌打ちして、見なきゃ、こうするぜ、と美津子の太股を抓ねる。

「あっ、な、なにすんのっ、やめて！」

カミの毛をひっぱられて、美津子が悲鳴をあげ始めると竹田と堀川は、笠にかかったようにきびしい声で、

「じゃ、しっかりと眼を開いて見るんだ」

美津子は、もうどうしようもなく、涙にうるんだ美しい黒眼を、前の画面に向けるのだった。

文夫の方も、義子と悦子の二人に強制されている。顔をそらせたり、眼を閉じたりすると、ズベ公二人が、抓ねったり、はじいたりひっぱったりするのだ。

遂に文夫も美津子も、どうともなれ。と、覚悟をきめたのか、おぞましい画面に視線を向け合う。

それを見た義子と悦子は顔を見合わせて、くすくす笑いながら、更に一本、また一本と竹田達が持ってきたフィルムを映写してゆくのだ。

「ふふふ、面白い映画でしょ。でも、出演している男も女も顔はよくないし、身体も不恰好。若くて、ピチピチしたニューフェイスが森田組も欲しく思っていたところなのよ。あんた達二人は恐らく森田組映画部のドル箱スターになる事と思うわ。しっかりと頼むわよ」と義子がいえば悦子も、いくつものいまわしい映画を一種の虚脱状態になって見入っている美津子の、お臍をつついたりして、

「十八になったばかりで、映画の主演女優、大した出世じゃないの。しっかりと勉強するのよ」

といって笑いこける。

五本のフィルムの映写は、ようやくおわっ

た。

長時間、そんな映画を強制的に観賞させられた美少年と美少女の額には、べっとりと脂汗がにじんでいる。

「どう、素晴しかったでしょう。明日のプレイの参考になった事と思うわ」

嫌悪の戦慄と不思議な陶酔がミックスされた気分で、美津子は思わず両肢を閉じ合わせようと半身に力が入ったが、大きく開かされて横木に縛り止められた肢は、びくとも動くものではなかった。

悦子は何かに気づいたように笑いだし、義子の肩をたたいて、文夫のそれを示す。

「まあ、いやだわ。でも無理ないわね。感じやすい年頃なんだから」

文夫の顔は、見る見る充血してゆく。

「美津子嬢だって、きつとそうよ。しきりに両肢をもじもじさせているじゃない」

義子と悦子に笑われて、美津子は打ちひしがれたように首を垂れてしまう。

「ねえ、こんな映画を見せられて、このまま二人別々のところで淋しくおねんねするの可哀そうじゃない」

「でも、悦子、プレイは明日お客さんの揃った所でさせなきゃ駄目なのさ」



「だからさ、今夜のところは、虫おさえに、あたい達と竹やん達とで、スベッシュ・サービスをしてやったらどう。静子夫人と桂子も銀子姐さん達にしてもらっているんだし——」

「それもそうね」

美津子と文夫は、お互いに首をがっくり垂れ合ったまま、すすりあげるように首を振っている。

小躍りせんばかりに喜んだ竹田と堀川は美津子にとりかかろうとしたが、ちょっとお待ちよ、と義子が二人のチンピラをさえぎる。

さかりがついてしまったような二人は、口をとがらして、

「なんでとめるんだよ。俺達と、このお嬢さんとは、浣腸までしてやった仲だぜ。そういうサービスなら、俺達がするのが当然じゃないか」

まあ、わかってるわよ。と義子は笑いながら、

「まあ、そうガツガツいなくても、あんた達の気持はよくわかってるさ。気がすむまで美津子のサービスは、させてあげるけど、その前にちょっと、美津子にして貰いたい事があるんだよ」

義子は、竹田の耳に口をあてて何かいう。

ニヤリと口をゆがめた竹田、

「なるほど、そいつは面白いや」

「ね、わかったらう。じゃ、美津子の縄をといてやってくれ」

竹田と堀川は、いそいそとして、美津子の全身にかけられている縄を解き始めたのである。

地獄の羞恥責めに、しかも今日は野犬のような竹田と堀川にかけられるのだと半分失心しかけていた美津子であるが、急に、二人が自分の身にかけられている縄を解き出したので美津子は夢ではないかと思ったくらいだ。

ようやく、全身の縄を解かれた美津子は、ふらふらと、その場に身をかがめ、縄目のあとか痛々しくついた陶器のように白い両手を前へ廻して二つの乳房を押さえ、びったりと腿を閉じ合す。数々のむごい責めにあいながら、そうした初々しい羞恥を忘れぬ美津子を竹田や堀川は頼もしげに見つめているのだ。

「ねえ、美津子嬢、貴女の縄を解いてあげたわけはね、あたい、文夫さんにサービスしてあげようと思ったけど、昨日から指の先が痛んで仕方がないのよ。ですから——ふふふ」

悦子は、身をかかめている美少女の顔をのぞきこむようにして笑う。

義子がつついていった。

「今の映画を見て、文夫さんたら、そら、こんなになっちゃったでしょ。何とか解決してあげなきゃ可哀そうよ。だからさ、貴女、竹田さん達にサービスしてもらう前に、恋人の悩みを、貴女のその美しい白い手で——わかったでしょ」

美津子は、ズベ公達という意味がやっとわかり、床に頭を押しつけるようにし、肩を振るわせて泣きじゃくる。竹田や堀川が、自分の縄をといたのは、こういう恐ろしい計画をたてたからなのだと知った美津子は、あまりの恐怖に全身をがくがく震わせて鳴咽しつづけるのだった。

義子が目くばせすると、竹田と堀川は、ずかずかと身を伏せて激しく泣いている美津子の傍に近づき、その白い肩に手をかけて、ひっぱ返えすように上半身を起こし、美津子のすべすべした両腕を両側からかきとむようにして無理やり立上らせるのだった。

美津子は、竹田と堀川の二人に、引きずられるようにして、文夫の前へ引き立てて行かれた。

(未完)



## 裸女二人の尻の下

十二枚一組 略号(まふ)

Mモデルに志願してきた幸福な男は、豊満な全裸の美女二人から徹底的にいじめられる。逞ましい素肌の臀部が男の頭の上に無遠慮にのっかってくる。華麗なマゾ絵巻が美しいカメラ・アイによってあますところなく捉えられていきます。どうぞ貴方を、この幸福なM男に入れ替えて、Mの醍醐味を十分に御賞味して下さい。

## 美女から縛られる

十二枚一組 略号(まね)

暴君と化した二人の逞ましい美女の前に跪いたM男は、必死の抵抗も空しく、縄で厳しく縛られてゆく甘美な過程を連続で狙いをつけてゆきます。後手高小手に縛りあげられて身動きもできなくなつた男に、これから二人のベテラシ女性に、さてどのような暴虐のムチを揮うでしょうか、詳細は写真によってお楽しみ下さい。

## 痛烈ムチのご馳走

十二枚一組 略号(まれ)

後手に縛りあげられた男は、二人の裸女にとっては、恰好の弄び者である。二人の美女の手にあるムチや麻縄は、激しいいきおいで男の肌の上で炸裂する。忽ち赤いシミズ腹れがふくれ上り、血がにじむ。それでも女達のむごたらしいムチの手に止みそうにもない。やがて男の口からも痛苦とも快味ともいえる呻めきが洩れる。

## 汚臭と足舐の強制

十二枚一組 略号(まり)

女の肌にじかにつけていたパンティを頭にかぶせられ、口に押し込まれても、縛られている身の男にとつては、どうすることも出来ない。やがて女の足指が無理矢理口へ押し込められる。拒否しようにも他の一人の女が頭を押さえて逃がさない。二人の女による強制が、いつの間にか男を恍惚たる被虐の花園へさそい込んでしまう。

## ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演

## Mフオト 最新作 M場面決定版

## Mフアン待望の

## 超傑作集

大手札印画紙焼付  
各組十二枚一組 二〇〇〇〇円  
八組全部にて 一三〇〇〇〇円

## 二女の戯むれと男

十二枚一組 略号(まも)

跪いた男の背の上には、二足の美しい蝶々のように戯むれる二人の裸女があった。はじめ男の存在など無視していた二人だったが抱擁に飽きると共に、尻の下にうごめく男をなぶってみようという気持になった。何ごとも易々として従うM男に対して、二人はどのような辱しめを与えるか、写真によってとくとお確かめ下さい。

## 馬を乗り潰す女

十二枚一組 略号(まめ)

二人の肥った女を背中に乗せてハイハイドウドウ、いくばくもなく男の馬は潰れてしまう。乗り潰された男は、さて、これから勝負な二人の美女から、どのような恥しい仕置を強いられるだろうか。それは面白くてたまらない女達になぐさみの遊戯であったが、M男にとつては、身も凍るような戦慄的な暴虐であった。

## 首締めで刺す止め

十二枚一組 略号(まむ)

いくばくなく痛めつけても辱しめても喜んでいるM男に対しては、最後の止めとして、逞ましい太股による首締めによって昇天させてやるのが御慈悲である。苦悶にあえぐ口の中には、汚物が、足の指が押し込まれ、男の顔が鼻が、むちゃくちゃにいたぶられつくす。さんざん弄れた男は、遂に精根つき果てて女達の軍門に降るのである。

## 二女の臀臭に泣く

十二枚一組 略号(まみ)

逞ましくも肉づきのよい二女の臀の下に押し潰された男の顔は、醜くひしやがて、その臀臭をいやというほど嗅がされている。なおそれでも足りないかと思ふ一人は勇ましく放屁を男の顔面にふきかける。今やグロッキーになった男に對して、二女の責めは巧妙なテクニクで男が泣き叫ぶまで更に続行されるのであった。



記

手

## 私と私の周辺

葉山 啓

○

先日、編集部へ宛てた私信で、私は「私と私の周辺」という、感想文(?)を、送ろうと思っているが、よく、考えてみると、そういう、雑文(?)で、貴重な、誌面を汚すのは、不本意であるし、又、自分の気持としても、なんとなく、お茶を濁すようで、納得がいかず、やはり、折角、送るのなら、自分でも、これなら、と、いう、作品が出来てからに、さしていただきたい——V、と、大要右のような、趣意を、述べておいたのだが、或る日、「までよ」、と、再度、考えたことには、最近の、本誌の面白さは、創作品を通して、作者の人格や魂に触れることよりも、(だからといって、多くの作者が、お書きに

なっている、労作が、つまらない、ということでは、決してない旨、御諒解を願って)生々しい論壇、新鮮な議論、そして、果しのない饒舌、などを通して、その人の内面をのぞき、性向を知り、人格を偲ぶ方にあるのではないか——と——

それならば、自称、ヘソマガリの私とてにも、乙に、とりままして、「作品」だけしか、書かないということもあるまい——いや、むしろ、夜乃探郎氏や、芳野眉美氏の仲間に入って、気の向くまま、ペンの向くままに、いろいろ、と、おしゃべりを、やってみたら……。

この、やたら、忙しいくせに、不毛で、退屈な毎日が、更に、楽しくなるのではないか

……。と——、そんな訳で、ここに、その一稿を、お送りすることになったが——題して、「私と私の周辺」。——

## 1 不 満

私の中には(芳野眉美氏の言を借りれば)「崇養神」が、在します。芳野眉美氏は、神酒愛好家を、自称してられるが、私は、神酒よりも、美女の、コートの方に、より、魅力を感じている。(もっとも、神酒も、嫌いではないが、)

だから、コートに、関係のある、クリスタ—も好きだし、美女のアヌスも勿論、大好きである。

医学的に云うなら、アヌスは、直腸末端のなんでもない、排泄器官の、一つに過ぎないのに、美女のそれは、思っただけで、私の心をかき乱す。なぜなのかい——ということには、私自身にも、よく、わからない。どうかすると、私には、女性の、ヴァギナよりも、アヌスの方が、魅力的であることさえある。コートと、アヌスは、切り離して、考えられないが、自分でも、自分の、性向が、わからなくなつて、おかしくなる——

だが、こんな、私の性向を、かりそめにも



口に出来るのは、ここ（本誌）だけのこと、であって、もし私が、こんな、話を、ここ、（本誌）以外の場所で、口にすれば、私は、たちまちにして、不潔きわまりない、変態男（？）として、人々から、爪はじきされることは、間違いない。

そういう意味では、まことに、この世は住みにくく、私の、周囲の人々は、全くの、健全と、ノーマル（？）を遵奉していて、（しかし、それは、見せかけだけのことも、知らない……）。私には、人間と、人間の、セックスが、なにを基準にして、健全だの、ノーマルだのと、いわれるのか、よく、わからないし、又、えてして、道学者的健全を売りものにしたり、ノーマルを、看板にしている奴の中に、とんでもない、喰わせ者が、いることも知っているの、そうそう、いわゆる健全だの、ノーマルだのに、敬意を表しているわけでもないが——、こういう連中から変態（？）呼ばわりされると、私自身が傷つくことよりも、なによりも、まず、実生活に支障を来すことになるし、さりとて、そんな連中を相手に、「オウ、たしかに、僕の性向は、アブノーマルだ……」と、居直ってみても、ここは、ストックホルムでもなければ

ニューヨークの、グリニッジ・ビレッジでもない、まず、警察の変質者リストに、のっかるぐらいが、関の山——。

倒錯美の中の、目くらめく、決感——。ひめごとの中の、限らない陶醉と、喜び……などの、とうてい、理解出来ぬ（？）人々ばかりが、ごまんという、性的後進国だから、こればかりは、どうしようも、ないことだが……。

アメリカや、フランス、それに、スエーデンなんかの、エキスペリメンタル映画を見ると、その、90%までが、倒錯セックスを足がかりにして、人関の存在に関る、すべての問題——そして、その集団たる社会の問題に鋭く、アブローチしているのに……。

——私は——いろんな意味、——健全バカ——にだけは、なりたくない、と、思っている。

## 2 本誌に寄せて

「前衛」、ということについて、考える。

殊に、日本の前衛に、ついて——である。

更に、それを、前衛芸術にだけ限って、考えれば、それは、あくまで、作家精神の問題に帰着する。

常識論で、前衛芸術の本質は？——と、問えば、三才の幼児でも、既成の美的観念と、既成の表現、乃至、その方法論の、破壊——そして、その視点での、新しい、美意識と、表現、乃至は、方法論の発見と、創造行為と答えるに、違いない。

だが——、今日、日本の前衛芸術が、果して、その本質を、貫いているかといえ、これは、大いに疑問としなければならない。問題を、前衛映画と呼ばれる、一群の映画と、その作家達に限って、考えても、もはや、そこには、作家精神すらが、不在であるとしか云えぬ程——それ程、退嬰しているように思える——。

前衛芸術の類型化なんてことは、まったくバカバカしい、お笑いだ、が、それ程——（かつては、そうでなかったはずの）作家の精神が、フヤケてしまっているのが、現実の状況である。——

その原因は、一体なにか？——と、考えて、私は、遂に、三つの結論を、ひき出した。それは、それらの作品が、作家の内的必然性から、創造されているのではなく、時流の中での、一現象にしかすぎなかった、と、いうことと、（勿論、その作家に、資質、才能が



なかったということも、あるだろうが、意外に、それらの作家達が、既成に対して、抵抗も、破壊も試みず、パターン集積に、終始したこと、そして、最後に彼等が、実に、健全で、ノーマルであったということ——の、三つである。

これでは、まったくのところ、どうしようもないではないか——と、私は、首を、ひねり、そして、健全だの、ノーマルだの、と、いわれる、性<sup>セックス</sup>が、いかに、日常生活の中で、類型化し、不毛化しているかということに、今更のように、目を見はったのである。

「性とは、一体、なにか——」

時には、種族保存本能の、しからしめる、神儀であろうし、時には、決楽のみを追かける遊戯であろうし——オダサクの言葉を借りれば、日常茶飯事の欠伸まじりに、倦怠期の夫婦が行なう行為と考えてみたり、娼家の一室で金銭に換算される、一種の労働行為と考えてみたり——

ならば、私の性<sup>セックス</sup>——、女性のコートに対する、限らない憧れ、女性のアヌスを恋い、悶々する、私の性<sup>セックス</sup>とは、一体、なんだろう。

思い、ここに至って、私は、始めて、私の映画創造への内的必然性が、実は、この、性<sup>セックス</sup>

にあるのだということを見つけたのだ。

女性のコートへの、あこがれと、アヌスへの切ない恋が、私の創作活動の原動力であり（私は、少くとも、今は、正直に、誠実に書いています）、発想の根源である——と、云ったら、おそらく、読者は失笑されるかも知れないが、既成の、なにごとにも、多少の、違和感を感じずには、いられない、（勿論、標準的な性交も含めて）のは、私の、愛が、女性のコートや、アヌスを指向しているせいだと云って、まず、間違いはない。

つまり、私の、性<sup>セックス</sup>——には、普通の、性交時にも、必ず、アヌスと、コートが、不可分の存在として——そして、それへの愛、として、あるのだ……。そして、この、性<sup>セックス</sup>——の違和感が、私に、どうしても、映画を創らせるのだ——

今一度、いうならば——私の映画のイメージは、すべて、女性のアヌスと、コート、から、発想し、出来上って行くのだ——。

幸いにして、海外の映画祭に出品して、賞を獲得した、二、三の作品も、すべて、そうなのだ——、八こと（本誌）だけの話であるが、Vとして、こういう視点で見て行く時、本誌に扱われている、二、三の創作の中に、ま

さしく、小説前衛としての方法論を、見出すことができるように思え、そして、それが、私に新しい文学の可能性をすら（大げさかも知れないが）信じさせてくれるのだ——。もし、仮りに、こういう逆説的な云い方が許されるなら、近い将来、本誌の中から、本質的な、前衛小説と、その作家が誕生することになるのではないだろうか、と、いう気さえするのである。勿論、一部を除いて大方の読者は、そんなことに、関心があるはずもないだろうし、それぞれの、環境、性向の中で、染めれば、いいのだから、ということとは、百も承知の上で、私は、云っているのである。

行間に、にじむ、やむにやまれぬ強烈な、作家の精神——、私は、時々、その、熾烈な、精神を感じて、その中から本誌の可能性と、将来性を見出しているのである。

本誌の中に、（健全な人々から、ひんしゅくを買い、悪書といわれている）本質的な、前衛作家の精神を垣間見て、私は、驚いている——。冗談ではなく本当にである。

### 3 コート作戦

新しい作品を作ることになって、その、美術を、仲間の一人で、今、売り出し中の、若



い版画家、N君に、依頼した。N君は、T美大を、首席で卒業して、最初は、写実的な油絵を描いていたが、いつの間にか、抽象版画にかわって、ここ、二、三年の間に、すっかり、有名になった。いろんな点で、私と、意気投合する所多く、仕事の面でも、大いに、秀れた、アドバイスをくれているが、その他にも彼と私の間には、秘めたる、共通点がある、と書けば、もう、おわかり？——、そう彼の中にも、崇養神が、宿っていたのである。何度目かの打ち合わせに、新宿の、ティールームFで、落ち合い、このバックは、どう

の、この色彩は、どうのと、やっていた時——、その日、私が、伴って来ていた、その作品で、ヒロインを演ずる、岡嶋真理子(22)が、「チョット、失礼します」と、云って立ち上り、奥の廊下へ消えて行った。その廊下の、突き当りは、勿論、トイレである、私と、N君は、顔を見合わせ、そして、なにくわぬ顔付きで、更に、打ち合わせを続けていた。が、二人の胸中に去来するもの——それは、まさしく、真理子の、そのものである、真理子は、未だ、S大に、在学中の演劇好きの、美しい娘だったが、私達とは、その

日が、二度目の出会いという、浅い、つきあいであった——

いくばくかの時がすぎて、再び、奥の廊下から、赤い、ワンピースを着た、真理子の姿が、現われた。

「うん、歩きぶりも、なかなか、いい……」

私は、そんなことを、考えながら、均斉のとれた、真理子の姿を眺めていた。

「どれ——僕も、行って来るかな……」

突然、N君が、そう云って、立ち上り、又もや、なにくわぬ顔で、タバコを、吹かしながら、廊下の奥へと、消えて行った

「残り香か——？」

私は、先を越されて、残念だったが、まさか、二人、連って行くわけにもいかないのだから、冷えた、コーヒーを飲み、底に残った、砂糖を、スプーンですくった——。

N君と、入れ違いに、席に帰って来た、真理子は、砂糖を、しゃぶっている私の顔を見て、恥ずかしそうに微笑んだ。だが、この時うかつにも私には、なぜ、彼女が、恥じらいの微笑み浮べたのか、その意味が、よく、わからなかったのである。——

何時間かの後、打ち合わせを終って、ティールームを出た、私達は、三越の前で、真理子

## 現在在庫『本誌既刊号、特集号、限定版』案内

### ○臨時増刊号「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号「文献」

### ○限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛グラフ集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

### ○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

### ○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号「美5」

### ○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号「美6」



と別れた。

N君と二人、伊勢丹の駐車場へ向って、信号を渡り、歩き始めると、N君が、私の耳元で、嬉しそうに、ささやいた――

「彼女――昨日、ピーナッツと、しらたきを大分、沢山、食べたようだ……」

私は、思わず、N君の顔を見た、N君は、楽しそうに笑って

「――ちょっと、分析して見たんだ……暖いうちにね……」

「ふうん……」

私は、心の中で「畜生」と、叫びながら、しかし、わからないことが、一つあった。

「だが、あの店のは、流れてしまうんじゃないのか……?」

「それがね……」、とN君は、ますます、嬉しそうに、

「水が、出なかったんだ……だからネ……」

私は、その、真理子の、もの、を、思い浮べて、「残念」と、思った、あの、可愛い娘の、もの、だから、さぞかし、素晴しかったろう……ピーナッツと、しらたき、か――畜生――

「味は――?」

「上々……ピーナツも、ずいぶん、やわらか

くなるもんだねえ……」

「フウン……」

いまましい、N奴。

「だが――この辺、今日は、断水しているのかしら……」

「いやネ――こんなこともあるのかと、最初に、ちょっと、バルブ、をいたずらしておいたのさ……真理子コート作戦、成功の巻というわけさ……勿論、もう、ちゃんと、流しておいたよ……あれを、他の奴に、見せるのは惜しいものな……」

その、作品の出来栄は、我ながら、すばらしかった。題名「見られてしまった女」

そそっかしい、映画評論家曰く――

「映像の美しさは、他に、類を見ない……」ですと――。

#### 4 お便りへの返事

##### (その一)

曾我部要(大阪)様

八月号、読者通信、拝見致しました。拙い作に対し、過分な、おほめを頂き、大変、恐縮致しております。

其の後、新しい作品(シナリオ)を、書いておりますが、ここ、一、二カ月、俗用に

追われ、なかなか、筆が進まず、徒らに、時ばかり過ぎ、我が身の非才と時間の不足を、嘆いております。編集部の方へも、今月は、お送りするからと、約束しながら、違約に違約を重ね、又、先日の、山原清子氏を囲む座談会(六月二十七日)にも、申し込みをし

て、『ひかり三号』の切符まで買い、楽しみにしていましたが、とうとう、それにも、欠席しなければならぬ破目に陥り、つくづく、テレビの仕事など、引き受けねばよかったと、後悔しているような次第で、いずれは又、新しい作品をお目にかけ、御高評頂けるようになることと思いますが、その節は、どうか、よろしく、お願い申しあげます。

##### (其の二)

橘行司子様

八月号、SM時評、ありがとうございます、ございました。映画史上最初のなんて、云われると、穴があったら(アヌスでもいいです)入りたい、ぐらいです。今後共、よろしく。

##### (其の三)

芳野眉美氏

七、八月号の、お返事、ありがとうございます。神酒拝受のシーン撮影の節は、キツト、お呼び致します、(本当は、こちらで、



やりたいのですが)、M女性は、なかなか、見当らず、ちょっと、困りました。

サクラさんと、マミさんを、拝借出来ませんか？ オット、サクラさんはSでしたね。私も、モダンジャズは、大好きで、レコードも、少しばかり、コレクションしています是非、お遊びに、お出で下さい。神酒はないけど、コーラぐらいは、よく、冷えていますから……。お便りは、左記へ、どうぞ。

## 連続組写真Mフオト

### 二人の女性 餌食

大手札印画紙焼付

三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名  
M男性……Mモデル志願者M・H氏  
男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐め差しめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化しました。縄、ローソク、浣腸器などの小道具を用い、マゾファンの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。どうか、この写真集にてマゾの醍醐味を心ゆくまで味って下さい。〕

## (其の四)

中村優子(川崎)様

九月号にて、お返事、ありがとうございます。した。仰言る通り、初めは、お手紙にて、意見交換致したく、連絡場所を、書いておきます。お手紙を、頂けましたら、当方、詳細と写真を、お送り致します。参考資料も、多少ありますので、御入用でしたら、どうぞ——では、お便り、お待ち申しております。

## ☆四馬孝☆力作画

### 時代風俗 女体切腹図絵

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(ゆい)

#### 一、座敷牢の美女切腹

無実の罪によって、座敷牢に押し込められた武家の美しい娘。牢内に白布を敷きつめ、双肌ぬぎとなるや、自らの潔白をあらわすため恋人の見ている前で、雪をあざむく真白い下腹をあらわにして、短刀できりきりと切りさばき、左の乳房の下に止めの一刺し。天晴れ覚悟の美女切腹の姿。

#### 二、介錯に果てる美女

ふくよかな胸、まろやかな肩口、可愛いふくらんだ腹をあらわして肌ぬぎになつて庭に端座した娘。ふっくらと脂づいた左脇腹から臍下にかけて、脇差で切ったかきり回せば、介錯の刃がきりりと一閃。麗わしの美

連絡先——東京都世田谷区玉川等々力町二

丁目七八。コーリン内 葉山啓

(勝手を申して恐縮ですが、芳野眉美氏、中村優子様以外の、方で右記住所へ、お便り頂きましたら、私には、伝達されませんので、お返事その他で、失礼することになります。悪しからず、御諒承下さい)

(終)

女の細首が、さつと飛び散る血しぶきと共に身首異にする凄絶のシーン。

#### 三、駕籠の中の姫君切腹

氣にそまぬ縁談の相手の家へ駕籠で送られてゆく可憐な姫君。腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹を果す。守刀を抜き放つて豊かな臍下へずぶりと突き刺し、更に鳩尾へかけて十二分にはねあげて、凄惨にして美しい十文字腹の見事な姫君切腹の有様。

#### 四、男装の美女切腹

小姓姿もあでやかに身を変えた男装の美少女が、豊かな乳房もむきだしに着物の前をくつろげて、白く輝く下腹にしたたかに突き刺す懐刀の切先。深夜の奥御殿にくりひろげられた倒錯美切腹絵巻。

#### 五、美女裸身の切腹

もはや逃げられないと決心した美しい腰元は、死んで操を守りぬこうと、すべすべとした柔肌のすべてをさらけだして、守刀の短刀を抜き放つと、下腹のたっぷり肉づいた皮下脂肪を切った上、咽喉元に止めの一突き。



## 「息詰まる刹那に酔う女」

辻 村 隆

「息詰まる刹那に酔う女」

竹野ひろ子から電話があったのは、七月四日の朝だった。何を気紛れにひよっこり電話して来たのだろうと、日曜日は朝寝ときめている私は、渋々ベッドより起き上り、ねむい眼をこすって受話器をとり上げる。

「誰だか分る？」

ハスキーなひろ子の声だが、何カ月振りかの、突然の彼女の声には、私も咄嗟には憶い出せない。

「さあ——誰方でしょうかネ……」

とぼける訳でもないが、起き掛けだけに、稍気嫌が悪い私。

「ひろ子……竹野よ」

「ああ、あんたか。急に誰かと思った」

「私で悪かった様ね。いい話だから、辻村さんに知らせてあげ様と思ったのに、何だか余計なことしてる見たいだわ。もう、よそうかしら」

「おいおい、言い出して、わざわざ起しておいて、よすなんて殺生やで。白状してしまいなさいな」

「辻村さんに是非一度撮って欲しいっていう人がいるの。勿論女性よ、但し趣味は私と同じ。同じでも、程度は私以上。ふとした事でお知合になって、この間、私の家で主人と三人でプレイしたのだけど、凄いわよ。どう面

白そうでしょう」

「プレイというと、やはりオシメカバーとかゴムの感触とか」

「すべて、私の好みとドンピシャリなの。どう、一度お逢いになる？それとも辻村さんの好みと違うから、気が進まない？」

「カメラ・ハントに使ってもいいかね？それなら是非逢って見たいけど。フォトはいや、書かれてもいや。唯プレイだけとなると、暑い時だし一寸億劫だなあ」

「撮って欲しいと、自分から希望している位だから、勿論ハントもO・Kでしょう。詳しくは御本人に聞いて頂戴ね。名前は山本阿





津子、通称アッちゃん。齡はレディのために言わないでおくけど、まあ、二十七、八才ぐらいと考えていて結構よ。お家は大阪府下の池田市内、唯今独身中と、これぐらいでいいでしょ。善は急げというけど、今日の午後どう？」

すっかり睡気はさめていた。私は尚もアッちゃんなる女性の容貌、又確実な打合わせ場所等を細々ときめるのに、更に数分の時間を要した。

「じゃあね。うまくいったら、辻村氏一度奢るべきよ。そうそう、うちの人からもくれぐれもよろしくって……。何しろ筆不精だから、いつも辻村さんの噂しながら便りを書かないの。忙がしいせいもあるでしょうけど。休無理しないで、せいぜい張切って頂戴。じやあサイナラ」

今日の日曜日、差し当っての急用もなし、まあ、あると強いて言えば、気が進まぬながらも行く気になっている、参議院議員選挙の投票ぐらいである。

改めてベッドに潜り込む気にもなれず、私は嘗っての、竹野ひろ子とのプレイの数々を回想しながら、ぼんやり朝刊に眼を落していた。

× × ×  
約束の午後一時、私は打合わせ場所ときめた、阪急梅田、OS劇場裏の喫茶Rを漸やく探してドアを開ける。

日曜日というのに案外人影は薄い。喫茶店はガランとして客は私を含めて僅か三人。降

ったり止んだりの典型的な梅雨空とあれば人も出ないのだろう。見るともなしに眺めるテレビで、吉展ちゃん事件のクロと目されていた小原保が遂に自供したと速報はしらせていた。恐らく吉展ちゃんはこの世に生存しないだろうと、私は直感した。子を持つ私も親の一人として、誘拐程いやな事件はないと思う。

喫茶店のレコードが、まるで符牒を合したかの様に「かえしておくれ今すぐに……」となり出す。ピーナッツの双つの声が、悲愴に響くにつれ魂の滅入る思いに、私もひとときかられた。

我に還って時計を見ると約束の時間を十分過ぎていた。私以外一人の客もない。コーヒは体調のためやめているので、例によってサンドイッチと水。それも喰べ終り、水も残り少なくなつて、お代りをする。私は少しいらして来る。テレビでこの近くの梅田花月から中継の『素人名人会』をやり出したから、一時十五分を過ぎていたのだろう。凡児が洒脱な司会をやっているのをぼんやり眺めていたら、扉が開いて、逆光線に一人の女性の姿が入口に立った。喫茶店のルームは昼でも暗い。辺りを見廻しながら女性は入口近くのボックスに坐った。



（恐らくこの女性に間違いあるまい。眼が馴れるのを待っているのだ。ホレ、キョロキョロし出しただろう）私は過去の十数度の経験から、確信をもって件の女性に近づいた。

「山本さんですね？」

女性は見上げ、ハッとした様に、ドキマギして続けざまに二、三度うなづいた。

「辻村です。私の席に、いらっしやいませんか？」

「ええ」

素直に彼女は立上ると、奥まったテーブルに向い合せて坐った。固くなっている。

「ひろ子女史から紹介されたんですけど、本当に、或る雨の午後突然に」こうして見知らぬ同志が、雨の巷の片隅で、語り合えるなんて、考えると、人生なんて案外楽しいもんですね」

気分をほぐす様にそんなロマンチックめいたことを駄べって、私はウェイトレスに彼女のためにアイスコートを注文した。

「お聞きしたい事許りですけど……。何しろ貴女に関しては全然予備知識ゼロですのでネ」

「私は辻村さんを、三十九夜物語の第十七夜以降、本を通じて存じております」

「とすると、もう数年前からのおなじみとい

うわけですね。で、奇クは貴女御自身でお買になるの？」

「一年許り前から発行所に直接購入を申込んで、毎月送って戴きますが、それまでは……」

アッちゃんは一すい淀んだ。

「それまでは？」

「ええ……。実はあたし、それまである人と内縁だったんですけど、五年許り一緒に暮らしていたのです。その人が毎月買ってきて来て、私に無理に読ませたのです。それが今では自分から進んで本を買う様になるなんて、私も変りました。私のこと、いずれお話ししますけど、何からでも聞いて下されば結構ですわ」

山本阿津子は、羞らい気味に口に手を当てて軽く微笑んだ。地味な、時代遅れの洋髪。淋しいかげのある白い頬。薄化粧はしているであろうが、それも目立ぬおとなしそうな丸顔の、優しさを体一杯に浮べているような女性であった。渋い茶系統の半袖のツーピースが、尚更に彼女を地味に見せるのかも知れない。

しかし五年にわたる同棲生活が、やはり人妻めいたものを、彼女の全身にはのめかしていた。

私達はどちらからともなく立上った。暗黙

のうちに、プレイとフォトと、カメラ・ハン

× × ×

OS劇場の前から車を拾うか、堂山町に櫛比する連込みホテルへでもしけ込もうかと思案して私は、劇場の前で立止った。

「あのう、勝手なお願いですけど、私のアパートへお越し下さいませんか？ 私一人暮らして、気兼ねありませんので、それに……」

それにといい掛けて彼女は口籠ったが、恐らくプレイの道具が揃っているからとは、流石に口ににくかったのだろうと、私は自分勝手に推察した。その方が私にとっても都合いいし、ゆっくり出来る。そして彼女の生活の断片をも覗けるわけだ。

「勿論いいですよ。そうしましょう。気を使わなくて、いいかも知れませんね。じゃあ阪急で」

私達は阪急宝塚線のプラット・ホームに並んで立った。

うまく急行がホームに入ってきた。十三、

石橋と停車して、池田駅には二十分少々。

駅前を縦断する産業道路を、石橋寄りに引き返して、徒歩十数分、新築の三階建てのアパートの二階に彼女の塙があった。アパート

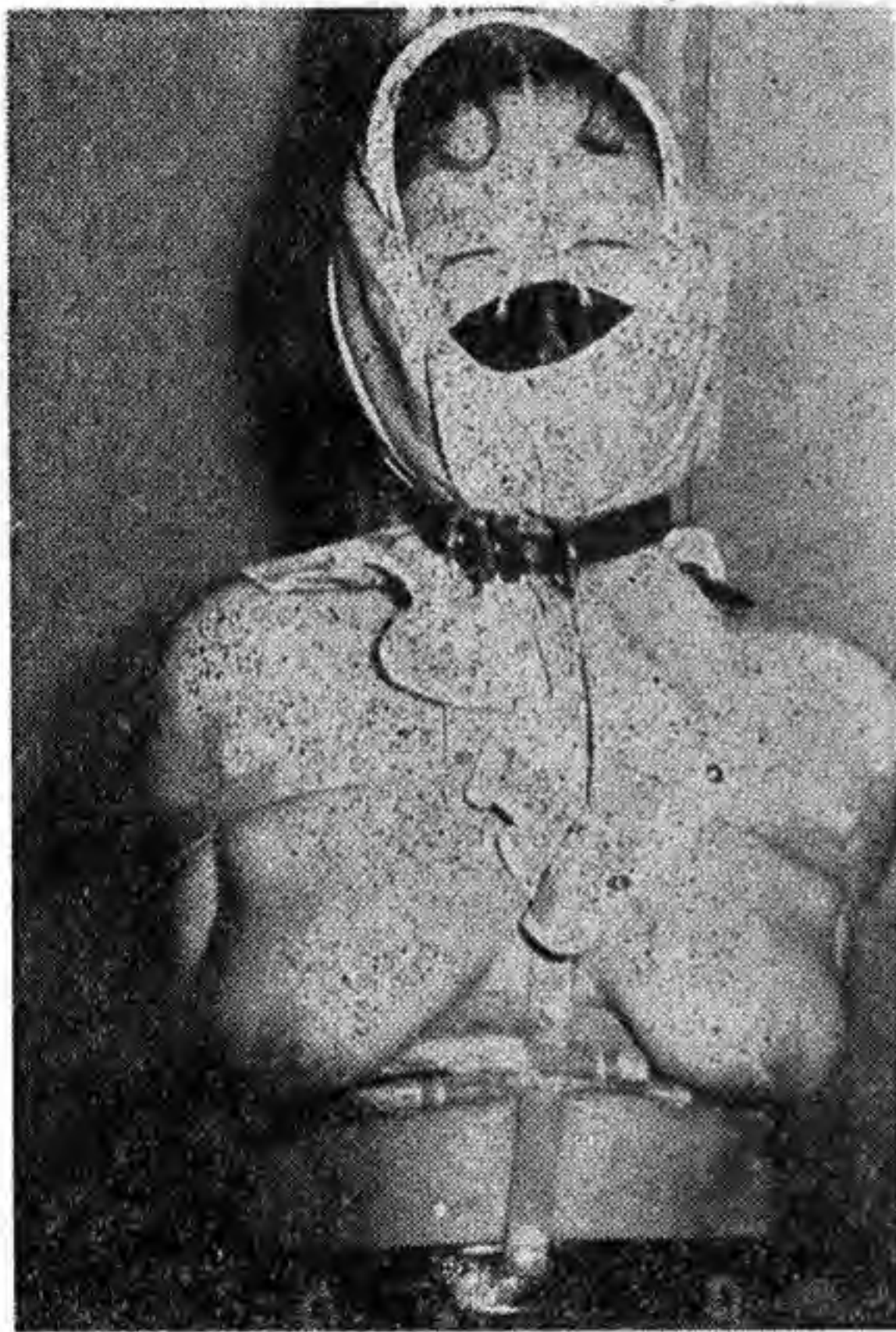


の横手に二階へ昇る階段があつて、一部屋宛に独立している。今流行りの、隣りは何をする人ぞ”式で、二人で連れ立って入っても、誰一人怪しむ者のない便利さである。

車中で、私は車輪の騒音に、かなり大声で喋り合つた。問はず語りの彼女の話で、自分、素性や来歴も見当がついて来た。話は徒歩の十数分の間も延々とつづいていた。

竹野ひろ子が以前勤めていた会社の、仕入先の会社の経理をしていて、事務連絡でひろ子とは社用で時々会い、知合いになつたらしい。お互いの好みは社用のみで、話合つた事は全然なかったが、

奇クに出たひろ子の写真が、彼女の知っている竹野ひろ子（ここでお断りしておくが、竹野ひろ子は奇クの名前です。彼女の会社での名は勿論本名、H・Tですがイニシャルをとって竹野ひろ子と私が命名したので、私との交際では彼女自身、竹野ひろ子を使っています。念の為）にそっくりなので、或る日思い切って聞いて見たら、案外あっさりひろ子が認めたので、彼



女も自分の性向を打明けたというわけである。この二人、SとMなら、女性同性でもプレイした処だが、どちらもM傾向の、それも、おしめカバー、ゴム、レインコート等の愛好者なので、精々連れ立って、雨の日レインコートに身を包み、ゴムの幻想に憑かれながら、おしめカバーをはめてぶらぶら歩き廻るのが関の山だったとか。

竹野ひろ子が、その会社をやめ、今の彼と結婚後、暫らく音信は途絶えたが、或る日、阪急百貨店でひろ子夫婦と阿津子がバツタリ

と出逢い、旧交を温ため、最初富田林へ遊びに行つた時は話だけに終り、二回目に遊びにいった時、遂々プレイしたという段取りになる。ひろ子の旦那は、プレイがもう一つ拙劣で、嘗つて阿津子の相手であつた男性とは全然感覚が違い失望したらしい。それを女同志で素早く感知したひろ子が、では辻村隆を紹介しようか、という事になった次第である。

阿津子と同棲していた男性は、純然たるサジストであつたらしい。彼女の女学生時代より胚胎していた、ゴムへの愛着と欲求はさして充たされず、専ら、責めプレイと緊縛に終始したが、彼女がプレイの最中、思い切つて自分の要望を始めて持出した処、それ迄は阿津子を専ら飼育しているつもりでいた彼は、阿津子自身にもMの感覚の、異なる半面のある事をその時知つた。その後は、かなり彼女のその要望を採択して、プレイには必らずとり入れ、二人の仲はプレイを通じて琴瑟相和したそうだが、破綻は昨年やってきたのである。



彼の帰らぬ夜が頻々と続き始め、そのうち  
 プイと居なくなつたのである。彼女は半狂乱  
 で男を探したが、どうやら他に女性が出来た  
 事を知らされ、元来双方の親が反対の同棲だ  
 っただけに、反ってこれ幸いと、誰も親身に  
 なってくれず、自分がみじめになつて自殺を  
 考えたこともあったが、ふん切りもつかず、  
 やつと傷心の痛手から最近直つたとの事だ  
 った。二回の搔把も、今となつては彼の下心  
 あつての事かと、愛憎に身をさいなまれる夜  
 もある。しかしひろ子に励まされ、自分なり  
 に愉しく生きようと考え始め、今は独り身で  
 収入も相当あり、適当に生活をエンジョイす  
 る男性もあればと、そんな事を考えたりして  
 いるとの事だった。

こんな身の上が、案外私とのプレイに踏み  
 切る気持になつたのかも知れない。山本阿津  
 子は数度、こんな私でもいいでしょうかと卑  
 下して訊ねた。地味な風采、容貌が、自分で  
 自分をみじめにしているのだと私は判つきり  
 いて励ました。貴女はまだまだ若いんだ。  
 もっともっと若くなりなさいと私は歩き歩き  
 肩を叩いてやった。「そう心掛けますわ」と、  
 彼女は嬉しげに私を見つめてささやいた。心  
 なしか浮々とした表情となり、沈み勝ちな眸

はいっししか、黒々と輝やき、しつとりと、う  
 るおいつつあった。

今、私は山本阿津子の部屋の一角にある。  
 身の境遇を聞いたとはいへ、彼女の好むプレ  
 イは一体どんなものか、私は何も知らない。  
 すべてはプレイという三字で語られて来た。  
 さあれ、ペールを脱いで、彼女の好むプレイ  
 を、彼女自身の口から、あれこれ注文しても  
 らうのが最も近道だ。それが彼女の最も好む  
 所謂プレイであるとすれば。

私はおもむろにバッグを開き、カメラとス  
 トロボをとり出す。準備して来た数条の縄、  
 簡単なゴム責具は、この際バッグの中で一寸  
 遠慮してもらうことにしよう。

× × ×

「私は御存知の様に責めの好きなサジストで  
 す。私がやれば恐らく、貴女のかつての旦那  
 さんと同じ様な、同巧異曲のものとなるでし  
 よう。だから、今日は貴女の、最もお気に召  
 したプレイの方法を仰有つて下さい。私は貴  
 女の言われるままに動き廻りますよ。どうで  
 す、この考えは？」

「それじゃあんまり身勝手に悪い様ですわ、  
 私、かなり虐められて来ましたから、大抵の  
 ことなら辛抱出来ると思います。どうぞ辻村

さんの思う様になさつて結構ですわ」

初対面で、ではそうですかと、自分の好み  
 を切出せないのは当然かも知れない。私は最  
 初の決意をあっさりと変更して、しからは、  
 先ずプレイへの導入は、私流に行くより仕方  
 なしと判断した。

「それじゃ、プレイの道具など、あつたら出  
 して下さい。日頃使い馴れたのがいいでしょ  
 うから」

アッちゃんにははにかんでうなづくと、洋筆  
 筒の二番目の抽出から、数条の縄、尾錠のつ  
 いた革製の胴締め、首輪、黒革の嵌口具、鎖  
 でつながった皮手錠、数枚のおしめカバー、  
 ビニール袋、日本手拭、クリップ等々、ぞろ  
 ぞろと私が啞然とする程たみに並べた。

「彼が置き残していったものです。このひと  
 つひとつに、私の汗と脂と血がにじんでいま  
 す。これを使うのは、本当に一年振りですわ。  
 憎い様な、懐かしい様な。これでどうにでも  
 私の自由を束縛して下さい。さあどうぞ」

彼女は全身の張りつめていた力が一時に抜  
 けたかの様に、それらの責め具の傍らに、肘  
 をついて両足を投げ出し、半身だけを起して  
 妖しくうるんだ、じっと射る様な眼ざしで私  
 を惹き込む様に凝視した。スラリと伸びたか



たちのよい脚は、身内の疼きをこらえかねるかの様に、微かに震えていた。

すっかり全身を投げ出しているのだ。私は思わずゴクリと固唾をのむと、じつくりと近づいていった。喉が乾いてカラカラだった。奇妙な昂奮状態におかれていた。

兎も角ベールを剥がして、肌を曝してやれと、私はツーピースに手をかける。彼女はいやいやと言う様に体をくねらす。勿論このしぐさ、一種の羞恥のからまった挑発的なポーズに過ぎない。私は服にかけた手を離しても、彼女は体を振っていた。可笑しくなったが笑ってははこの雰囲気ぶちこわしである。私は殊更に神妙な面持ちで、彼女の両手を取り、後へねじて両手を合わせ、傍らの柔かそうな縄で後手に縛った。やれやれ、矢張り人並みに初歩から掛らねばならないのかと、咄嗟にうんざりするが、やはりプレイだって階段がある。いきなり一足飛びに頂上へは行けない如く、プレイの階段を一步一步昇らねばならない。ごく早く、とびとびに昇ろう。

後手の余った縄を胸に廻し、兎も角、恰好をつけると、日本手拭で形許りの猿轡をはめる。いたって定石的な誰にも試みる緊縛のポーズに過ぎない。私は大したポーズではな

いと思ったが、着衣の俣のこの姿を、お義理の様に数枚とった。何か彼女が厭々をしなから、しきりに首を振っている。猿轡が嫌いなのかな？ 私は猿轡を外してやって「どうしたの？ どこか痛い。これが嫌なのかい」ときくと、

「いえ、猿轡がゆるいんです。もっときつく本気でしめて下さらないと」

と、あにはからん、お叱りである。これはこれは。

「服がしわになりますわ」

と、彼女は氣遣わしげに言う。服のしわにかこつけて、早く脱がせとの謎。仲々洒落れた女性だわい。しかれば、いよいよ本番でゆくとするか。私は無言で粗々しく服に手をかける。脱がせる段になると、彼女はその氣だから、体を左右にねじらせ、脱衣を助長してくれる。

スカートの腰の辺りが、稍々ふくらみ過ぎるので、はてなと思ひ、やがてパンティを外すと、その下にはピッチリ身についた水色のおしめカバーが彼女の股を、しっかりと蔽っていた。

彼女の頬は紅潮していた。私との初の出会いかからして、既に彼女は、おしめカバーを身

につけて来ていた事になる。そう思いつくと、私と逢って以来、一度もトイレへ立っていない。

スーと軽い尿臭が鼻をよぎる。私の心臓は急激に膨れ、嗜虐の脳神経が活発に働らき出した。私の心はハイドに変化していた。私は粗暴な手付で、おしめカバーを剥ぎとる。

尾錠のついた胸締具で腹をしめつけ、やや垂れ気味の乳房をクリップで挟む、黒革の嵌口具の裏には、口中を圧迫する突出物がついている。それを口をこじあけて押し込んで、嵌口具でしっかり閉塞し、使い方も分らぬ俣に、鼻に当る尖端についた紐を彼女の額から頭に廻して首のうしろで結ぶ。

鼻孔と口を塞がれて、彼女は辛うじて洩れ入る、微少な空気を呻き、喘ぎながら呼吸している。呼吸の度に豊満な胸が大きく波打つ。しかし、その眼には、陶酔と、被虐に耽溺する快楽の頂点の歓喜が溢れているではないか。この息詰る刹那に、彼女は歓楽の真髄を探索している事を、私はこの眼で判っきりと確認した。危険きわまりないこのプレイ。カチカチと秒を刻む置時計の音が、やけにすぐどく部屋の空気をさいている。

私は尚もいきり立ち、後手の彼女をずるず



ると、上りかまちとキッチンと中の間の三つの間の中心に存在する柱の前まで引曳っていった。染抜きののれんを外し、その柱にそって立たせて、柱に縛りつけ、後手をといて、両手を伸ばさせて竹の棒を添え、はりつけの様にして、色紐で、手首から腕まで、ぐるぐると竹棒に縛りつけた。両脚も柱にしっかりと括りつけ、私は引返して、じっとりと尿臭のただよう、テックスのおしめを彼女の頭にかぶせてやった。ぐっと絞ればしずくが垂れそうである。かぶせた上からおしめカバーをまるで帽子の様にすっぽりかぶせ首できつく結んだ。謂わば頭から顔にかけて、おしめカバーを着用したわけである。

スーッと一筋、二筋、黒髪を通して滴が顔に流れ、それが鼻先を通過して、嵌口具のすき間から口辺へ流れ込んでいった。大きく胸で呼吸は徐々に速度をはやめている。体内の酸素は既に欠乏寸前にあるというのか。私はそうしておいて、大急ぎでカメラに戻る。閉じた彼女の眼には、満足と陶醉の極があった。その眼を閉じた紅潮のエクスタシーの顔は、山本阿津子の、今迄の最も美しい顔に思えた。ドキリとする程それは凄惨な美しさだった。

カチカチと秒の刻みと共に、しかしその閉じた眼に苦悶が浮び、柱に緊縛した五体がゆれ動き、脚は震えだした。肩で息をつき、胸は激しく揺れ、息詰るシーンのそれは、名実共に、息のつまる寸前のシーンだった。首をおしめカバーでかなりきつく締めた上、鼻と口を蔽われて、且つ、阿津子はそれに快楽を見出していた。

限度はきた。私のカメラに、そのクローズアップを印した刹那、苦悶の絶叫ともいうべき、生死の境の眼が、私を、吊り上った必死のまなざしでハッシとにらんだ。

私はその刹那を承知して、握っていた裁ち鋏で鼻の先端の紐をパチンときり、ぐいと嵌口具を力任せに引き下げる。鼻孔は極度に拡大して、瀕死の金魚さながらに、鼻翼を大きくうごめかしながら、貪る様に彼女は空気を吸い込んだ。この処置はぐずぐずしては間に合わない。先ずこうしてから、私は徐々に嵌口具を口中よりとり出してやり、おしめカバーの首の紐をゆるめてやった。喘ぐ様に彼女は大きく息を吸いこんでいた。

「どうだった？」

私は少々照れ気味にきくと、  
「最高」と彼女は泣く様につぶやいた。

恐らくそれは快楽の最高を指すのだろう。  
「のどがかわいただろう」  
私はニヤニヤと意地悪くきく。彼女は首を振ってうなづく。

「さあ、のませてあげよう」

私は、彼女の口をアーンと大きく開かせ、おしめカバーをとって、頭部にのせておいたテックスを口の上で強くにぎりしめる。ポトポトと、薄く色づいた液体が、握りしめたテックスより口中へしたたり流れ込んでゆく。ゴクリと彼女ののどがなり、嚥下された液体が食道を通過してゆく。

すっかり絞り切ったテックスを二つにち切り、開いた口に押込んで、今度は鼻に掛らない矩形の嵌口具でしっかりと口をしめつける。口中のテックスを泌々と味わうべし。身から出て再び御身に還ってゆくに過ぎないのだ。呼吸切迫の心配はないから、私は始めて一服ピースをつけ、心ゆくまで、山本阿津子の緊縛のポーズを眺めることにした。

× × ×

ぬめる肌を拭いもせず、一旦プレイを敢行したあとの彼女は、実に人が変わった様に積極的になった。私はさながら命令されている様である。ひとつひとつ細かく描写して



は、あと原稿用紙が何枚あっても足りはしない。ここに列挙して見よう。この一日の為に生き伸びていた様なものと彼女は述懐しながら、次々と、疲れを知らぬニソフの如く、要求を出してくるのであった。

A、新しいテックスを使っての、おしめカバーの装填。(これは簡単である)

B、緊縛して、おしめカバーをつけたフット(これも別段むつかしくはない)

C、雨靴を口中に押し込み、その上から自転車の中袋で、鼻口を強く猿轡、(汚辱した口中に泥が入り、両頬は中袋の緊縛で大きく膨れ上り、痛々しいが、かなり彼女は呼吸の切

迫にたえた)

D、子供の遊ぶ、大きなゴムマリを半分切断し、鼻に当る部分と口の部分に小穴をあけ、顔面にそれをすっぽり被せ、ロープでぐるぐる巻きに緊縛。これは穴があるので呼吸はラクでないがかなり持続する。そうしておいて首輪をはめ、四ツ這いにして引き廻してくれという(両手足は約三〇センチの鎖でつながった皮手錠、足枷をはめ、ヨチヨチと歩かせたが、馬乗りになってくれといわれ、乗ったが数歩でへたばる)。

E、全身を縛って布団用の大ビニール袋に入れ、袋の口を閉じて、蹴ってあちこち転がす。

## 梨花悠紀子逆吊り写真特集

大判印刷紙焼付  
各集五枚一組 一〇〇〇円

### 第一集 略号(さか)

#### 両足首括り逆吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

### 第二集 略号(させ)

#### 逆吊りの女体折檻

逆さに吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフット。

### 第三集 略号(さと)

#### 手足逆宙吊り

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印刷紙焼付によって発揮される。

(ビニール袋やがて空気が欠乏して全身にピツタリとへばりつき真空状態、あわてて頭部辺りを鉄にてきり裂く)

F、後手に縛り、両脚も縛って転がして仰臥、合成樹脂の透明の硝子板の如きもので、顔面を思い切り圧迫(満員電車の出入口でへばりついてる女性に見かける顔。余りいただけない)

G、右と同じポーズで、顔面に尻をのせて圧迫して欲しいというので、どっかと顔に坐る。(私は全然何ともなし。ズボンはいた俚なので)

以上の様なことで、どうやら奉仕になってしまった。カメラは自然お預けの恰好になっている。山本阿津子は息詰まる瞬間に快楽を感じる女性である事を私はこれらのプレイの数々から知り得たのであった。これは今迄になかった新しいタイプのM女性であった。生と死の瞬間という危険がそのいずれにもともなっていて、このプレイは、しかし一歩誤ると、恐ろしいカラストロフを妊んではないだろうか。戦前、阿部定に扼殺されたその情夫が、息詰る瞬間にエクスタシーを覚え、それが快楽の代償として、死に直結したことを、私はゆくりなくも想い浮べたりしていた。たてつけの注文に私は疲れを覚えた。彼女も流石にそれに気付いたのか、おこりが落



ちた様に、最初のあのしおらしさに戻って、はしたなさを、くどくどと詫びた。詫びる必要はちつともない。彼女によって私は又、新しいM傾向の或る一つの女性タイプのある事を発見したのだから。

身支度を整えて、彼女はソワソワと立上りきつと居ってくれと念を押して、何処かへ出ていったが、間もなく買物籠に数本のビールを突っ込んで帰って来た。

折角の好意に甘えて、私はビールをよばれた。彼女も大分いける方らしく、呑みっぷりは鮮やかだし、栓を抜く手付は素人離れしていた。聞くことを止めたが、或いは別れた彼とは、何処かのバーかアルサロ、それとも料理店での知合ではなからうかとフト感じた。

あの素肌の豊満さ、チラリこぼれるなまめかしさを、彼女は隠そうと努めるが故に、わざと地味に地味に装おっているのではなからうかと私には思えた。隠したい過去なら、強いて訊くこともあるまい。しおを見て立上ろうとする私の肘を押え、哀願の目付で彼女は無言で見上げる。夏とはいえ、窓の外を夕陽が赤く染めて正に沈みつつあった。既に七時に近かったのだが――。

× × ×

私が家に戻ったのは、午前零時を少し廻っていた。家内は少しふくれている。あれから山本阿津子の部屋を出た午後十一時まで四時間、何をしていたか――。私にもプライバシーの秘密を守る権利はある。ジャスミンの残

り香をふと我が肌に感じ、私は慌ててぬるくなった風呂へ飛込んだ。洗い落すにしては一寸惜しい柔肌の感触。私は湯舟にもたれながら、自分の両手をじっと見つめた。この両手が彼女の激しい要求で、白いうなじに廻り、そしてしめつけていったのだ。男と女の差こそあれ、阿部定の二の舞を演じなかったとは誰が保証しよう。私は山本阿津子の許をパイと逃げた。彼の気持が分る気がした。嫌いなのではない――。

怖かったに違いないのだ。私は深々と湯につかり、彼女の妄想を湯と共に流すことにした。君子(豚児)危きに近よらず。最初の最後であっていい。アッチちゃん、幸せであって呉れ給え！君の行き過ぎざるを祈るや切――。

## 四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

### 女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」  
〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号(美3)を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニアの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえ

かなわぬ稀少な文献となっています。皆様のご熱心な要望によりまして、ここに限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できまさんので、直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思います。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆



奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するためにも、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

## 緊縛フォト・アルバム

### 限定版第二号 豊満と清楚 内容

#### △美しき縛しめ (第四集) △

(一)、豊満をくびる……大塚 啓子  
(二)、胸と胴をくびった縄にもだえる女体。……長野 良子  
(三)、グラマーの縄目……長野 良子  
(四)、むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。……長野 良子  
(五)、豊満裸身の陶醉……長野 良子  
(六)、うっとりとした表情は、縄にか紐にか？……長野 良子  
(七)、鼻をいためつける……長野 良子  
(八)、指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。……長野 良子  
(九)、荒縄の緊縛感……大塚 啓子  
(十)、とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。……大塚 啓子  
(十一)、黒と白の対照……大塚 啓子  
(十二)、白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。……大塚 啓子  
(十三)、責めに疲れて……大塚 啓子  
(十四)、責め抜かれてぐったりとなった女体。……大塚 啓子  
(十五)、戯れの縄プレイ……新井マリ子  
(十六)、アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。……新井マリ子  
(十七)、恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。……新井マリ子

(一)、首締め縛り……新井マリ子  
(二)、のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態。……新井マリ子  
(三)、猿ぐつわ非情……新井マリ子  
(四)、開股しばかりの上に非情の猿ぐつわが……新井マリ子  
(五)、開股棒しばかり……新井マリ子  
(六)、革の口枷が頬もくびれよと締めつける。……大塚 啓子  
(七)、絶叫のワンカット……大塚 啓子  
(八)、縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。……大塚 啓子  
(九)、痛みに喘ぐ……大塚 啓子  
(十)、責められて急所の痛さに思わず呻めく。……大塚 啓子  
(十一)、首、首縄と足縄……大塚 啓子  
(十二)、首に掛った縄と足の縄が女体を変え。……大塚 啓子  
(十三)、悶えても拘束された麗身は逸脱しない。……大塚 啓子  
(十四)、反りかえった足の指が縄目に可愛い。……大塚 啓子  
(十五)、二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。……大塚 啓子  
(十六)、誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。……長野 良子  
(十七)、投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。……長野 良子  
(十八)、はにかんで見せた美しい全身のポーズ。……長野 良子  
(十九)、両手吊りと足首……五月亜紀子  
(二十)、両手両足を縛られて一本棒に晒される。……五月亜紀子  
(二十一)、清純な美しさが、この全身に漂っている。……五月亜紀子  
(二十二)、晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。……大塚 啓子  
(二十三)、荒縄への誘致……大塚 啓子  
(二十四)、荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。……大塚 啓子  
(二十五)、珍しく完全に噛まれた猿轡……大塚 啓子  
(二十六)、厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。……大塚 啓子

(一)、緊縛女体操縦法……大塚 啓子  
(二)、縛りに変化をつけられた女体はどこへ。……大塚 啓子  
(三)、瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。……大塚 啓子  
(四)、棒責めの序曲……新井マリ子  
(五)、両足首の両端に縛られて、さて、……新井マリ子  
(六)、さあ、打って、とながし目の艶なこと。……新井マリ子  
(七)、輝くような美しい裸身もあらわに……長野 良子  
(八)、縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。……長野 良子  
(九)、情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。……長野 良子  
(十)、開股しばかりの表情……大塚 啓子  
(十一)、開股しばかりの全貌……大塚 啓子  
(十二)、両肢を開けて縛り上げられたポーズ。……大塚 啓子  
(十三)、びんと一直線に伸ばして縛られた脚。……大塚 啓子  
(十四)、放置された全身の痛さに耐えるシーン。……大塚 啓子  
(十五)、強盗侵入の構想……新井マリ子  
(十六)、押し入った強盗は女を縛って転した。……新井マリ子  
(十七)、家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？……新井マリ子  
(十八)、台所で縛られていたぶられるシーン。……新井マリ子  
(十九)、胸、美しきスト……大塚 啓子  
(二十)、胸、臍、ウエストが縄によって捕捉。……大塚 啓子  
(二十一)、くねらせたましき臀部……大塚 啓子  
(二十二)、後手高小手の美しさは素晴らしい。……大塚 啓子  
(二十三)、柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。……大塚 啓子



——これがノンフィクションであるべき筈がない——

小説 箕田京二 木戸川 健

死亡広告

奇譚クラブ儀、昭和四十一年二月三十日、青少年保護育成のため、割腹自殺いたしました。ここに生前のご厚情を深謝し、謹んでご通知申し上げます。

昭和四十一年二月三十一日

天 星 社

A

いつの頃からか、箕田京二の頭の中には、こんな広告文案が出来上っていた。元新聞記者の勘で、時流をつかむ事には早い。オオノパンボクの死は、組織暴力の撃滅に

通じた。彼は当てた。コウノイチロウの死は何に通ずるだろう？。

一般庶民は、死んだ人の事など考えはしない。追悼するだけである。しかし、マスコミ人種は考えるのである。大物が死んだ、——たしかに、世の中は動くのである。

七月二十四日、東京都議会選挙で、自民党は予想だになかった敗北を喫した。彼の友人の新聞記者は、これをコウノイチロウの死と結びつけて考えている。自民党の地方議員には党人派が多いのだ。

「編集長、木戸川健のいっているような形でグラビアを復活させましょうか？」  
突然、編集部員のKがいった。のんきな奴である。

「グラビアがあれば、たしかに売れるだろうな。しかし、俺は売れても売れなくても、俺の雑誌を殺したくないんだ。五〇〇号まで、いや、一〇〇〇号まで生きてみせる。——それが、俺の反骨だ」。

箕田京二は、泣きたい気持であった。この俺の反骨を、この俺の反骨を——一体、誰が理解してくれるのだ。何故、わかってくれななのだ。親友の辻村だって——本当はわかっていないのだらう。

箕田京二は、九月号に、当局に対する全面的屈伏とも思われる八本誌の信条V五項目をかかげている。八発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしませんVという。こんな事を誓う編集者が、世





界のどこに在るだろう。後世、八人間、箕田京二Vを語る時、これは必ず問題になる。

八本誌の信条V、これは、風俗文献誌編集者箕田京二の涙で書かれたものであった。

（梅原北明の叛骨は理解されても、俺の反骨は理解されないだろうな。多分——）

箕田京二は、仙台の住人久我庄一のものした八人間、梅原北明伝Vの好エッセイを読み返しながら、淋しく笑った事だった。

## B

その夜、年に一度の戦友会の席で、箕田は酒をおった。よくしゃべり、よく叫んだ。

二十人近い集りであった。いずれ劣らぬ勇士であった。日本が敗けても、負けなかった口だ。中国大陆では勝っていたのだ。彼等が

敗北を認識したのは、実に、共産中国が出現した昭和二十七年であった。

「軍歌をやれ！」と、誰かがどなった。

「あんた、誰でしたっけね？」

と、箕田はからんだ。

「バカ、中隊長殿だ」

と、隣の上等兵がいった。

「中隊長殿？。ああ、これは失礼しました。」

——中隊長殿、報告します。箕田はシャバでろくな事をやっております。奇譚クラブという、悪書を出しております。——御存知？

ああ、そう。——読者？ 中隊長殿が？——

こりゃあ、あかん。読んだら、あかんがな、

あんな本を——

「箕田よ。いや、箕田君」

と、中隊長はいった。

「ぼくは、今、心ならずも、兵器工場で働いているんだ。ぼく等の製造している、主に弾丸だが、これは自衛隊が発注しているんだが、一部は南ベトナムで使われているかもしれないのだ。——ぼくの言いたいのは、それだけだ」

「中隊長！」

箕田は、ハッとした。

「わかればそれでいいよ。——箕田、軍歌を

やろう。そうだ、貴様は音痴だったな」

「音痴でも軍歌は歌えます。大体、軍歌でえのは、音痴を標準に出来ているんです」

そういつて、箕田は歌い出した。

「砲工兵騎の兵強く……」

しかし、誰もついて来ない。それでも、箕田京二は歌い続けた。

それでも、箕田京二は歌い続けた。

「クッ、クッ、クッ」と、突然大学助教授の一等兵が笑うが如く、泣き出した。それが、きっかけで、あっちでも、こっちでも——

「みっともねえぞ！」

と、誰かが叫んだ。しかし、その誰かも泣いていた。

箕田京二は歌い続けた。泣きながら、歌い続けた。（音痴の歌でも、戦友は泣いてくれる。戦友っていいなあ！）

——まるい月が出ていた。八月十五夜の月である。箕田京二は、踰越としてイバラの道を歩いて行く。（例え悪書といわれても、読者から骨がないといわれても——続けよう。K誌を続けよう）

「箕田さん！」

後から、女の声が追ってくる。振り返り、見れば——梨花悠紀子だ。そんな筈はない、



そんな筈はない。俺は酔っている。  
「どなた？」

C

「その女が、誰であつたかといえはだ」

箕田京二はご機嫌に、そういつて、回転椅子をぐるりと廻した。回転椅子だけかと思つたら、その上にはちゃんと人がのつていて、よくよく見れば辻村隆である。

「気持ちいいね。もう一度廻してくれ」

「気にならないのかい——？」

「女には用はないよ」

「ウソをつけ。——愛川悦子だ」

「ナニ！」

「それみろ」

「しかし、梨花と愛川じゃあ、全然似てないぜ」

「だから、酔っていたのさ」

「プ、プレーしたの？」

「俺は酔っていたんだよ」

「うん。——信用しよう」

辻村隆は、ぶすつとして、いった。

「ところで、そろそろ、何か書けよ。読者から、やいのやいの言ってくるんだ。カメラ・ハントがないと矢張り淋しいらしい」

「他に、誰かいないのかね。宝塚二三夫氏なんか、ぼく以上に、ハントしているじゃあないか」

「うん。それはそれで考えるとしてさ。さしあたり——」

「さし当りね。ぼくは、さし当りで、二十年間、あんたとつき合ってきた。考えてみりゃあ、くされ縁だな」

「そういうな。箕田京二と辻村隆の名は、梅原北明と上森健一郎のように、まず後世に残る事はたしかだ」

「大して、感激ねえな」

しかし、辻村隆は思う。たしかに、俺達は何かをやったのだ。それは、たしかだ。——後世にのこる事を……。

突然、辻村隆は笑い出した。

「何だい？」

「誰かがいつてたな。ぼくのカメラ・ハントには詩があるって——」

箕田京二は、それには答えず、

「サヨウナラが人生さ」

ぼつりと言って、十月号の八奇クサロン／＼冒頭のことばを書くべく、万年筆をにぎったのであった。

辻村隆は立ち上がった。そして、何だか知

らないが、  
「よし！」と、言った。

D

（何んだ、モデル志望だったのか！）

箕田京二は、自分の迂濶さに呆れた。そう判ってしまうと、先刻編集部員のNに案内されて、さっそうと入ってきた姿は、学生でもBGでも、いわんや人妻でもない、一種独得のものであった。

「御住所は？」

「住所不定、無職、前科三犯、十九才、矢田部満子。——名前は音で読んで下さい」

箕田は苦笑した。別に驚きはしない。

「まあ、いいでしょう」

「ペイは、どのくらいですか？」

「いや、まだ採用するかどうか——」

「でも、あなたが一番偉い人でしょう」

「エラいですよ、シンディですよ、編集長という仕事は——。で、あなた、K誌は読んだ事ありますか？」

「もちろん。私、芳野眉美さんの大のファンです」

「うん。辻村隆という人は——？」  
「知ってます。でも、嫌い、大嫌いや」



「おやおや。木戸川健はー？」

「そんな人、K誌にいたかしらー？」

「まあいいでしょう。塚本鉄三はー？」

「あの人も好かんわ」

「ちょっと待って下さいよ。あんた、SですかMですか？」

「男を責めてみたいんです」

「ははあ」

「編集長さんでもいいわ」

「まいったな。——お名前は？」

「魔子！」

「この顔でトカゲ喰うかやホトトギス」

もちろん、住所不定、前科三犯はでたらめである。(辻村隆に紹介してみようか。彼女がMモデルになったら、すばらしいんだが)

「世の中って、うまくゆかないものね」

「エッ？」

自分の心を見抜かれて、箕田はギョッとしました。やはり、魔子だ。

名神ハイウェイの京都南インターチェンジを通過した直後の道は、ほとんど一直線にのびていた。箕田京二は愛車のタウナス17Mを運転しながら、先程別れてきた誌友の言葉を

## E

思い出していた。

「誰か知るサジストの悲しき心を——。K誌にはもっと、われわれの悲しみがあってもいいんじゃないのか。ユーモアも結構さ。しかし、ペーソスというものもなけりゃあね。ユーモアだけじゃあ、落語か漫才だ」

この直言は、箕田には痛かった。

ユーモアとペーソス。そうなんだ、それなんだ。笑わせて、皮肉って、しかも、ほろりとさせるもの——。そうなんだ。「そういうお話だな」

そういつてから、誌友は、「実は、あるんだ」と、遠い眼をした事だった。中国大陸での体験談であった。——箕田は、ほろりとした。何故、中国は悲しいのだろう。それは、俺が戦ったためか。否、俺の青春が、そこにあったからだ。

中国には、俺たちの青春があった。空しい青春が——。俺たちは戦った。何のために？。「毛沢東を助けるために、戦ったのだ」

皮肉屋の戦友はそういった。

「チキ生！」

箕田は思わず声に出して言った。それは、インディアンのような奇声を上げながら、若者たちを満載したスポーツカーが、彼を追

抜いた為ではない。

「チキ生！」こそ、国に裏切られた、戦中派共通のうめきであり、突撃でもあった。

彼は、ギヤをオーバー・トップをいれ、忽ち、若者たちを追い抜いた。

それから——

箕田が「よしの」に着いたのは、翌朝の十時少し前であった。「よしの」とは、誌友芳野眉美の経営するバーに外ならない。

「水を一杯下さい。——水ですよ」

箕田は念を押した。神酒とやらを飲まされてはかなわない。

「大阪から、わざわざ？」

「来てしまったんです」

芳野がおひやを差し出すと、箕田はうまそうに一息にのみほして、

「夜乃探郎氏と」と、言った。

「論争するのはいい。しかし、感情的に対立するのは、まずいですな」

芳野眉美は驚いた。

「そんな事を、わざわざ言いにくられたんですか——」

「K誌は、私の生命です。——サヨウナラ」

芳野はひき止める事も忘れて、ぼう然と見送っていた。



# 久我庄一氏の労作に感謝しつつ

—伊藤晴雨に関して—

保 藤 久 人

「——女を責めるということは、面白いものでございますよ……」と言った画伯。

『変態性欲者』または『氣狂い』よばわりされつつ長年月を経た『一匹狼』（註・九月号）久我さんは画伯の「責めの行動」について真正面から追求し描写しようとする。しかし私にはそういうむつかしいことは出来ない。それで、例によって傍から、そっと画伯の横顔を覗いて見ることにしよう。

今、私の手許に、古い大判雑誌を綴り合した部厚いものが二冊ある。親しい古本屋の主人から貰ったもので、内容は雑多。バラバラ

にして欲しい部分だけを集め合本したものらしい。従って満足なものは一つもなく、雑誌名さえ判然としない。しかし判っているだけで七種あり、何れも21年秋から24年秋までの創刊号から三・四号までであり、私にとって大変いい資料になっている。

その中に八虐げられる日本婦人Ⅱ伊藤晴雨作並に画Ⅴというのがある。（註・22年Ⅱ猟奇第四号）

変人・奇人と言われた画伯の人柄を、一体どのような人なのかと、私も日頃から関心を持っていたので、右記した一文を大切にきて来

た。

「自由を奪われた日本婦人が、古来伝説にも歴史にも、其の総てが自由を奪われ、貞操を奪われ、果ては其の生命まで（中略）しかしこれを率直に記すことは、其筋という不思議な人によって圧迫され（下略）」以上、その書き出しである（註・傍点は私）

「——私は日本婦人の虐げられた過去の歴史文献伝説を過去五十余年に涉って調査し、その材料で室内が充満した。私が画家生活四十年に得た報酬は悉くこれの為に費して、人も知る貧乏生活を続けて今日に到った」

「——私には一度も後悔というものがない」  
「——歳華頻りに飛び、世は移り、人は替りサーベルは棒に変わり、砂糖はズルチンに替り世の中に、吾等の研究も又、世に出でんとす。喜ぶ可しと雖、多少の感慨なき能わず」  
画伯の執念ともいえる斯道への道、その態度、生活、戦後の解放に対しての心理。それ等がこの小文の中に満ち満ちている。

「——法医学として立派に存在する『責め』の学説を一概に『ワイセツ』として斥け、春画の頒布と同じ罪状に擬律した当局の無智と乱暴は、これを世界何処の学界に於ても、彼の『暴帝ネロ』を除いては夢にも思い掛けぬ



事である』

正に驚く可き自信と信念である。

画伯の書く自伝的なものに最も良く登場し

乱れ髪に執念した晴雨氏の筆



だるま返し

て来るのが『今は故人となった私の知人』である『越中高岡の呉服商、二瓶久助』と『小石川白山御殿町に住む足袋屋の小沢利助』の二人である。

『二瓶君はかつて非常な文学好きの青年であった』から始まり、二瓶久助なる人の『変態性欲』ぶりが微細に書き綴ってある。

又、小沢利助という人に対しても、

『——最初は少しキ印かと思つたが（中略）

応接して見ると、これがなんと又、二瓶君流の素晴らしい変態性欲者である事が判つた』（註・傍点は私）と以下この人の『奇行変態』も詳しく述べてある。そして画伯は言う。

『——私は今ここで変態性欲者の独特の発見……否、鑑定法を説かんとする。これは世の人々をして、彼等の爪牙にかからざらん事を希うからである』——と。

『——変態性欲患者の特色は眼である。瞳孔がドンヨリとして眼の周辺が濃く、加えてこの瞳孔が、仮令ば日中の猫の目の如きものは十中八九変態性欲者である』——と。

『——彼、二瓶君亦御多分に洩れず、此の亜流である』——と。

永い間白眼視され、*“ヘンタイ”* 呼ばわりされて来た画伯の反骨なのか。それとも信念

の言葉でもあるのか——。

又、田舎芝居で『佐倉宗五郎の拷問場』を見て、『その一幕に驚き』『かつて江戸時代に同心の役を勤め、後に絵草紙屋の主人となり、小林清親の世話をして、又、免因保護事業に一生を捧げた原胤昭氏に、この様なことが実際に行なわれたのか、と尋ね』ている。

箱根の関所で『出女』『入り鉄炮』の諺通り関役人の目の前で、女の前を捲って局部を調べた事実と言及し、

『——婦人の誇りは完全に傷けられ（中略）人権蹂躪も甚だしく（中略）幕府の重臣から何人も逃れられず、辱しめを受けまいとして特種な方法『関所破り』を命懸けで（中略）露見すれば碌』

『——嗚呼、何という残酷な制度であろう』又、放火罪の火あぶりの順序を書き、局部を火の附いた葉で焼くのが止めたこと記し、

『——死して尚、此の惨刑あり』——と。

——この辺りに画伯の真実の『心』があるのではなかったか。斯道の為に、非情冷酷、惨忍な縄さばきを見せ乍ら、その心の中は……と推察出来る。矢張り偉大なる大家なのだろう。



# コンスチチューション

芳野眉美様——

御同慶に耐えません。

五箇月目によくやく所期の目的をお遂げになつたのですから。これは反語でも皮肉でもありません。本気でそう思っているのですよ。

九月号「麻生保氏の生活と意見」これを読んで一番喜んだ人。それは芳野様でしょう。

正直に言つて私は芳野文学は好きになれませんが、人間芳野親分には好感が持てます。賞讃にせよ、お世辞にせよ、褒められる事に我慢のできない人。踏みつけられ、叩きのめされなければ次の発展が出来ない性格の方。それが芳野親分でしょう。

五月号「濡れにぞ濡れし」の「我、奇クを愛す」

あれが誰を相手に選んだ挑戦かはすぐ解るのに。

解らないのは黒淵嬰一だけ。

結果は。芳野親分の期待した反撃はなく、思いがけない副産物が二つ。

くろ ぶち か ず こ  
黒 淵 賀 集 子

六月号「濡れにぞ濡れし」の「遊び」に見える精神分裂症的八ツ当り？

そうではありません。芳野様は迷つて居られるのです。誰かに、何かをしてほしいか、それを表明出来ないのです。何か。

芳野様は腰の抜けるまで叩きのめしてほしいのでしょうか。そして再び立ち上った時、芳野文学の新しい展開が生れる……

誰かが、悪役になつて、奇クと芳野親分の為に、喧嘩を買つてあげなければならぬのに、五月号はお気の毒でした。よい相手を選んだお心算だったのでしよう。でも相手の気位が高過ぎたようですね。奇ク共和国警視總監は、親分相手の決闘を無視されておしまいになりました。

それでも芳野様は諦められない。

誰かに撲られたい。

そして八月号「濡れにぞ濡れし」の「主題と必然性」となった次第。

芳野眉美様。

お会いした事はありませんが、若しも私の想像が当たっているなら、親分は手の小指が比較的短く、左手の親指の上あたりから右下に向う線は、彫は深いが直線状で、上端はギザギザになり、薬指の附根から中に細い線が何本か乱雑に走っているような方ではないかと思つています。

私に女予言者の資格があるかしら。

九月号の「反語」問答。私が予期していた通りの事をおっしゃつて来られたので、嬉しくなりました。そこで前から用意しておいた通りの御返事を致します。

芳野親分の御入用なものは何でしょう。

髪の色は問題外。つまり個性は不要。

私は嬰一の傍に居て、彼に次期作品を書かせなければなりません。

芳野様にはサンプルびん七本（一週間分）荷造りしてお送り致しますよう。

途中で腐敗しないよう、過酸化水素〇・五パーセント混入しておきます。

今、六法全書を調べているところです。若しも食品衛生法違反だったらお許し下さい。

麻生保様——

九月号「麻生保氏の生活と意見」よく書いて下さいました。



精神貴族麻生公爵にふさわしくない事も御承知で、奇クと芳野親分の為によく語って下さいました。以前の「生活と意見」を読んでいなかったら、売名の為の慣れ合い論争と思つたかもしれない程です。

それにしても立派な文章でした。

奇ク共和国貴族院議長の答弁みたい。

芳野親分が衆人環視の中で叩きのめされて、わざと仕掛けた口論である事は余りにも明らかです。そうでなければ、八月号の際だらけな挑戦はできませんものね。

麻生様でなかったら、どうなったか。公爵の体面を汚さない応答の美事だったこと。

奇ク共和国大審院長橋行司博士の判決は如何ですか。

麻生保様。

六月号で嬰一の精神衛生に注意せよとの御忠告は身にしました。

八月号で私は「彼の精神力を過小評価」したと申しましたが、それは決して彼が強い意志を持っているという意味ではありません。

最初考えた程でないにしても神経質なのは事実です。彼が申しますには、

八月号「濡れにぞ濡れし」の「主題と必然性」は「世界史シリーズ」への批判なのだそ

うです。何と云っても聞き入れません。

七月号で麻生公爵は美的センスを持て、狷介孤高なれと呼びかけて下さいました。

嬰一はエリート意識に徹し、精神貴族になるよう努力すると申しました。

それが八月号の「馬鹿馬鹿しい」で又も虚脱状態。

彼、嬰一の作品ぐらい人間の登場しない作品はないでしょう。出て来る女性はスーパールばかり。

無理ありません。彼は酒や煙草と同様に女性も知らないのです。

母親と私の他には。

ギボンやウエルズを親戚扱いする男。アーネスト・パーカーやエーゴン・アイスを引用しなければ文章の書けない者。

ゼノビアやローザモンドやアンナ・コムネナ等、過去の死人に向って永遠の恋人と呼びかける黒淵嬰一。

芳野様が折角賞讃して下さっても「あれは皮肉だ」と言っただうしても理解しません。

仕様のない男ですこと。

それが「麻生保氏の生活と意見」を読んでやっと納得しました。これで嬰一は麻生公爵に一度救われた事になりますね。

皆が円満に治って奇ク共和国は安泰。

さて嬰一の地位と階級は、

まだ八カ月ですから二等兵ですね。

でも將軍と呼ぶとキゲンがよろしい。家ではヘヤ・ゲネラル・クロと呼ぶ事にしています。軍国主義者ではないのですが。

別段おかしいとは思いません。日本語でも大將と呼ばれる民間人は沢山居ます。

奇ク共和国は古代ローマのような貴族制共和国。併し平民も乞食も対等の発言権と平等の自由を持ったユートピア。僅か三百円の租税又は物納で最大の満足が約束される福祉国家です。

最近外敵の侵略を受けてグラビヤを含む最も豊かな領土を失いましたが、終身執政官兼大元帥箕田首相は国策を誤らず、平和憲法を守って不戦の国是を貫き、失った以上のものを未開の地方で入手しました。

失った領土は取り返す時もあるでしょうが、国が亡びたらおしまいです。孫子とかいう人が、そう言っただと嬰一から聞きました。隣国のU王国がその例でしょう。

奇ク共和国の将来は栄光が約束されています。奇クは改名すべきですね。

貴譚クラブと。



## 芳野眉美氏と夜乃探郎氏へ

## 一筆啓上

木戸川

健

——芳野眉美氏と夜乃探郎氏の論争ともいえぬ「論騷」に、一言あってしかるべしと筆をとったのだが、大人げないのでやめにしたという事と、九月号が送られてきて「今後も不可解な迷文句を吐いて、皆さんを悩ますことを誓います」と、眉美君が眉を決すれば、むこうを張って探郎氏が、わざわざ読物とことわって、ことわりもなしにモノブレイな眉美節を真似た「贋作の贋作、夜乃探郎氏の優雅な生活」を書きはじめたので、これはほってはおけないと、生来お節介な野郎なので、思い直して再び筆をとる事にしたという事とこんな調子で書いていたら俺の文章がメチャメチャになってしまうと、ちょっと心配になったので、やはり俺は、俺の調子で書こう、

ウン、とマミ（飼い猫の名前です。気にしない）のお尻の上に二千枚の原稿用紙をひろげて、だが俺にはとてもそんな器用な真似は出来ないので、すぐやめて、やはり寝床の中で書く事にしたという事と、中村錦之助と有馬稲子が離婚したという事と（関係ないね）雨が降り出して来たという事——。

ああ、シンド！。

× × ×

七月二十日、首相官邸で開かれた、政府招集の全国知事会議の席上、奇ク他数誌が問題になった。

大阪の佐藤府知事が、「現在、各都道府県でまちまちに行なわれている、青少年保護育成条例を一本に強化して、法律として施行し

不良出版物を取締るべきである」と、発言されたのに対し、佐藤首相は、「出版物に対する法律での規制は、言論断圧と見まがわれる恐れがあるので、なお慎重を要する」と、答弁されたという事である。

この事は、どういうものか、NHKのラジオ以外報道されなかった。本誌の大方の読者も御存知なろうと思うので、あえて冒頭に御紹介した次第である。そういう機運のある事を、おわきまえになっていただきたい。

私は、箕田京二氏を梅原北明にしたくはないのである。時代が違う。従って、梅原北明の叛骨、箕田京二の反骨であってはならないのである。叛骨と反骨の違いである。

× × ×

さて、御兩人、私の軍配は、花橘の行司子のように、いつも真ん中をさしてはいない。

橘さんは遠慮すぎる。

私は、お二人の書かれたものを、ほとんど全て読み返してみた。批評する者の当然の行為、エチケットである。大して読みもしないのに、「泣いて明治の文豪を斬る」ような真似は、私はしない。

お二人の対立は根本的なものである。「現実」と「空想」の対立ではない。人間は誰し



も、この二つのものを持っていて、調和させて生きているのであるから、こんな事で対立するわけがない。

論争の全ては、ものの見方である。マクロ的に見るか、ミクロ的に見るかの違いである。見る、観る、にはこれ又、客観と主観がある。マクロは巨視と訳されて、全体的に客観的に大きく物事を見る事であり、ミクロは狭視と訳されて、身辺的に主観的に小さく物事を観る事である、事はいうまでもない。

これは、哲学の宿病でもある。人間の対立の、根本的なものである。

芳野眉美氏はマクロ的に物事を見ている。夜乃探郎氏は、ミクロ的に物事を観ている。この違いである。文章にも、この違いはありありと現われている。そして、この違いではどちらにも軍配をあげかねる。

ただ、私は、芳野さんの昔の物の見方は、ミクロ的であったと判断する。自己批判ばかり盛んで、他を批判する事をしなかった、出来なかった、ちっぽけな、ちっぽけな、ミクロの世界観の中に閉じこもって、哲学青年芳野眉美はのたうちまわっていたのである。

思えば、芳野眉美よ、よく脱出した。そういう、哲学的な苦悩（一歩誤れば、死だ！）

を経験した、この青年に私は敬意を表する。私にも、一時、そんな時代があったからだ。だが、△論争▽に対する、軍配はあげない。それと、これとは、別だ。

## ○

K誌にものを書いている人々の大部分は、完全な△匿名者▽である。私も、無論、例外でない。編集部では、私の住所氏名は知っている。ただし、それが△私▽であるか？夜乃探郎氏も同様であろうと思う。

ところで、匿名批評は邪道であり、卑怯である。とりわけ匿名で対人批判をすべきではない、という鉄則がある。だから、匿名批評は、どんなに優れた文章で、どんなによい事を書いて、オバケが物をいっているようなもので、現実社会の用いるところではない。では、△木戸川健▽というオバケが、K誌で物を言っているのは、何故か？それは、K誌が好きだからである。本心をいえば、正体を現わしたい。そして、辻村隆さんのように、カメラ・ハントをやってみたい。もしもお許し下さるならば、中村優子さんでもいい（どころか、大いにいい）プレーして、それをK誌に発表してみたい。ホント。どう、中村さん——ぼくは鶴見です、あなたとは最も近い

アイダガラです。閑話休題。

K誌上での論争は、お互いが匿名だから、暗闇の中でなぐり合いをやっているようなもので、罪はない。——という気持も、私にはある。しかし、芳野眉美氏と夜乃探郎氏の場合は違うのだ。何故なら、芳野眉美氏の正体は大方が知れている。夜乃探郎氏は、私以上に正体不明であるらしい。辻村さんも、楽我記で述べているようにヒキョウである。それは、△木戸川健▽が△西条操▽氏に公開状を書く以上にヒキョウである。

私は、芳野眉美氏に軍配を上げる。論争以前の問題である。もし、夜乃氏が芳野氏を批判するためには、同じ土俵にのぼらなければならぬまい。△久我庄一▽氏、対△西条操▽氏の、SM論争とは違うのである。又、嘗ての吾妻新、対、沼正三の「スボン、スラックス論争」とも違う。前者は、正体不明者同志の論争であり、後者は△事物▽を対象にした論争であるからだ。

正体を現わしている芳野眉美の人格と名誉は、△木戸川健▽を殺しても、擁護されなければならぬ。論争は、正々堂々となさるべきである。夜乃探郎氏の、芳野氏への公開状は、ルールに反する。



さて、次に論争の内容にふれよう。根本的な対立は、先にも述べたように仕方がない。枝、葉の問題である。だから、或は、お二人の意表をつくかもしれない。(と、おどかしおいて――)

芳野君は、無邪気な生意気だから、思った事を、ずばりと書く。育ちもよいだろうし、又、事実、ごく育ちのよい文章である。ひねくれたところが一つもない。ポツチャン的である。御自分では、天下の皮肉屋のように思っておいでだろうが、どうして、麻生保氏にかみついて行ったところなど、中々純情である。ハアッ、ソーッと、言う人とは気づかずに――。総てに、甘えがある。彼のいう、マザー・コンプレックスから来たものかも知れない。但し、このボンボン、前述の如く、ただのボンボンではない。哲学的な苦斗を経験している。

本当をいうと、私は彼が好きだから、もうこれ以上は書けない。眉美君、躍進して下さい。あなたは、バーの経営者で一生を終る人ではない。現在に甘えてはいけない。これはハ木戸川健Vがいうのではなく、私がいうのです。

「どうも、バーの客の心理と、まことに、どうも……」と、苦笑された、夜乃氏は、ベテランである。芳野氏がハポツチャンVなら、彼はハ赤シャツVかハタヌキVである。悪い意味では決してない。彼等には、人生経験がある。人生とは、そういうものだ。正論が人生を支配するわけではない。ハ赤シャツVは現実像であり、ハポツチャンVは理想像である。

つまり、私は、大方の読者とは全く逆に、お二人を眺めている。例え、SMプレー(Sですか?)に未経験でも、夜乃探郎氏は人生のベテランである。ロマンチシストは芳野眉美の方だ。夜乃氏がハ赤シャツVなら、麻生氏はハノダイコVか。これも、悪い意味では決してない。

一体に、この度の論争は、どうも私には、夏目漱石のハ坊ちゃんV的ムードのように思えて仕方がないのである。枝、葉に渡って述べてみよう、と筆をかまえてはみたものの、どうもハ西条V対ハ久我V論争に、待ったをかけるような訳には行きかねる。

漱石のハ坊ちゃんVでは、結局、ポツチャンが敗けて、東京へ帰る事になっている。私の軍配も、そういう意味では、夜乃氏に

あげる。但し、私はハ山嵐Vである。

× × ×

漱石のハ坊ちゃんVでは、最後に、ポツチャンと山嵐が、赤シャツと野太鼓に生卵を投げつける事になっているという事と、もし、そんな事をしたら、夜乃氏がたくさん怒るだろうと、たくさん心配になったので、決して悪意はありません、とあやまろうとしているという事と、東京都議会選挙で社会党が第一党になって、たくさん喜んでいっているという事(但し、私は自民党支持です。都会に限っては、それでいいと思っています)と、どうやら、雨がやんだらしいという事。

オヤスミナサイ

○次号予定作品○小説芳野眉美(夜乃探郎) 妊娠腹観賞会(高野原美) 痴人の糧(山本章) 怪物?出口王仁三郎とそれを取りまく信者達(久我庄一) 嗜虐の歴史(三原寛) 御厠番秘聞ハ畜財の秘密V(芳野眉美) 亜紀子奇譚ハ後V(麒麟児久) 花と蛇(団鬼六) 論評奇譚クラブ(夜乃探郎) 連れ込みホテル特別室(福田久文) 耕土散筆(保藤久人) アリアドネ(黒淵嬰一) 煙草責のアンケート(城野道一) 心傷たむ遍歴(西条操) 外――



## ○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛 大手札三枚一組 略号 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にち)	臨月腹開陳 大手札四枚一組 五〇〇円 田中美佐子 略号 (にし)	臨月腹開陳 大手札四枚一組 五〇〇円 田中美佐子 略号 (にり)	臨月腹開陳 大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にす)	柱縛りの妊婦 大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号 (にや)	臨月のヌード 大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にわ)	妊婦の裸身像 大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号 (にた)	縛られた妊婦 大手札二枚一組 三〇〇円 田中美佐子 略号 (にる)	臨月の裸身像 大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にお)	臨月の裸身像 大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にぬ)	突き出た臨月腹 大手札三枚一組 四〇〇円 田中美佐子 略号 (にい)
---	--	--	--	---	---	---	---	---	---	--

## ○刺青女体資料の部

入墨の高手小手 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いち)	縄に悶える入墨 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いへ)	足吊り三態 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いと)	剥れた腰巻 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いは)	女一匹御意見無用 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いお)	玉取姫が凄む 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いる)	全裸緊縛立像 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いに)	入墨ヌード 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いよ)	後手吊りの構図 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いほ)	黒細帯の裸身 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いわ)	黒帯を誇る 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いか)
--	--	--	--	---	---	---	--	--	---	--

入墨 自慢 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いり)	黒ふんどし入墨姿 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (くの)	黒ふん媚態の魅力 大手札五枚一組 五〇〇円 山原 清子 略号 (くな)	黒帯背面模様 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (くこ)	黒ふん手吊り責め 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (くり)	全裸入墨姿態 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (いれ)	晒六尺ふんどし 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ろと)	白六尺帯一本の姿 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ろに)	白帯後手高手小手 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ろし)	日本髪全裸強烈縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (いら)	洋髪全裸強烈縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (いこ)	日本髪全裸股間縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (ほき)
--	---	---	---	---	---	--	---	---	--	---	--

山原 清子 略号 (いさ)	可憐島田髻全裸縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 山原 清子 略号 (いみ)	黒フン高手小手縛り 大手札八枚一組 八〇〇円 山原 清子 略号 (ひろ)	入墨女体全裸像 大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひへ)	黒帯刺青女体美 大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひね)	六尺帯をするまで 連続二十ポーズ組写真 大手札二十枚一組 二〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひは)	白ふんどし脇差切腹 大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひに)	白ふんどし短刀切腹 大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひぬ)	刺青姐御腹巻脇差 大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひほ)	刺青姐御腹巻短刀 大手札十枚一組 一〇〇〇円 山原 清子 略号 (ひり)	入墨女体海老姿態 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ほか)	文身女体股間縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 山原 清子 略号 (ほき)
---------------	--	--	---	---	---	---	---	--	--	---	---



## 夢の、また夢

芳野眉美

## 第一章 花仙老と唐女

題名が無いのは、表紙がとれた為で、学術的に価値のある資料とは思われない。簡単な交友録ともいふべきもので、書いた人は、薬種問屋の主人と思われるが、屋号名前はわからない。

三十枚程の和綴の小冊子で、虫食いの上、達筆すぎて、読むのに骨が折れるが、短いのは一行、長くて十行と書いてない断片の集りだから、理解出来ないことはない。

書かれた年代は、徳川十二代將軍家慶の頃と思われる。

店頭に雑多に積まれた、十円均一とある古雑誌の中にまぎれこんでいたもので、古本屋の親父も、くず屋から買ったまま、そこに放

置したものだろう。

ひまつぶしに表紙のとれた古文書をめくっているうちに、どの頁にも「花仙老」と「唐女」という名がでてくるのに気がついた。

交友録といっても、この小冊子を書いた薬種問屋の主人は、花仙老と名のる七十余才の老人と、五十余も年の違う老人の養女、唐女の奇妙な関係に興味を持ったらしい。二人の記録の部分で交友録は占められている。

十円玉と交換に、私はその小冊子をもらうことにした。小冊子の作者と同様の興味を、私も持ったからである。

常緑闊葉樹の巨木が並ぶ自然園の池のほとりに寝ころんで、小鳥の声を聞きながら、よ

れよれの古文書を読むという、なんとなくロマンチックな気分になりながら、私の視線は古文書を追い、また古文書から遠く離れて自分勝手な空想の世界を形成していった。

唐女は、かつて、吉原の遊女であり、大判の錦絵にも描かれた美女であった。

遊女、といっても、江戸時代の吉原の遊女は、琴、三味線はもとより、和歌俳諧、書などの高い教養を修めている。

唐女とは、唐様の書が堪能なところから、そう呼ばれたものである。

老人の前身は不明であった。薬種問屋の主人は、老人の身内や親戚を、一度も老人宅でみかけたことはなかった。

それにしても、吉原の遊女を見受けし、余世をゆうゆう自適するほどの財力が、老人にたくわえられていることが不思議だった。老人は、別に、大商人の隠居ではなかった。

老人と主人の関係は、老人が持病のぜんそくがひどく、投薬が絶えず必要であり、老人の偶居に比較的近かった薬種問屋を老人が訪れているうちに、その主人と親しくなったものと思われる。

老人宅の酒席にも招かれるようになって、主人が奇異に思った始めは、絶えず、老人が



唐女の足を撫でていることであつた。

即ち、唐女は老人のかたわらに、浮世絵のように立膝になり、横ずわりになる。老人は唐女の赤子のような、ふっくらしたまっ白な小さな足を愛でながら、左手で口に酒を運んでいた。

老人の癖とはいいいながら、時折くすぐったそうに身をちぢめ、困ったように主人を見つめる微笑は、おもわず、ふらふらと吸い込まれそうであつたと、主人は記している。

そればかりではない。

主人は、老人の秘事を覗いている。

薬草を持参した主人が、玄関で案内を乞うたが、返事が無い。裏庭に廻ってみたところ奥の居間に人の気配を感じた。

主人は、別に覗くつもりではなかつた。そのまま帰ろうとして、居間の障子の隙間が気になった。

その居間は、老人と唐女の寝室であつたことが、主人の気持の奥に何かひっかかるものがあつたものだろう。

老人は、唐女を横たえて、唐女の足に唇を寄せていた。

そして小エビのように足の指をちぢめ老人の顔に柔らかな足の裏を押しつけている唐女

の、まっ白な下半身が主人を射すくめた。

軽い嘆息が唐女の可愛い唇からもれた。老人が唐女の小さな足の指を噛んだらしい。

老人は唐女の足の裏を舐め、丸いかかとかじり、果ては、唐女の足をすっぽりと口の中に頬張つた。

夜具は無かつたが、畳の上の痴態であるだけに、主人が受けた刺激と興奮は計り知れないものがあつたことだろう。

唐女のあらわな脚がすつと延びて、足の指が膳の上の木の実をつまんだ。そして、唐女の脚は、また、老人の口に向かって投げ出されたのである。

唐女の足の指に挟まれた酒の肴を、老人は口を寄せて啖つた。

唐女のなめらかな脚は、交互に、膳と老人の口の間を往復した。それは全く無造作に繰り返えされたのである。

酒の肴を足でつまみ、老人にたべさせる唐女の慈愛に満ちた静かな微笑を、主人は一生忘れることができないだろうと思つた。

主人が偶然覗いてしまったのは、老人の異常な晩酌の光景であつた。それが老人の趣好であつたとはいえ、老人の考えられないような要求であつたとはいえ、唐女は少しも老人

を哀れんではいなかったのである。

しかし、主人は、見てはならぬものを見てしまったと思つた。

薬種問屋の主人が、唐女を奈良の三月堂の不空絹索観世音菩薩にみたてたのは面白い。老人にとって、間違いなく、唐女は菩薩であつて外の何者でもなかつたのだろうから。

雪のように潔らかな唐女の足からは、得も云われぬ芳香が漂よい、老人の言葉を借りれば、この世のものとは思えぬ、妖しい美しさに、主人の心は掻き乱された。

その時から、主人は、老人が唐女が軽やかに歩く音さえも聞き耳をたて、近くまた遠く唐女の足を凝視しているかのように思えたのである。

ここでもう一つ、主人が酒席に招かれて、ぶつかった事件を書かなければならない。主人が老人の性癖を知つたのも、この時であつた。

老人の酒量は多くはなかつた。いつでも、老人の膳には、銚子が二本だけ、置いてあつた。そして、老人の膳の二本の銚子から、主人が酒を注がれたことは一度も無かつた。

多くは、唐女の酌で、主人の膳に置かれた数本の銚子から、盃を受けることになる。



このことに主人がいぶかると、

「これは、お酒ではないのですよ」

と老人が微笑を浮かべながら云った。

「お酒ではない」

「そう、お酒ではありません」

老人は唐女を見て、声をたてて笑った。唐女が顔を伏せた。

「なんといいましようか、私が長寿を保っているのは、これのためでしょう」

「長命のお薬と聞いては、私も是非頂戴したいものです」

と主人が云うと、老人はおかしな返事をした。

「この味は、おぼえないほうがいいのではありませんか」

「おぼえないほうがいい、と申しますと」

「困りましたね」

老人は、唐女が注いだ、その酒ではない透明な液体をぐいと乾しながら、主人に云った。が、別に困ったような顔はしていなかった。

「私が、そう思うだけなので」

「それでは、薬草の名だけでも、お聞かせ下さい」

薬種問屋の主人は、てっきり薬酒だと信じてしまった様子であった。

「そのうち、わかりますよ」

そう云うと、老人は盃を持って、唐女に、その酒ではない、無色の液体を注ぐように促した。

「人肌はよろしいものですな」

老人の盃に、なみなみと注がれた清涼な液体を、主人は何か神秘的なもののように思えた。

唐女が薬草をせんじているところを見れば薬草の専門家である自分に、わからぬはずはないと主人は思った。長命の薬を、老人は誰にも教えたくないのだと、主人は好意的な解釈をしたのである。

「そのうちに、わかりますよ、か」

それからしばらくして、何回目かの酒席の途中で、老人が廁へと称して中坐したことがあった。台所では、唐女が新しい酒の仕度をしているはずであった。

主人は座を立った。

だが、唐女の姿は台所にはなかった。

主人の膳にだけ、酒が用意され、老人の膳には、二本の銚子は見られなかった。

そう広くはない老人の偶居である。主人は彼女が寢室を兼ねた奥の居間に居ることに気がついた。

唐女がそこで何をしていたか。

主人には全く考えられないことであった。

金銀であしらったまき絵もまばゆい、黒塗りの樋宮が部屋の中央に置かれてあった。

寢室用の可愛い樋宮であった。

唐女が使用するものだろうか。

そう思ったとき、唐女は、裾を流して、その黒塗りの樋宮に坐っていた。

そして、終ると、唐女は、樋宮の中味を二本の銚子に移したのである。

老人の二本の銚子の中味が、唐女の体内を通過したものであることを、主人は知った。

主人は、また、見てはならないものを見てしまったと思った。

しかし、唐女の体内を通過した美酒であれば、自分も飲んでみたいと思った。

老人宅をしばしば訪れているうちに、唐女の高雅で端麗な容姿に魅せられていたのかも知れない。

そんな気になった自分が、主人は少しもおかしくはなかった。

その夜、主人が唐女の体内で温められた美酒を飲んだかどうかはわからない。

老人のあけくれば、唐女の足であり、唐女の尿であった。



主人は、このことを、老人には話さなかった。

老人が、薬種問屋の主人に、問わず語りに昔話を始めたのは、主人にすっかり心を許したからかもしれない。

老人の異常な性癖や、意外な蓄財の秘密など、唐女も驚くほどの話が、老人の口から語られた。

それはまた、老人の一生を支配した、種々な事件の話でもあった。

老人の前身は、江戸城大奥の御廁番であった。

## 第一章

### 中藺の神酒

花仙老人が大奥の御廁番をつとめたのは、徳川十一代将軍家斉の頃、文化文政時代のことである。

将軍家斉の在任五十余年、退任後も実権を握って大御所と称し、世に大御所時代と云われた。大奥三千人、子女実に五十五人をもうけ、江戸時代最高の乱脈豪華な生活を展開した。

家斉の初期に、老中松平定信の寛政の改革

が失敗し、家斉の死の直後、老中水野忠邦の天保の改革が失敗している。文化文政時代はその間にはさまれる。

東海道中膝栗毛、南総里見八犬伝が発刊され、東海道四谷怪談が初演された。家斉の腐敗した生活を反映して、町人文化が乱れ咲き華美と頹廢の中に太平は続いていた。

その間、外国勢力の進出がようやく激しくなっていた。

政治上はみるべきものはない。現代の世想とよく似ている。

考え方によっては、花仙老人は幸福だったかもしれない。廿代の後半から中年の老人は上は側室中藺お局、下は腰元お末の者、大奥の美女集団の排泄物の中に埋もれた。

花仙老人の話は年代順ではない。思い出す度に、ぼつりぼつり話すのを主人が小冊子に記したことになる。

そして、老人の話は、何故、老人が唐女の尿を愛し、唐女の足を愛したのか、その理由も明らかにされ、また、老人が老後の生活を支えるだけの蓄財の秘密も、理解出来るのである。

花仙老人は、奥女中の小用を見ただけで、彼女たちの性情が判断出来たという。朝に夕

に、奥女中の排泄物と接しているのだから、いつのまにか身についてしまった、特技と云えるものだろう。

高級奥女中のなかでは、将軍のお手がついていない中藺、これをお清の中藺というのだが、そのお清の中藺の小用が、最も綺麗であった。非常に細い水流が、虹を描いて落下したという。

中には、落下する孤線が太いのもあったが、不思議なことに、このお清の中藺に将軍のお手がつくと、かならず将軍の「おたね」を宿し、側室に迎えられたといわれる。

線の細いのは、やはり、どこか弱々しいところがあるのかもしれない。

身持ちも性情もわるくなるのは、男に縁が無くなった、中老級の奥女中に多かったらしい。

大奥に入れる男は限られている。側用人、茶坊主とひそかに密通する中老たちの小用はあたり四方を散らし、奔放で、まるで夕立ちが過ぎ去ったようであった。

男遊びのあげく、下の病になる奥女中もいた。一度に放出出来ず、数回中断し、その度毎に、位置をかえ、全くいたいたしい限りであった。



月に一度の血の道るときは、書くまでもない。

江戸城大奥の高級奥女中の厠は、砂を入れた宮で落下物を受け、一回使用する度に、番人が厠から宮を引き出して捨て、綺麗に洗い浄める方法がとられていた。

厠の床下はかなり高く、番人が中に入って掃除が出来ようになっていたことだろう。床は石畳を敷き詰め、中央の凹みに砂宮を置いたのである。

砂に散った数多くの奥女中たちの小用の跡から、彼女たちの性情を判断したとは、御厠番ならではの出来ぬ芸であろう。

だが、長い年月の間には、厠の床下を掃除している番人が居るのも気がつかず、いや気がついたとしても、足下の下部を無視して、そのまま番人の上に用を足した奥女中もいたことだろう。

平然と見下しながら、頭から番人に浴びせかけた奥女中もいたのではないだろうか。事実、花仙老人は、こんな体験をしているのだ。

ある朝、老人が厠の床下を掃除し、白砂を入れた宮を床に置いた時であった。頭上に人の気配を感じて、あわてて老人が

床下から出ようとする上から声があった。

「待ちゃノ」

老人は砂宮に、おおいかぶさるように平伏した。ささいな落ちどで打首になった番人もいるのである。

続いて、

「顔をお上げ」

きびしい声であった。

おそろおそろ老人は顔を上げた。手の掌に油汗がにじみでていたと、老人は回想する。

目をまっ赤にはらした中臈が立っていた。昨夜は一睡もしていない様子であった。

老人は、それがお清の中臈であることに気がついた。そして、その中臈が、非人間的な動物的な役目から解放されたばかりだと思った。

お清の中臈の役目に、將軍に添臥を命じられた中臈の監視がある。

將軍と同じ寢室に臥し、寝ることも、また見ることも禁じられて、ただ、將軍とその中臈に背を向け、二人の夜の秘めごとを聞いている。

翌朝、添臥の中臈の甘いむつごとを、別室に当直している年寄に、詳細に報告しなければならぬのだ。

寵愛に甘えて、將軍に応外なおねだりをすることを禁じるための制度とはいえ、恥かし、消えいりたいような役目であった。

それを知って、刺激にあきた將軍は、あからさまに見せつけてくることもあるだろう。

裸にむかれた添臥の中臈が、顔をおおい、耳をふさぎたくなるような、被虐的な羞恥に満ちた姿態をとらされても、寢室を出ることは許されない。

監視の中臈に見ることを命じながら、將軍は添臥の中臈を犯したかもしれない。こんなことがあったとしても、それは自然のなりゆきであろう。

中には、監視の中臈にさえ、ついでに手をつけてしまった將軍さえいるのではないか。

二人の中臈を交互にもてあそぶことなど、將軍には日常茶飯事だったかもしれない。

何はともあれ、厠の黒塗りの樋の縁に立つ若い中臈の身体は、やっとそこに立っているようにも見えた。ときどきに身体がふるえ、全身でショックを受けとめている風情であった。

男を知らないお清の中臈なのだ。無理もない。

その中臈は、しばらく老人の顔を見ていた



が、やがて。

「口を——」

と老人に云った。放心したような声であった。

(口を)老人は思った(開けると云うのか)

老人は唇をふるわせながら、口を開いた。

やっと開いたといっている。

「もそっと」

(近づくと云うのか)

老人はそっと立ち上った。

白綸子に金糸で縫縫した源氏車の襦袢の裾が

羽根のように広がって老人をおおった。

廁の床下が暗くなった。

「この世のものとは思えぬ」

話終って花仙老人は大きく溜息をついた。

中臈と老人の間は、三寸と離れていなかったという。

老人にとって、それはまさしく神酒であった。

老人は、呑みに呑んだ。

お廁番とはいえ、老人が奥女中の小用を直接に口で受けたのは、その時が始めてであった。

最初にして、最後と思われるような、考えられない事件であった。

主君に対して絶対服従を強いられ、一言の反駁も許されない身分の低いやしい番人であれば、年若いお清の中臈のなすがままになったのだろうが、理由はそれだけではないだろう。

宇治拾遺物語や今昔物語には、兵衛佐平貞文が、本院左大臣時平の女房侍従の君に恋し思いあまって、女の童から、侍従の君の黒塗りの什器を奪い取ったばかりでなく、中に収められた透明な液体を吸り、かたちよく盛り上った黄金の塊を舌に載せたという、有名な話がある。

本院の侍従のそれは、兵衛佐の舌の上でたちまち淡雪のように解け、甘く、苦く、酸郁たる香を口中に漂よわせた。

即ち、侍従の君の秘水と思えたのは、丁字を煮出した汁であり、侍従の君の秘塊と思えたのは、沈と白檀と麝香を甘葛の汁で練り固めたものであった。

侍従に欺かれた兵衛佐は、恋しさがますますつのり、物狂しく侍従の残香を求めて悩み死にしよう。

御廁番にすぎない老人が、高級奥女中をひそかに恋慕し、崇拝していたとしても、それが何になろう。せめて、兵衛佐平貞文のよう

に、残香を求めるようになるのではないだろうか。

老人の心の奥には、お清の中臈が絶対的な権力者として君臨しているのではなく、ひそかに思慕している高貴な雲上人が命じたことに、諾々として奉仕している気持があったことだろう。

その後、お清の中臈は將軍のお手がついたが、將軍のおたねを宿すには致らず、大奥から姿を消した。やはり、線が細すぎたのだろうか。

その行方を、老人は知らない。

水鹿子の白無垢、墨形の肌着、それに、加賀絹の二布を、老人はそのお清の中臈から拝領している。二布とは、腰のもののことである。

いつ拝領したのか、中臈の神酒を拝受した直後か、中臈が大奥から下がる頃のことか、確かなことはわからない。

それ等、お清の中臈が身につけていたものは、桐の箱に収められて、老人の大切な家宝となっていた。

お清の中臈が、二度三度と、老人の口を使用したかどうかはわからない。

(未完)





奇クの愛読者、そして大塚啓子嬢のファンです。彼女の豊満な肉体に厳しく喰い込むナワ目にあえぐ姿に、ある種の陶醉を感じる私です。だが統制厳しき折柄、本誌にフォートの掲載がなくなつたのはいささか淋しき限りだが、これも致し方なきこと。そこで、限定版分譲品として、一層の充実を求めるのがマニヤのマニヤたる所以です。緊縛の迫力は勿論のこと、苦痛にあえぐ表情を如実にあらわすため、髪のみだれや汗にぬれた肌

などその効果を一層高かめるものと思います。大塚嬢をモデルとして、そういう迫力のあるフォートを是非お願いします。それから貴社の関係にもしSMに関する同好会などございましたら、お知らせ願いたいのですが。「孤独の中で楽しむ世界」自分のS的性格をそう考えておりますので、他人に知られたくないために仮名を用いました。(東京都八大島行雄)

このところ、相次いで長逝された谷崎潤一郎、江戸川乱歩二氏に對して、奇クは心から哀悼の意を表すべきだと思っています。十月号に、両氏に関する追悼エッセイをのせられるよう提案いたしました。真に両氏はSMを超越し昇華させ、しかもSMから片時もはなれなかった稀有な作家であつたと思います。お暑さの折柄、編集部の皆様御健康を祈ります。麻生は目下多忙にて、当分投稿出来ません。悪しからず。(麻生保)

暑中御見舞申し上げます。始めて御便りしますが、小生は二十二才独身の男性で浣腸の記事を愛読しております。自分で時には女性の手で浣腸を楽しんでおりますが

その後必ず消毒のため(?)坐薬を用いております。先日、薬局でポリラリザン(ドイツ製マルホ輸入)坐薬を紹介され、使用報告の文献を借してもらいました。文献そのものは別に面白くありませんが、その中で日本(及びイタリヤ等)の病院(順天堂医科歯科、社会保険中央、京大、阪大、新大東女医大等)の使用成績が表になって、効果が一覽表になっていました。もちろん東女医大を除くと男の患者が多いのは当然として、女性も少なくなく、七六名のうち十代が三名、二十代が二十八名、三十代が二十六名、四十代が十名、五十代が六名、六十代が二名と、二十代のしかも未婚とおぼしき年代にも少くないことを知りました。(二十才から二十五才が二十一人)内痔核、裂肛、外痔核、痔瘻、肛門周囲炎、ポリリーブ、肛門裂創等ですが、大して症状のない患者もいて、もしかしたら、マニヤではないかと思われる症例もあり、一人一人見ていくうちに、受付だの間診だの、診察前の浣腸や肛門鏡直腸鏡による診察の場面などが目に浮かぶようでした。女医大や社会保険中央病院へ行くと、このような令嬢にお目にかかれる機会も

多いことでしょう。同好の方のお便りをお待ちします。(千葉市黒砂町八高津忠夫)

始めてお便りします。読者通信にのせて頂けるかしらと、こうしてペンをとる迄に随分迷いましたが、愛する夫のすすめですので夫の希望も入れてかいてみます。私は本年二十九才の一児の母でございます。主人は三十六才で事業を經營しております。でもかくことだけは苦手です。結婚前から少し夫に変わった癖があるとは感じておりました。今ではすっかり私がSMの耽美に引きずり込まれております。本当にこんな楽しい刺激があるお蔭で今でも新婚生活に変わらない楽しい生活を送っております。でも、この頃はちよっぴりスリルもほしくなりました。丁度文通の上で知り合った方ですが本年三十一才の女性の方と、もう二年ばかりご交際してはいますが、その方に遊びに来て頂くうちに段々と親しくなりご希望もあって三人仲良くプレイを致しました。私はどちらかと申しますとM型ですがその方(かよ子様)はSがかった好みで主人をいじめ始めて、主人も始めての刺激ですので、すっか



り上気してしまい二人共本気でブ  
レーしたりするので私もしまい  
は少々ジェラシーがわいて困った  
くらいでした。丁度私も少女時代  
から父がカメラ店を経営していま  
したのでDPが出来ますし、私た  
ちの場合アルバムで六、七冊はご  
ざいます。最近では8ミリもカラ  
ー迄なんとか出来るようになり、  
先日もしもコンで主人にいわれて  
いろいろ撮したのですが、思った  
よりずっと美しく現像出来ました  
ので、すっかり二人共自信をつけ  
ました。そこで主人の希望も入れ  
て皆様に述べさせて頂きます。ご  
夫婦やパートナーのいらっしやる  
方とぜひご交際したいのです。か  
よ子様とプレー(SM)ご希望の

方はご連絡下さいませ。但しかよ  
子様の希望は年令三十五才以下で  
紳士的な口のかたい方を望んでい  
られます。(香川県高松市八松田  
美恵子)

私は女相撲や女子レスリングの  
愛好者で、貴誌を毎号楽しく愛読  
している者です。特に九月号のデ  
パート女子レスリングは、よかつ  
たと思います。又、今月号では琵琶  
湖畔での女相撲や女斗美場面の  
分譲品を多数発表下さいまして、  
大いに期待しております。さて、  
おたずねいたしますが、私はまだ  
素人の相撲やレスリングを見た事  
がありませんし、愛好者のグルー  
プも知りません。一度是非見たく

又カメラに納めたく思います。つ  
きましては愛好者のグループが有  
れば入会方法等又モデルになって  
下さる方があれば是非お教え下さ  
い。当方二十七才、会社員独身で  
す。又毎号執筆されている先生方  
の住所も合せてお教え願えれば幸  
いです。(女相撲女斗美ファン)

暑さきびしき折柄、編集の皆様  
方には大変な事と存じます。ご苦  
労様です。小生当年二十四才にな  
ります小市民ですが、この道にか  
けては十一年のベテランと自他共  
に許す者です。というのも、そ  
のきっかけが奇クにあるのですか  
ら、奇クもつみなことをしたもの  
です(ゴメンナサイ)。小生が奇

クをはじめてみたのは、たしか昭  
和二十九年の夏のことでした。小  
生はゆきつけの貸本屋の本だなの  
すみにのついていた、きれいな表紙  
の本をなにげなく手にとつて、ひ  
らいてみた時のおどろきを今でも  
はつきりおぼえています。思えば  
あれから十一年、奇クとのつきあ  
いで小生のSM趣味も成長してき  
たのです。今度はじめて手紙をか  
くことにしたのも、分譲品を購入  
しようと思ったのも、実は最近の  
グラビヤ、口絵の全廃によるもの  
たりなさやいやすためなのです。  
すなわち小生が十一年間にわたつ  
て見続けてきたものに対する愛着  
とでも申しましょうか。とにかく  
そういったものが小生に(元来悪

## 四馬孝 妖美画集

### 女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付  
五枚一組 略号(しせ) 一〇〇〇円

- 一、若き姫君の切腹美態
- 二、介錯を受ける美しき娘
- 三、切腹する娘落城の哀史
- 四、夫の眼前で切腹する若妻

### 浣腸美媚態

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付  
三枚一組 略号(のゆ) 六〇〇円

- 一、美しい令嬢に対する浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場面
- 三、女学生に行う浣腸の私刑

### 浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付  
五枚一組 略号(しき) 一〇〇〇円

- 一、片足吊りで美女に浣腸
- 二、いちぢく浣腸の恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子シリンドラー乱舞す
- 五、イルリガートルの浣腸

### 浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付  
五枚一組 略号(しえ) 一〇〇〇円

- 一、踊子へのイルリ浣腸責

### 羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付  
五枚一組 略号(しい) 一〇〇〇円

- 一、ヒマシ油強制下剤実施
- 二、進しり出る緑の浣腸液
- 三、女体浣腸用責衣の応用
- 四、両足吊りイルリガートル浣腸
- 五、羞恥責め絵巻
- 一、渾水による人工妊婦製造
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三馬の美女責め
- 四、全裸の美女柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ



筆の上筆不精なのですが、書く一大決意をさせたのです。もちろん編集氏諸兄にうらみなど申し立てるのではありません。あの青少年保護育成に関する論議によって諸兄のご苦労もさぞやと拝察いたします。ただ、このみたされない胸の内だけは、察してほしいのです。どうも変な話になりました。恐縮です。今後ともよろしくお願い致します。尚これはダ足ですが、小生のケイコウは百% Sで好みは分譲品の申込み内容をこらんなればおわかりいただけると思います。(ダ足のダ足、相手は女性にかぎります)では、皆様方のご健康と奇クのご発展をいのりまして筆をおきます。(長崎市八ザボン生)

○ 長雨と冷夏ではとほといやになっておりましたら、今度は毎日毎日、にえかえるような暑さで弱りきっております。私って、特別にどことって病気はないのですが暑さにはたまりません。夏のない国へ行きたいなど考えたりしております。九月号を書店にて買い求め、ほんとうに楽しく読ませていただきました。口絵がないかわりに読むところが多くなって、

私にはうれしい変りようです。以前の雑誌ですと、カミソリで写真のところだけ切りすてておりましたが、最近ではそんな面倒なことをしなくても楽しく保存できてうれいのです。今月号では、やはり「花と蛇」を一番に読みました。私はこんな小説が大好きです。私は毎月雑誌は十四、五冊ぐらい買求めておりますが、殆ど確実に一ル読物、小説現代、婦人公論ぐらいで、他の雑誌は書店の店頭で拾い読みして気に入った小説や読物があつたときに求めることにしております。奇クも写真や絵はいりませんから、もっと増頁して本文を増してほしいと思います。今月号の小説現代で奥野信太郎さんが「大阪ストリップ地帯を行く」というルポを、書いておられますが、この記事には、大変興味を持ちました。勿論女の私はストリップなんか見たことはありませんがこの記事を読んで、自分もストリップパーになつてみたいなあと思つたりしました。私って露出症的なところがあるのです。それであの記事の中にあるストリップパーの方になつてみたい、そうしたらどんなに幸せだろうかと空想したりし

### ☆傑作迫力Mフオト☆

二人の女性からの責め

山原清子外一名出演

男が屈伏するまで

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふそ)

腎の下に呻吟する

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふた)

二女の股賣地獄にあえぐ

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふぬ)

逆エビとムチ打ち

大手札十二枚一組 三〇〇〇円 略号(ふち)

ムチで仕込むズベ公

大手札十枚一組 二五〇〇円 略号(ふよ)

口中の汚水処理器

大手札九枚一組 二三〇〇円 略号(ふり)

顔を玩弄する

大手札八枚一組 二〇〇〇円 略号(ふわ)

豊満な二人の馬になる

大手札七枚一組 一八〇〇円 略号(ふる)

腎臭をかがされる

大手札六枚一組 一六〇〇円 略号(ふお)

口中に汚れた布を押し込む

大手札六枚一組 一六〇〇円 略号(ふね)

縛り人形を踏みつける

大手札五枚一組 一四〇〇円 略号(ふつ)

顔を素足で踏みつける

大手札三枚一組 一〇〇〇円 略号(ふな)

○ ました。でも、今の私の生活ではそれは、夢みたいな話で、いずれ二、三年のうちには大学出の秀才?と結婚させられるのだと思ひます。ちよつと身上話みたいな(大げさかな)文章を書いてみましたので、あとで送ります。(大阪市八カワカミ・ケイコ)

○ 九月号に書いておられた豊中の守口順子様、貴女とお友達になりたくて、この通信を書きました。

私は以前大阪の山村様宛にこの欄をお借りしてお便りした事がございます。私は本年三十一才、勿論妻子もあり、大阪市の生野区に住み、伊丹市に勤める平凡なサラリーマンです。しかし奇クとは十数年来の付き合いで貴女の知らない豊富な話題や、旧号も沢山持っています。一度お逢いして色々お話ししたいですね。貴女はきつと素晴らしい女性だと思います。そんな女性を全裸にむき、ぎゅうぎゅう縛



# 四馬孝画 秘蔵版 責め画集 分譲

## △責められる美女波津子の痴態△

大判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

白く輝く肌にどす黒い縄。

一、恐怖の浣腸責め展開す

二、柱抱きアグラ縛りの責め

## △可憐な美少女加奈子の羞恥責め△

大判印画紙焼付 五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

捕われの美女加奈子の運命

一、ローソクの火責めにあう

二、ヨチヨチ歩きの美少女

三、逆エビ縛りの柱宙吊り

四、股間縛りで被虐の絶叫

五、鑑賞に供される緊縛美体

## 『花と蛇』画集

大判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えに)

一、京子に芸を仕込む鬼源

二、静子令夫人への汚辱

三、機り責めにあう美津子

四、片足挙げ縛りの桂子

五、粗相を強要される京子

## 浣腸と排泄画集

大判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えい)

一、恐怖の浣腸台の美女

二、浣腸のあとの楽しみ

三、百CCのグリセリン浣腸

四、塩水をヤカンで飲ます

五、排便を耐えぬく美女

## 女体吊責め特集

大判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えほ)

一、弓吊りローソク責め

二、エビ縛りの宙吊り

三、股間縛りの責め

四、美女の舌の先縛り

五、股間縛り鼻孔吊り

## 美貌汚辱と鼻責

大判五枚一組 一〇〇〇円 略号(えは)

一、美しい女の鼻をなぶる

二、一本一本女の鼻毛をぬく

三、美女の口中をほじくる

四、泥絵具にまみれた顔

五、ラーメンを食べさせる

り上げ、その上くすぐったり、浣腸したり色々責めたてる。それが私の趣味でありまた念願でもあります。幸い私宅と貴女宅とは近いです。是非お友達になり若い時代を過ごしたいですね。誌上にてよいお返事待ちます。京都の藤島万寿子様、私は貴女の指定された場所へ行きました。五月晴れの大変良い天気でした。私は胸をときめかせながら定刻かちりに、すでに私が行った時は二人程先客があり、これは大変な競争になるんじゃないかそう思っている、また一人恐らく福井の高橋氏ではないかと思いますが、都合四人のS男性が、しかし彼女はいない。約一時間程して先客の二人が帰り、私ももう一人計二人になってしまった時、ピンクのスーツを着た素晴らしいグラマー美人が、私の後をいったり来たり、私は胸をときめかせながら、声のかかるのを待った。しかし、そのまま大きなヒップを左右に振りながら、貴女はいってしまわれなかつたのでしよう。掛けて下さらなかつたのでしよう。か。恐らく二人の男性を意識しての事と思いますが、私はあの日一番北の端に座っておりました。直

度道路工事をしておった辺りですが、どうでしょう、先ず貴女は顔といい肉体といい第一級の美人です。私にとって責め甲斐があるといるもの、京都のデラックスホテルの一室で素晴らしいプレイをしませんか。そしてプレイの感想を二人連名で奇クに発表しようではありませんか。貴女は責められたいのだ、貴女の豊かな白い肌に非情な縄が喰い込み、乳房はゆがみ、下腹部はくびれ、喰い込む股縄のためにあえぎつつける。口にはパソティの猿轡、そんな貴女を私は責める。くすぐり責め、つねる、叩く、ローソク責め、はては股縛りのまま歩かせる。そして最後には浣腸責め、どうでしょう、素晴らしいではありませんか。貴女はそうされたいのだ、私のこの文を読まれたら、早速、誌上にて連絡場所をご指定下さい。なるべく早く。(大阪市八田口一夫)

○ 昨夜奇ク入手致しました。思ったことを書いておきます。奇クサロンの写真はとても好きです。もっと多ければ尚良いと思います。平伏人氏の文がなくて残念でした。読者通信の中で、徳山市の安田隆夫さんのブロータス談義は楽し



貴誌の一読者ですが、小生馬化願望の二十六才になる男です。二十五才以下の、体重六十キロ以上の男性で、小生の馬に長靴をはき拍車をつけて乗り廻して下さる人はいませんか。体重は重い程嬉しいです。小生が馬になり部屋の中を潰れるまで乗り廻してクタクタになるまで、更に肩車であちらこちらと鞭で勇気づけながら……この様にして下さる若い人、是非友達になって下さい。また乗馬の出来る人、経験のある人、また馬術の道具を一通りお持ちの方、是非文通しましょう。写真同封にてお願い致します。男性に限る。(浜松△KA生▽)

〔今月の新版分譲品〕

大手札印画紙焼付

十二枚一組 二〇〇〇円  
大塚啓子 略号(のる)

鳩下腹から脇腹、更に臍の傍から  
か尾へかけて、豊かな女体。やがて咽  
喉元に止め、一刀を刺されて、あ  
われ絶命。豊富な血紅を使用して  
美しい女体が、命を失ってゆく様  
を順を追って、刻明に描写し、血  
をまみれの屍体となつた女の美しさ  
を最高度に發揮しました。

## 血紅使用

美しき女の屍体

大手札印画紙焼付

十二枚一組 二〇〇〇円  
大塚啓子 略号(のり)

美が、その全面に漂っている。喉の刺傷から血が溢れ出るのだい  
仰向けになつた死屍には、胸と咽  
い女体。氷刃を肌の上に残した美し  
下腹部を朱に染めて斃れた美し  
る。眼をむいて息絶えている。  
が、そこには凄惨の中にある無慘

血紅切腹連續写真

大手札印画紙焼付

十二枚一組 11000円  
大塚啓子 略号(のせ)

白く輝く豊満な裸身を惜しげも

なく晒して、大勢の人達の前で女  
が腹を切りさばいて命を自らの手  
で断つ順序を連続で写真化したし  
ました。下腹から手まで血だらけ  
にして苦痛にのたうつ女体。そこ  
には女の哀れさと美しさとが、渾  
然一体となつて、マニヤの方々の  
胸に迫ってくることでしよう。

血紅使用

切腹した女の死体

大手札印画紙焼付

十二枚一組 二〇〇〇円  
大塚啓子 略号(のい)

切腹といふ崇高な儀式を終えた女  
切腹は、今や全身を血に染めて屍を  
横たえてゐる。彼女の柔肌を割いて  
た刀は、血を吸つて白い肌の上に見  
鮮烈なコントラストを作つて見る  
人の目を楽しませるだろう。

血紅使用

立腹に悶える女体

大手札印画紙焼付

十枚一組 一八〇〇円  
大塚啓子 略号(のさ)

桜の木の前で散る花の如く、輝  
一本の裸身で仁王立ちになつて、  
潔く立腹の壮絶なる実演を行う豊  
麗な女身。下腹を血まみれに立  
つたまま行う女体切腹。溢れる血  
汐。苦痛にのたうつ姿を異性の  
目の前に展開したいという切腹女  
性の昂揚するマゾヒズム――



東浦ひかる様九月号での貴女のお便り拝見させて頂きました。文中に私の名前があり光栄です。貴女は最近太ってこられたそうです。が、結構な事だと思えます。若い女性には最近やせるために一生懸命

△吉井幸男▽

全裸の肥り肉を麻縄でぎりぎり  
と嚴重に縛り上げられ、浴槽の中  
へ無理矢理に浸される。只でさえ  
力いっばいに締め上げられた麻縄  
は湯を吸つて、肌に喰ひ込む。一  
方は熱い湯に蒸された背中の刺青は

の身体がやっと入るか  
木製の檻に閉じ込めら  
れる白い肌の動物がう  
いとの変りなかつた。ご  
めいた女はか



書店でSM雑誌を見ている初老  
 壮年、若年などの姿を見るとハ  
 ンやはりこの人たちもSMに、興  
 味をもつのだなアと思う。いった  
 いSM党は何人、イヤ何千、何万  
 いるのかと未知の世界での想像を  
 たくましくする。路を歩いててもそ  
 のへんに、ウヨウヨしているのか  
 も知れない。女もいよう。そして  
 雑誌が売れるというわけ。SM集  
 会は経験がないが、心臓が強くな  
 いとプレイもできないらしい。た  
 だ談話では物足らないし、といっ  
 て衆前でプレイは？というわ  
 け。勇敢にぶっつかること、羞恥  
 や躊躇は禁物だろう。ある男、あ  
 る店にて、晒の褌を切ってもらっ  
 た時、他の男が褌を買いに来た。  
 帰途を共にし、褌の使途を尋ねた  
 のが契機で、SM友達になった  
 と。どこに運があるか分らぬも  
 の。と思うと、中年女性が赤布一  
 米を買いに来た、勇をこらし、お  
 腰ですかと尋ねると、失礼なッ気  
 違いと一喝を食わされてひっこみ  
 がつかなかった、というのもあっ  
 たそう。ツイてないのである。褌  
 お腰に關した読物の少ない折りか  
 ら、六月、七月号の富士春波先生  
 の二作は満足した。今後もこうい  
 うものを発表してほしい。(東京

△中村一夫△

三原さん、「嗜虐の歴史」は九  
 月号で終ったのでしようか。悶絶  
 するような激痛と自動的喉をつ  
 いて出る悲鳴にかかわらず、なお  
 敢えて加虐者の恣意に身を委ねら  
 れる気力は、情欲からではなく、  
 自分のしたいことのためには善悪  
 の彼岸を超越できる、神のような  
 強さと自由さ、またその強烈な生  
 命力に対する渴仰から出てくるの  
 ではないでしようか。その加虐者  
 が婦人であれば容姿の美しさと稀  
 少価値とがそなわって、一層形而  
 上の憧憬をさそうのではないでし  
 ようか。東女史(どういう職業の  
 方か存じませんが)との体験談を  
 読ませて頂いたとき、わたしはこ  
 う感じたのです。「嗜虐の歴史」  
 を執筆なさって以来、南溟の樹海  
 のなか、遠い世紀をさかのぼる詩  
 情につつまれて、戦場における蛮  
 勇を女王への奉仕に昇華したソバ  
 イが、原書を超えて美しく描かれ  
 ることを期待しておりました。黒  
 瀬さんが、義母のために地獄その  
 ままの獄舎に繋がれ、その結果高  
 僧となったローマの將軍の子息の  
 ことを紹介して下さったことがあ  
 りましたが、ソバイもまた、女王

に奉仕した受難の月日のうちに、  
 次第に女王以上に強く、美しく、  
 かつ自由なもの——深い詩的真實  
 に目覚めて余生を送らなかつたで  
 しょうか。因みに外国の文献を紹  
 介して下さるときは、版元を付記  
 願えれば幸いです。(福田久文)

「辻村隆さんへ」辻村さん、「サ  
 ロン楽我記」△第十五回▽うれし  
 く拝見致しました。私のささやか  
 なナイロンのひも揚げものを「実  
 に感動した」とのお言葉。かえっ  
 て私の方で感動しました。こんな  
 によるこんでくれたのですもの  
 ——「夜乃探郎がそのすべてで」  
 のお言葉も、散文精神に徹しよう  
 と信条する私にとって、まったく  
 わが事いたれりの最大の讃辞と受  
 けとめました。誌上公開主義者  
 ——この文句も、ありがたく拝受  
 します。もう、夜乃探郎論は、ス  
 タイリスト、辻村さんにかかつて  
 は委細もれなく私はガラス箱では  
 づかしがる一人のピエロにすぎま  
 せん。△ピエロは、その小さなハ  
 ートは複雑です▽夢男は、現実の  
 (直接文通ETC……)世界が怖  
 いのです。おさっし下さい。末長  
 く奇クという「共通の広場」で、  
 お引立の程を——。そして「

女相撲と女斗美

モデル 木村洋子、大塚啓子

女相撲組打ち

大手札八枚一組 略号 八〇〇円

相撲マワシ着用

略号 (すか)

女相撲投げ業

大手札八枚一組 略号 八〇〇円

相撲マワシ着用

略号 (すね)

裸女の争斗

大手札五枚一組 略号 五〇〇円

白晒六尺着用

略号 (めん)

裸女の寝業

大手札五枚一組 略号 五〇〇円

白晒六尺着用

略号 (めき)

裸女相撲つ

大手札八枚一組 略号 八〇〇円

白晒六尺着用

略号 (えく)

女相撲四十八手

大手札六枚一組 (1) 略号 八〇〇円

女相撲四十八手

大手札六枚一組 (2) 略号 八〇〇円

女相撲四十八手

大手札六枚一組 (3) 略号 八〇〇円

女斗立業の応酬

大手札六枚一組 略号 八〇〇円

立業の攻撃場面

大手札六枚一組 略号 八〇〇円

寝業の女レス

大手札六枚一組 略号 八〇〇円

女斗連続場面

大手札九枚一組 略号 一〇〇〇円



「吾等アブ党それぞれの道をゴーイング・マイウェイで行くのが、一番いいのじゃないでしょうか」

「夜乃探郎氏よSM探求に今後は手をとりあって」のお言葉。私の方こそお願いします。（ピエロはまだ奇ク一年生ですもの）では、辻村さんの「カメラ・ハント」を

期待して……。ロープの魔術師たる辻村さんのご活躍を祈って……  
七月二十三日八夜乃探郎

芳野眉美さん—今月の八世相診断室Vはどうもまずい事になりました。結果として、あなたを批判した事になるやもしれないからです。でも、これだけははっきり申

## 刺青姐御脇差短刀六尺禪腰巻勇姿

### 禪一本艶姿脇差

大手札印画紙焼付  
八枚一組 略号一五〇〇円

山原清子  
白の晒ふんどしを胸高かに締め、姐御が、腰の一本刀をすりと、抜いて、坐、胡坐、中腰、立姿と、みえを切った勇ましい艶姿を、同好の方々の御希望にもとづいて、特写いたしました。

### 禪一本艶姿短刀

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 略号二〇〇〇円

山原清子  
ふんどし一本の大胆ないでたち、背中の刺青を、これみよがしに誇らしげに晒して、白鞘の短刀を抜き放った姐御の艶姿が、十二枚の連続フォトによって全身余すところなく御覧になれます。

### 腰巻一丁艶姿短刀

大手札印画紙焼付  
八枚一組 略号一五〇〇円

山原清子  
大の男を顔で使って貫く充分の姐御が、乾分たちを前に短刀を口に、くわえ、或は畳に突き立て、凄んで威嚇を示しているところ。真赤な腰巻のお色気が、あらわな真白い怪にあふれている。

### 腰巻一丁艶姿脇差

大手札印画紙焼付  
十二枚一組 略号二〇〇〇円

山原清子  
真紅の腰巻をむざうさに身にまとっただけの姐御が、腰巻の裾から、真白い足をなまめかしく踏みだして、腰の脇差を抜き放つや、右に左に刀を構えてアン垂涎の姐御ぶりをふんだんに撒きちらす。

し上げておきます。いやしくも筆を持つて立つ者は、他人の意見に耳を傾けるのは当然ですが、全体として批判にくじけてはならないという事です。あなたはそれ程弱い人間ではないとお見受けしますが、もし私のいった事が癪にさわったならば——それ程癪にさわる訳はないと確信しますが——マミが発言して下さい。どうか、マミの書いたもので、私を感動させないで下さい。私は商売柄お世辞をいうのが大嫌いなので、あなたをハ才人Vなどと申しません、確かに何かを持っておられるという点で、今後の活躍に期待しております。八出る釘は打たれる、昨今君に一番大切なことはニッコリ笑って人を斬るの精神です。不必要な妥協はくれぐれもなさらないように——。友よ、好敵手よ！  
(神奈川県八木戸川健)

○  
数年来の愛読者の一人です。いつも真先にこの欄を見て、同好の方々のご意見や体験談などを興味深く拝見しています。私は二十六才のサラリーマンですが性格はMのほうなので作品もそのようなものを好みます。八月号の「ある夏の閑奏曲」は全く素晴らしい作品で

した。今まで読んだいろいろの小説、体験、評論の中でこれほど私自身にぴたりとくるようなものはありませんでした。作者の体験がうらやましいかぎりです。私の理想は男まさりで逞しい女性によって組み敷かれ征服されることです。但し排泄物への興味はありません。少し以前になりますが三隅千恵子さんや高木紀久枝さんの手記も好きなものの一つで、ただ私がMのため「女性の女性に対する征服」というテーマを、勝手に「女性の男性に対する征服」に読み替えていました。「花と蛇」はMものではありませんが、プロットディテイルともずばぬけており近来的秀作だと思えます。これを裏返しにしたような本格的M小説があればいいのに、いつも考えています。ただ「花と蛇」では女性の羞恥心がモチーフになっていて、その意味でのM作品は構成がむづかしいかも知れませんが、M系統のものはどうしても即物的色彩の強いものが多くそうでなければ極端な観念性へ走るようです。「閑奏曲」のような優れた内容の作品はあまりありません。最近の誌上では読者間相互の呼びかけが盛んになっていますが、た



# 安原さゆり第二回妊娠妊婦フォト

## 第二回の妊娠について

「奇クサロン」にてすでに知らせられています通り、妊娠腹にてお馴染みの安原さゆり夫人が、第二回目の妊娠をいたしました。第一回目に比べて比較して、更に大きく膨らんだ妊娠腹の写真を、ここに各月に分けて分譲いたします。第一回目に分けて分譲した写真と併せて文献的資料として保有下さい。

## 九カ月の妊娠腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

安原さゆり 略号(にん)

まんまるく膨れあがったお腹を側面から眺めてみると、膨らみがへソのあたりから、次第に下の方向に移って月が満ちてきたことが、はつきりとよくわかる妊娠九カ月の見事な腹部。

## 九カ月の妊娠腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

安原さゆり 略号(にの)

どたりと脚を投げだして横坐りとなつた九カ月の妊婦は、べんべんたるお腹をもて余すように、あえいでいる。誰が見ても一見して月が迫っていることがわかる。下ふくらみの立派な妊娠腹である。

## 妊娠九カ月の腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

安原さゆり 略号(にみ)

大きな腹部をもてあましたように横たわった女は、まるで牝獣と叫ぶにふさわしいグロテスクなものである。これも人間女性の異常美といえるであろうか。妊婦記録の一端として一見の要あり。

## 八カ月の妊婦腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

安原さゆり 略号(にへ)

全裸と輝と側面の三枚を八カ月の目として撮影したフィルムの中から選んだ。八カ月の終りに近く、目から腹の膨らみに、流石二回のように張りきっているのだ。

## 六カ月の妊娠腹

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

安原さゆり 略号(にそ)

妊娠五カ月から一カ月毎にと予定して安原氏が撮影した妊婦フォトの六カ月の大きなもので、八カ月の九カ月の大きさとどのよう違うか比較するため、特にフアンの方にお分けいたします。

しかに自分だけの殻に閉じこもっているのは、いかにも味気なくわびしいと思います。読者通信にはS女性の方はあまり登場されませんが、六月号の東京の太田恵子さん(残念ながら私はあの条件に該当しません)のような方が、もっとどしどし出てきて下さることを切望しています。できればそのような方と文通してみたいと思っていますのです。良きお便りをお待ち申しております。(京都市右京区八田代生)

○ 芳野眉美様、ご希望により再び私愛用のパンティをお送り致しました。普通の方々からみたら全くはしたない事にお思いかと存じますが、本当に貴方一人がいくら「誤解する人にはさせておいて」と仰言って下さっても、そこは、やはり女ですし、優しさと慎ましさが女の生命であり美の根源であると教えられ、比較的古典に育てられた私としては、何か調子に乗っている様に誤解されそうで嫌でしたし、初めは随分思い切った決心も必要でございました。実際、娘時代の私でしたら、自分の汚れたパンティを人様に差上げるなどという事は、不潔で不道徳で到底

考えられない事ですものね。でも結婚して多少S的な方面にも開眼させられた今は少し違います。それに私っておしやれですから、何時の間にか下着類も色々買い集めてしまい、お送りしたような散々に穿き古したものでも、何かしら愛着があつて捨て兼ねていたところでしたから、貴方のお申出があつて戻つて幸いだったかも知れません。(廃物利用とはまさにこの事ですわ)そして貴方のお好きな私の匂いも、丹精こめてたぶりと秘めて差上げました。ですが、余り貴方のお気に召す様にと心掛けたら、少し酸郁とし過ぎたかも知れません。ご覧になってさぞお驚きになった事と、失礼ながら独りおかしく存じております。ただ私もそう何時迄も棚晒しになつていては嫌ですから、誰方にもパンティはもうこれっきりにして戴きたいと存じます。そこで一寸お訊きたいのですが、奇クフアンの方々は、MだとかFだとか皆様大そうにおっしゃっています。が、案外意気地のない方々ばかりで、近頃私不思議に思えてなりません。想像しているだけで、または書いていただけで満足なさっているのだら何という事はあ



りませんが、変にウジウジした男性なんて、私は身ぶるいの出る程嫌いです。男性の魅力は逞しさこそそれであると思っています。そこへゆくと芳野様は、陽気で健康で頼もしく、その上申分なく素晴らしい方なのでしようね。貴方のお書きになった物を色々と拝見していると、そんな素敵なイメージが浮んでまいります。今ではもうすっかり私も貴方の熱心なファンの一人になってしまった様ですわ。ただど芳野様、私が美歌夫人程に美しくないのが、ただ一つ口惜しくてなりません。どうぞこれからもしどしお書きになって、私達ファンを益々熱狂させて下さいます様に。それではこれで失礼致しますが、くれぐれも御身御大切に遊ばせね。ではご気嫌よう。(七月十三日) (東京都東鴨八市川千鶴子)

私は八年程前に書店で見かけたKK誌に胸が熱くなる思いをし以来毎号愛読してきました。女性を貴めたい願望も空想の中のみに止めて来ましたが、私の貴めを甘受できる女性に呼びかけたいと思います。切っ掛け筆をとりました。貴女の好きな虐め方で最大限の屈辱をあた

え虐め抜いて感涙にむせばしたいのです。初めからプレイは望めませんでしようからお便りを交歓しプレイの工夫なぞしてみませんか。絶対に真面目な交際を願っています。申し遅れましたが私は昭和十年生れ、身長一・七〇米、十五、六貫現在喫茶店と食堂を経営しています。同好の女性の応答を期待しています。(千葉県八S太郎)

八月号拝見、大いに楽しませて頂きました。伊満里の女相撲の写真珍らしく、また葉山夕起子さんの人形娘相撲の写真も面白く拝見しました。ただこれは写真がもう少し鮮明であつたらと惜しく思います。この可愛らしい人形美津、紀代さん達の色々の組合せで変ったポーズの取組みの写真を発表して頂けたらと思います。まわしのゆるんだ所や、解け落ちて羞らっている所など人形でなくては出来ない場面など見せて頂きたいものです。また「浪江大五郎」(万田不二氏)も興味深く読みました。これは欲を言えばよい挿絵があつたらと惜しまれます。九月号の発売を、今から楽しみに待っています。(東京八崎崎京人)

奇く編集部の皆様、お元気ですか。いつも、我々マニヤのために社会情勢のけん恵にも、かわらず、本誌発行を続けられる事を感じ謝致します。社会情勢とはいえ、この春からグラビヤがなくなった事は私としては、淋しい事です。仕方がありません。それにもまして、内容的には充実されている事は嬉しく思います。私は、女性を縛る事にも興味を持ちますが、女性性に対して浣腸したりする事に興味を持っていません。しかし実際に実験?して見たくても、なかなかそうしたことには理解を持って協力

してくれる様な人は、実際にはいなくて困ります。もっとも、空想の域を出ては問題ですが、身障者であり、それだけの財力のない私にはプレイをしてくれる人もいなくて困っています。誰か私の協力者となつて色々教えて下さる方は、ごさいませんか。お便り下さい。お待ちしております。我々ままな事を書きましたが、編集部の皆様今後ともよろしくお願い致します。時節柄お体をお大切に、マニヤのために働かれる事をお願いすると共に、ご発展をお祈り乍ら、ペンをおきます。(長野県茅野市

## 異色責写真分譲品

## 鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一〇〇〇円

モデル MS 役 山原清子 鈴木見子 略号 (はた)

## 裸女レスリング

大手札四十枚一組 三五〇〇円

モデル 山原清子、大塚啓子 略号 (れす)

## 入墨を踏みにじる

大手札八枚一組 八〇〇円

山原清子 略号 (いつ)

## 黒禪奔放姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円

刑部典子 略号 (ろち)

## 碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円

刑部典子 略号 (のん)

## 全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一〇〇〇円

山原清子 略号 (いね)

## 白禪奔放姿態

大手札十枚一組 一〇〇〇円

刑部典子 略号 (ろて)



（海野博）

編集の皆様、初めて突然におたよりを申し上げます。愚かなみじめな女の手記としてご笑覧下されば幸いと思います。私は今、申し上げるのも恥ずかしい姿で、この手紙を書かされております。私にあるご主人様に飼われてる身です。ご主人はこの家（東京の郊外にあります）に時折おいでになります。私が、私はこの家に来てもう八カ月余りになります。その間、身を隠す衣類を与えられたのは、わずかの間で、ほとんどの日々を一糸まとわぬ姿で暮しております。今もご主人様の前で全裸のまま、足には両足首を二十センチ位の鎖でつなぐ足錠をつけられ、両手も手錠をかけられたまま、この手記を書かされてるのです。手がふるえて上手に字が書けないのは手錠のせいもありますが、自分のあさましい姿を、他人の人に書き送るなど恥ずかしい限りだからですが、これもご主人さまの命令で致し方ありません。ご主人は私に一日の生活を書くように申されますので、今日一日の私の生活をお読みいただきたいと思います。昨日は土曜日でしたので、ご

「今月の新版Mフォト」

読者M氏受難の巻

女性対象のMモデルに応募してきた愛読者のM氏が、自分が女性から、こうして貰いたいという希望をもととして実施したプレイを側面から撮影したものです。S役女性には最近順に生長を遂げた大塚啓子嬢。豪華なホテルの一室に繰りひろげられたMプレイの写真化、特にその一部を御希望の同好者の方々に焼増いたします。

◎M組二十五態◎

主人はこの家にお泊りになりました。私は、私の肉体のすべての部分を使ってご主人様に一夜中ご奉仕いたしました。朝になるといつもの習慣で六時にお手伝いさんのくみ子さまが起しにきます。私はベッドの足にくさりでつながれて休んでいますが、くみ子さまは私を全裸で後手しぼりのまま風呂場へ連れてまいります。風呂場ではくみ子さまともう一人のお手伝いのとみさまに全身を洗われるのです。同性の前で恥ずかしい姿をさらすのさえ、体中がほてる程なのに、十九になるくみさまと、四

大手札印画紙焼付（9×13㎢）  
各組一枚一組（送料共）

一組一枚 三〇〇円  
十組十枚 二〇〇〇円  
二五組二五枚 四〇〇〇円

MMMMMMMM  
1 両股責め押え込み鼻弄り  
2 足の踵で鼻の頭をつぶす  
3 皮ムチを顔に浴びせられる  
4 犬男になめさせる太股  
5 足の指をすっぽりなめる  
6 顔面騎乗の女御主人さま  
7 臀部を嗅ぎまわらせる犬  
8 足の裏なめを強制する女  
9 女御主人の唾液をのます  
10 玄関でチンチンをする男

MMMMMMMM  
11 玄関で足指をなめさされる  
12 私の放屁でも糞くらえ！  
13 足の踵を必死になめる犬男  
14 両股の下に埋れた犬の顔  
15 頭を蹴られた尻尾を振る犬  
16 両股の首絞めに喘ぐ犬男  
17 臀部を革ムチで打ちまくる  
18 ツバの御馳走を飲ませる  
19 足の指先で鼻を摘みあげ  
20 鼻も口も足の裏で蓋される  
21 足のお味はどんな具合？  
22 この犬奴踏み潰してやろう  
23 股に挟まれて幸福な男の顔  
24 さあ口を開けてごらん！  
25 両股の下にある悦楽境

十を過ぎたというとき様は、情容赦もなく、私をからかいます。今朝も「ゆうべは大分騒がしかったね、奴隷さん何されたの」とか、「今週はご主人出張らしいから、私たちで可愛がってあげるよ」とかいわれました。ご主人が起きるのは八時ごろです。朝食はそれからです。それまで私は放置されます。でも大抵ははじめに恰好をしていなければなりません。今朝は手足の錠をはずしてもらえましたが、玄関わきの立木に首輪をはめられてつながれ、四ツ這いになっていました。私が、今でも

——もう大分屈辱に慣れてきたのですが——辛いのは食事のときとその後です。朝食はダイニングキッチンになっていきますので、ご主人と二人のお手伝いさんと、ご主人の運転手さんとが、テーブルを囲まれます。私はここでも裸のまま手足をふんばって、お尻を高く上げた四ツ這の姿勢をとらされます。そして犬がたべるような金属製の皿で、手もつかわず、口だけで与えられた食物を頂かなくてはなりません。食後私のもっとも辛いときがきます。私は身にまとうものなく、（くさりなどもはずさ



れています。庭にひき出されま  
す。そこで私は、四人の方達の注  
視する中で、排泄させられるので  
す。今朝は立ったまま手足を大の  
字に広げた姿で、させられました。  
まず私の前一メートルくらいのと  
ころにポリバケツが置かれます。  
この中に一滴も洩らさぬようにし  
ないと、後でもっとおそろしい、  
恥ずかしい目にあわされます。私  
は正面を向いたまま手で涙をぬぐ  
うことも許されぬままこれを行な

## 鼻いじめ三態

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円

山原清子

略号(はね)

鼻マニヤの方々に對するサービ  
スとして、鼻いじめに関する三態  
の美しいフォトを提供します。門  
外漢には一向に興味はないでし  
うが、斯界のファンには、貴重な  
資料となるでしょう。

## 寝棺の中の裸婦

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円

山原清子

略号(ねか)

人間の一人がこっそりと入る厚板  
作りの寝棺の中に、生前と何ら変  
らない美しい死顔を見せて、若い  
女の死体が横たわっている。娘の  
葬られる姿に、関心をお持ちの方  
は、ごさいませんか。

いました。それから、家の掃除  
です。私はご主人の二号さんとい  
うことでこの家に來たのですし、  
お金も先に貰っていますので、ご  
主人の奉仕なら仕方ないのですが  
お手伝いさんにまで小突かれ、電気  
掃除機もあるのに使わしてもらえ  
ず、ホーキをもって広い家の隅々  
まで働き、お尻を上げて、お手伝  
いさんたちの鞭をおそれながら、  
ぞうきんがけをしなければならな  
いという有様です。もっと書かな  
ければならないのですが、ご主人  
さまからお許しができました。また  
後日書かされると思います。哀れ  
な私はいつまでこの生活が続ける  
のでしょうか。私の前にも二十才  
の方が、半年くらいおられたそう  
です。誰か私の代りになって下さ  
る方はいるのでしょうか。(東京  
△山中冬子△)

奇ク一年余の愛読者です。浪江  
大五郎悦庵絵灯電を読んで感銘し  
ました。男女の死斗を描き、盲人  
とはいえ力自慢の男も、大柄で逞  
しい女の前に遂に屈伏締めあげら  
れてしまう。初めに攻勢をとりな  
がら中盤以降腰元浪路に投げつけ  
られ、たたきつけられ、殊に胴を  
締めあげられてからは、全く戦意

喪失、女の蹂躪に任せ、組敷かれ  
た上首を締められ絶息寸前、男女  
の斗いは女の一方的勝に終ってい  
る。私の様なマゾの血を湧かすに  
充分です。弱いはずの女が大柄で  
力の強い場合、男を体力に依り屈  
伏させその上に跨り征服する事は  
昔より現在に至るまで良くある事  
と思います。斯様な真迫せる男女  
の斗争を度々載せて下さいます様  
お願いします。(荒川区八久保木  
生△)

初めてお便りします。私は二十  
三才の女店員、一年程前フト古本  
屋で見たのが始まりでKK誌を愛  
読しています。今は七、八冊ぐら  
いになります。少女時代はすごく  
お転婆娘で女の子と遊ぶよりも男  
の子達と相撲をとったりレスリン  
グのまねをしたり組み伏せたりし  
たこともあります。こんな遊びが  
大好きで高校生の時は、あまりこ  
んなこともしなくなり、水泳とか  
巾飛のスポーツをよくしました。  
今は体を少しもてあまし身長一六  
一センチ、五八キロですから男に  
もそう劣ると思いません。元来  
勝気で男にも負けるのが大きらい  
です。S趣味のようです。大人に  
なってから男をいじめたことない

ので、お転婆と勝気の性格から思  
う存分M男をドレイにして私のオ  
モチヤにして馬にしたり、またト  
イレにしたらどんなに楽しいかし  
らと、ひたすら毎日考える様にな  
りお便りしました。Mの男性、特  
に三十から四十ぐらいの人、私に  
組伏せられ縛り上げられたい男、  
私の大きいお尻に顔を敷かれない  
人応募しなさい。またM男の殆ん  
どの人が人間トイレの希望のよう  
ですけどほんとのかしら？少し  
はすかしいけど、私のお尻のニホ  
イカガセたらどんなだろうと思う  
と胸がワクワクします。犬にして  
はしなどとすけずけいいますけど  
犬は小便でも大便でも平気でナメ  
るわ、私の犬にまたドレイになり  
たい人はプレーにホテルか旅館に  
入ったらすぐ両手はキツチリおな  
かに縛りつけておくこと、そこを  
出るまでは絶対にほどこない犬は  
足だけで手はないのだから別に不  
便でないと思うわ、信用しないわ  
けでないけど、これでホテルの快  
適な気分が味え存分に女王として  
男を道具につかえるから。私を女  
王様として尊敬しいやしいことも  
喜んでする男性希望ならお便り出  
しなさい。但しプレーに要する費  
用は一切用意することを忘れずに



〔今月の新版分譲品〕

浣腸される清子

大手札印画紙焼付

三枚一組 五〇〇円

山原清子 略号(かろ)

浣腸に興ずる女

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

山原清子 略号(かへ)

浣腸に悶える

大手札印画紙焼付

七枚一組 一〇〇〇円

山原清子 略号(かに)

乳房責め五態

大手札印画紙焼付

五枚一組 六〇〇円

山原清子 略号(てら)

禪美に羞じらう

大手札印画紙焼付

六枚一組 八〇〇円

玉田美佐子 略号(こん)

啓子をいじめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

山原清子と大塚啓子 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

山原清子と大塚啓子 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札印画紙焼付

八枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子と山原清子 略号(うね)

逆さ吊り正面背面

大手札印画紙焼付

二枚一組 五〇〇円

増田みゆき 略号(つる)

夫婦連縛鼻責

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田みゆき夫妻 略号(らか)

夫を責める新妻

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はや)

牛男をのりこなす

大手札印画紙焼付

十枚一組 一二〇〇円

増田喜代司 略号(はま)

〔東京都太田区八長谷川洋子〕

市川高夫様、読者通信にてのお言葉心より感謝いたします。奥様の物をプレゼントして下さるとのこと、ほんとうに口に出していえないうくらいです。しかし前の住所は局留がぬけておりましたので下に郵便局留とつけ加えて下さい。(局留にてでは貴兄や貴姉に失礼と思います。正直いって家の者には知られたくありません。こんな事をいうとまた貴兄にしかたられそうです。奥様の様な女性が現われるまで自分の心の中にしまっておこうと思っております。しかし、もう以前の様に悩む事もありません。だって奥様からのプレゼントがありますので) 貴兄のいわれる「求める者には与えられる」をいつも頭において今後積極的に行動し、きつと奥様に負けない様な女性を見つけます。(その時は読者通信欄に知らせます) それから「万事積極的に行くにはまず経済力を養う」とありますが真にその通りです。前に「私はまだ親のすねかじりです」と書きましたが、実は現在大学三年生(二十二才)です。しかし後一年で卒業ですし、社会に出れば貴兄のいわれる様に

まず経済力の安定のために努力します。ほんとうに真実味のあるお説教をいただきありがとうございます。貴兄の自信のあるお言葉を聞いていて自分でもなんだか自信と勇気がでてきた事をつくづく思います。話の様子では貴兄はもう社会ではさうとうの地位にある事だと思います。今後益々仕事にはげまれ、またブレイの面でも(奇クを通して)夫婦協力してバラ色の人生を送って下さい。心からお祈り申し上げます。(それからまた時々読者通信に心況など書きまします。そして読者通信でも一よければ文通交際をお願いいたします)。最後にこの様な貴兄や貴姉を知る事が出来たのも奇クのおかげとほんとうに感謝しております。どうかどの様な型の物になってもまたいませんで、発売を中止する事だけは絶対にしない様をお願いいたします。(大阪市八山西一郎)

一寸お尋ねいたしますが、数年前に出たマゾ特集号ございませんでしょうか。あちこち古本屋をさがしていますが中々手に入りません。私は生来気弱なためかMの性格故、Sの記事には全然興味なく



異性により行われるM記事にだけ興味を抱いております。奇クは二十七、八年頃より愛読していましたが、三十年頃宗教上の理由（キリスト教）でそれまで溜めておりました約五十冊の奇クを古本屋へ売却してしまっただけですが、自らの心を偽る事が出来ず、数年前から再び奇クの一愛読者となりました。かつて整理した頃の奇クに多くのM記事があったことを思い、今になって手放したことが惜しくて、あちこちの古本屋を探し回っておりすが中々見つかりません。たまにあって定価の数倍の値段がついていて、現在の薄給では一寸手が出ません。奇クの中には現われる様な、美しいS女性達によって、自分も一度Mの世界を実際に体験したいと思えます。が、現実では、そのようなドミナにはお目にかかれず、只今空想の世界で遊ぶのみです。奇蹟的に若しそのようなドミナにめぐり会えたら自分のすべてを捧げて悔いがないでしょう。現在の私にとって奇クのみが自分のこと性を昇華してくれる唯一のオアシスです。七月号も大分M記事が多いのも喜びです。出来ませれば、マゾ特集号新たに出版されないでしょうか。サ

ド特集号はよく古本屋で見かけますが、全然興味なく、どうかマゾファンのためマゾ特集号をお願いします。前にも誰か読者通信に書いておられました様に、SとMのファン別に予約出版出来ないでしょうか。少し位コスト高になってもいいと思います。通信でよくS何分M何分と書いておられる人がいますが、私には不思議に思います。純粹のSまたはMではないと思います。自分は全くM一辺倒です。先日一寸したきっかけで友人宅で秘密映画なるものを拝見しましたが、全くもってかえって気分が悪くなりました。すべて遅ましい男達が弱い女達をいじめ犯すシーンばかりで、Sの人達なら喜ぶでしょうが、私は全くいやになりました。そして、ますます自分がMであることを認識また誇りとしてしました。自分の中にあるキリスト教的なものが、かえって自分のMにあると思います。強いものは、かえって弱いものの奉仕者となってこそ、この世の中は平和になると思います。世に正に人道地におちる時代、日々愚連隊により犯されヒモにされ売りとばされる多くの女の子達の事を思う時、自分も男ながら男の風上にもおけぬ

野郎達と怒りの念が禁じえませんが、すべての男性がMとなる時、始めてこの地上に平和がくることと信じます。全くとりとめもなき文章となりましたが、一マゾ男のたわ言とお聞き流し下さい。（福島県八十六才、独身、赤川恵武男V）

## ○

編集者の皆様お元気ですか。長らくご無沙汰申し上げておりますが、もうお忘れの事と思えます。僕は昨年の七月始め、お便りした三重県の高橋次郎でございます。あの時は僕の思っている心の内を皆申し上げたつもりでございます。世の中にはこんな男もいるんだなあと思われたことと思います。が、僕はMS2程度じゃないかと思えます。奇クを毎月のように読んでおりますが、最近以前に比べて物足りないような感じですね。人様々ですから皆の好みに合致することは、中々むづかしいと思います。が、読者通信を読むと熱心なファンが数多くおられるようで大変うれしく思い、また力強く感じております。僕はどんな形にでもかまいません。裸にされて縛られて責められたいのです。ムチで打たれてもまた身体の一部を火刑

にされてもよいのです。大勢の人の前ではちよっと困りますが、信用できる人でしたら一人から三人位までだったら辛抱できます。相手の人にも望みがあるのです。身体細い方は気が向きません。男子でしたら四十五才位以上六十才位までの方で顔は別にかまいませんが、ただ一つ鼻の大きい人で鼻孔の出来るだけ大きい人でしたら良いです。またもう一つ重要なことは体重が十八貫位以上の肥満体を好みます。なぜかやせている人は好みません。女の方でしたら年令は特にきめませんが、やはり三十前後以上の方で肥満体の人が良いです。ここでお願いがあるので、愛知県名古屋市中心に岐阜三重でもよいのですが、交通の割合便利などところにおられて僕の欲望を満たしてくれる人をご紹介して下さいませんか。無理な願いかもしれませんが、貴社のお力でなんとかして下さい。読者通信にそちらで要点をお書きになって発表して下さい。結構です。その時の名は高橋次郎にして住所は書かないで下さい。この間、岐阜の徹明町の青木さんを十二日に尋ねましたが、お会い出来ませんでした。何とぞ良い人をお引き合わせ







ますが、次々と欲しくなるのが私達マニアの心理ですね。この度のものはダンロップで発売して居るものですが、特に変わった型では御座いませんが、大変良質のゴムである事、又長時間の着用にもあまり肌にベタベタしない事等、仲々考えられた品です。又薄いゴムで下に何か着けて居ると、透き通って見える位です。足の廻りも全部ゴムで、布はほとんど使用して居りません。通信ではオムツカバー

あまあという処です。もしかしたら来月あたり、又別なものを入手出来そうです。カバーとは一寸違いますが、もうお判りかと思ひますが今度発売になったものです。私もまだ見た訳でないので結果をお知らせ出来ません。しかし着用した感じは又お知らせ出来ると思ひます。神戸の中川さん、大阪の徳増さん、通信をお待ち致します。(愛知△T△生▽)

愛好者の方で売って居る処が無いとか言いますが、その氣に成って求める氣に成れば必ず入手は出来ます。勇氣を出して、良い品を集めてお互いに楽しみましょう。大西良子さん、九月号では通信に貴女のお名前が出なく、残念に思つて居るのは私一人ではないと思ひます。如何お過しですか、貴女の文に御座いました外科用湿布帯、あらゆる処を聞きましたが残念乍ら入手出来ませんでした。恐らく病院で特別に注文して作るものと思ひます。しかし、何んとかして入手する心算です。まあ先月は先程のカバーを入手しましたのでま

市川高夫様への呼びかけ。先日古本屋にて奇譚クラブ五月号を買ひもとめ、貴男の「パンティマニア」の方々に、という記事を拝見致しました。私も貴男同様、女性の汚れたパンティに異常なまでの執着を持つ二十五才のサラリーマンです。私の様な者がほかにいるということが分り、どれだけ心のやすらぎが得られたか分りません。でも、学生時代に苦労したとはいへ、すでにパンティを手にし

次号(十一月号)は九月二十五日に発売いたします

いかぎりです。女性の汚れたパンティはおろか、新しい物さえも手にした事のない私には、妻の洗濯前のパンティを心からプレゼント致し度いと存じます。という言葉は神様の言葉のように聞えます。それに「思い切り汚して差上げるわ」この言葉が胸にどれだけ響くか貴男や、パンティ・マニアの方には分って頂けると思ひます。パンティを夢見ては毎日悩んでいます。貴男だけが頼りです。どうか奥様の汚れたパンティをお送り下さい。美しくスタイルのよい奥様のパンティは宝物にまさるものです。豊かな腰をつんだパンティが、手に入るかも知れないと思ふと、胸の高鳴りをどうすることも出来ません。どうか一日も早くお送り下さる様お待ちしています。送って下さったパンティをつつむ絹の布を用意しながら待つております。(奈良市△野田健次▽)

始めてお便りします。二十一才のオフィスガールです。偶然御誌のことを知ったのは、実は去年の暮のことでしたが、それ以来毎号欠かさず愛読しております。とっても私にはこわい記事が多くてくり返して読むのは「浣腸」に関

するものに限ります。もの心ついてから私自身が始めて浣腸されたのは虫垂炎で手術されそうになつて、七月号にのつていた女子大生と同じような目にあつた時のことです。自分ではしたことがありません。本当のことを告白しますとどなたかに、ホテルのようなムードのあるところで、恥かしがる私を押さえつけて無理に浣腸していただけたらと思ひますが、女性の身であつてみれば難しいことだと思ひます。私達女性にとって最も都合いいのは、やはり病院です。同好の女性からのお便りをお待ちします。(東京△佐々木典子▽)

小生十年來の貴誌のファンで昔の豪華なグラビヤの載つていた頃を一入懐しく感じられます。しかし世評に抗して出版される御努力は大変な事と思ひますが、本誌に人生の楽しみを秘かに求めている人も多数あること故、今後二十年でも三十年でも本誌が継続して発行されることを願つております。そのために必要とあればグラビヤの廃止も又やむをえないと思ひます。小生らの命である本誌の充実と永続を心からお祈りしてペンをおきます。(大阪△森 明▽)



# ☆編集後記☆

○新刊が発売になると打てば響くように、読後感やエッセイが寄せられてくる。今月号では、葉山啓、保藤久人、黒淵賀集子、木戸川健の各氏から寄せられたものを掲載した。そのため代理部の広告数頁と「心傷たむ遍歴」とがはみだしてしまった。

○ドラマ「奇譚クラブ」に引続いて、実録・奇譚クラブが夜乃探郎のペンで今月号を飾った。先月号の表紙カットを見て旧号を譲ってほしいとか再版してほしいとかいう希望が相当あるのだが、残念ながら今となっては御希望にはそいかなる。

○八月号での「小説、梨花悠紀子」に引続いて、今月号では「小説、箕田京二」が登場し

た。来月号では「小説、芳野眉美」が予告されているが、うろろろしている、さしあたり「小説、辻村隆」や「小説、青木順子」があらわれそうだ。どなたか、「小説、夜乃探郎」をものさされる方はないだろうか。

○夜乃探郎氏といえば、次号では、またまた「論評・奇譚クラブ」をひっさげて、奇クのレギュラー・メンパー十名をなで斬りに、そのタフな健筆をふるう由、乞御期待!!

○お待ちかねの連載「花と蛇」早いもので続編となつてからでも、すでに十回を数えた。回を重ねる毎に益々好調、いよいよ佳境に入ってきたと宣伝しておく。編集後記で自画自讃するほど、ミットモナイものはないと、常日頃考えているのだが「花と蛇」だけは、そのミットモナイことを敢てしておく。

## 愛読者原稿募集

### △体験、告白、手記△

これだけは、どうしても人に話したい、書いておきたいといったことが、どなたにも一つや二つ必ずある筈です。物言わざるは、腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びや思い出などをどしどしお寄せ下さい。採用篇には本誌一年分以内贈呈します。

### △創作、小説、物語△

最初は余り長いものは無理ですが、本誌の内容に適した題材で皆様の夢を文章に托して下さい。採用篇には本誌半

年分以上贈呈します。

### △感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを皆様の筆でまとめて下さい。採用篇には本誌五カ月分以上贈呈します。

### △(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく報導下されれば幸いです。採用篇に

は本誌三月分贈呈します。

### △マニヤ、ファン通信△

編集者、執筆者、投稿者、モデル嬢などへの呼びかけやファンとしての希望、或は前号の感想批評、本誌に対する希望や御意見、など愛読者としての通信をお寄せ下さい。本誌とファン、マニヤ同志の忌憚のない通信ですから、何なりと御遠慮なく。採用篇には本誌三月分贈呈します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

## ☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊)三〇〇円△送共△  
三月分(3冊)九〇〇円△送共△  
半年分(6冊)一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

## 奇譚クラブ 定価 三〇〇円

### 十月号

【第十九巻第十号】  
【通刊第二〇七号】

昭和四十年九月二十日 印刷  
昭和四十年十月一日 発行

編集人 箕田 京二  
発行人 吉田 稔  
印刷人 北村 俊夫  
大阪阿倍野郵便局私書函第十四号  
発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(国鉄大局特別取扱承認証第一二二二号)

## ☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に関する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下りしないよう、特にくれぐれも、お願い申し上げます。